移民の生活の歴史（3）

ブラジル日系人の歩んだ道

半田知雄　著

（第7部から第10部まで収録）

目　次

（下の数字は原本のページ数）

再刊のことば
第１部　契約移民―金のなる木をさがして
１．第一回かさと丸移民　10
かさと丸のサントス入港／サンパウロ移民収容所の日本移民
２．「配耕」先、六農場の地理　24
３．「配耕」と移民列車　27
４．ブラジル産業史のうえからみたコーヒー農場の地位33ブラジル産業の移り変わり／コーヒー栽培の歴史とサンパウロ州のコーヒー地帯
５．コーヒー農場における第一回移民　38
コロニア／ズモーン農場の場合／カナアーン農場の場合／フロレスタ農場の場合／サン・マルチーニョ農場の場合／グァタパラー農場の場合／ソブラード農場の場合
６．第一回移民の経験―いわゆる「失敗」の原因について62
７．第二回旅順丸移民　68
ジャタイー農場／サンタ・マリア農場／サンタンナ農場／第二回移民の成績とその後の移民輸送
８．移民とはどういうものか―日本の近代化の下積みとなった農民たち　80
９．ファゼンダ生活の一農年（一九一二～一九二二年）87農年

の切れ目―出るもの、はいるもの／コルション作り／はじめの食べ物／コーヒーを入れる／ファゼンダの洗濯と薪取り／鍬の柄のすげ万、その他野良仕事に必要なもの／便所のこと／仕事はじめ―出勤風景／除草の仕事を習う／コーヒー園の食事／たばこ一服／帰宅（プラ・カーザ）／ビッショ・デ・ペー（砂蚤）／土曜日／斧つかいの名人／土曜の晩／日曜日／コーヒー園の間作／夜逃げのこと／ブラジルの夏／病人、葬式／パン焼きと豚殺し／日本移民の食生活／新移民とブラジル語／子供のたのしみ／ファゼンダの正月／臨時収入と不慮の欠損／作物のとり入れ／牛車の季節／山たて（コロアソン）／パトロンの農場入り／コーヒー採取（アパンニャ）／コロノの暮らしぶり／日本人コロノの家！ファゼンダの人間的環境／ファゼンダの組織とコロノ制度／フェスタ（祭り）の多い六月／山崩し／総勘定／エンボーラ

１０．一九二七年の調査にあらわれた移民の生活　１６３

第２部　初期移民の都会生活

１１．サンパウロ市における初期の日本人１６８

１２．当時のサンパウロ市１７８

１３．コンデ街の生活１８５

移民にとりつきやすい家庭労働／大工、塗工と家具商／自動車運転手／在留同胞のオアシス、コンデ街

１４．ビッショ賭けの話１９８

１５．シネーマ２０３
１６．フロントン２０６
１７．あそび２０９

第３部　独立小農への発展
１８．独立小農と近代自作農の出現２１４
１９．自作農へのあこがれ２１７
２０．米作をめざした初期の日本人２２１
２１．日本人植民地の三つの型２２４
２２．原始林の開拓２２５
みどりの地獄
２３．原始林開拓の先駆者２２７
測量隊の仕事／ヤマキリ（山伐り＝森林伐採の仕事）／山焼き
２４．新開地風景２３９
住居／衣服／食物／あらやまの仕事
２５．初期植民地の一年間２４７
はじめの無知／プランタデイラ／コーヒーの植付け／家つくり／衣服／食物／正月・新年宴会／綿つみ／カザメント（結婚）／天長節／ばった軍襲来
２６．植民地の建設―入植当時の悲惨な経験２６２
平野植民地の開拓／イタコロミー（第一上塚）植民地の創設／ビリグイ植民地／バイベンとブレジョン植民地

２７．地権問題―植民者にふりかかる人為的災難２８９
第４部　植民地建設途上の諸問題
２８．植民地の自治機関と教育２９６
日本人会・青年会／小学校／青年の夜学
２９．移民社会における結婚３１３
３０．連れ家族の悲哀３２１
第５部　地方史―各植民地の歴史
３１．サントスおよびジュキア線の同胞３２６
第一回移民と当時のサントス市／サントス市およびその周辺の邦人とその職業／ジュキア線の同胞
３２．イグアッペ植民地の建設―桂、レジストロ、セッテ・バーラス３４３
サンパウロからレジストロへの道／イグアッペ植民地という名称／桂植民地の開拓／レジストロおよびセッテ・バーラス／初期植民者の生活／産業の移り変わり／植民夜話／現勢概覧
３３．奥モジアナ方面の米作者３６５
初期の人たち／米作者の特殊ないき方／二種の分益農／初期の米作法／低湿地の米作／台地の陸稲（おかば）づくり／初期の大農とその生活／ジャーナリズムに喧伝されなかった奥モジアナ地方／イーリャ・グランデの悲劇／冠婚葬祭／追捕

３４．カンポ・グランデにおける沖縄県人の発展―第一回移民の足跡をたどって３８９
カンポ・グランデ周辺の開拓／市外と市内の日本人／変わりつつある生活
３５．サンパウロ市郊外の農業と日系農家の生活４００
郊外農業のはじまり／郊外農家の生産と生活様式／元祖自慢／各集団地の歴史／当時の販売法と天秤姿の野菜売り／初期の運搬機朗とトラックの出現／貧弱な生活程度／近郊農業の特殊な例外／都会との文化交流と生活の改善
３６．アリアンサ移住地の特色４１６
確実なる計画と秩序と統制のある組織のもとに／移住者は出稼ぎものではなかった／先駆者の苦闘／初期入植者の生活／移住者が直面した現実／「アリアンサ」というところ／「コーヒーよりも人をつくれ」
３７．ブラジル拓殖組合の創設になるチエテー移住地４２６
移住者の不満と事務所員の苦労／初期入植者の生活／入植者は依然として少なく……／市街地（ノーボ・オリエンテ、現ペレイラ・パレットス）の発展／漬物のにおい
３８．多くの障害をのりこえて建設したバストス移住地４３７
バストス移住地／移住地の経常方針／開拓の第一歩／植民地の動き／初期移民者の生活／満一年の保健状況／市街地および小学校建設／十一年間の入植者家族数／失敗した土地選定法／やせ地に栄えた産業／バストス移住地の特色／植民者の精神的傾向

／スポーツのバストス／郷土愛／現在のバストス市
３９．旧移民の多いトレス・バーラス移住地４５０
トレス・バーラスとアサイー市／移住地の特色／はじめて原始林に斧をおろす／入植初年度／開拓二年目からの植民者の動き／ブラ拓の指導方針／テーラ・ローシャ地帯の植民地
４０．北パラナ（パラナ州北部）への発展４６２
一九三〇年以前の北パラナ／ロンドリーナ地方の開拓
第６部　全盛期の植民地（一九三〇～四〇年）
４１．全盛期のコーヒー地帯４７２
４２．初期植民地全盛時代の生活……４７６
植民地の気風／小パトロン気分（住居、食事）／つきあい（お産とお葬式）／新しい日本人会／青年会とスポーツ／弁論大会／巡回シネーマ／流行歌／東亜共栄圏の夢と棄民思想／ブラジル育ちは気がきかない／初期植民地崩壊のきざしと青年会の反同化的傾向／おやじたちの不満
４３．地方都市の出現と発展４９４
ペンソンの役割／町の青年会の役割／学生寄宿舎、裁縫学校／うどん・しるこ屋／地方都市日本人の職業別／地方都市の生活
４４．戦前の植民地における二世の性格５１２
４５．ノロエステ線における日本人の勢力５２２
４６．日本人はなぜ農業に執着したか５２６

第７部　移民と風物（下の数字は本文庫のページ数）

４７．米食と風呂　１３

４８．日本移民の食物の特長　２５

４９　虫の話　３３

５０　草の話　４７

５１　初期植民地の気風　５８

オスピタリダーデ（旅人をもてなす）／相互扶助と平等主義／もののやりとり

５２．ブラジルの田舎者の生活　６８

住居とその内部／寝室とあかり／食生活／たばこ／入浴／洗濯／家禽、家畜、その他／作物／性格、趣味、教養／服装／女たち

第８部　移民社会の中心地サンパウロ市

５３．一九三三年におけるサンパウロ市の日本移民８４

コンデ街の模様／コンセリェイロ・フルタード街／コンデ・ド・ピェヤールとイルマン・シンプリシアーナ街／ピニェイロス区

第９部　深まりゆく移民のなやみ

５４．二つのナショナリズムの間にはさまって苦しんだ移民　１０６

５５．ナシオナリザソンと外国語出版物（とくに新聞）の発行禁止　１１４

５６．新聞と、その果たした役割　１２０

はじめての新聞、週刊『南米』／『日伯新聞』の出現／『伯刺西爾時報』の登場と「日伯」／その他の新聞／「日伯」「時報」の対立時代／新聞の果たした役割／各新聞の特色

５７．一九三三年から四一年末まで　１４９

移民二十五周年祭／移民二分制限法／ポルトガル語のできない教師は日本語を教える資格がない／十四歳以下の児童に対する外国語教授の禁止令／日語教師の生活は苦しかった／だれが親孝行を教えるか／ただ悶々として／かくれて教えても効果はあがらない／二世教師は植民地で孤立した／早く同化した二世とその親たち／二世の自覚のはじまり／サンパウロ市の日系インテリ青年たち／ヨーロッパ戦争と深まりゆく移民のなやみ／一喜一憂の時代／世の中一般が変わっていく／枢軸国民は敵国人／一九四一

年、戦前最後の年
５８．太平洋戦争中の在伯同胞　付―戦争中の日本移民の心理状態　１８１
第１０部　戦後の混乱と新しい生活への歩み
５９．終戦直後における同胞社会の空気　２１１
あるサロンでの会話／デマはどうして流されたか／計画的な陰謀も片鱗をみせる／「公報」を待つ心理
６０．混沌たるコロニアの状況　２２０
カンポス・エリーゼオス宮の説得／オズワルド・クルースの暴動／終戦一周年／郵便再開／邦字新聞の再刊／永久帰国者の出現
６１．テロ事件とその犠牲者　２４１
６２．ブラジル人側に残された資料による臣連事件の理解　２４７
臣連事件に対するブラジル人の態度／ブラジルの新聞に見る臣達本部と臣連実践綱領／デマ宣伝と偽造写真、その他／脅迫行為のいろいろ／各地指導者の臣連理解／偏執狂的頭脳の指導者たち
６３．戦後コロニアの対立抗争はどのように解釈されたか　２７２
６４．建設への道　２７７

６５．「涯しなき思想旋風を衝いて」―終戦後七年の信念派の理論　２８６
６６．人種的偏見のない明るさ　２９７
追補　日本移民の人種的差別観
６７．一世青年と異人種間の結婚　３１１
６８．「新来」と「ブラジル・ボケ」　３１４
６９．二世と日本文化―逆効果をもたらした教育３２２
７０．日本移民の宗教生活　３３３

第１１部　コロニア統一への動き

（下の数字は原本のページ数）

７１．戦災同胞救援運動７２４
７２．トビ魚一行の訪伯―涙で仰ぐ日章旗７２６
７３．サンパウロ市創立四百年祭への協力運動７３１
日本館のにぎわい／日本美術紹介としての役割
７４．サンパウロ日本文化協会の創立７３８

第１２部　コロニアの現状

７５．戦後移民の渡伯　付―日本の企業進出７４４
７６．一九六七年五月の皇太子夫妻歓迎について７５１
７７．現代の奥地シチアンテ（北パラナ同胞の現状）　７５７
ロンドリーナ市のスケッチ／農村をのぞく／シテア

ンテの生産様式（過去）／シテアンテの生産様式（現在）／奥地の非コーヒー地帯／今後の行き方に対する諸問題／二世の成長とその教育／二世の政治運動／二世の結婚問題／世代の差と教養のへだたり／寺院、盆おどり、その他いろいろな「会」／冠婚葬祭／家庭生活／最後に、さらに奥地の町を
78．単一性から多様性への発展781
二世が大きくなって／土地がやせて／勝ち負けの争いもあって／教育の目標もかわって／自由な選択ができて／階層の分化もおこって／社会的地位の入れかわりもおこって／新しい方向への動きもあって／発展の意味もかわって／発展のための必然的多様化
79．エピローグ785
用語解説789
参考文献794
表紙　挿絵　著者

第７部　移民と風物

４７　米食と風呂

日本移民がブラジルへ来ていちばんさきに要求したのは米食であり、そのつぎは風呂であった。風呂はまだがまんできた。米がなかったら、われわれは、とてもブラジルの生活になじめなかったのではないかとおもう。

生活様式のなかで、住まいと衣服については、それほど苦情をきいたことがない。畳の上でねおきしたいなどという話もきいたことはあるが、はじめのころは、なにかぜいたくなようにひびいた。金ができて、りっぱな住宅が建てられるようになったら、日本間をつくって、ゆっくり休めるようにするさ、それまで畳の上の生活は成功後のたのしみにしておけばいいと思った。だから、させまった問題にはならなかった。

衣服だってそうだ。いまでこそ日本人は洋服を着て平気でいるが、四十年、五十年前の日本人は、日本着から突然わけのわからない洋装にかわったのである。男の洋装は、それでもあまり不自然ではなかったが、女性の洋

装ときたら、全く、ぎこちない以上に、へんてこで、きゅうくつで身につかなかった。上着（ブルーザ）とスカート（サイア）はどうにか自分でも工夫したが、下着となると、どうしていいかわからなかった。（ブラジル式の下着（コンビナソンといったかどうか）はどんなにしたらいいか）パンツの有無など、はじめから問題にしなかった。

だから、しゃがむ癖のある日本女性はこれが噂のたねになった。しかし、ブラジル式（洋装）は不自由だという苦情はなかった。

問題は米だった。ブラジルに米がなかった場合を考えてみたらどうだろう。ファゼンダの生活は苦しかった。しかし、米があった。ただ収入にくらべて高価であったから、節米には、すべての移民が苦心した。第二次大戦後、バイア方面にはいって、米が自由にえられなかったところの移民は、さっさと移動してしまった。おそらくたばこ好きがたばこをきらしたときのように、どうにもならないいらだたしさと空虚さを感じたにちがいない。米の飯さえ腹いっぱいたべられたら……と考えたことだったろう。幸い、ファゼンダには米があったのである。

初期移民たちが、コーヒー農場へ契約労働者としてはいったときに、そこでお目にかかったのは、ブラジル人の好きなアグーリャ、（長米）であった。はじめて食べた

のは、油飯であった。ポロポロして、いくらかしんのあるやつだ。これがブラジル式の煮方だということだった（1）。

しかし、だれもこの御飯をおいしいと思わなかった。なにも入れないでたいた、ふうわりとした「白い御飯」がたべたいと思った。おかずなどは、火あぶりにした干鱈のひときれでけっこうだ。いや、これがなによりうまいとさえ思った。

初期移民たちの頭には、毎日白い御飯をたべることはぜいたくだという考えもあった。郷里（くに）では粟やひえをたべていたものもあったろう。そこで節米が工夫された。白い御飯はときどき御馳走にたべればいい。いつでもたべられるという安心感で節米は苦痛でなくなる。

ファゼンダには、かつて他のコロノがさつまいもをうえて、その後放棄した畑（コーヒー園外）があった。もう誰のものでもないので、そこへ行くと採取したあとの蔓がのびてしぜんに芋ができていた。りっぱなものではないが、小さい芋を二、三キロほりだすには、それほどの労力を要しなかった。これをとってきて、小さくきざみ、御飯に入れてたくのである。ときには、フバー（とうもろこしの粉）をまぜてみたが、これは御飯のほうがいやにべたついてしまって成功しなかった。まもなく、カンジーカ（とうもろこしの上皮をはいだもの）をつくって（2）これをあらかじめ煮ておいて、御飯をたく

とき米にまぜた。
これは案外たべられたが、カンジーカをつくる労力がたいへんだった。老人か子供がいる家族だけにできることであった。かぼちゃをたきこむことも考えた。マンジオカ芋もきざんでいれた。
こんなにして、節米のために、いろいろなものを御飯にたきこめば、塩を入れたほうがよかったというので、塩味にすると「まぜ御飯」か「おじや」のようなものになってしまう。そこで豚の脂を入れてみる。そうするともう油飯だ。これでははじめからブラジル式に、米を油でいためてから御飯にたいたほうがいいということにもなる。
節米を考えているうちに、ブラジル食にあともどりすることもあった。だが、ブラジル式油飯は、女が男たちと同じ時間に山へでる習慣のある日本人には、ちょっと向かなかった。御飯が冷えてくると、油の匂いが、ぷんと鼻につくからであった。このひえた油飯にコロッテ（小さい水樽）の水をぶちかけて、さじで口へながしこむ。
パパイヤの塩漬けでもかじってみるが、えたいのしれない味となる。それでも、漬物のいきおいでけっこうたべた。日本人は米を主食にするために、どうしても量を多くとるのである。
そのうち、場所によって、くだけ米（キレーラまたは

ケブラード）が手に入るようになると、ねだんも安かったので、これをたべた。アグーリャ米は、元来のり気が少ないので、くだけ米でもけっこうたべられたのである。

当時、ファゼンダはアグーリャ一点張りであった。今日のようなカテテ（丸米）はなかった。ブラジル人は油飯にするためにアグーリャ米をこのんだ。油飯のおいしさは、できあがってからも、パラッとして、決してべたつかないところにあった。この味は、旧移民になって、ブラジル食に慣れてこないとわからないものであったろう。

ファゼンダに一農年をすごすことのできた移民たちのよろこびは、外作地から米をとりいれたときであった。むろん、精米所などはなかったから、自分で臼でついてたべるのであるが、もみを十俵、二十俵ととりいれ、家の中の一角につみあげ、さあ、これで米の飯が腹いっぱいたべられるぞ、という自信ができたときであった。

米を臼でついてたべるといっても、もみからつくのであるから、かなりの時間がかかる。いくたびもペネイラ（ふるい）にかけ、もみがらをとり、また臼に入れてつくのであるが、きれいにもみがなくなるようなことはまずない。最後には、のこったもみを、一粒一粒ひろいださなければ御飯にたけない。しかし、労力をおしまなければ、毎日、白い御飯がたべられるのである。みんな夜に

なると、米つきにはげんだ。

日本から大豆の種子をもってきたものがあれば、味噌もできたし、フバーでぬかみそまがいの漬物もできた。こうして、ファゼンダ時代から、日本食も工夫できたのであるが、このようにすべてがそろうのは第一次大戦後の移民時代になってからである。しかし、一般的にいって、ファゼンダでは、米食はしたが、副食物は、フェイジョンをはじめとして、かなりブラジル式のものであった。もしブラジル式といって語弊があるならば、ブラジル式をまねたものであった。

初期移民のなかには、米のできるところへ行って米作することを夢見るものもあった。白米一俵が一五ミルから二〇ミルもしたのであるから、もみを二百俵もとったら、けっこういいもうけになるにちがいない。まだコーヒーなどは大農場の作物として以外、小農には考えられない時代であり、マラリアの脅威も実感になかったので、一九一四年ころは、モジアナ線の奥へ米作にはいり、マラリアのために多くの犠牲者をだしたこともあった。新開地ノロエステの魅力には、荒山には米ができるということもあった。

稲が背丈にのびる。いや、手をさしあげてやっととどくくらいになる。一アルケールに二百俵ももみがとれる(3)、などという噂がながれて、人々を奥地へさそった。

植民地において、コーヒーがなりだすまでの五、六年間は米作が生活費をささえるために大きな役割をはたした。精米所が一九二〇年前後からノロエステの主要な都市にできて植民者たちは自由に米食ができるようになる。

ただ、当時からアグーリャ米が丸米（カテテ）に比して値段もよかったし、またよくできたので、これが主になっていた。

日本人の食物としてカテテ（リオ・グランデ米といっていた）がもちいられるようになるのは、サンパウロ市の生活からであって、ここでは、早くからカテテがよろこばれていた。ことに、一九三〇年ころから、サンパウロ市内に、サラリーマン階級や小売商人がふえてきて、日本人でも一家をかまえるものが多くなると、彼らは二重生活で、昼はブラジル食、夜はできるだけ日本食という傾向をとるようになって、カテテの需要が急にふえてくる。そして、味噌なども、いろいろなものが、日本人の雑貨・食料品店で販売されるようになるのである。だが、注意を要することは、労働者階級や学校の寄宿舎では、二重生活の繁雑さをさけるために、昼も晩も、いわば和洋折衷の食事をしたということは　白い日本飯にフェイジョンとビーフ、サラダあるいは漬物という具合である。晩には味噌汁をつくることもあった。

米食はブラジル人一般の生活でも、第二次大戦後は、

ぐんと盛んになり、地方においてさえ、マンジオカ粉の消費は年々少なくなってくる。ことにサンパウロ市では、大衆レストランなどでさえもマンジオカ粉をあの木製の「おはち」に入れて食卓にそなえつけにしているところは、めずらしいくらいになった。

日本人は、どんなにすばらしいブラジル料理（あるいは西洋料理）をたべても、最後にはお茶漬けといって米の飯をかっこんだ。しかし、二世の時代になると、これがだんだんかわってきて、お茶漬けを要求しなくなる。それにつれて、老いた移民たちも、ときによるとお茶漬けをわすれる。お茶漬けをわすれるときには、食事が本当にブラジル的になるときかもしれない。いま（一九六〇年代）は、戦後移住者は別として、その時期にさしかかっているのだともいえる。

米の飯と同様に、日本人の生活になくてはならないものは風呂であった。ファゼンダですら、これを工夫したものがあった。しかしそれはキント（大きな酒樽）やタンボール（ドラム缶）が手に入る場合に限っていた。ガソリンが使用されなかった時代には、ドラム缶を入手することはむずかしかったから、ピンガ酒を入れるキント樽を利用した。しかし、これには釜がつけにくいので

ラッタ（二〇リットル入りの石油缶）で湯をわかして入れたもので手間がかかった（今日のように、二本の管でつなぐ釜はファゼンダにはなかったのである）。そこで、たいがいブラジル式の大きな金だらいで行水することで満足した。

どうかして、風呂をたて、ゆっくりはいりたい、そういう要求もまた、植民地を建設する動機の一つであった。

植民地へはいった当時、どんなにして風呂にはいったかは、植民地初期の生活のなかで述べたところであるが、なにより便利なことは、燃料のたきぎがいくらでもあったことである。水の便利さえよかったら、毎晩でもたてられる。しかも、簡単な囲いだけで屋根もない露天風呂であったが、こうしたものを外人に遠慮せずにたてることができるのは、植民地の特典におもわれた。よく日本人の入浴には、亭主がはいっていると、女房がわきから背中を流してやる習慣があった。これをどこからブラジル人にみられたのであろうか、日本人は男女で同時に入浴して湯をかけあう蛮風をもっていると非難されたことがあった。日本通訳や監督の苦労は、移民たちがブラジルの風習に反したことをやって、日本人排斥の種子をまかないように注意することであった。しかし、移民たちにとって、長年の生活様式のすべてをうばわれることは苦痛であった。彼らは早く外人に気がねなく、風呂には

いれる生活をのぞんだ。ブラジルでもそれは可能であった。住居が野中の一軒家でさえあればいいのである。筆者があるとき、セントラル地方のレノーポリスを汽車で旅行していると、当時、人参栽培の借地農をしていた日本人農家の近くを汽車でとおった。すると、どこの家の谷間にも露天風呂がみえた。ブラジル人なら、さしあたりモンジョーロ（水力でうごかすきねと臼）ともいえるが、それにしては小川に直結していないのですぐ風呂であることがわかった。おそらく、汽車のとおる時刻はきまっているし、ことに夜であれば、ゆっくりとはいれるところであろう。多くはタンボールを五右衛門風呂に利用したものであった。ただここで感じたことは、ああ、日本人の生活にとって風呂とはかくも必要なものであろうか、ということであった。

植民地へはいった当初は、皆が皆、はじめから風呂をつくったわけではないから、材料が入手できたもの、あるいは大工の心得のあるものなどが風呂をまっさきに作った。すると隣近所の人が、これをもらいにいったものである。風呂もらいは、さびしい植民地のたのしみの一つであって、一風呂あびたら、コーヒーを御馳走になり、南京豆やピッポーカ（はぜとうもろこし）をかじりながら、世間話に時をすごすことが大きな気ばらしで

あった。

コーヒーがとれ、レンガづくりの住宅ができるようになっても風呂だけは日本式の木製風呂桶をすえた。すでに地方都市には日本人の職人がいて風呂釜ができていた。場合によっては風呂桶まで注文した。円形や方形のものができる。セードロ材などは長もちするし、なかなか感じのいいものである。タイル張りにしては気分がでない、というのが日本人の趣味であった。

日本人の生活における風呂の意味は、決して衛生上の必要ばかりではなかった。一風呂あびると疲れがとれるといい、また、一風呂あびたのちの気分は、なんともいえない。すっぽりと熱い湯にひたっていると鼻歌の一つもうたいたくなる。あれは全く、この世の天国だというのである。それは衛生以上に快楽なのである。だから、これがないと生活にしめくくりがつかない。米の飯と風呂のない生活は、日本人には生活ではなかったのである。

しかし、ここでも、ブラジル式の生活に慣れてくると、だんだん快楽が必要におされてくる。ことに都会の生活では、たとえば、発汗のはげしい夏期になると、風呂よりもシャワーのほうが便利である。水も湯も自由にでるし、時間にも制限がない。朝夕体をながさなければ気持ちが落ち着かないようなことすらある。そういう場合はシャワーにかぎる。そこで子供たちは、まっさきに、風

呂よりもシャワーをとるようになる。ただ、寒い季節になると、一世は風呂を思いだす。あったまって寝るということが、なによりだ、ということになって、二重様式をとる。そして、シャワーと同時に、木製の風呂もこしらえることになる。ただし、二世の時代になると、この二重様式はすたれて、シャワー一方になることが多いのである。風呂の快楽的要素はかえりみられなくなるのである。

注

（1）料理法は「ファゼンダ生活の一農年」のところでくわしく書いた。

（2）製法は同じく「ファゼンダ生活」のなかにでている。

（3）一九二六年ころの調査では平均八十俵ということであった（『今日のブラジル』）。

４８　日本移民の食物の特長

われわれはブラジルへ移住したとき、はじめからこの国の食物を摂取することに努力したわけではなかった。口にあうたべものは、おおむね日本式なものであったから、自分たちの味覚をもとにして、口にあうものだけをえらんだし、口にあうように工夫した。ブラジルにおける日本移民のたべものの特長は、ブラジルの材料を日本式に処理することであった。アグーリャ米からはじまって、フェイジョン（豆）、とうもろこし粉、マンジオカ粉、さては干鱈（バカリャオ）、干し肉（カルネ・セッカ）にいたるまで、日本式に処理した。こうして、コロニア独特のたべものもあらわれてくるわけである。ここでは、われわれの食生活のなかで「日本人はたべるが、ブラジル人のたべないもの」、「ブラジルの材料を日本式に処理したもの」などをあげてみる。

むろん、ここでことわっておかなければならないことは、こうした食べ方は、必ずしもコロニアにおける独特な料理として固定するものではなく、われわれの生活がブラジル的なものとして落ち着くにしたがって、大部分のものはきえていったし、現にきえつつある。だが、少数のものは、いまだに存続し、われわれの食生活の内容

をなしている、ということである。

まず「米の飯」からはじめる。ブラジルのアグーリャ米（長米）は、油飯にしてこそおいしいが、日本式にたくとポロポロしてねばり気がない。ただ新米なら、いくらか日本米に近づく。アグーリャ米が油飯としてのおいしさに親しむまで、ながいあいだ、この米でたいた「白い御飯」でがまんした。そして、それがいつのまにか白い御飯そのものの味として味わうまでになる。今日でも、さらっとしたアグーリヤ米のほうが「白い御飯」にたいても、ねばり気のつよいカテテ米よりもおいしいと思っている人が少なくない。

フェイジョン（豆）は、早くからブラジル料理の主なものとして、ブラジル式に料理することにつとめたものではあるが、それでもあ（丶）く（丶）をだして、甘い煮豆にしたり、小豆の代用品としてあんをつくったことがある。大豆のない時代には、フェイジョン味噌までつくってみた。しかし、こうした工夫は、小豆や大豆がとれるようになると、かえりみられなくなる。ただ白豆（フェイジョン・ブランコ）が「甘納豆」や「きんとん」になるくらいである。

マンジオカは、その粉を小麦粉とまぜてだんごにしてたべたこともあるが、なまの芋は、煮て、こねて、もち

のようにしてたべたり、またこれをうすく切って、日にかわかし、油であげて、いわゆる「オキナワ・センベイ」にして、子供のおやつにした。

とうもろこしの粉フバーも、小麦粉とまぜてだんごにしてふかしたり、また砂糖と重曹を入れて油であげ「ポリーニャ」にしてたべた。これは現在でもすたれていない。だが、フバーを米ぬかの代用品として「ぬかみそ」に使ったことは大成功であった。これはいまでもわれわれの生活から離れない。米ぬかよりも匂いが少ないから都会生活者などには、あんがいいいのである。ブラジル人が「ぬかみそ」の匂いをきらうことはすごいものである。

細いマカロンを日本式うどんにしたことにはむりがなかったろう。こまかくきざんだものや貝がら形のものは「しるこ」のもちの代用品にもなった。

ブラジル人が全然たべないもので、日本人だけがたべたものの筆頭はそばであろう。

ごまはバイア方面では昔から使っていたし、アラビア系の人たちはごまの油を好んでつかう。ただしブラジルでは、そんなに大量には栽培していなかったようである。ごまは大豆とともに最近では大量に生産されている。とうふはまだ日本人社会の食べ物であるが、そのうちブラジル料理のなかにもはいってくるかもしれない。納豆は

むろん、当分われわれのあいだだけの食べ物にとどまるだろう。

ブラジルの野菜で、はじめから日本式に汁の実に利用できたのはわけぎくらいのものである。ピッコン（菊科の野草）の若葉を「おひたし」にしたり、てんぷらにしたことはだれでも経験があるだろう。なにもないときには、さつまいもの葉もたべた。しかし、ブラジル人のようにかぼちゃの新芽（カンブキーラ）や花はたべなかった。そのかわり茎（葉柄）はすじをとって煮つけてたべた。日本のふきを思わせるものだったからである。だから、のちにふきができるようになると、こんな料理はわすれられてしまう。

シュシュー（はやとうり）は、ブラジル人の料理に昔からあったものであるが、日本人はこれを漬物にした。二つに割って二、三日、日に干してからしなびたものをぬかみそに漬けるとおいしい。若いのをきざんで「瓜もみ」の代用品にもしたし、汁の実にも利用した。

ブラジル人のたべないものに「わらび」がある。ブラジル人は日本人がサマンバイヤをたべるといってびっくりした。たけのこは最近たべるものがいるそうである。

ごぼうもたべないと思う。野生のものがあるようであるが、日本人が栽培したものがしぜんに繁殖したものであろうか。そういえば、よもぎはどうだろう？　いまは

雑草となってしぜんにはえているが、人間がはいったことのない処女地にはみられない。ごぼうもよもぎもブラジル名がわからない。

くだもののなかで桃は昔からブラジルにあったが、日本人はあおい実で梅漬けの代用品をこしらえた。そしてこれを紅くそめるためにベテラーバ（あかいてんさいの一種）の汁や、ビナグレイラの実で色づけした。

このビナグレイラ、別名カルルー・アゼードを日本人は「梅」と呼ぶ。酸味が梅を思わせるからである。ふよう科の植物で綿によく似ている。この実のがくのところ（苞？）がまっかになり、すごく酸味がつよい。これを塩漬けにして梅漬けの代用品としてたべる。戦後は同胞社会にひろくブラジル・ウメとして愛好されるようになった。郷愁をいやす食べ物である。ブラジル人は葉を油でいためて、とろとろにし、フェイジョン料理とともにたべる。実のあかいところはジェリーにする。梅漬けのようにしてたべるのは日本人的な食べ方である。

ずいき（タイヨーバまたはタイヤー）はむろん芋をたべるが、ブラジル人は葉をきざんで油でいためる。日本人は茎を酢味噌にしたり汁の実に入れたりする。

カラーといって山芋に似たものが昔からブラジルにあった。これをとろろにしてたべるのは日本式食べ方であって、ブラジル人のしらないものである。いまでもと

ろろの好きな日本人ならみなたべる。

キアーボ（おくら）を汁の実にしたり、味噌あえにするのも日本式である。アグリョン（オランダがらし）をすきやきに入れるのも日本式だ。

マモン（パパイヤ）の漬物は、早くから移民の間に行なわれていたものだ。うれかけたものを少し日にかわかして、ぬかみそ、あるいは味噌漬けにすると甘味があって美味である。

（パパイヤの実）

この国の野生のきのこをブラジル人が昔から食べていたかどうかはわからない。むろん、上流社会では、ヨーロッパからきたシャンピニョン（マシュリユウム）の缶詰はたべていた。日本人は、開拓生活の初期に、よくブラジルきのこをとってきてたべた。牧場や休耕地にはえ

るものがあった。山林中の古いあり塚にできるものはとくにおいしいといわれていた。きくらげはよくしられている。ただし、一般に日本のきのこのような風味がない。

多くの代用品があるにもかかわらず、うなぎとまつたけはかわるものがない、といわれている。

ブラジルのうなぎはムッスンまたはムッスーといわれる。アマゾン地方ではブラジル人の好物だというが、サンパウロ州では少ない。味も日本のうなぎにくらべるとおとる。一般にはしられていない。

たにしもブラジルにいる。ただし、たべるのは、どうやら日本人だけのようである。

海のものでは、うにやなまこは日本人の食べ物であるが、近ごろではふぐ（バイアクー）をたべるブラジル人がいるという。しかしブラジルの食物の本（1）をみると、「有毒な魚、ただし肝臓をとりされば食用となる」とだけでている。昔からたべていたものかどうかわからない。日本人は日本式にたべる。ふぐのひれ酒を好むものもある。

ブラジル近海にふぐは多いのであるが、日本人間でも、それほど一般的な食べ物とはなっていない。日本式に処理するという点でさしみをぬかすことはできない。ブラジル人がいちばんおどろいたのもこのさしみであった。

いかもの食いは、カスカベル（鈴蛇、ガラガラ蛇）を

たべる。珍味このうえなしという。強壮剤としては魚粉のようにしてのむ。ピンガ酒につけておいてのむものもある一時、ブタンタン毒蛇研究所から苦情がでたほどである。

ブラジル人でも味をしるとやめられないという。

とかげは大きいのになると五五センチくらいのものもいるといわれる。この大とかげはブラジル人もたべる。むろん日本人は煮魚のようにしてたべる。

ラン（食用蛙）は、ヨーロッパの料理をたべつけた特殊な人たちがたべていたようであるが、イタリア人では昔からたべるものがいた。日本人は日本式に「てりやき」にしてたべた。しかし、一般のものは、日本人でもあまりとびついていかない。

こうして、日本式に処理するものは、たいがいその味つけが、味噌、醤油が基調になっている。これが、油、塩、にんにく、胡椒、トマトなどの味つけになれば、もう日本料理ではなくなってしまう。

注

（1）A・J・デ・サンパイオ『セルタネージャとアマゾニア内奥の食べ物』ブラジリアナ叢書二三八、一九四四年版。

49　虫の話

われわれ日本移民がブラジルの土をふんで最初にお目にかかった虫は、日本ではほとんどしらずにいたなんきん虫であった。

移民収容所で二段になった鉄製のベッドに最初の夜をむかえたとき、夜中に首ったまがもぞもぞしたので目をさました。

「いやにかゆいぞ、虫にさされたんだな、へんなにおいがしやがる……」とえり首をさすって手についたにおいをかいで顔をしかめた。

「おや、こんなにはれあがった。どうやらなんきん虫というやつらしい。みろ、この血を！」

白い枕かけに、いくすじかの血がついている。やっとひとねむりしたころ、そっちでも、こっちでも、電気をともしてベッドの上にあぐらをかき、ぶつぶついっている。手の甲や首ったまや、ほっぺたがはれあがっているのだ。でも虫の姿はみえない。

やがて電灯を消して、再びねつくころは、またもや虫の襲撃に目をさますのであった。

熟睡できないままに翌朝目をさますと、ベッドの金網や鉄の棒のつなぎ目に、虫どもがすきまもないほどつ

まっているのだ。これではねむれなかったはずだ。マッチの棒をつっこんでつぶすと、石油くさいへんなにおいを発散する。だが、とてもつぶしきれるものではなかった。

移民会社の世話人に訴えても、当時は殺虫剤もなく、しかも何百台とならんだ寝台にひろがっているこのなんきん虫には、手のほどこしようもなかった。ながくて四、五日のしんぼうだというので、移民たちはがまんしなければならなかった。むろん、人それぞれの体質によって、はれあがらないものもあったり、また夜中にくわれても平気でねているものもあった。

ファゼンダにはいったとき、古い板家にはなんきん虫がいた。通訳などは、ペンソン（下宿）の、そなえつけになった古いベッドにねかされて不眠症にかかった。どんなそまつなベッドでも新しければ心配はない。ただし、夜中に天井からおちてくるやつはふせぎようもなかった。

植民地の生活になんきん虫はいなかった。

ただ、二等（日本の三等）の夜汽車で旅行するとき、なんきん虫にやられることがあった。

あのかたい板のバンコによりかかって、うとうとやっていると、ときには首ったまをかじられて、急にふくれあがることがあった。

カマラーダたちのとまる木賃宿に、なんきん虫はつき

ものであった。ただし、だれも問題にしないとみえて、朝おきてもなんきん虫がいてねつけなかったと苦情をいうものはいなかった。このやっかいな虫どもも、なれてしまえば、全然わずらわしいものではないらしい。木賃宿の常連たちは、みな不感症になっていたにちがいなかった。

旅行などで家にもちかえったなんきん虫は、石油をかけて殺した。ガソリンが手に入るようになると、ベッドを庭にもちだして、ガソリンをかけ、点火してやき殺した。二回もやったらたいがいいなくなる。一九四〇年代には、もうなんきん虫の話はきけなくなった。

ビッショ・デ・ペーのことは、ファゼンダ生活のところで書いたから、ここでは略する。

ただし、人間の体にはいる虫では、この砂蚤以外に、ベルネという虻の幼虫が皮下にはいりこむ。子供の頭などにうみつけた卵が、すぐうじになってくいこむのである。日本人はタケノコ・ビッショとよんでいた。親指大にはれあがった中心に小さな穴があって、ここからなかの虫が息をしている。これを、たばこのやにと石けんをこねたものでふさいでおくと、なかの虫が弱ってくる。丸二日もたってから、力いっぱいおしだすと、ぴょこんと、白いうじ虫がとびだす。よくみると、小さなたけの

こみたいに輪型がついていて、その輪と輪の間に、点々と黒っぽい毛がはえている。小さいのは米つぶ、大きいのは大豆の粒くらいある。これは家畜によけいはいる。なれないととりだすのに苦労する。痛いので早くおしだそうとあせるからである。屋外の用便には、女の人はとくに注意しなければならないといわれていた。

もう一つ、日本人が「千匹ビッショ」といっておそれているビッシェイラがある。これは銀ばえにうみつけられる無数のうじ虫であって、おできや耳だれについた。水にうすめたアルコールやクレオリーナでも殺すが、医者に見せて、とってもらうことが多かった。

ありもうるさい。

大人はそれほどでもないが、赤ん坊など地べたにはわせておいて仕事をしていると、ときには、火がついたように泣きだすので、びっくりして母親がとんでいくと、ありの巣に手足をつっこんで、ありどもに刺されているのである。

サウーバ（葉切りあり）は大きなあり塚があって、少し注意していれば、ふみこむ心配はまずないが、ラバ・ペース（Ｓｏｌｅｎｏｐｓｉｓ ｇｅｍｉｎａｔａ）という小さなありは、もし草のなかででもあれば、ほとんど人に気づかれない。

ただ、そこだけが土がかわいてふわふわしているのでよく注意すればわかるのであるが、いそがしいときなどは大人でも気づかずにいる。巣の面積はいろいろだが、直径二〇センチ以上の丸みがかった不定形である。ここへ足をふみこみ、すこしたってから気がつくころは、もう何百、何千という小ありが、すねの上のはうまではいあがって、チクリ、チクリと刺しているのである。ぶゆのような小さいありながら、するどい針をもっていて、人間の手足にしがみついては丸くなって刺す。数が多いのでとても不愉快である。赤ん坊など、体いっぱいはいあがられて、わんわん泣くのである。ラバ・ペースとは足洗いということであるが、全く、洗うようにくっつくのである。

サウーバ（葉切りあり）は、しらずに足をかまれると、肉でも食い切られたのではないかと思うほど血が流れだす。カベスーダ（頭でっかち）という別名があるだけに、小豆粒ほどある頭についているはさみで肉を食い切るのであるから、出血もひどい。でも、よほどぼんやりしていないかぎり、これにかまれることはまずないだろう

サウーバは農作物の害虫として、ブラジルではいちばんおそれられていたものであった。戦前にはまだこのありの撲滅法が完成していなかったので、「ブラジルがサウーバを殺すかサウーバがブラジルを殺すか」という標

語で政府はサウーバ退治を奨励したものであった。

サウーバにおそわれると、一夜のうちに、綿畑など、みるもむざんに若葉をくいあらされてしまう。働きありのなかには、体のかっこうが大小あって、葉をくい切るもの、これをかついで巣にはこぶもの、いろいろある。通路はすっかり掃ききよめられたように一〇センチくらいの幅で、えんえんとあり塚、あるいは途中の入口までつづいている。このありがいちばん活動するのは夜中であるが、葉をかみ切っている近くへよってみると、バリバリと音がしている。

人家へ侵入して穀物をかつぎだすこともある。とうもろこしが好きだとみえて、粒にしたとうもろこしの袋をみつけると、まず穴をあけて袋をやぶり、くずれおちるとうもろこしの粒を、一つずつかついではこびだす。あの、体の何倍もある粒を、頭のところへもちあげて、よたよたとはこぶのである。まるで人間が袋を頭にのっけて、列をなして運搬しているようにみえる。ねずみよりも損害は大きい。一夜のうちに半俵くらいもちさられたという話もきいた。

彼らは作物の青葉やとうもろこしの粒を巣にはこんで、これを積みかさね、そこで培養される菌糸を幼虫の食物にするのだという。だから、内部に複雑な構造をもつあり塚は小山のように地上に土を盛っている。

サウーバは繁殖期になると、イサーとよぶ羽根のある女王ありがたくさん巣からとびたつ。これを鶏が追いまわす。子供たちはこれをとり、あの大きなお尻のところをちぎって串にさして焼いてたべるのである。いなごよりもっと油っこい。

ありのなかで、かなりやっかいなものは、日本人が「ムダンサあり」とよんでいるコレイソン（Ｃｏｒｒｅｉｃａｏ Ｇｅｎ．Ｅｃｉｔｏｎ）である。ムダンサとは移転ということであるが、地上一面、まっ黒になって小さなありが移動してあるくのである。これが人家などにはいりこむと、地面も壁も寝台も、このありでいっぱいになってしまう。その数は、何万か何十万かわからない。バラータ（ごきぶり）でも、こおろぎでも、ねずみでも、追いだし、攻撃し、虫ならかみころしてかつぎながら前進する。このありは、人間の体につくと、ちょっとかみつくだけで、針はないから刺さない。でも、夜など、寝台をおそわれると、びっくりして夜具をうごかすので、ありがいつまでものこる。

これがわずらわしいのである。できれば、そっとしておいて、どこかに避難していれば、まもなく移動してしまう。いまころであったら、おそらく殺虫剤で屋内に侵入する前に進路をかえさせることもできるだろう。しかし、植民地開拓当時には、殺虫剤はなく、しかも、みな土間

の家であったし、ありなどは、どこからでもはいりこめるようなアバラ家であったから、もしこのありがあらわれたことがわかったら、とおりすぎるまで、そっとしておくより仕方がなかった。家を通過するのに三十分とはかからなかった。ただし早く追いだそうとしてほうきではきたてたりすると、進路をみだして、いつまでも家中をはいまわるし、人間の体にはいあがってくいつくのでうるさかった。

このありが通過したあとは、ごきぶりやこおろぎやねずみがいなくなるのでよかった。

ごきぶりはふえてくると人の爪の裏をかじるし、こおろぎは絹物をくいちらし、ねずみに爪さきをかじられたという話もある。

蜂はどこにでもいるもので、ブラジルでとくにめずらしいものではない。コーヒー採取のとき、蜂の巣があってこまった経験はだれにでもあるだろう。コーヒー樹はなまでももえることがあるので火でいぶすことができなかった。これは、ベスパという野蜂で日本の足長蜂に似ている。家の玄関や軒などに、直径一五センチから二〇センチくらいの丸い灰色の巣をつくるのはマリンボンドである。子供たちはよく、これに紙の吹き矢をふきこんであそぶ。日本人は家に蜂が巣くうのは縁起がいいのだ

といってたいせつにすることがある。この蜂もきれいな蜜をためるのであるが、巣が木質であるために、めったに口に入れられない。

蜜蜂の一種で針はないが、巣に近づくと髪の毛や女のスカートのなかにとびこんでぶんぶんやってうるさいのがある。でもありのように、しょっちゅうでっくわすわけではないから、あまり問題にならない。ジャタイーという黄色ぶゆのような蜂は、木のほら穴にろうの巣をつくり、わずかだがおいしい蜜をためる。

近年アフリカ蜂がふえて猛烈に人間をおそうので問題になっているが、まだやられた経験がない。四、五年前、ある農場で、恐ろしい野火が牧場やカッポエイラをおそったとき、そのやけあとの白あり（クピン）の巣に蜜蜂の巣が発見され、おおいに蜜をなめたことがあるが、大木のほら穴がなくなった旧地帯では白ありの巣を蜜蜂が利用することがわかった。これは筆者の想像にすぎないが、白ありの塔はタツー（きゅうよ）やタマンズアー（あり食い）にあらされたあとは、なかががらんどうになるので、蜜蜂の巣にちょうどいいようになるのではないかと思う。

虫といえば、毛虫もおもいだされる。ブラジルには、すごい毒をもったのがいる。ことに日本の栗の木にいる毛虫に似て淡緑色の大きな毛虫は、ちょっとでもその毛が

肌にふれると、たちまちはれあがって、ひどい痛みがくる。ブラジル人は、タツラーナ！　というとみなびっくりしてとびあがる。夜はほたるのように草の中で光っている毛虫もある。蝶の種類の多いブラジルには毛虫も多いわけである。

虫のなかでいちばんこわいのは「くも」である。ことにカランゲジェイラといって、足をひろげると一二、三センチ（1）くらいになる真っ黒で毛のはえたやつがいちばんおそろしい。

かまれても大人なら生命に別状はないといわれるが、その痛さは口にいえないほどだ。大の男が、わんわん叫びながらはねまわる。毒蛇の場合と同じように注射液もあるが、手か足をかまれたときはその「上部をてぬぐいでくくってやり、なるべく毒が身体にまわらぬようにすると同時に、かまれた部分を直接口にあてて充分吸ってやる。すぐ痛みをやわらげる方法としてはリゾール温液（二〇〇グラムくらい）につけてあたためてやる。もしつけられない部であったら温湿布をひろくあて、ひんぱんにとりかえてやる」など、いろいろな手当ての方法やその他服薬のことが、高岡専太郎博士の『家庭医書』にでている。

農村ではこの「くも」をさけるために、いつも二つの

場合を注意する。その一つは、コーヒーをうえつけた穴「コーバ」を掃除するときには、そのなかに「くも」や毒蛇がいないかどうかよく注意することで、もしゴミがつまっていた場合はすぐ手をさしこまないことである。もう一つは、朝おきて靴をはくときは、靴をさかさにして、床の上に、とんとんとたたきつけ、「くも」がはいっていないかどうかたしかめてみることであった。掘立て小屋時代には、よく靴のなかに「くも」がはいりこんでいる可能性があったからである。

くも類でうるさいのは「だに」である。

カッポエイラ（やぶ）や牧場をとおると、ときどきこれにつかれる。でも大きなやつはすぐ発見できるから世話がない。こんなところに、いついぼができたのだろうと思っていると、それが大きな「だに」だったりする。牧場に多いので家畜にたかる。よく牛の群れに近づくとアヌーという尾のながい鳥が、ケオッ、ケオッとなきながら地上すれすれにとびたつ。牛の「だに」をとって食べる鳥だという。茶色のと黒いのと二種類いる。ハトくらいの大きさの鳥だが、だれもとらない。

人間についていちばんいやなのは、乾燥期（冬）に多くでるポルボラ（粉末）という粉のように草の葉などについていて、牧場や薮の細道をとおる動物や人間につく

やつである。この「だに」でホコリのようにこまかいのをムクイン（Ｔｒｏｍｂｅｃｕｌａ　ｂｒａｓｉｌｉｅｎｓｉｓ）というが、ポルボラと同じ種類のものかどうかわからない。とにかく、ポルボラもムクインも、つかれたときよりもずっとあとになって、体がそこここかゆくなってからはじめて気がつく場合が多い。何百、何千と体につくのであるが、どこにいるのか、ちょっとわからない。毛穴にくいこんで血を吸うと赤くなるので、ちょっとぶゆにくわれたあとのようにみえる。足のほうから、だんだん体の上部に移動し、腰のあたりにきてバンドのためにそこにかたまる。

敏感な部分にもくいつくのでうるさい。いまころならいくらでも薬があるが、昔はたばこのやになどをつけておとした。全部とり去るのに一週間くらいかかることがあった。

ブラジルでは、枯草の上で体を休めることは注意を要する。冬になると牧場地帯は、俗にカチンゲイロ（カピン・ゴルズーラ）という牧草の穂が日本のれんげ草のように赤くみえて、目のさめるような美しいながめになる。そのころ地上はほとんど枯草だ。ピクニックなどに行って、いい気持ちになって草の上にねころんだりすると、家にかえってからムクインにつかれたことを発見して、おおさわざになる。

釣に行って、川べりの草をわけて歩くときも気をつけなければならない。動物のとおるような細道がいちばんあぶないのである。筆者が友人のジープでマット・グロッソ州を旅行したときのことであった。月夜の牧場地帯の小川のほとりに池のような自然温泉があったので、みんな草の上に着物をぬぎすて、お湯につかっていい気分になっていた。近くには人家もなく、まったく原始的な陶酔であった。ところが、宿にたどりついて寝どこにはいるころになると、体中がむずがゆくなってきたのである。草の上になげだした着物にムクインがついたのであった。まったくつや消しな話である。

植民地の生活を語るとき、各所でふれたが、初期荒山時代は、みなぶゆや、蚊や、ビリグイ（小さな蚊の一種）などの襲撃になやまされた。仕事をしていると手の甲が真っ黒くなるほどぶゆ（ブトともいった）がたかった。そのあとが痛がゆくなってふくれあがる。足はもしゲートルの類でもはいていれば心配はないが、それをもちいなければ、ズボンの裾から膝の近くまではいあがって、あとで気がつくと、とたんにかゆみをおぼえだす。埃でよこれたすねを、かいてかいて、かきむしって、土まけのようにはれあがったり、しまいには化膿する部分もでたりする。

ビリグイ（学名　フレボトムス）を日本人は「ヌカ蚊」

ともいった。あつい日中よりもむしむしする夕方が多い。夜は家の中に侵入する。蚊帳の目をとおすほど小さいやつで、血を吸うときは、刺されたようにいたがゆい。どこにとまったのか見えないほどだが、日にすかしてみるとかすかにはねが光ってみえる。場所によると、森林梅毒ともよばれるフェリーダ・ブラーバの病原体を媒介するといわれた。これは、ノロエステ地方の開拓初期に多かったライシュマニア・アメリカーナであった。開拓がすすむにつれ、虫もいなくなり、また、いやなおできもだんだん少なくなっていった。

蚊もうるさい。シャツをとおして刺すやつもいる。よくぼろきれをブリキの管に通してこれを腰にさしこむようにした蚊いぶしをほどこしながら働いたものである。森林近くの仕事がいちばん蚊の襲撃になやまされた。

蚊といえば、初期の米作地や原始林時代はアノフェレスのために多くの人がマラニアにおかされ、生命をうばわれた。

日本移民のなかには、上陸早々なんきん虫になやまされ、ファゼンダでは砂のみに足をいためつけられ、新開地ではばったの大軍に作物をあらされ、ついにはアノフェレス蚊のためにマラリアにかかり、雄図むなしく開拓地にたおれた者が何人あったかわからないだろう。

虫の話も、わが移民の生活の歴史のなかではみのがす

ことのできないものである。

注

（1）アマゾン地方では二〇センチくらいのもいるという。

（2）ここでは作物の害虫についてはサウーバやガファニョット以外はふれなかった。

50　草の話

虫の話をかいたついでに草のことを書く。草といっても畑にはえる雑草である。移民の生活にとって、思い出深いものであるが、近ごろはだんだんわすれられていくようである。

ファゼンダ生活は、一面からみると雑草との闘いであった。一九三〇年ころまでは、コーヒー園はもちろんのこと、雑作（米、豆、とうもろこし）地でも、無肥料の略奪農であったので、いちばん警戒しなければならないことは、雑草がのびることであった。無肥料でたいがいの作物はできたかわり、雑草の伸びも早かった。

土地のいいところは背丈にのびあがって、コーヒーの葉を黄ばませた。雑草にうもれると作物がのびなかった。

十二月から二月にかけての真夏は、雑草はものすごいきおいで成長した。炎天のもとで、汗をながしながら、この雑章と闘ったのである。エンシャーダを握る手のひらは、いつかマメがつぶれてタコだらけになる。シャツは汗でぐしょぬれになる。ところによっては風とおしが悪いので、蚊やぶゆやあぶなどに刺されながら、除草にはげんだ。

まず、話をピッコン（Ｐｉｃａｏ）からはじめる。橋本梧郎の『ブラジル植物記』によると、日本名は「コセンダングサ」、菊科の一年生。コーヒー園などには、すきまもないほど密生し、土地のいいところは腰のあたりまでのびあがる。小さな黄色い花がさいて、その実は黒いとげのかたまりになる。そのとげのさきに、また、かすかなさかさとげがついているので衣類にくっつくのである。それこそ、つくわ、つくわ、着物は黒ごまをふりかけたようになる。俳人が「草じらみ」と名づけたやつだ。

絹服のひだかかる如と草じらみ　　中島廉女

女のスカートなどはバリバリくっついてもつれがちだ。ズボンの裏側にもつく。足をうごかすたびに、ちかちかする。仕事のじゃまをすることおびただしい。休息のと

き、着物の一端をつまんでピンと張り、ナイフやその他の小刀でこそぎおとすことは、コーヒー園生活のなかでも書いた。これがそのあたりにちらばるのだから、また生えるわけだ。年に何回も生えるのである。若草のうちにけずりとってしまえばいいのであるが、種子のつくころまで放っておくと、また、ぞっくり、「あおもうせん」を敷いたようにはえる。

若草のときは除草もらくであるが、草がのびて実がつくころは、茎がすじ張ってくるので、切りにくい。根もかたく深く張る。

春菊のような匂いがするので、日本人は若いのを摘んで、おひたし、汁の実、てんぷらなどにしてたべた。風味のあるものであるが雑草としては始末におえないものであった。この実が着物についたまま洗濯をすれば、手にささることもある。

コルションという名のイネ科の草で、地面をはうようにのびるのがある。コルション（敷きぶとん）というから、あのコルションにつめる草も、この種類のものであろうか。細い糸のような茎で、人間に不快を感じさせるようなものではないが、よほど気をつかわないと除草のときに取りのこす。地下の養分を吸いとることがはげしいとみえて、畑一面にこれがおいしげると、作物の成長をはばむ。

だが、地面がかわいているとき、この草にむかって鍬をとおすのは気持ちのいいものである。根が深くないから、鍬をすべらすように引く。さらっ、さらっと切れるのである。草がしげっているわりに仕事がはかどる。だが雨のときは枯れきらない。根元からすぐ芽がでるのでやっかいだ。

カラピーショ（Ｃａｒｒａｐｉｃｈｏ（ｌ））というのは、やはりイネ科の芝草であろうが、じつにやっかいなものである。穂がでないときは、きれいな草で、ぶんげつしたての麦のようである。

ところが、みじかい穂がでて、みのるころになるとたいへんだ。実は小さなこんぺいとうのようで、とげだらけ。これがズボンのさきやスカートにつくのである。ピッコンよりもばりばりとして痛い。実の色は、はじめはあおいがうれてくるともみのように黄色くなる。これがうんとついたら、まず、ナイフでこそぎとってからでないと仕事がすすまない。根がぎっしり張っているので仕事もやりにくい。シャツの袖にでもついていようものなら、ちかちかして気になる。こんぺいとうの針のさきにはさかさとげがついているのだから、スカートなどはすぐもつれて足にからみつく。だから女でもこの草とりにはスカートの下にズボンのようなものをはくか、それともモンペをはく。カラピーショのついたすそが足にか

らまりついたのでは、とても不愉快で仕事にならないからである。いちばんいやな草であった。しかしピッコンやコルションほど畑一面にひろがることはなかった。新コーヒー園や雑作地では、ひとまとめにしておいて、枯れたら火をつけて焼いたこともあった。これも作物にはたたった。

メンドイン・ブラーボという草は、切ると白い汁がでる。トウダイグサ科の植物であろうか。これの改良種が観賞用の草花となっている。「マンジョウカ」と同じ科の植物ではないかとおもう。

密生していても、人間の親指くらいの太さの茎がのびあがる。土地がいいほどのびる。これが大きくなる土地は、作物、ことに豆のできがいいというので農家はよろこぶ。しかし、手おくれになって胸のあたりまでのびあがったものをけずりとるとなるとたいへんだ。かなり根が深く、なまくらな鍬ではよく切れない。鍬をたたきこむのに力がいるので、骨のおれること除草ではいちばんかもしれない。

つゆ草と松葉ぼたんの種類は、ブラジル式の除草法ではなかなか枯れないのでやりきれない。つゆ草などは、まとめて木の切り株の上にのせておく。

新開地には、カピン・アマルゴーゾ（2）がすすきのように白い、しかしなよなよした穂をなびかせていた。

普通は、ただマルゴーゾといっていた。

これは近くの牧場から侵入することが多く、牧場などでは、背丈にのびあがる。牛馬もあまり食べないにがい雑草で、牧場の細道を人があるいていても、帽子だけが動いているようにみえる。夕日にすかしてみると美しい白穂であるが、風がふけば遠くへ実がとんでいく。

根がもろいので、ぎっしり張っているわりに除草はしやすい。大きな稲の何倍もあるような株でも、サック！と鍬で根ごと切りおこすことができる。

だが、この草の実は遠くへとんでいくので、近くに牧場があれば、耕作地をもつ人は迷惑する。こうした理由から、日本人の植民地に外人がはいりこんできて、そのロッテ（地区）を牧場にすることに対してはおそれをなしていた。

ベースボールに熱心なある友人のところでは、除草に手がまわらなかったため、奥さんは隣家の人に気がねして、鎌で草の穂を刈ってあるいたということである。

だが、この草は、土地が古くなると、だんだん姿を消すのではなかろうか。もう四十年も前のことであるが、開拓初期のノロエステは、各所にマルゴーゾ（アマルゴーゾとはいわなかった）のしげった畑や牧場があったが、もうあまりみられなくなった。新開地でも、この草がはえていると、どこか荒涼とした感がするものであっ

た。

マルゴーゾほゝけつくしゝ風寒き

冬枯の野に佇つはわびしも　　葛西妙子

パラナ州には、ウルチーガという大きな葉で、茎にもにもとげのはえた、いやらしい草があった。イラクサ科の植物だという。よく除草のいきとどいたところではすぐ絶えるらしいが、やまぎしやちょっとしめり気のあるところには、よくはえた。

「ウルチーガの葉で尻をふいてみろ！」

なんて、よくじょうだんにはいったものであるが、ちょっと手にふれただけでも毛虫にさされたように痛い。『ブラジル植物記』によると、ウルチーガ・ブラーバ、ウルチーガ・フォーゴなどの別名があるそうだが、みなさわると痛いという意味をふくんでいる。ウルチーガ・フォーゴは火のウルチーガだから、やけどの痛さを思わせる。

葉は薬用にもなるそうだが、どうも、見ると肌があわだつようで近づきがたい。しかし、どんなにのびてもうどの大木、注意ぶかく切りとって、人のとおらないところによせておく。ウルチーガと関係のあるウルチカリアという言葉がある。じんましんのことだ。ウルチーガの葉にふれたときの不快さを連想させる。

さわると痛い草は他にもある。やまぎしの草にまじっていたり、ときにはコーヒーの樹にからまりついている。しっていれば心配ないが、はじめは、たいがいしらずに、一度や二度、このつる草にふれたものが多かろう。けむくじゃらな朝顔の葉のようなつる草である。シッポー・ブラーボともいったが、本当の名をしらない。

豚や鶏もたべ、人間にもたべられるカルルーという草がある。カルルーとは「たべられるもの」という土人語だというが、ところによって、いろいろなものをさす。そのなかのカルルー・ソルダードというのは、ちょっとピッコンのような草で、茎のほうには、ところどころにとげがはえている。土地のいいところではすばらしくのびる。豚がおいしそうに、シャリ、シャリとたべる。わりあい、たやしいい草である。カルルー・リングア・デ・パーカ（牛の舌）は、その花をみると、水引き草をおもわせる。花が黄色なのや、うすむらさきのがある。日本人もこの葉をすきやきなどにいれてたべる。おひたしにもする。多肉性のもので、なまのときは切るとぬるぬるする。除草にはらくな草である。

雑草とはいえないかもしれないが、それでもコーヒーの樹にはいあがると成長のじゃまをする野生（？）のトマトがある。おや指のさきくらいの大きさの実がなって、臭気がとてもつよい。なまでたべると口がえがらっぽく

なる。料理にはつかえる。病菌に強いとみえて、茎はどんどん枝をひろげ、コーヒー樹いっぱいにひろがる。実もたくさんなる。むろん、たやそうと思えば根元を切ればいいのでなんのことはない。

ナス科のものでは、トマトみたいだが葉の裏や茎にとげがあり、トマトのようで黄色い実のなる草がある。新開地に多い。名をわすれたが、甘いので、子供たちはよろこんでたべた。

また同じナス科で、野生のほおずき（これもたくさんある）みたいな草で、小さい黒い実のなるものがある。まち針の頭くらいの大きさ。マリア・プレッタといった。子供がたべると桑の実をたべたあとのように口のへりを真っ黒にする。

もちろんこれとて、除草にくるしむたぐいの雑草ではない。

その他場所によるとごぼうやよもぎがある。ごぼうはブラジルでは野生のものがあるらしく思われる。農業者が除草に苦労した話はきかないが、これが牧場にふえ、実がたくさんなると、馬をいためつける。ごぼうの実がしっぽにつくと毛がからまりついてしまって、はえやあぶを追うことができなくなるからであった。

よもぎは日本人がもってきたものではないかという話もあるがわからない。サンパウロ市の郊外に多く、なか

なかたえない。

ちがややわらびも場合によってはたえにくい雑草であった。

だが、ちがや（サッペー）は農家に大きな貢献もした。あばら家時代はこれで屋根をふいたし、サッペー小屋は涼しかった。

サッペザール（ちがやの原）は人がはいりこめないような草原も多いが、冬になって野火がはいると、すっかりもえてしまって地肌があらわになる。そして、ひと雨くると、つばながでるのである。

ブラジルのわらびは人間の背丈にのびあがる。若芽も親指の太さ、あるいはそれ以上にふとくなる。日本人はサマンバイヤを食べるといって、ブラジル人はびっくりした。食糧になったといえば語弊があるが、ときには野趣のあるおかずをわれわれの食膳に供した。土地をふかくすきおこすようになって、ちがやもわらびも姿をけすようになる。

チリリカという悪草がある。世にはばかる憎まれっ子、人の屑もチリリカということばがあるから、悪草といってもいいだろう。いろいろ種類も多いらしいが、サンパウロ近くの古い土地には、のびるみたいなもので匂いはないが、根元に米粒みたいな小さい球根がごっそりついて、いじればいじるほど広く繁殖するものがあり、また種子

と地下茎とからふえていく芝草のようなかやつり草の一種がある。これは根が木の根のようにかたくて、日にさらしておいても、なかなか枯れない。しぶといことこのうえなしである。

さらに、チリリカとはいわないが、俗に、トレーボというカタバミ科の草がある。葉がトレーボ（クローバー）に似ている。まれに四つ葉のものもある。これは葉に赤黒い斑点ができ四角な模様をつくる。ブラジル人はサンゲ・デ・ジェズース（クリストの血）とよんでい聖愛のシンボルというより、なにかの「お守り」かもしれない。鉢植えにしているのを見ることがある。

この草も根のほうにあわつぶのような球根が無数にできて畑をたがやすたびにどんどんふえていく。チリリカも、このトレーボも近来、除草薬が生産されるまで、人間の手におえない悪草であった。

注

（1）カラピーショというのは辞書によるととげのある草の実の総称である。われわれがここでいうカラピーショはイネ科に属し、実は小さいこんぺいとうのようである。はじめはあおく、のち黄色くなる。

（2）Ｅｌｉｏｎｏｒｕｓ　Ｃａｎｄｉｄｕｓ　Ｈａｃｋ.

（3）クリストの血がしたたったカルバリー山上にはえたものだという伝説がある。

５１　初期植民地の気風

オスピタリダーデ（旅人をもてなす）

礼厚く行商発つや冬霞　　転石

私が植民地初期の気風を叙述しようとしたとき、いちばんさきに思いだされたのはこの句であった。駅から遠い植民者の家へ、行商（マスカッテ）に行ったところ、食事まで出されてすっかり恐縮し、あつく礼を述べて、冬霞の新開地を、またとぼとぼとつぎの日本人植民者の家を訪ねていく光景が想像され、当時の植民地の気風をなつかしく回想することができるからであった。

絵かき志望の一友人は、行商でパンをかせいでいたが、あるとき筆者の宅をおとずれ、「このあいだはＯさんのところへ行ったら、たくさん買ってもらったうえ、御飯まで御馳走してもらって、じつにうれしかった」と話したことがある。

これは行商の行き先が、たまたま筆者の友人のところだったことによる歓待であるが、こうしたことは、戦前の植民地の気風からいえば決して例外ではなかった。

不便な奥地をおとずれるものは、視察者、新聞社の集

金人、行商、土地売りなどであったが、二、三軒まわるのに一日仕事のこともめずらしくなかった。訪問先では、どこからきた誰ということとさえわかれば、商売のことはあとまわしで、まず世間話がはじまる。マスカッテならすぐ商売の内容もわかるが、そんな荷物をかついでいない客に対して、はじめから「何の御用で……」などと、よそよそしい言葉でといただしはしない。きっそく家に案内し、「よく遠いところをきなさった。サンパウロはこのごろどうですか」というようなことから、客は各地のニュースを語る段になる。

おかみさんは、客がどんな素性のものかきかされるまえに、もう炊事場へかけこみ、コーヒーをガリガリひきだす。いれたての匂いのいいコーヒーが、カネキンニャ（瀬戸びきの小さな茶碗）でブーレ（コーヒー入れ）ごとサーラのテーブルにだされる。コーヒーがでると勝手では、もう米をとぐ音がしだす。さらに裏のほうでは、娘さんか誰か犬に鶏を追わせている。カッカッカ……というなき声がきこえてくる。鶏がつかまったのである。こうして、客間で話が用むきのことにうつる時分には、もう食事の支度ができるのであった。

用事がすもうがすむまいが、食べ物ができあがれば、テーブルにはこばれてくる。ひろん、食事時でもなんでもない。とにかく、遠いところからきた客には、なにには

さておき食べ物をだすのが習慣だ。おかみさんには、どんな客か、亭主の話し具合でわかる。主人がうれしそうに声を張りあげて談笑していれば、楽しい珍客であることを察する。客が遠慮している様子だったら、あんまり空腹ではないとみて、「そのうち酒のさかなもつくりますけに、まあ、ゆっくりしていきなさい」というようにすすめる。

旅に慣れないせっかちな客は、時間外の食事とみて辞退する。そしてさきをいそぐ。とうとう昼食にはありつけなかったというようなことになる。だから、田舎まわりの仕事をするものは、だされたら一口でも食べておく。話しているうちに主人の気にいれば、必ず泊まっていくようにすすめられる。農繁期であろうと仕事の最中であろうとかまわない。珍客をもてなすのは、植民地の人には無上のたのしみのようだ。ひともしころになって一杯やれば、めずらしい話もきけようし、苦労話もきいてもらいたい。ランプの光のもとで、一家のものが遠来の客をかこんで夜ふけまで語りつづける。

もし、いそぐ旅でなかったら、客も安心してもてなしをうけていい。たとえマスカッテでも、ゆっくり旅つづけたはうが商売になる。小間物や化粧品など晩になってからのはうが宣伝しやすいし、買うほうもいろいろ説明をきいて必要なものをえらびだす。

行きずりの旅人でも、事情を話せば、決してそまつにはあつかわない。紹介状などもたなくとも、どこのだれにきいてきた、といっただけで、御飯もごちそうになれるし、泊めてもらえる。昔は、だれでも「視察」と称して各地をみてあるいたものである。視察者がくることは、土地の評判がいいことだし、また日本人が多くなれば、おたがい力づよいことなので、どこでも歓待してくれた。

よく同県人をたよってあるくものもいた。また、九州の人間がいちばん世話ずきだからというので九州人をさがすものもある。しかし、日本人なら話がわかるから安心してたよっていける。むろん旅人をいたわる気持ちは日本人だけの美風ではない。いな、これはブラジルの人たちが、みなこの国の美風として誇っているものだ。とくに、交通の不便な時代や場所ではそうであった。

筆者はまだノロエステの開拓初期に、奥地へはいったものであるが、山へはいる途中、道に行き暮れて、一行四人、あるファゼンダのスペイン人の家族の世話になったことがある。むろん、コロノだったので余分の寝台などあるわけはないので、夕方であったが、これから森林へ行って木を切ってきて寝台を作ろうといいだしたので、土間でけっこうだといったら、サーラいっぱい豆がらをひろげ、その上に収穫用のパンノ（布）を敷いてくれた。そして、その晩は、日本人は米が好きだろうからといっ

て大きなかねのおはち一杯油飯をつくり、さや豆を細くきざんで豚の脂で妙りつけたものをそえて御馳走してくれた。こうして一晩世話になり、翌朝はカフェーもよばれ、よく道も教えられて目的地へ向かったのであった。ブラジル奥地の習慣としては、こういうふうに家の中に泊めてもらうことは破格のとりあつかいであることをしったのは、ずっとあとのことであった。普通は、物置きか、旅人をとめる特別な小屋（ランショ）があって、食事は家の中でだしてくれるが、泊まるのは、そうした特別な場所である。なぜなら、旅慣れしたものは、夕食をたべさせてもらえば家の者に礼をのべ、すぐ小屋にひきあげ、翌朝は未明に出発するので、主人にあいさつする必要もないからである。

こうして、奥地の人たちは、ブラジル人とかぎらず、どこの国籍のものでも、旅人の便利をはかることをわすれない。むしろ日本人はこうした習慣をしらなかったので未知のものを家の中に泊めたくない気持らから、外人を警戒し、食事すらだきない場合があった。

ブラジル人が旅人を歓待することは、その後友人とマット・グロッソを旅して、多くの経験をした。ときによると、残り少ない食料品をあらいざらいだし、また数少ない鶏をつぶして料理してもらったり、きのどくなほど世話してもらった。こうして旅人をいたわるかわり、

万一裏切り行為でもあれば、見つかりしだい、一発のもとに消されてしまう。イングラチドン（忘恩）とトライソン（裏切り）に対しては、決して容赦しないのである。また、奥地の人たちは、どんなあばら屋に住んでいても、必ず武器をそなえていた。猟銃やピストル（昔は二連発のガルーシャ）である。日本人は武器をもっていないということで評判になって、ときには無頼の徒に甘くみられたことがあった。そういう話が伝わると、日本人以外の者を家に泊めないということになる。しかし、事情に通じたマカーコ・ベーリョ（古猿＝古強者の意）になれば、正直な旅人であるかどうかをみわけ（とくに家族ものは安心できる）彼らをうけいれる習慣を獲得した。「一度世話しておくと、いざという場合には頼りになりますよ」というのである。彼らも一宿一飯の義理をわきまえているのである。

相互扶助と平等主義

ブラジルにムシロン（ムチロン、プシロン）とよばれる相互扶助の古い制度があることは、いろいろなところで述べた。日本では「ゆい」と呼ぶそうである。ブラジルのムシロンは、ただ相互扶助だけを目あてにしたものではなく、そこには社交的な意味もあるという。しかし、

こういうものも賃金制度が普及するにしたがって消え去るようである。

われわれの社会では「加勢」とよばれるものが、ファゼンダや初期の植民地時代にはあった。ムシロンは相互扶助の共同作業で、夜はバイレ（ダンス会）などがあってにぎわうのであるが、「加勢」も家建て、蒔きつけ、収穫、その他病人がでて仕事がおくれたような場合の手伝いであって、あるときは村（植民地）の家長たちが、またあるときは青年たちが集まって、おくれた仕事をかたづけた。こういうことは、どこの植民地でも、入植後四、五年くらいまではつづいた。そして、女たちは炊事の方面をうけもった。結婚祝いの御馳走つくりなどはあとまでつづいた。現在でも習慣として残っている地方が多い。

それから、冠婚葬祭には、村の人たちが相談のうえで、結婚式のお祝いには鶏一羽、お葬式には白米二リットル、誕生祝いはもち米いくら、もしお金の場合は、二ミル、五ミルというようにきめていた。祝いごとがあってご馳走をつくる場合でも、ほとんど手伝いに集まった女たちがあれこれときめる。しかし、コーヒーがとれだし、成金がでたりするころになると、きばっておおげさにやるものがあらわれて、もうこうしたしきたりはきえていくのである。

移民たちは、おおむね裸一貫でブラジルへ渡航した。

ここでものをいうのは肉体的な労働力だけであったから、日本で何をしていたか、どんな社会的地位にあったかは問題外であって、場合によっては尊敬され、また同情の対象くらいにはなった。人をだしぬいて得意になろうにも経済的基盤がない。お互いが貧乏なのだから他人に迷惑をかけてはならない。だから、みんなで相談する。それ以上のことは、加勢にいってうんと働けばいいのである。こういう習慣を生みだす平等社会は、もし不慮の災難でもおこって落伍者がでるような場合は、村全体の責任として、なんとかもりたてようと加勢した。そのかわり、こうした集団では異論は禁物である。大多数の納得のいく方法にしたがって、集団行動を行なわなければならない。もしその植民地に東北人が多かったら東北的色彩がつよくなるし、九州人が多かったら九州的になる。病人がでて現金を必要とし、人から借金する場合、証書などというやぼなものは提出しない。むろんインフレの少ない時代ではあったが、何年たっても必ず返済した。

もののやりとり

こういう社会の内部では、有無相通じるために、さかんに物のやりとりをする。めずらしい野菜ができたといっては隣近所へくばる。豚を殺した場合もそうだ。釣

にいってどっさり魚をとってきた場合などはむろんのこと、自慢話かたがたもっていく。ときには、親しいものを招待して一杯やる。

ところがちょっと不便なことは、隣家にほしいものがあっても、買いにいくことができない。まだ養鶏など、もうけ仕事にはしていなかったから、卵買いにでもいったら、あるだけくれる。お金をとらない。野菜ものなどは、いるだけとっていきなさいという。お金をとらないということは、どうしても遠慮せざるをえなくなる。

こうした点、ブラジル人は少しも気にしない。移民として同一境遇にあるもの同士ではないから、ただならいつでももらいにいく。むろん、彼らも「お返し」をする。しかし、それは、なにも義務とは思っていない。だから、日本人はブラジル人に対しては多くの場合お金をとった。また、わけてやりたくないときにははっきりことわった。こういう方面で、同胞社会の内部と、対ブラジル人とは別な態度でつきあった。ブラジル人に対しては、早くからネゴシオ・エー・ネゴシオ　（商売は商売）というはっきりした態度をとった。そして、この傾向は都会に近いところでは、あとになると同胞間にも一般化していくのである。同じ時期に、同じ境遇のものが、同じ場所にはいる、という初期の植民地的社会でなければ、たとえ隣合っていても、やることは必ずしも連絡があるのではな

いから、商売は商売という態度をとっても、そこになんのこだわりも感じないわけである。

未知の旅人に対しても町へバスが通うようになれば、どこそこにはホテルがあります、といえばすむし、金さえ払えば、他人の加勢なしで人をやとい、自分の気にいった住宅をつくる。結婚披露なども自分の社会的地位を誇示しようとしてばかげた御馳走もつくる。物を買いにくるものには、そのときの市価で売る。それをだれも不思議がらない。ブラジル人であろうと日本人であろうと商売は商売である。

よく奥地の人は「サンパウロ郊外の百姓のところへたずねていくと、コーヒーどころか、家へはいれともいわない。利害関係がなければ門前払いをくわされる。町の近くでせせこましい生活をしているから人情味がなくなる」と、こぼしたものである。

しかし、こうした傾向は、もう奥地でも、だんだんあたりまえのことになっていく。裸一貫の出稼ぎ移民であった時代が遠くすぎ去ったことを物語るものであろう。ことに二世の時代になると、もう移民意識はないから、日本人であろうとブラジル人であろうと、他人は他人である。人情にこだわる義務は感じなくなるのである。

５２　ブラジルの田舎者の生活

ここで田舎者とよぶのは、いわゆるカイピーラのことであるが、このなかにはカボクロといって、数代にわたって不便な場所で、ほとんど商品経済のそとにあって、自給自足的な生活をしているもの、ながくコーヒー農場のコロノとして住みついたもの、あるいは移民の子孫で、カボクロと同じような生活をしながら、小商品生産者として農業をいとなんでいるものなどをふくめる。いずれも、その生活様式は、ブラジルの貧農的伝統をもっている点で共通している。ここでは、主としてサンパウロ州内の田舎者について述べる。

いま彼らの生活を叙述しようとするのは、ただ読者の好奇心にうったえるためではなく、ファゼンダや植民地、あるいはサンパウロ郊外の日本人農家が、彼らの生活から、多くの影響をうけているからである。彼らは生活のうえでわれわれの先輩であった。彼らの生活様式は、現在すでに失われたものもあるが、不便なところでは、依然として持続されている。

カボクロの家

住居とその内部

彼らの住居は、日本移民の植民地初期の生活で叙述したものとほとんど変わらない。

いちばん原始的なものは、パウ・ア・ピッケ様式といって、丸太や割り木で家のかこいをつくる。地上には木（パウ）を立てならべる（ア・ピッケ）ので、そうよばれる。壁土はぬったりぬらなかったり、もし壁土をぬってその

上にしっくいの上塗りをすれば上等な家となる。
屋根はサッペー（茅）が多く、所によっては椰子の葉や木っ端もつかった。土間は水を打ってよく突きかためる。
天井はないのが普通である。サッペーぶきの家などは、屋根の木組をかずらで、ていねいにからげているので、風雅な感さえする。
ファゼンダの家にはレンガづくりで屋根は円瓦のものがある。こういうところは地面はレンガ敷きになっている。窓には木の戸はついているが、ほとんどガラス戸はない。もしレンガ造りで白亜の壁、ガラス窓のついた家であったら、もう貧農とはいえないし、農家であっても、普通はカイピーラとはよばないので、ここにははぶく。
カイピーラの家は、食堂兼客間のサーラ、主人夫婦の寝室、子供たちの部屋、炊事場の四つに仕切られているが、各々の部屋の入口に戸はついていない。たまにフノゼンダのレンガ屋にはついていることもある。カボクロの家など、二部屋くらいのところもめずらしくない。母屋のわきにひさしをおろして、ここを炊事場にすることが多い。
サーラにはテーブルがおいてあり、腰をすえる部分を蒲の葉で編んだ椅子が数脚ある。
しかし、カボクロの家などには、テーブルも椅子もな

いところがある。そういう家では、小さな腰かけをもちいたり、丸太を横にして腰かけに利用したりする。カボクロには、日本人と同じように、しゃがむ習慣があることも考えあわせていいだろう。

食器棚はサーラにおくことも、炊事場におくこともあるが、木のわくに板を何段にもならべたもので棚のへりに切り紙などをたらして趣味をそえる。日本人は丸太を土間にならべてその上に空箱をかさねた。

もしサーラに額をかけるとしたら、たいてい色刷りの聖者の肖像である。しかし、パウ・ア・ピッケの家には、なにもなかった。カレンダーの一枚もかけてあればいいほうで、当時は「ひめくり」であった。

テーブルの上には、素焼きの水がめ（モリンガ）が水のみ（カネーカ）と共においてあった。コップはほとんど使わなかった。

寝室とあかり

彼らのダブルベッドは大形で、日本移民をおどろかせたものの一つであった。とうもろこしの皮をつめた厚い敷きぶとんをもちいた。枕には草の花（マセーラ）の干したものをつめる。キク科の植物なのでいい匂いがする。夜には便器をつかう。便所はないところが多かった。あ

かりは、カンテラをもちいた。オキシフル入れの壜のような形のもので、ブリキのわくがついていた。持つところもブリキでできていた。寝室では、これを枕もとの台の上においた。

特長のあるのは炊事場であって、かまどはレンガづくりは上等で、泥壁や丸太の家なら普通は棒をならべて作った棚の上に、長目に泥できずく。鍋が二つ三つならべてかけられるようにする。われわれも、こうしたかまどをきずいた。むろん、しゃがむことを別におっくうに思わなかったから、直接土間にきずくこともあった。

かまどの上には、二本の針金、または蔓で細い棒を横につるした。ここに腸詰めやトウシーニョ（豚の脂身の塩もの）を掛けた。しぜん燻製になる仕掛けである。棒をつる針金や蔓には、底をぬいた空壜を逆さにとおしてぶらさげ、ねずみよけにした。ときにはブリキ板をランプの傘のように吊りさげることもあった。

たきぎは、棚式かまどなら、その下にさしこんでおく。コーヒーやもみをつくために、必ず臼があった。腰高のもので中ほどがくびれている。きねは両端をつかうようになっている。一方がコーヒーを粉にするときのためなら、他方はもみをつくためである。日本人はもちをつくときに日本式のきねをもちいた。

食　生　活

コーヒーを入れるには、まず湯をわかしておいて、粗糖（マスカーボ）をよくこれにとかしてから粉とともに布袋でこした。湯は鍋か空缶でわかした。袋は細長くできているのであんどんのわくのようなものをつくり、上部の板には丸い穴をあけ、ここに袋をさしこんでたらし、下のほうにコーヒーうけの器をおいてこした。ときには壁のすき間にコーヒーこしの袋の柄（太い針金）をさしこむこともある。コーヒーはブーレに入れて、かまどのいちばんうしろのほうにおいて、いつでもあたためられているから、客があればすぐだせる。甘ったるいものであるが、食物にいっさい砂糖をつかわない生活のなかでは、けっこうおいしくのめるのである。

甘いコーヒーをどんぶりに入れて、とうもろこしのさらし粉（ファリーニャ・デ・ミーリョ）をまぜ、そばがきのようにして、朝や午後のおやつに食べる。これも入植当時は、われわれもまねた。しかし、カイピーラたちは朝はたいがいコーヒーだけで、ものをほとんどたべない。九時に昼飯があるからである。

日常の食物は豆が主で、油飯もたいたが、豆にマンジオカの粉をふりかけてたべるほうが多かった。米飯への好みは時代がさかのぼるにしたがって少なかった。ミナ

ス州のカイピーラはアングー（とうもろこしの粉を鍋の申できながに練ったもの）をたべる。

豆は豚の脂やにんにく、塩などで味をつける（煮方、味つけの順序は、すでにファゼンダ生活の中で述べた）。とろ火で長時間煮るので、こってりしておいしい。客があれば、分量をふやすために水を入れて汁を多くする。これはマンジオカ粉をふりかけてたべるために、具合がいいので便利である（マンジオカ粉の種類については、イグアッペの桂植民地の生活のなかで説明した）。われわれは白い御飯にこの豆をかけてたべた。しかし、脂とにんにくは少量にした。ここでは日本移民の生活を主として記述するのではないから、われわれの食生活については詳細にわたることをさける。

パン釜のある家は、田舎家でもかなり気のきいたところである。彼らは麦粉に、とうもろこしの粉やマンジオカの粉をまぜてパンをつくった。またときには御馳走の焼肉もこしらえた。

あおいとうもろこしのできるころには、おやつ（メレンダ）にパモーニャやクラウをつくる。パモーニャは、とうもろこしをまずすり下ろし、裏ごしにかけた汁をファリーニャ，デ・ミーリョとまぜてべっとりさせたものを、とうもろこしの葉に包んでふかすのである。クラウは、すりおろしたとうもろこしの汁を裏ごしにして煮つめ、

ようかんのようにする。
カイピーラにもいろいろ変わった料理があるが、初期の移民たちはそれを自分たちの生活にとりいれようとしなかったので、ここでは詳しく説明しない。
フェスタ（お祭り）のときに彼らはケントンをつくった。ピンガ酒を湯でうすめてしょうがやニッケや砂糖で味つけした熱いのみものである。これも二世が成長するまでは、あまりわれわれの生活にはいってこなかった。
食事時には、テーブルのないものは、土間の小さな腰かけにかけたり、男なら、ときには入口の門に腰かけて、お皿にもりきりの食事をした。ソッパ兼用のほうろう引きの白い皿にもった食物は手のひらにのせ、わしづかみにしたさじでまっ正面から口へもっていく。おかわりはほとんどしない。日本人は無作法な食べ方だといったが、いかにもゆったりとして自由な食事であった。
冷蔵庫などはないのであるから、ものを保存するには、肉類は日干しにしたり、塩漬けにしたり、ときには燻製もこしらえた。むろんかまどの上でもしぜんに煉製ができた。
日本移民も、腸詰めやトウシーニョのつくり方を彼らから学んだ。

たばこ

たばこは縄たばこ（フーモ・デ・コールダ）をもちいた。

これはたばこの葉を縄にしてかためたもので、色はたいがい真っ黒で、すごくかたい。きざむときには、このかたい縄たばこのひときれを左手ににぎり、その先端をナイフでうすくけずりとるのである。縄の太さは直径三センチ、あるいは二センチ以下のものもある。けずり方は、ナイフの刃を自分のほうにむけ、左手のたばこを外がわへひねるようにしてきざむ。きざみながら、きざみとったものを左手の手のひらにためていく。たばこ一本分をけずりとったら、これを手のひらで、ゆっくりともみほぐす。それから、枯れたとうもろこしのやわらかい皮を、適当な長さと幅に切って、これに巻きこむ。巻いたたばこはほぐれないように、最後には、皮（パーリャ）の縁をひとなめしてはりつける。そして、原始的な火打ち石のライターで火をつける（ライターの構造については、ファゼンダ生活のところで述べた）。たばこ一本つくるにも時間がかかる。中年以上の女は、きざんだ縄たばこを、よくパイプにつめてすう。パイプ（カシンボ）は素焼きのものや、粘土でつくって日干しにしたものなどがあり、長い管（ラオ）がついている。管の長さは、地方により、

好みによっていろいろちがっている。
縄たばこのひときれを、くしゃくしゃ噛んでは、ときどきピッとつばをはきだすものもある。
われわれも縄たばこをすった。これが上手にきざめるのは、ブラジル生活のベテラン、マカーコ・ベーリョである。フェイジョンやピンガ酒とともにブラジル的なこくのある味である。だが、慣れないものには辛くてすえない。慣れたものは、紙巻きのように、たびたびすわなくてもいいから健康にもいいし、だいたい経済的だという。田舎ものは自家製のものをすった。

入　浴

彼らは、夕ぐれどきか、夜になってから小川で水浴をする。体をあらわないときは、家で夜、足だけあらう。毎日はだしで生活しているからである。足をあらうとき、よく砂蚤（ビッショ・デ・ペー）がはいっていないかどうかしらべる。もしはいっていたら、ナイフのさきで上手にほりだす。
女は人目につくところでは絶対に水浴をしなかった。万一やむをえないときは、下着をつけたまま小川にとびこんだ。着物をきかえるには、ぬれた下着を下にずらしながら、頭から別な着物をかぶっていく。

洗　　濯

女たちの洗濯はじつにていねいで、小川のほとりで数時間をすごす。なかなか楽しいようである。近くに人家があれば、ここが井戸端会議の場所となる。その場で洗濯物を煮る。芝生の上にひろげてさらす。立ったまま、洗濯板にむかって、パタン、パタンとたたきつけながら洗う。洗濯板には、手前に、二本の足がついていて、小川にむかって傾斜している。日本人も芝生に洗濯物をさらすことをおぼえた。でもブラジル人のように、白いものを多くもちいなかったから、あんなに漂白する必要はなかった。それに、女性でも山の仕事がいそがしかったから、そんな暇はなかった。

家禽、家畜、その他

豚や鶏（地どり）を飼っていた。裸首や逆毛の鶏を日本人はめずらしく思った。ガンバー（スカンク）や山猫にとられないように、夜は棒でしっかりかこいをつくって、そのなかにいれた。ことにひよこもちのめんどりを入れた。そのかこいは、兵隊が休憩時に銃をくみあわせてたてかけるように、棒の柵を「入」字型にくむのである。でも、野獣の襲撃の心配がないところでは、成鶏は

裏のほうの木にとめた。卵は木につるした籠の中に生ませた。中に枯れ草を入れ、卵がころげおちないように、籠はややはすかいにして横に吊るのである。

山羊には三角形のくびきをつけた。くびきのわくは三方の端をX形に交差させておく。こうしておけば、やたらにそこらへ首をつっこまない。有刺鉄線の柵もくぐって通らない。

鶏は放し飼い、ときには豚もであるくので、家の入口の戸をあけておくときのために、もう一つ別に、人の腰くらいの高さの格子戸をつけた。上部を三角形にとがらせておけば鶏がとびこめない。これも、われわれは利用した。

豚は去勢してシケイロという棒のかこいの中に入れ、とうもろこしを食べさせてふとらせる。これをエンゴールダという。うんと油が多いほどいいので、やっと身うごきのできるような狭いところでこやす。

豚の脂は食物の味つけに欠かせないもので肉よりも脂身を尊重した。まだ綿実油はなかった。オリーブ油は貧農の生活にははいってこなかった。

子供はパチンコ（スツリンゲ）のかわりに土人がつかったボドッケ（石弓）で小鳥をとった（これは最近全然みない）。また、わなをかけてつかまえた。

よくあばら屋の入口に鳥かごがかけてあった。オウム

が屋根の上にのって、どなりたてていることもあった。
また、ホロホロ鳥がいて、しらないものが家に近づくと、ホロホロ、ホロホロとさけびたてた。しかし、多くの場合は、ヤセ犬が二、三匹とびだしてきてはえる。でも犬どもはよく訓練されていて、家のものが、「サーイ・カショーロ！」（犬ども、ひっこんでいろ！）とどなると、みんなおとなしく裏のほうへかくれる。日本人は犬の訓練が下手であった。

作　物

作物はとうもろこしやマンジオカが主で低地にはいくらか稲もつくった。土はたがやさず、草木を切って焼き払い、カバティラという穴掘り棒でうえつけた。もっとも原始的な場合は、さきをとがらした棒をもちいた。マンジオカは、はじめは短く切った茎をうえるが、二度目からは、草を掘ったあとへ、また茎をさしこんでおく。
彼らは決してよけいな仕事をしない。干魃がつづけば、坊さんにたのんで雨乞いをしてもらう。それでも降らなければ、「パシェンシャ・アッシン・デウス・ケー」（神様のみむねだ。がまんするさ！）ということになる。
家は少し高みにあるから、少しはなれた低いところにバナナやオレンジがうえてある。オレンジは「おくて」の

もので都会人はカイピーラ種とよぶ。聖ヨハネ祭がすぎるころ甘くなる。一方に穴をあけ、手でもみながら汁を吸う。みかんは、食べるといわずにしゃぶる（シュッパール）という。

ムシロン、またはムチロン（いろいろのいい方がある）については、各所で説明した。

性格、趣味、教養

彼らの性格については、いろいろな説があるが、文献には、かなり理想化した記述が多い。純朴でユーモアに富んでいるといい、またメランコリックご外来者に対して警戒的だともいう。むろん無学で、迷信深く、なかなかうがったこともいうが、ときにはとんでもない口からでまかせのこともいう。

音楽やおどりが好きで、話術もたくみ、人をよろこばせる術を心得ているともいうが、境遇によって、いろいろな型がある。だが、音楽、ダンス、話術のうまさ、なにかブラジル文化、あるいは伝統の原型が、ここにたもたれているようにも思える。

彼らはカトリック教徒であるが、民間行事には、インジオ的アフリカ的なものの名ごりもみえる。お祭りがすきで、同情深く親切であるが、移民の目からは怠惰で、そ

の生活は停滞しているようにみえた。
文字の文化に接することはまずなかったから、世間知らずであったことはいうまでもない。鉄道のあるところでは汽車が自慢で「ジャッポーン・タンベン・テン・トレン？」（日本にも汽車があるか？）ときく。電灯のある都会をしっているものは「ジャッポーン・テン・ルース・エレトリカ（ルーザレチカときこえる）？」（日本にも電灯があるか？）とたずねる。
日本人は彼らの無知を憤慨したが、彼らは大まじめなのであった。日本人を外国からきた移民だなどと意識しないものもいて「ジャッポン州からは汽車でくるか、それとも馬でくるか」ときいたという話もある。
日本人は彼らの生活に進歩のないことをみて、カボクロみたいになるな！　というのを、子供たちへのいましめとした。
彼らは、よくビオロンをひいてうたい、アコーディオン（サンフォーナ）にあわせて踊った。日本人は彼らからいろいろな生活法を学んだが、こうした趣味はうけつがなかった。成功をいそいだ日本人には「進歩」はあったかもしれないが、ただ、がむしゃらに働いて趣味のない生活を送った。

服　装

男の服装は、シャツにズボン、古いフェルト帽をかぶりはだしで、煙にファッコン（山刀）をぶらさげている。護身用にもなるが、山歩きのとき、木の枝を払ったり、蔓を切ったりするのにいいし、細工ものにもつかう。女は袖の長いブラウスに裾を引きずるようなスカートをもちい、頭にレンソ（ネッカチーフ）をかぶって、髪の毛を包みかくしていた。こんな服装は現在ではジプシー女だけに見られる。いつも裸足であった。

女　た　ち

物を頭の上にのせてはこんだ。ときには素焼きのパイプを口にくわえながら……しかし、そういうかっこうを娘たちは人にみせなかった。貧弱な食生活をしていて栄養失調におちいっていても、十四、五歳になると、バラの花がひらいたように美しくなった。しかし、中年になると早くおとろえた。カイピーラやカボクロの女に肥満性のものは少なかった。

子供を布にくるんで、わきにかかえて歩くのはカイピーラ女が道を行くときによくみかける風習である。彼女たちは男の来客があると、主人や家の男が一応話をすませるまで、あまり姿を見せなかった。コーヒーをもってでてくると、すぐ姿を消すのが習慣のようにみえた。

第８部　移民社会の中心地サンパウロ市

５３　一九三三年における サンパウロ市の日本移民

ブラジル日本移民二十五周年を祝った一九三三年は、わがコロニア史においても、一つのエポックを画する時期であった。一九二九～三〇年の世界経済恐慌に影響された一九三〇年のジェツーリオ革命以後、ブラジルの政治もナショナリズムの方向にかたむいたが、まだそれほど極端な動きはあらわれず、他面、日本からの移民は、政府の渡航費全額支給と一九三二年度からは、十二歳以上のものに対して支度金五十円が与えられるなど、一九三四年度のブラジル移民最盛期の一歩手前にあった年である。

こうした時代に「地方においては、農業をいとなむ移民たちの「五割三分（1）」までが、すでに独立自営農（借地、請負、自作等）にすすみつつあり、また停滞しがちな日本植民地に多くの新移民がはいって、新鮮な気風を

つぎこんでいたのであった。

このころサンパウロ市の邦人社会も、一九一四〜一五年時代のまずしさから、おいおいぬけだして、コンデの住民たちも、「坂を上がって」コンセリェイロ・フルタード全盛時代となり、コンデ・ド・ピニャール、タバチングェーラ、イルマン・シンプリシアーナへとのびていった。当時は、まだジョン・メンデス広場が今日のような拡張をみなかったので、このへんまでのびてきたのであった。むろん、このころは皆借家であって、日本人が所有していた家などは一軒もなかったにちがいない。

いま、伯刺西爾時報杜刊行の移民二十五周年記念『伯刺西爾年鑑』とバウルー市にあった聖州新報社販の『在伯日本移植民廿五周年記念鑑』をもとにして、当時におけるサンパウロ市の日本人の生活を叙述してみよう。

当時（一九三二年ころ）サンパウロ市内に生活していた日本移民の数は約二千人であった。もし厳密な調査が行なわれていたなら、はるかにこの数字を上まわっていたかもしれない。そして、最も日系人口の密集していたのはコンデ・デ・サルゼーダス街を中心として、イルマン・シンプリシアーナ（ここは店が主で住居はあまりなかった）、タバチングェーラ、コンデ・ド・ピニャール、コンセリエイロ・フルタード、ボニータ（トマース・デ・リーマ）エスツダンテス、サンパウロの諸通りをふくむ、

いわゆるコンデ界隈であって、ここには約六百の日系人がいた。
そして筆頭はコンデ街の約三百人、それから、コンセリェイロ・フルタードの百四十人、ボニータの四十人となっている。
つぎに多く集まっていたのは、ピニェイロス区であって、ここに二百人ほどの日系人がいた。そのつぎは市立市場をかこむ、いわゆるメルカード区域で、さらに、ルース、ソロカバナ等の駅の近くからサン・カエターノへつながるあたりがおもだった集団区域であった。
ただおもしろいことは、調査者が、主として農業方面に力をそそいでいて、その方面では年生産量や土地所有についてくわしくしらべているにもかかわらず、サンパウロ市の住民については、おおまかな職業分類（聖報社年鑑）と、住所録のなかの職業別（時報年鑑）があるだけで、仕事の内容については、筆者の記憶にたよるはかなかった。
ブラジルにおける日本移民の発展を、主として農業方面にみいだしていた時代としては当然だったかもしれない。
さて、初期移民時代からの職業的進出のあとをたどるとすれば、大工、家具商、建築請け負い事業、家庭労働、自動車運輸業、旅館業、日本品雑貨商、というような順序で、それらがその後どのように発展したかをみるべき

であるが、すでに二十五年の歳月を経たこの時代は、地方における移民の発展（数のうえの増加と経済力）によって、あの時代には見られなかった新しい職業があらわれ、また一方では一般ブラジル人相手のもっと永続性のある仕事もふえてきている。初期移民たちが、いちばん手っとり早い職業として進出した家庭労働は、聖報の二十五周年記念鑑に十四人があげられているだけで、伯刺西爾年鑑のほうでは、その存在すらあきらかでないのである。

そのかわり、染物・洗濯業、洋服裁縫職などの方面にのびる者がかなり多くなっている。手の技術といくらかの資本によって、家族員や二、三の独身青年をやとってやる仕事であった。家長一人が働くとか、あるいは家族員が別々に働くことをやめて、農家と同じように全員がそろって、それに二、三のカマラーダを加えた仕事、というような行き方であった。新移民時代に、カマラーダの役目をしたのはいわゆる「構成家族」であったが、サンパウロでは、あらたにやといいれる日本人青年であった。彼らは仕事に熟練し、いくらかの小金がたまると独立して同じ仕事にたずさわった。こうした行き方でその後発展するのは洗濯業と食料品店であるが、後者はその当時数においてごく少なかった。

その他、初期移民社会と変わったものをあげるとすれ

ば、いわゆるホワイト・カラーのサラリーマンが少数ではあるがあらわれていることである。これも在留民の数の増加にしたがって、まず総領事館では、嘱託、雇員をふやすようになったこと、移民事務が多くなって、移植民会社でも、在留民中から有能なものを抜擢して社員にしたこと、その他、新聞記者、教育父兄会（2）、日本人会、医療組織の同仁会などの事務をつかさどるものたちが、七十人ほどでてきたことである（これに教育者、伝道者、弁護士、医者などをまじえた約百人くらいの人間が、いわば当時のコロニアにおけるインテリ層をなしていたのであった）。

しかし、彼らの生活は、移民たちから「百姓では食えない連中」として、あまり高くは評価されていなかったように、月給も、ブラジル人の会社員などとは比較にならない少額なものであった。その生活はまずしく、住所録をみても、堂々と一軒の家をかまえているものはごく少なく、新聞記者などは年も若かったせいもあるが、独身が多かった。記者の元老ともいうべき野村忠三郎などは、小さい子供をかかえた五人家族であったが、いつも居候を身のまわりにおいていた。

さて、そのころ数のうえで、相当はなばなしい進出をみた「商業」について記してみる。

『伯刺西爾年鑑』の住所録には、単に商業とあり、聖報の

「廿五周年記念鑑」には、それぞれ分類した種類もあるが、なお商業とだけでているものがある。どんな商売であったろうか。

このころは、コロニア史の初期に名高い藤崎商会はすでになく、輸入商としては蜂谷兄弟商会その他があり、移民からのしあがった日本品雑貨商がコンデの坂からはいあがっている。中矢商店はまだコンデの坂の上にあったが、国井、羽瀬などの各商店が、イルマン・シンプリシアーナへ進出していた。これにつづいて日本品、ブラジル製品をとりまぜた小間物・人形などをあきなうバザールもふえてきているし、すでに記したように、日本人相手ばかりでなく、あたり近所一般の住民を相手とした食料品店（エンポーリオ）、野菜屋（キタンダ）、薪炭店などがあらわれたのはこの時代の特長である。薬局は日本人の経営によるものが、あったかどうか不明であるが、ブラジル人薬局に日本人薬剤師がつとめるようになっていた。薬局や食料品店は、農村の小資本が都会へながれこんでくるようになると、つぎの時代の商業としてかなり発展するのであるが、当時はまだ萌芽時代であった。薬剤師はすでに八人いた。

もう一つ、この時代の特長としてあげることのできるのは、地方農家の発展とともに、かなりしっかりした農産物仲買商、委託販売商があらわれ、また、肥料、農具

等をあつかう商人があらわれたことである。その数はごく少ないが、後日発展したものである。パウラ・ソウザの大原商会（仲買）、ピニェイロスのカ・ナカオ商会（のちジャグアレー肥料会社と名があらたまる）などは、そのいい例である。小さなものは、市立市場（メルカード・ムニシパール）近くにもぼつぼつ姿をみせていた。

商業のなかには土地売り（仲介および社会代理人）もはいっている。ただし、「廿五周年記念鑑」には別項目にあげられて五人となっている。実際はもっとあって、ソロカバナ線の一部から北パラナ方面の土地が当時売り出されていたのであった。初期のように、ある理想家的人物を中心とする植民地建設ではなく、ブラジル人その他外国人の土地会社が営利的に土地を売りだす時代にはいっていた。

最後に伝統的な家具商をあげる。「廿五周年記念年鑑」には一、二軒があげられているが、これには、店は張っていないが製造しながら販売もしたいわゆるオフィシーナ（工場）もかなりあるとみられる。むろん、工場とはいいながら家庭内の工房程度のものであったことはもちろんである。家具店などでも裏のほうには、たいがい仕事場があり、そこにはぞうりやスリッパをつっかけた日本人職人が、かんなくずにまみれ、ペンキで顔や手をよごしながら三人、四人と働いていたのであった。しかし、

家具商はすでにこのころから、やや停滞ぎみであった。にわか大工あがりの職人によるエナメル塗りの家具が多く、新しいデザインによる新時代むきの製品をつぎつぎにだすことができなかったこと、また、資金や販売術などが不足したためか、一、二の「成功者」をだした以外その後の発展はあまりはなばなしくなかった。

それから、初期移民時代からなじみ深い大工は、「廿五周年記念鑑」には「建築業」としてわけられている。その数二十三人である。『伯刺西爾年鑑』によるとその住所録のなかに四十八人の大工が数えられた。家具大工もふくめられていることと思う。大工とならんでピントール（塗工）があるが、五、六人だけである。一部のものは家具職中にはいっていたことと思う。

さらに多くの大工をひきいて仕事をしていた建築請負師は『伯刺西爾年鑑』によると三人である。そして鮫島がやはり筆頭であった。

昔から日本人になじみ深い職業として、自動車運転業もある。『伯刺西爾年鑑』によると十九人が教えられ、「廿五周年記念撃では十六人があげられている。個人のおかかえ運転手はあまりしらべられていないようである。住所録によって彼らの渡伯年代をしらべてみると、明治から大正初期にかけて移住したものが断然多いのに驚く。新しい移民がどんどん進出していく職業ではなかったよ

うだ。この時代は、まだ資本家によるタクシー業はなかった。それから、家庭労働者のことをあげるべきだが、すでに記したように、もう、コッペイロ時代はすぎ去ったとみてもいいだろう。

つぎに、旅館と飲食店をあげる。

旅館は十二、三軒（伯刺西爾年鑑十三、廿五周年記念鑑十）であって、すべてがまだ移民宿程度のもので、自らホテルと名のっているところは少なく、多くはペンソンといっていた。一室に二、三人をねとまりさせ、日本食を給する宿屋であった。ホテル・トキワやペンソン上地などは、一人一室の特別部屋をもっていたかもしれない。

場所はコンデ界隈、ルース、ソロカバナ駅近辺、市立市場の近くなどであった。

飲食店は、バール、うどん屋、しるこ・まんじゅう屋、料理屋等であって、うどん屋程度のものはコンデの「地下室」にもあったが、この時代に料理屋が進出した。これは地方農家にぼつぼつ成り金があらわれたことにもよるだろう。日本座敷もあらわれた。しかし、日本酒アズマ・キリン（3）はまだでていなかった。

コンセリェイロ・フルタード三七番に富田（とんだ）屋があり、同じ通りの一二番に青柳があった。昔は家の番

号がメートル制ではなかったから、今日の地理でいうならば、ジョン・メンデス広場からはいってきて、角から右側六軒目に青柳があったことになる。あのあたりで夜になると、みんな飲んでは、こりゃ、こりゃとやっていられたのであるから、ジョン・メンデス広場拡張前は、コンセリェイロ・フルタードもサンパウロ市の裏町にすぎなかったのである。十数年ごしの「籠の鳥」がまだうたわれていたはど、日本「文化」の影響もテンポはゆるやかなものであった。

菓子屋もふえている。店をだしていたのがコンデ界隈で二、三か所、その他ピニェイロスやメルカード（市立市場）方面にもあって、十軒をこした。

娯楽機関としては日本倶楽部以外の撞球場が二軒あった。しかし、このころはもうみんなブラジル人の有名なたま突き場へかよっていた。キンチーノ・ボカユーバのタツコ・デ・オウロなど、いついってみても何人かの日本人が見られた。

話はこのくらいにして、「廿五周年記念鑑」にあげられているサンパウロ市における日本人の職業別を筆者の注解づきで記してみよう。ただし、総領事館や移植民会社のことははぶく。

印刷業　六ヶ所　主として日本文。新聞社の仕事もふくむ
化学工業　一ヶ所　製薬所である。大河内辰夫ほか三人の名があげらている
医師　三　人　ただし免許医は一人だけ
歯科医　七　人
電気治療師　一　人
鍼灸師　一　人
薬剤師　八　人　日本人経営の薬局は存在不明
伝道者　三　人　プロテスタンテ
教育者　五　人　うち三人は私塾経営者
外交員　二　人　地方の注文とり
公認会計士　一　人
弁護士　一　人　公認かどうかは不明
商業　八四人　輸入商、バザール、雑貨商、食料品販売、会計士、店員まではいっている
店員　八　人　調査用紙に店員と記入したものの数であろう
旅館　一〇軒
飲食店　一三軒　バール、うどん屋、料理屋
菓子商　一二人　菓子店、菓子製造人
豆腐店　三　軒

青物商　三　軒　キタンダ
玩具商　三　軒　バザール
自動車器具店　一　軒
電気器具店　一　軒
時計商　一　軒　修繕が主である
ブリキ商　一　軒　ブリキ細工、ハンダー付け
薪炭商　一　軒
醸造業　二ヵ所　醤油づくり
写真業　二　人
自動事業　一六人　みな自営運転手
染物業　四人
洗濯業　一四人　染物と洗濯業はほとんど兼業であった。何軒であったか不明であるが、家族もち八人、独身六人である
理髪業　一一人
家具商　一二人　製作所もふくむ
撞球場　二か所
靴修繕　一人
精米所　一か所
建築請負　一人　少なくも三人はいた
土木技師　四人
建築業　二三人　大工である
金網（工）業　一人　カネ細工師

機械製作　一か所
鋳物業　一か所
化粧品製造　一人　家内工業
製麺業　一か所
肥料商　二人
職工　五人　四家族と独身一人。ただし、どういう種類のものか不明
彫刻師　一人　木彫
石工　二人
左官　四人
産婆　一人　数人いた
書籍商　一軒　当時専門
両替　一人　質屋、高利賃をかねる
土地売買　五人　仲介・代理人
雑貨商　八人
仲買　二人　大ものだけ
柔道指南　一人
著述家　二人
映写業　一人　地方巡回シネーマ。主として日本映画
家庭奉公　一四人　女性は二人だけ
学生　二人　大学生、一人は一世、他の一人は不明

農業　　三人　家族ものと独身二人
野菜業（栽培者）一五人　一五家族
無職　　三三人　定職のないもの、職を表明したくないもの、見習、失職者等

（家長だけを数えて何人、何か所、何軒とした。「軒」は必ずしも家一軒、店一つを意味しない。ある商店の一角をかりうけて、別な商売をする場合もある。人数も正確なものではない。『伯刺西爾年鑑』にてらし合わせてみても、一方にでていて他方にでていないものがあり、別にしらべようもない）

以上、無職をはぶいて六十一の職業が分類されているが、商業（とくに輸入商）、食料品店、家具商、大工、自動車運転業、その他、一般ブラジル人も相手にする商売や仕事も三分の一くらいあげることができるが、もしその収入額がわかったとしたら、日本人相手の仕事のほうが、分類上の割合よりも、その比重はずっと重くなるのではないかと思う。日本人がかたまって商売しているということは、相手が主として日本人であることを示している。だから、とくに多くのブラジル人を相手にしていた輸入商、家具商などは、集合区域にはいりこむ必要はなかったのである。

だから、サンパウロ市、ことに日本人集合区域にある移民たちの生業は、かなり大きな割合（正確にはわから

ない）が、地方農家の経済に依存していたのではないか、と想像される。「ともぐい時代」という言葉がきかれたが、全然日本人の客を相手にしないなどという商売は、ほとんどなかったのではないか。もし当時の邦字新聞の広告欄をひらいてみたら、いかに多くの日本人商人が、新聞広告をとおして同胞社会によびかけていたかがわかるだろう。

最後にぜひ説明しておきたいことは、職業分類表に出ている農業、あるいは野菜栽培業にたずさわっている人たちについてである。ここで、どういうわけで農業と野菜栽培業が分けてあるのかわからないが、数のうえでは後者が断然多く十五家族となっている。この人たちは、おそらく、市の町はずれで野菜をつくり、自ら天秤や手車、あるいは馬車（ラバ一頭のもの）で市中を売り歩いた人たちで、この中には市内の巡回自由市場（フェイラ・リーブレ）へも販売にでていたと思う。

当時、フェイラへは、サンタンナ、モルンビー、タボン、イタケーラなどからも馬車やトラックで、それぞれいちばん近いフェイラへ野菜売りにでていた近郊農家もあって、この人たちを数えたら、何十家族となったことだろう。ここではフェイラにでている郊外の人たちを全部数えているのではないことはあきらかである。

第二次大戦後はフェイラのあきない人、すなわちフェ

イランテは農家から独立するものが多くなったが、戦前では農家から直接売りにでるものが多かった。

最近では（一九六八年）交通のはげしさから、市の中心などでは、フェイラの廃止されたところもあるが、サンパウロ市内の各区では、週に一度必ずこの露天市がたって、野菜、果物、魚類、その他の食料品から日常必需品いっさいが安価に購入できた。

フェイラ

コンデ界隈の人たちには、テアトロ・サンパウロ（劇場として建ち、のち映画館となる）のまわりの広場にたつフェイラ，デ・ラルゴ・サンパウロがいちばん便利であった。水曜日が市のたつ日で、早朝から十二時ころま

でつづく。コンデやコンセリェイロの日本婦人は、みな手籠をさげてこのフェイラにでかけたものである。

しかし、一九六八年からの市区改正で、劇場はとりこわされ、広場もともに「大通り」の一部にかわろうとしている。

コンデ街の模様

いわゆるコンデ界隈に日系人が約六百人ほどいることは、すでに記したが、そのうち半数以上がコンデ街にいたのである。そのコンデ街の模様はどんなであったろうか。

すでに、コンセリェイロ・フルタード街全盛時代にうつっていたが、トマース・デ・リーマ（当時はボニータ）街までを「坂の上」といっていた。ここには、まだ中矢商店が街路に向かって店を出しており、常盤旅館もあって、コンデ街の入口をにぎわしていたが、坂のおり口には日本新聞社があり、これから下が昔ながらのコンデ街であった。

医者からキリスト教の伝道師までここに住居をかまえていたし、人間の生活になくてはならないものはなんでもそろっていた。たださびしさを感じさせるものは大正小学校がもうサン・ジョアキン街へうつってしまったし（4）、地方からでてくる人たちを相手にする旅館も坂か

ら下にはなくなっていることである。大工、ピントール（塗工）で古くからここにがんばっているものはある。お菓子屋、うどんや、バール、牛乳屋、豆腐屋、理髪店、洗濯屋、野菜屋、洋服屋、こうしたものはなんでもある。五〇〇メートルもないような街の長さ（坂から下へ）につまるだけ日本人がつまったという感。むろん、昔からここに住居をかまえているブラジル人もいるなかであるから、人口の稠密さが思いやられる。一軒の家に二家族、三家族がすんでいるところはめずらしくなく、女子供をあわせて十八人というところも二か所あり、平均八人弱と計算されるのであった。これは家の裏などに独立に出入りできる部屋があったりして、貧民には安い借料で住めたし、むろん地下室（ポロン）も大繁盛であった。しかし、坂をおりてしまった低地のほうの家の裏側は湿度が高く、通風が悪くて、決して健康的ではなかった。この方面では、床板のないシメンタードの部屋を一つ借りうけ、石油の空缶でこしらえたしちりんで炭火をおこし、これ一つで物を煮たきして生活するものもかなりいた。そういうものは、家族構成が悪くて農業にむかなかったり、労働のできない病弱者などであって、もしこのあたりだけの生活をみるならば、サンパウロ市の日本移民の前途は決して明るいものとはいえなかった。その生活程度は、ブラジル人の最低に近いものであって、日

本式なもので残っているのは、かけぶとんくらいなものであったろう。だがなにより気楽なのはこのあたりに住んでいるブラジル人は日本人の気心をしっていてみな平和に暮らしていたことであった。

このように、コンデ街にはたくさん日本人の店があり、日本人がつまっているといえば、あるいは、日本色のあふれた繁華街でも想像する人がいるかもしれない。ところが、外観は、じつに、なんのへんてつもない、普通のサンパウロ市の下町なのであった。むろん、バールあり、牛乳屋あり、野菜屋も店をだしていたが、それらの店では日本字の看板をかかげる必要もなくて、表からながめた坂から下のコンデ街は、日本人の顔こそみられたが、それ以外は別にこれという特色もない下町にすぎなかった。ただ、われわれはここへきて、日本食の匂いをかぎ、窓にカーテンのかけてない家の多いことに気がつき、一軒に一家族だけがすんで、サロンにはワニスの光った家具をかざってある、というようなゆとりのある生活ぶりがみられないことであった。どこの家をのぞいても、なにか、一時的な、まにあわせな生活態度がそこに感じられ、移民の街であることをしらされるのであった。

コンセリエイロ・フルタード街

ここは当時全盛であって、お菓子屋、料理屋があり、

「旅館」と日本字でかいた、旗を横からつきだしたような金属製ペンキ塗りの看板がみられたり、〝御料理〟としるした門灯があって、多少日本的雰囲気をかもしだしてはいたが、今日のようなネオン全盛期ではなかったから、内部へはいらないと、その実際はわからなかった。お菓子屋のガラス箱の中に和菓子がならんでいたり、書籍店の書架に日本文字がみえたりするのが日本人の集合街であることを示していた。

コンデ・ド・ピニャールとイルマン・シンプリシアーナ街

この方面が、日本品雑貨商あり、バザールあり、ガラス戸に「理髪店」とかいたところがあったりして、日本人街の入口であることを示していた。日本字の看板もかなりみられた。店かざりは今日のようなはなやかさがなく、ショーウインドウもごくちゃちなもので、日本品を販売する店にはいると、プーンとこんぶやわかめの匂いがした。店で商売をする人も、ほとんど日本語をつかい、ポルトガル語で客を応接する二世の進出はまだなかった。

ピニェイロス区

コンデ界隈についで日本人の多かったのはピニェイロス方面であり、ここには二百人ほどの日本人がいた。

まだコチア組合の事務所は部屋借り時代だったので、組合員の動きも少なく、広場とメルカード（市場）を中心として集まってはいたのであるが、まだ密集したところはなかった。広場（ラルゴ）にはまだ中央に音楽堂がたっていて、ここを電車がひとまわりしてシダーデへもどるようになっていた。広場の中心から、ちょっとそれた、シダーデから行って左手のところにベベドゥロ（馬に水をのませる大きな鉄製の水盤）があった。土曜や日曜の晩は、音楽堂をめぐって、若い人たちのナモーラ風景がみられたほどのんびりした時代だったのである。テオドウロ・サンパイオには、まだ、ねずみもらの並木があった。バスはまだとおっていなかった。日本人の店は、ピニェイロス街、ブタンタン街等に多く、そのつぎは、フェルナン・ディアス街であって、電車通りのテオドウロ・サンパイオ街にもいるにはいたが、目だった店はなかった。今日、ピニェイロスにおける日本人街ともいえるカルデアル・アルコベルデ街には、まだそれほどの進出がなく、カ・ナカオの事務所その他日本人食料品店があったくらいて、ひっそりしていた。

　このピニェイロス区にも、日本人が生活するために必要な商店はなんでもあった。飲食店あり、菓子屋あり、日本品雑貨店、理髪店、豆腐屋、薪炭商、製麺所、さらに聖公会・聖ヨハネ教会がそのころからすでにあった。

また、市場には川魚がときどきでていた。ピニェイロス川をはさんであたりはひろびろとした草原であった。ピニェイロスは一歩でれば田舎であって、ブタンタン、カシンギー、タボン、カンポ・リンポ方面に、まだ日本人農家がたくさんあった。コチア方面から日本人がトラックにのってサンパウロ市へでてきた時代であった。

注

（1）『伯刺西爾年鑑』後編、一六ページ。

（2）　総領事館管轄の教育統制機関。

（3）「アズマ・キリン」は東山醸造会社製のブラジル日本酒の名、一九三五年に売りだされた。

（4）　大正小学校は一九二九年十月にサン・ジョアキン街の今日の文化センターの裏へうつった。

第９部

深まりゆく移民のなやみ

５４　二つのナショナリズムの間にはさまって苦しんだ移民

一九二九年十月二十四日、ニューヨークの株式大暴落にはじまる世界的経済恐慌の波は、たちまちコーヒーの生産過剰になやむブラジルにも及んだ。

当時ブラジルの政界は、次期大統領選挙の候補をめぐって、共和制成立以来政権をにぎってきた旧勢力に対して、新しい党派のうごきがみられた。政府与党の候補（サンパウロ州統領ジューリオ・プレステス）に対してパライーバ、ミナス、南リオ・グランデ諸州の反政府党の政治家が、活発な動きをみせていた。

しかも、このころは、第一次大戦以来、徐々に勃興してきた都市の商工階級および、労働者たちの勢力も、農村の大地主たちに対して、かなり重きをなすようになり、

国民の声は、それまでよりも広い階級によって代表されるようになっていたのである。恐慌を契機とする彼らの不満も、旧勢力を中心とする政府に対する批判となってあらわれていた。

一九三〇年五月一日、ワシントン・ルイス大統領の満期近く、次期大統領の選挙が行なわれたが、与党ジューリオ・プレステスに対して、野党からは、それまで、南リオ・グランデの州統領であったジェツーリオ・バルガスが新興勢力の代表として立候補した。しかし、選挙の結果は、与党のジューリオ・プレステスが当選した。

このとき、投票に政府の干渉があったとかの噂がしきりにながれて、世の中は騒然としていたが、十月三日になると、ブラジルの各地に、少壮士官を先頭として武装蜂起があり、その進撃はめざましかった。十月二十四日、大統領ワシントン・ルイスは、上層軍部が組織した「講和委員会（ジュンタ・パシフィカドーラ）」に政権をわたし、任期終了まで、のこるところ一か月たらずのときに、ヨーロッパへ亡命することになった。

これで次期大統領としてのジューリオ・プレステスの立場も消え去り、成功した革命派は「講和委員会」から政権をうけつぎ、ジェツーリオ・バルガスを首班とする臨時政府を組織し、レプブリカ・ノーバ（新共和国）として出発した。

この革命の主役をつとめたのは、すでに記したように、南リオ・グランデ、ミナス・ジェライス、およびパライーバ三州の反プレステス政治家や軍人であったが、サンパウロをはじめとする多くの都市の新興ブルジョワジーおよび労働者階級の支持があったことは、ジェツーリオ政権によって、「教育・保健」「商工・労働」の二省が新設されたこと、それから、労働時間の制限令、無記名投票や婦人参政権などによる選挙法の改革、その他職業代表の国会進出などが行なわれたことによってもうなずけるだろう。

ジェツーリオ政権は、一九三二年のサンパウロを主力とする護憲革命に遭遇して、新憲法制定を促進させられたが、同時に、憲法制定議会によって、一九三四年、ジェツーリオ大統領は臨時政府首班から、正式な大統領に選挙された。

しかし、この三四年体制は、一九三七年十一月十日、次期大統領選挙を目前にひかえて、突如、議会は解散され、軍部支持のもとに、ジェツーリオ独裁政府が樹立されることによって終わりを告げた。

独裁政府はこのとき新しい憲法を公布したが、それによると中央集権主義が表明され、各州はほとんどその自治権をうばわれ、州には、三〇年革命当時と同じように、大統領から執政官（インテルベントール）が派遣される

ことになった。かくて、一九三九年九月、第二次大戦がはじまると、四二年にはブラジルも連合国側について参戦して、ヨーロッパに出兵することになり、ジェツーリオ大統領の独裁政権は、ヨーロッパ戦争終結の一九四五年までつづくのであった。

ジェツーリオ政権は、はじめから独裁的傾向をもっていたが、国家統一の立場から、外国移民およびその子弟に対する急激な同化政策をとった。

これは、一九三三（昭和八）年四月の州教育令にもあらわれた。その中心となった禁令は、「その年齢の如何にかかわらず、十歳未満の国語文盲者には外国語を教授することがゆるされない」ということであった。

この十歳未満云々は、以前から州の教育令にあったものであるが、農村の実状として、また、外国移民がさかんに入国した時代として三〇年革命以前の州政府は、あまりやかましくいわなかったのである。しかし、革命後は、この法令によって、外国移民の子弟教育を、きびしくとりしまる方針にでたのであった。

しかし、ここでも「国語文盲者に」というような字句があったところから、「ブラジル語の読みかきができるならば十歳未満でも……」というような解釈もでて、まだなんとかぬけ道もないではなかった。

ところが、一九三八年から三九年にわたって、独裁政

府は、外国人団体取締法、外国語出版物取締法、外国系ブラジル人の同化促進に関する法令を相ついで制定実施し、外国移民の文化・教育活動に制限を加えるようになる。

移民法施行細則（有名な法律第三、〇一〇号）では、外国語教育は全面的に禁止されることになる。この移民法は、移民の入国、居住、帰化、植民地形成、初等教育、商工業三分の一法（1）など、移民生活のいっさいを規定したといってよい。この法律の施行で、コロニアの日語学校は全部閉鎖となった。その後も、もし日語学校があるとすれば、それは非合法で「もぐり学校」ということになる。（2）

この細則によると、サンパウロ市およびサントスを除外例としたその他の地方を農村地帯とみて、そこの学校では十四歳未満の者に外国語を教授することが禁じられたのである。しかも、いかなる学校、私立学校といえども外国人は「校長（校主もふくめる）たることはもちろん、教員たることもあたわず」ということになったのである。

すなわちブラジル人でなければ、外国語を教えてはいけないということであった。

そうするうちに、一九三九年の九月になると、さらに政府は、「州内学務官憲に対する訓令」において、私立学

校のブラジル化を強調したが、そのなかで、

（三）　外国語の教授は一日に二時間を超過することをえず

（四）　私立学校の催物は、そのプログラム中に外国語を含みたるもの、或は外国精神を昂揚するが如き種目を挿入したるものを許可せず、且つプログラムは事前に教育局の許可をうくべし

（五）　外国語の教科書は、教育局の認可をうくべし

（3）

すなわち、実際的には、外国語によるまたは外国的な教育はまかりならぬ、ということに等しいものとなった。十四歳以上のもので農村の学校にとどまるものはほとんどなく、ブラジル語で日本語を教えられるような者もなかったからである。

ジェツーリオ政府のナシオナリザソン政策は、一方でヨーロッパの政情を反映し、他方移民国であるブラジルの国民意識の統一促進にのりださざるをえなかったこと、まもなく大戦の勃発によって、ますますその政策を強化しなければならない立場におかれたことによって説明されるだろう。

一方、わが同胞社会で、当時まだ精神的につよく本国に依存していた移民たちは、日本における国粋主義の影

響をうけて、日本人的意識をつよめていった。

一九三一年九月十八日、すなわち、ジェツーリオ政権が樹立されて約一か年後、極東には満洲事変がおこり、ついで十月には上海の日本陸戦隊出動などがおこった。

さらに、一九三三年三月には国際連盟脱退、三五年には政府の国体明徴の声明などがあって、思想界は右へ右へとかたむいて、一九三八年五月の国家総動員法発令となり、自由主義思想その他、国策批判の言論は、ほとんどそのかげを没することになって、国家至上主義、日本民族至上主義、東亜共栄圏思想などの諭が、ここブラジルまで、とうとうと流れこんできた。

そして、それまで移民たちが、いちばん関心を持っていた二世教育問題において、伯主日従などのような養子思想は、表面的にはブラジルの国策に沿うものとしてとり消されはしなかったが、日本人の子孫は、子々孫々まで天皇陛下の赤子であるという考えにとらわれてしまった。子供たちに日本語を教えることが民族存続の条件であるという確信にたったのである。しかし、これに対するブラジルのナシオナリザソン政策が、一九三七年十一月十日以後、その障害となってたちあらわれたとき、移民たちは、精神的自由をうばわれたものとして、ブラジルの将来に希望を失うようになってきたのである。ナシオナリザソン政策は、子弟の教育ばかりでなく、すでに

記したように、外国人団体取締法、外国語出版物取締法などによって多くの制限が加えられだしたので、こうした文化面における圧迫も、一九三八年以後になると移民の心理を、ますます暗いものにしていった。彼らには、こうした制限が永久につづくものと思われたし、同化途上にあって、反動的に自分たちがますます日本人意識をつよめているとき、一方では、自分たちの意志に反する二世が、ぼつぼつふえて、彼らの将来がカボクロ化して、自分たちから離れていくような不安にかられるのであった。

ここでは一九三〇年ころから、ヨーロッパ戦争につぐ太平洋戦争の勃発、および終戦までの移民たちの生活を、その精神的あるいは心理的な面を重視しながら叙述しようとするのであるが、眼目とするところは、戦後の勝組の抵抗にまでつながる移民心理の発展・推移をみきわめようとすることである。

もしこうした現象を、世界史的な立場にたってながめてみれば、近代資本主義の発展から帝国主義の問題、ひいては低開発国の問題にまでつながり、二つのナショナリズムの間にはさまって苦しんだ移民の歴史も、そのなかの一現象として説明されなければならないだろうが、ここでは、そうした問題にまでは深入りせず、現象を現象として追求するにとどめなければならない。また、移民の同化という人間性のデリカシーにつながる問題の研

究も、ここでは私の手におえないテーマとして残しておくよりしかたがない。

二つのナショナリズムの間にはさまって、移民がいかに悩みつづけたか、この前後十数年にわたる苦悩は、ほとんど移民の宿命ともいえるもので、その間に戦争という大事件がはきまって、おそらく二度とくりかえすことのないような特殊性をもって展開するのであった。

注

（1）各国人従業員は三分の一をこえることができない。

（2）『コロニア五十年の歩み』一二六ページ。

（3）『日本人発展史』下巻、二〇〇～二〇一ページ。

55　ナショナリザソンと外国語出版物（とくに新聞）の発行禁止

一九三三年以後の同胞社会の動きを、年代的に記述するまえに、ここでは、ブラジル政府のナショナリザソン政策がどういうものであったのか、移民の立場から解明したい。

ナショナリザソンとは、ブラジル国内のあらゆるものを、政治的・経済的・文化的に、ブラジル化しようとす

る運動であった。時と場合によって、国家主義運動、国民性、あるいは国民意識統一運動などと訳することができる。外国移民を多数うけいれることによって、近代化をおしすすめてきたブラジルは、いまや各国がそれぞれ国民意識を高揚しているとき、国内の住民、ことにブラジル人とみなされている移民の子孫が、いつまでもブラジルを「わが祖国」として意識しないでいることは、国家の統一性にひびわれをもたらすものとしておそれられたのであった。当時の世界情勢のもとで、ブラジルの国家的立場からみると理由のある当然な運動であったろうが、移民たちにとっては、自分らの精神上の自由をうばうものとして、苦悶の種子であったことも事実である。

ブラジル人がこの運動によって、国の法律でさだめられた「この国で生まれたものは、すべてブラジル国民である」という思想を徹底させるために、この機会を逸しては、禍根を永久にのこすものと思ったのは当然であったろう。まず、外国語、ことに枢軸国家の言語によって発行されていた新聞をとりしまることに、その先鋒がむけられた。この一文の末尾（1）にかかげられたディアリオ・ダ・ノイテ紙の記者の主張は、それがいかにつよくブラジル人の愛国心にうったえるものであるかを示してあまりあるものといえるだろう。

当時、外国語による新聞はおのおのそれらの国の利害

を中心とした報道をのせていたし、ことに枢軸国家の利益を代表する言論は、ブラジルの国民にうけいれられない傾向をもっていたが、そうした国家出身の移民たちは自分たちの祖国の報道をぜひとも自国語によってくわしくしりたいと思っていた。そのうえ、移民たちは、その子弟に、自分たちの理想を伝えようとすれば、どうしても自分たちの国語によって彼らを教育したいと思っていた。移民たちの頭では、それがドイツ人であろうとポーランド人であろうと、自国語による教育以外に、子弟たちを自分たちの思うとおりに教育することは不可能なものと考えられていたのである。彼らは遠く祖国をはなれて、自分たちの将来を考えるとき、自分たちの文化をうけつぎ、自分たちの言語を話し、自分たちの気持ちを理解してくれる子孫を育成することが最大の希望であった。

しかし、これは「ブラジルで生まれたものはみなブラジル国民である」とみるブラジル人には、どうしても肯定することのできないものであった。外国人がブラジルに来て、その子弟を彼らの考えどおりに教育することは、「ブラジル人からブラジル人であることの資格をうばい、ブラジルの国民意識統一（ナシオナリザソン）運動に反逆する行為」とみなされたのであった。

ここに移民の悲劇があった。移民たちは外国へ移住したがゆえに、自分たちの精神的自由が、反逆的なものと

して否定されねばならなかったのである。しかも、当時ヨーロッパは戦乱の巷と化す一歩手前にあった（この年の九月一日ドイツはポーランド進撃の命令を下した）。本国政府は、世界各国にある自国の移民たちに祖国愛を求め、祖国の正義をうけいれるように宣伝していたのである。

このような時期に、移民たちは、自分たちの文化的敗退は、自分たちの民族そのものの敗北のような錯覚さえおこすにいたったのである。移民たちの行為は、必然的にブラジルの国家的立場とあいいれないものとなるのであった。

ことに、日本のように、明治以来、教育勅語を教育の原理とする国民教育が徹底していた国の国民は、ブラジルの国家的立場からのナシオナリザソンは、民族的自殺をせまるものとして、移民の精神に、大きな衝撃を与えたのであった。

しかし、こうした民族的苦悩の中で、もしいくらかでも正常な生活をみださない何ものかが存続していたとすれば、すでに三十年近いブラジル生活の歴史のなかで自分たちの気持ちもだいぶブラジル的になっていたし、また多くの二世たちが、ブラジルを生国としてそだっていたことであった。これら二世をその家庭にもった移民たちには、ブラジル人的立場にたって考えることも、全然

不可能ではなかったのである。しかし、生活様式のあまりにちがったブラジル人社会になじみきれずに、いわゆる同胞社会のなかで、移民の不自由をかろうじてみたしてきた多くの一世たちには、そうしたブラジル人的立場を理解する力はなかった。それは、戦後になるまで、心の片隅におしやられたままになっていたのであって、大勢はブラジルのナシオナリザソンによって祖国への郷愁をつよめるだけであった。こうした境遇は、いろいろなデマを正しい報道としてうけとる心理的基礎をなしていった。彼らの唯一の希望は、世の中が平和になったら、祖国へ帰ることであった。彼らは外国にあるがゆえに、あるいは移民地にあるがゆえに、自分たちの自由がうばわれたことに観念の目をとじた。そして民族は民族の文化をうけいれるところにのみ、存続しうることをしみじみと感じ、帰国できる日の一日も早からんことを祈りつつ日々暗い生活を送っていたのであった。

ここに、一九三九年五月三十一日付、ディアリオ・ダ・ノイテの記事を抄訳的に紹介する。これは、一九三八年五月四日の連邦政府法令第四〇六号にある「ブラジルの農村地帯においては、外国語による書籍、雑誌、新聞の発行は、移植民審議会の許可なくしてはゆるされない」ということ、同法令第八七条にある「外国語によるあら

ゆる書籍、新聞、パンフレット類の発行は司法省の許可および、事前の登録を必要とする」という条文をもとにしてパラナ州における、主としてドイツ、ポーランド、ウクライナ語の新聞（農村地帯発行のものが含まれている）に対する現地報告であって、それに対する発行禁止をうながす論文をそえたものである。

論説の要旨は、

「これらの新聞が発禁にならないうちは、法令第四〇六号の効果があがったとはいえない。これらの新聞は、とくに農村地相における児童に悪影響を及ぼし、ナシオナリザソンを妨害しているからである。

ナシオナリザソンの目的とするところは――外国人の子孫であるブラジル人児童たちにわが国語を話し、ブラジルが自分たちの祖国であることを理解させることである。それは、自分たちの生まれた国に誇りをもつことができるように、ブラジル精神（Ｅｓｐｉｒｉｔｏ　ｄｅ　Ｂｒａｓｉｌｉｄａｄｅ）をうえつけ、これを強化することである。ドイツ精神とか日本精神とかいうものは、ブラジルのナシオナリザソンをさまたげ、ブラジル的家庭の破壊をねらっている連中が、彼ら児童の心にうえつけようとするものである。

彼らはブラジルの敵である列強に、ブラジルを売りわたし、奴隷化するために、彼ら無心の子供を利用しよう

とするものである。

そこでわれわれは新ブラジル、（Ｂｒａｓｉｌ　Ｎｏｂｏ）の青年たちが、祖父代々の愛国心によって、ブラジルの自由と国民統一のために戦っていること、さらに、祖父からうけついだこの寛大な国を、その献身的努力によって、

いっそう偉大なものとして子孫にうけつがせるために確固たる決意のもとに戦っていることを、彼ら児童たちに理解させる必要がある。それがナシオナリザソンの仕事である」というのである。

注

（1）　ディアリオ・ダ・ノイテ紙（一九三九年五月三一日）一面と六面。

見出しは、Ｃｏｎｔｒａ　Ｏ　Ｂｒａｓｉｌ－ａ　ｉｍｐｒｅｎｓａ　ｅａ　ｌｉｎｇｕａ　ｅｘｔｒａｎｇｅｉｒａ・

５６　新聞と、その果たした役割

いまでもそうであるが、以前、日本人集団地で、もししっかりした日本人会や青年会のあるところなら、たいがい「会報」をだした。ながつづきすることはまれであったが、「会館」ができ「会報」がでれば、一応、会として

社会的な役割がはたせるように思えた。印刷はもちろんガリ版の謄写刷りであった。そこでは村のインテリたちによって植民地経営の理想が語られ、会員の名簿も発表され、出産や結婚のニュースがのり、短歌や俳句もあらわれ、ときには、嫁入り前の娘の評判記もでたりして、青年たちに活気を与えた。そして、こうした刊行物をもつ植民地は「文化的」集団として誇ることができた。それは、文字をとおして、植民地内の精神的結合がつめられるように感じられたからでもあった。

こうした傾向は、わが在伯同胞社会全体においても同じであった。海外における日本人の在留地であってみれば、まず「新聞」があらわれた。はじめはガリ版の謄写刷りでもよかった。新聞の役割は同胞社会全体の「会報」であった。

言葉がわからず、横文字の新聞が全然よめなかった移民たちの間では、日本から一か月半から二か月かかって雑誌や単行本がくる間のつなぎに、各地にちらばった同胞のニュースが、なによりのなぐさめであった。日本の近況もまとめてしることができる。領事館や移民会社の「おえら方」がなにを考え、なにをいっているかも伝えられ、ときには、いじわるな「あげ足とり」の記事にもお目にかかれるので楽しかった。横浜正金銀行の広告をみれば、母国送金のこともわかる。

こうして、はなれ小島のように、点々とサンパウロ州の各地にちらばった同胞は、新聞をとおして、おたがいの横のつながりもでき、また、日本との縦のつながりもたもつことができた。どんな新聞でもないよりはましであった。このマス・コミ（？）によって移民たちは「在伯同胞」を意識するのであった。

はじめての新聞、週刊『南米』

わが在伯同胞社会に、はじめて新聞らしいものがあらわれたのは、一九一六（大正五）年の初頭であった。週刊『南米』といって菊版三、四〇ページ（あるいは一二ページ）の雑誌といってもいいほどのもの、ガリ版の謄写刷りであった。

（『移民四十年史』 四〇七ページには『南米週報』菊版八切り一二ページものとあるが、「発展史」下巻二五八ページには『週刊南米』とある。また、『理れ行く拓人の足跡』四〇五ページには「謄写刷り新聞「南米」……」とだけある。発展史と拓人の足跡の筆者は当時この新聞に関係があった人たちであるが、私のかすかな記憶によると、純白な表紙には「南米」と大きく刷ってあり、そのうえにやや小さく（あるいは横書きに）週刊とあったように思える。そこで週刊「南米」とした。そして、拓人の足跡の著者にしたがって、『南米』というのがこの新聞

の名であろうときめた）

創立者兼主筆は星名謙一郎で「後にブレジョン植民地を開設した人であるが、当時五十歳をこえていた（1）」。彼はハワイから北米のテキサスへ渡って米作をやった経験をもち、ハワイでは邦字新聞の記者をしていたことがあるというから、ブラジルへ来て、新聞のないのを知り、これに先鞭をつけたのも当然であったろう。しかも、彼の周囲には、外国語学校出やその他のインテリ浪人組が集まっていた。

「毎日一キロの肉で三人が二度食事をするという貧困な生活振りではあったが、天下を諭ずる勢いはなかなか大したものであった（2）」という。農業移民を主とした当時の同胞社会で、ポルトガル語がわかり、そのうえ移民たちよりいちだんとインテリであった彼ら独身の浪人たちが新聞をだしたがらなかったら、むしろ不自然であったかもしれない。

星名の週刊『南米』がどのようなことを書いたか、いま推察することはできないが、「四十年史」によると、「彼が売りだしたソロカバナ線の奥ブレジョン植民地および梅弁（ばいべん）植民地の宣伝用のパンフレット式であったが、紙面には世界情勢、母国の近況、聖州物価表、聖市日本移民の動静を三面記事に扱い、植民地文学欄もあった。移民現地の読物に飢えていた移民社会には大き

な需要で、奥地の日本移民も争って注文し、購読申込み、送金は日本領事館宛に殺到していた」という。

「発展史」による星名評は「……いはば海に千年山に千年の強の者で、しかも識見も高く筆もたち、当代稀にみる人物であった」とあるが、「四十年史」の協力者、安藤潔は、その『邦人社会の言論・思潮史論』のなかに（三〇二ページ）「星名の思想は邦人社会に圧倒的な『テイコク・バンザイ』主義で、最も無思想な一人であった……」

といっている。この二つの評を考えあわせると、なにか当時のインテリの一タイプが想像されそうである。しかし、同書で安藤もいっているように「セシル・ローズ的な開拓精神に人生の意義を感じるといった、多分に英雄的なコスモポリタン」の多かった当時の青年インテリのなかで、五十歳をすぎた星名の思想的立場は特殊なものであったかもしれない。彼にはジャカレー（わに）というあだ名があった（3）。

「発展史」によると、彼の新聞は「極度に星名自身の全人格に徹しすぎ、この時代の読者層には難解の感さへあった。僅か二年余にして」植民事業にうつったという。

「四十年史」によると「発行一年たらずで廃刊した」ことになっている。

『日伯新聞』の出現

週刊『南米』と同年「すなわち一九一六（大正五）年八月三十一日に『日伯新聞』が創刊された。ゼルマニア形四ページの石版印刷で矢張り週刊であった（４）」。「経営は明治時代に南洋からブラジルへ転航し、そのころまだ耕地通訳をしていた金子保三郎と大正二年に北米から転住した輪湖俊午郎の合作であった」という。「新聞は在ブラジル邦人に目と口と耳を与えるものである」というのが二人の意気ごみであった。ただし、輪湖はその後金子と意見があわず、約一年にし袂を分かってしまった。

星名が週刊『南米』を土地売りの宣伝に利用したことについては「四十年史」もふれているが金子も「土着定住を論じ、特に上地購入、植民地開設の気運促進に力をそそいだ」といわれる。

当時イグアッペ植民地（桂）には、すでに三十家族の入植者があり、ノロエステのビリグイ植民地開設ののち、カフェーランジア（当時はプレジデンテ・ペンナ）の平野植民地も二年目にはいっていた。しかし、そのころ一万五千といわれた在伯同胞の大部分は、まだモジアナおよびパウリスタ線のコーヒー農場にコロノとして働いていたのであって、小土地所有者となって定住すべきを指示しつづけたことには大きな意義があった。

『伯刺西爾時報』の登場と「日伯」

「日伯」が名実ともに「日伯」となるのは一九一九（大正八）年三浦鑿（さく）の手にうつってからであった。金子は日本へ活字を買いにいってもどり、宿望の活字印刷にうつろうとするとたんに病気のために続行不可能におちいってしまった。このとき「日伯」を買収したのが三浦であった。

この間一九一七年の半ばころ、ブラジル移民組合の機関紙として『伯刺西爾時報』が登場することになり、同胞社会における新聞界は俄然活況を呈する。

「時報」の社長は北米で新聞記者をやった経験のある黒石清作で、移民組合の移民教育部長として、活字、印刷機はもちろん職工までつれてのりこんできたのであった。そしてその年の八月三一日の天長節を記念して創刊号を出したのである。

ここで「日伯」と「時報」を比較してみると、日伯は活字になったとはいえ、ルビなしのグーテンベルグ式印刷、ゴムのロールでインクをつけては一枚一枚テコでしめての印刷であったが、一方時報では、活字にはルビをつけ電力で印刷した。活字そのままの印刷ではあるが、はじめから一千五百部もすった。しかも、時報は移民教育というたてまえもあって、申しこみがあろうとなかろ

うと、はじめのうちは、どんどん新聞を送った。だから時報が発行部数四千というとき、目伯は一千たらずであったろう。

とにかく、一九二七年、日伯が新しい機械を入れて週三回発行にふみきるまでの約十年間は、在伯同胞社会における新聞界は、日伯と時報の対立時代としてにぎわった。

その他の新聞

一九二一年九月には香山六郎の『型州新報』があらわれ、一九二三年三月には阪井田善吉（南舟）の月刊『南米評論』がでて、これが一九一八年六月から（南米新報）にかわり、一九三二年一月には翁長助成の手にうつって「日本新聞となる。こうして、邦人社会の週刊紙はでそろうのであるが、ここでは、単なる新聞論にとどまらないで、新聞一般がわれわれの社会にどんな役割を果たしたかをみていきたい。

われわれの生活の文化面、すなわち、日常生活の趣味、娯楽から文芸、思想、宗教、スポーツ、美術、芸能にいたるまで、さまざまな刺激を与え、指導し、批判し、ときにはつまずきの石となったことがないとはいえないが、新聞のなかった場合を考えてみると（戦争中や戦後の社会的混乱などをみてもわかるように）新聞の果たした役

割は大きいし、新聞をとおして同胞社会の文化活動の変遷をたどることも不可能ではない。ただここでは資料不足のために、こまかなところまで叙述できないが、おおまかな歴史はたどることができる。

「日伯」「時報」の対立時代

まず、日伯と時報との差は、両社の社長兼主筆の境遇および性格の差から、当然対立すべき運命にあった。この対立は両主筆の論説にあらわれ、世間に話題を提供した。

日伯新聞の社長三浦鑿は、鈴木貞次郎が『埋れ行く拓人の足跡』のなかでかいているように「猟奇的小説の主人公」であった。彼のおいたちを正確にしるものはなく一九〇九（明治四十二）年に、日本を訪問したブラジルの海軍練習艦ベンジャミン・コンスタンテ号で渡伯したという変わり種。それこそ、海千山千、しかも英語が上手で、ドイツ語もかなりやる。むろん、ポルトガル語もできる「浪人」であって、権威筋にはたてつくことを誇りとしているような人物であった。小柄で山羊ひげをしこきながら、大使も総領事も「クン」づけ。文章はかざりたてることをせず、風刺文、攻撃文ともなれば俄然ヘナブリの名調を加えた。

これに反して、時報社長黒石清作は、移民組合の教育

部長としてアメリカからわざわざえらばれてきた人物だけに、みるからに温厚な紳士、領事館や移民会社の立場をまもるとともに「郷に入っては郷に従え」「移民は養子の身分」というような説教をくりかえした。だからできあがる新聞は「くさいものにはふた主義（5）」の「御用紙的存在（6）」になりがちであった。

「二人はよく戦った。戦いすぎてときに醜悪な場面をも演出したものの、それがまた社会の話題を豊富にし、人気を博する種となった。黒石は邦字新聞経営者中の最年長者で温厚な一面を性格に持つためか、地方読者中には相当の支持者を持続し来った」と「発展史」の筆者は述べている。

当時、新聞はニュース・ペーパーではなく、言論機関といわれた。第一面のトップに社説をかかげて、社の主張を世に問うたのであった。だから言論人としての記者は社会の木鐸だとさえ主張した。

「……何処までも公明正大に率直に忌憚なくというのが私の建前である。従って日伯社の主義精神はこれに一貫している。（中略）だから在留邦人社会でも後暗いことをしている者や蔭でコソコソやってる偽善者は大抵私を嫌う。今後も依然として私の存在を邪魔するであろう。然し新聞記者の天職は一日も責務とかけ離れることはできないし、善悪正邪の区別をハッキリして、其外に正当な批判

を加えることである。苟も邪道に堕ちず、あくまでも正を執って永遠なる在留同胞の向上発展に資せんとする時にラチもない後輩から怨まれようとそれが何だ。私はそんな者を歯牙にかけて居ない。然し左様な手合も満更憎めない。寄ってたかって私をエライ者にしてくれる。何程かはいてくれぬと困る（7）」と三浦は主張する。

狆と猿活字を通してにみら合い（古石毒天筆）

「只同業者の間に此程の厄介者が居ることはえんぎでなく、寧ろ足手まといでデズグラッサードだ。新聞社会の恥だ」という。「同業者間の厄介者」というのは、三浦の国外追放に一役買っているとみた黒石を指したものである。それほど二人の立場は対立的であった。「戦いすぎてときに醜悪な場面をも演出した……」と「発展史」が評

したゆえんである。

ここで黒石側の答弁をあげられないのは残念である。おそらくそれはかかなかったことであろう。ここにあげた三浦の文章は普段のものとくらべるとかなりかたくなっている。とにかく、「一方が修身講話を以てすれば、他方（三浦）は之に答ふるに『へなぶり』一句を以て一蹴すると云ふ工合で、その後サンパウロ市に幾つも邦字新聞が濫立するまで、この二新聞ほど分野の判然せるものなく、また其の時代ほど油の乗った時代はなかった（8）」のである。

当時新聞は個人のものであった。時報ものちには移民会社からいっさいの権利を買いとって、個人の所有にした。

ものをいうために新聞をだしていた三浦は、「つぶされてもいいから思ったことをかけ」と配下の記者にもいっていたという。実際、のちには夜間暴漢におそわれて活字をめちゃくちゃにされた。二度も国外追放をくらって、二度目には日本で戦時中獄につながれ、終戦で出獄したときは、すでに栄養失調でまもなく死んだ。

彼の筆は「皇室の尊厳を冒とくし、過激な共産主義的思想を発表し、善良なる風俗を害し、公序良俗を素し、あるいは故なく他人の名誉を毀損し、又金員を収受せんが為めに毒筆を弄する等、其犯罪の事跡明瞭であります

（9）」と一部のものから指弾された。

しかし、彼の共産的思想なるものは、むしろ敵に乗ぜられたもの、いわば表現上の問題としての「筆禍」であったようにみえる。イデオロギー的なものはどこにもみあたらなかった。左に一例をあげる。

一九二六年八月二日の社説「忘れた大物」というのが、「皇室の尊厳を冒とくし、過激な共産主義的思想を発表し」たものとして「同志会」なるものから弾劾されたものであった。これは三浦国外追放の一資料として同志会によって印刷されたパンフレットにのったものであるが――その書きだしは、本記事の梗概、（としてはじめに解説がつく）――「移民問題を解決するためには、此（ヽ）の（ヽ）大（ヽ）物（ヽ）――傍点が打ってある――即ち皇（ヽ）室（ヽ）を（ヽ）口（ヽ）説（ヽ）き（ヽ）落（ヽ）さ（ヽ）ね（ヽ）ば（ヽ）な（ヽ）ら（ヽ）ぬ（ヽ）――やはり傍点づき――事を忘れてはならぬ。九重雲深しと雖も、現代の過激思想――この言葉は本文にはない――の気流が侵入せぬ訳にはいかぬ。皇室におかせられても、この間の事情を察知せられているから、本問題を持出す機は熟して居る」。この趣旨を三浦独特の不（ヽ）敬（ヽ）な（ヽ）る（ヽ）文（ヽ）字（ヽ）によりて発表してるものなり（といっているのがそれである）。

即ち次の如し（と本文を引用する）。

一、……動いた序に民間の資本家などを口説くなどは抑も未で、他に是非とも口説落さねばならぬ大きなものがあるを忘れて居る。ほかでもない、それは皇室だ。皇室が畏れ多いと申すなら皇室のことを預る宮内省を口説落して……。

二、……吾人の主張は或は気狂いじみて居ると云ふ人があるかも知れない。然し皇室か宮内省が乗り出して呉れないじゃ……。

三……たとへば御手元金から、僅か四五万円出して頂き、伯国に土地を買つとく、而して特定移民輸送船を三四隻造って運賃をロハにする。「土地を買ってやったぞ、只で送ってやるぞ、サアお前方伯国へ　往って安気に暮し、かたがた日本の国威を輝せ」かう来なくてはいかないのである……。

四、……ところで皇室が表向き乗出すことは国際間係上面白くないといふのが外務省あたりの……。

五、……北海道若しくは満鮮の柘植事業なども内務省の連中がヤツサモツサ担ぎ上げてゐるのが、鶴の一声、何とか皇室に口をきいて頂くと事業はスラスラと運ぶのである。それと同じやうに海外移植民事業も宮内省を口説落し、皇室を動かすことができれば始めてモノになる……。

六、……ただ宮内省は外務省と共に最もアトラザードで

民間の声など直接受けつけない……移民問題をどうかしやうと云ふなら、此の大物を忘れてはならない。七、……労資問題の紛争、小作争議の悪化、九重雲深しと雖も此の気流が侵人せぬ訳には行かない、其所を侍臣の少し心利きたるものが条理をつくして述べたつれば通らぬことは無い筈。問題はこれを切り出す勇気があるかないかに。機は熟して居る。

しかも、この告発文は社説が発表されてから約三か年もたってからあばき出されたものであった。どうしてこんなことをかくかといえば、こうした方法によって敵をおとしいれる風潮は、戦後の混乱期へもつづくもので、同胞間の底流の一つだったし、「同志会」なるもののかげにはやはり黒幕がいたことがあきらかだったからである。

それはさておき、彼の筆がきたなかったことは万人がみとめていたものであった。ひそかなわい談だったらさぞきくものをよろこばせたであろうと思うようなことも平気で文字にあらわした。それは社会の良識からはずれるものであった。だが一方では、世間のものが「ふせておいて」いわないことも、必要とあらば、どんどんあばいた。すねに傷を持つものは不倶戴天の敵として彼の失脚をねがった。「たたみの上では死ねない人間」であった。

この点黒石は用心深かった。説教家、モラリストとし

ての立場をまもり、生前読者から記念胸像をおくられ、戦後の混乱中は、「社の行き方に反する」という理由で母国戦災者救援運動にも参加せず、勝組からも支持者をえて、九十余歳で天寿をまっとうした。

筆者は新聞の社会的役割を述べるまえに、まず初期の新聞なるものの性格を示そうとして、「日伯」「時報」両紙の性格を叙述したが三浦追放事件には深入りしなかった。ただ、この事件の底をながれていたものは、在伯日本官憲に対する三浦の無遠慮な批判に対する復讐であったことだけは、ここにことわっておきたい。

その三浦追放事件をその後の史家はどのように解釈したかは、『コロニア五十年の歩み』の編者が三部（六三ページ）「形成期の社会記録」のトップにあげた言葉にあらわれている。これは今後さらに検討さるべき課題であろう。

「一九三〇年前後は移民入国の最盛期であったが、同時にコロニア形成の時期でもあった。本国の『権力』に対する土着民のレジスタンスは、コロニアが自主性をかちとるための戦いであった。三浦目伯追放事件は、このような風潮の露頭であり、当時の邦字新聞の社会面は、もろもろの事件を通してこの風潮を反映している。この国に根を張りはじめたコロニアの、本国政府の権威主義に

対する反発は、いってみればコロニアの人間形成の姿であった」と述べているのがそれである。

新聞の果たした役割

さて、一般読者の立場にたって新聞の果たした社会的、文化的役割をながめてみると、初期移民社会において、「時報」の果たした役割は大きかった。第一、活字がきれいであったし、なによりもルビづきであったから、しぜん読者も多かった。それに嶺昌のポルトガル語講義録も、言葉をならう点でなにほどかの役にたった。

新聞をとっていて、第一面に社説がかかけてあっても、当時のようにむずかしい漢字がならんでいては、たといふりがながついていても、学校の先生でもなければ、それをたんねんに読んで、あるいは共鳴し、あるいは批判することはできなかったろう。むしろこの点ではルビをもたない「日伯」のほうが読みよかった。しかしサンパウロから遠く離れて農業労働に従事しているコロノたちにとって、領事館や移民会社に対する抽象的な批判などは、あまり縁のないものであった。読者はまず講談をよんだ。

のちに講談が第一面にのるようになったのも、講談がいかに読者にうけていたかが想像されよう。一週に一回、二段から三段の講談をよむ、移民たちにはそれが楽し

かったのである。

それから当時は、いわゆる三面に日本近信がでた。当時の新聞をひらいてみて、いかにコロニアの記事が少なく、そして、日本通信が多かったかに驚く。これは一九三〇年代を通じて変わることがなかった。移民たちは身はブラジルにおいても、頭はいつも祖国にあったのである。新聞もブラジル事情よりも日本の動きを重視した。だから、はさみとのりで新聞をつくるといわれたほどであった。まだラジオも空便もなかったから、日本からくる新聞を切りぬいて原稿紙にはりつけることが編集者の仕事の大部分だった。

地方通信というのもあって、各地の日本人会や青年会のうごきが伝えられた。しかし、これは一九二〇年ころから植民地建設がさかんになってからの現象であった。

地方集団地の最大行事は新年と天長節であったが、ことに天長節には運動会や相撲大会があって、地方通信をにぎわした。新年と天長節には、どの新聞も特別号をだし、新年の名刺交換から天長節の奉祝広告で新聞社は懐がうるおったし、在留民は、広告の大きさによって、成功者のふえたことを想像した。

紀元節はどうしたものか、あまりにぎわなかった。

特別号には移民の体験記などもでたが、不平組は日伯のほうへ投稿した。時報は文芸欄以外の投稿掲載には気

をつかった。匿名の中傷文がないともかぎらないからである。

日伯のスキャンダルやすっぱ抜きの記事は読者にうけた。うけた反面多くの敵をつくった。当時はみな本名で発表したからである。

経済記事――ポルトガル語のよめない移民たちにとってサンパウロの「市況」はみな邦字新聞によってしった。毎週の物価表とともに農産物取引きの状況も知らされた。地万の仲買人にごまかされないためには、日本語の新聞に発表される物価の変動をしっておく必要があった。

文芸欄をもうけて、創作、紀行、短歌、俳句をたびたびのせたのは六ページの時報であったが、他の新聞もいくらかこれに紙面をさいた。

短歌や俳句がいかに日本移民の趣味性を持続させ、農村文化の荒廃をくいとめてきたか、のちの発展ぶりをみればわかるだろう。

これは一九二五年以来、アリアンサ移住地に入植した「直来植民」たちに負うところが多いのであるが、自然環境と生活様式の差によって、無秩序になりがちな生活のなかで、文芸の力によって一部のものが感覚のデリカシーを持ち続けてきた点は注意されなければならない。これは当時の新聞経営者の想像も及ばなかった点ではなかろうか。文芸欄は、一面、無味乾燥な奥地の生活に情

熱のやりばにこまったインテリ青年たちの自慰的な場所でもあったが、社の読者獲得の面からみれば、利用価値の少ないものであったろう。一般読者は、むしろ講談的な「よみもの」を求めていたのであるから……。

これは新聞そのものの役割ではないが、新聞社の存在とともにわすれてならないものは、集金人の存在であった。地方では購読料、広吾料の集金人まで「新聞記者」とよばれた。なぜなら、彼らの「聞きだし」は地方通信となって発表されたからである。彼らは「記者」として一面おそれられた点もあるが、新聞記事の内情の伝達者として期待された。「サンパウロでいまごろ、こういうことがおこっている。いったい、内情はどうなんだろう」「大きな声ではいえないが、実は……」というのが、地方の人たちのききたいところであった。新聞記者（じつは集金人）をわが家にとめて、一晩飲みながら世間話をする、というのが地方の顔役のたのしみであり、誇りであった。これには、セールスマン（ビアジャンテ）も同じような役割を果たした。こうして、新聞にかけないことは集金人によって地方へ伝えられた。ときにはとんでもないデマとなって……。

新聞が果たした社会的役割でみのがすことのできないのは「広告」であった。ことに在伯同胞一般によびかけ

なければならない寄付金募集などは、新聞紙がなかったら不可能であった。一例をあげれば、一九二三年九月一日の関東大震災の際の義損金募集であった。この天災の報に接した在伯同胞は、新聞のよびかけによって五〇〇コント近くを献金したのであった。世話人は、この金で毛布を買って日本へ送った。もちろん寄付者の「芳名」も新聞紙上に発表され、おかげで新聞社も広告代がいい収入になった。

さらに、初期のサンパウロ市の邦人商業は、ほとんど在留民相手であったから、広告がなかったら商売にならなかった。書籍店などは、新刊書の輸入とともに書籍目録とその売価とを発表した。

藤崎商会とか日本貿易会社などという二、三の商社は、ブラジル人相手にしっかりした店をだしていたが、その他は輸入商などといっても新聞広告によらなければ、その存在はわからなかった。何々「商会」などと新聞にでていても、そこは、表からは気づかれないような地下室（ポロン）であったりした。税金の関係もあったろう。

ホテルもそうであった。いわゆるペンソンとよばれる素人下宿程度のものであったが、新聞の広告をみて行ってみると日本式の木札に何々「旅館」と墨書したものが入口にぶらさがっているところが多かった。味噌、醤油の販売もそうだ。醤油などは新聞広告のおかげでうれた

ものである。

領事館の通告はもちろん新聞をとおして発表された。青年の徴兵猶予願いも新聞によってわすれず届け出された。居所がわからず領事館留置きの郵便物は時おり新聞に広告された。

連れ家族の青年や娘が家出して行方不明になると「尋ね人」広告がでた。「尋ね人」広告に姓名がでることは不名誉だったから、これは自由行動のブレーキになった。

日本人会、青年会の役員は、選挙のあとで新聞広告に名を出した。この新聞を数部買い求め、自分の名のわきに赤線を付して故郷へ送ったものもいた。死亡広告は、「誰々儀……薬石効無く……」の黒わくづきででた。ていねいなのは親戚や反大代表のほか一家全部の名もだした。たとい死亡広告であろうとも新聞に名がでることは自慢だったのであろう。その他「帰国広告」「訪日広告」も餞別の返礼がわりにだせば、世間から一かどの顔役とみとめられだろう。こうして新聞はコロニアの「会報」として、当時の人々に在伯同胞を意識させた。そしてどんな不便なところに集団しても、日本人会や青年会をつくり、学校をたてることの刺激になった。のちには農村協同組合創立をも促進し、経済的、社会的、文化的向上に貢献した。

むろん、マイナスの面が指摘されないでもなかった。

「何れも内容貧弱、文辞整わず、無味乾燥到底読むに堪えぬ」と評され、また、新聞記者には「母国に居る時からの新聞記者と云ふものは殆んど絶無で、農園の労役に堪へないで少し筆の立つのを頼りに成り上つたものが多い。伯国では又新聞条例が寛大でもあり、又実際に施行せられぬから、これ幸に新聞と云ふ文明の利器を悪用して、あらゆる要計を行ひ同胞の思想上に悪響を及ぼして居る」と一九二八年ころ慨嘆したものもいた。しかし、なかった場合を考えれば、マイナス面ばかりをあげていられない。移民社会の初期にはまだ経済的余裕がなかったから、到底いい新聞はできっこなく、新聞社も借金で苦しまない場合は、食べていくだけでやっとであったっだから記者たちも独身青年が多かった。この点どこか学校の先生と似ていた。

一九二七年四月から日伯が週二回となり、時報は一九三一年十月より週二回、一九三四年に聖州新報がバウルーからサンパウロ市へでて翌年の九月から週三回発行するようになり、やがて三八年から三九年にかけ、聖報のさきがけを追って各紙が日刊にうつるようになると、新聞は個人の新聞からぼつぼつ営利事業に変わるものもでて、ニュースを主とするようになるのであるが、一方では、日伯がかわきりで一九三六年より全伯少年野球大会、一九三八年からは全伯青年野球大会などを主催して、

ベースボールの発展に力をそそぐとともに社の名によって優勝旗やカップをだして宣伝につとめだす。ちなみに日伯は一九四〇年七月二十五日から『ブラジル朝日』と名をかえる。三浦が追放されてのち、名実ともにあらたまったのである。

戦後のように「のど自慢」の芸能祭はなかったが、俳句および短歌大会、ベースボールや陸上競技大会などでコロニアの文化向上につくしたことも、新聞の果たした大きな役割であった。

むろん、一九三一年以後になると、日本の国粋主義的傾向を反映して、戦後の問題に種子をまいた点もあるが、これは時代の趨勢に順応してきた新聞にとっては、やむをえないことであったろう。こういう傾向に抵抗するためには同人雑誌などがでたわけであって、新聞はその時代の一般的要求にもとづいて、コロニアの動きとともに変貌してきたのであった。

各新聞の特色

ここでもう一度、戦前の各新聞にもどって、その特色をみよう。

『聖州新報』は一九二一年九月七日（ブラジル独立記念日）ノロエステ線の玄関であるバウルー市に、第一回移

民の香山六郎によって創設された。「最初はジンク版印刷、週一回四ページであった。同社が活字を日本から取り寄せたのは一九二五年五月であり」、サンパウロ市に乗りだしてきたのは、一九三四年であった。一九三〇年から週二回、一九三五年九月からは週三回、そして、一九三八年五月から日刊となった（2）。

聖州新報、略称「聖報」は「ノロエステ日本人植民地が発展の一路を辿るに到って、距離の上から交通不便、聖市の二活字新聞週一回発行が、植民地へ配布されるに十日以上かかった。それにこの二つの新聞（時報と日伯）は都会記事のみ多く、植民地のローカル・ニュースには手が及ばなかった（13）」ところから、かつてプロミッソンの上塚植民地の開設に協力した香山が、ノロエステ同胞を代表する言論機関として出発したのであった。

はじめのころは発行部数三百五十、日刊時代は九千部にとびあがった。

「発展史」の筆者は、社長香山を評して「別に一貫した主張はなく、時に毒筆を揮い、激しては海南島移住論などを真剣に書くあたり、新聞人というよりは寧ろ思索方面の性格者と思われる」と評しているが、これはこの筆者自身にもあてはまるような評言であった。それほど三〇年代の終わりころは、永住思想が一般にぐらつきだした時代であった。

「四十年史」に私の書いた香山評は「公孫樹と号して、社説以外旅行記や随筆をかいた。カミシモをぬいだ気安さで人情家香山六郎に接することが出来る。彼は自由主義はなやかな時代から戦後の思想的大転換時代まで、各時代の思潮を一身に体験してきたような男で、ブラジルにはめずらしい存在である。彼が果して新聞記者であるかどうかと云う議論は、論敵の好んでなした批判であったが、少くも無思想なジャーナリストの中にあって、思想家たるべく努力して来た人であったといえる」。この努力こそ私は多とするものであった。常識家は無難である。だが思想家はときにあやまちをおかす。しかし、これをあらためるにも躊躇しないであろう。

『南米新報』は一九二三年、月刊『南米評論』として出発し、一九二八年から『南米新報』となり、はじめは発行部数二千五百といわれたが、のち七千部だしたという。

社長兼主筆は阪井田善吉（南舟）であった。

「其の評論と雑誌風の編集中に日本的なものが明瞭で、一部の読者層には迷はず読むことができる特徴を持つものと見られてゐる」と「発展史」に記されているが、「四十年史」の安藤によると、「阪井田南舟が『南米新報』を発行し、これによって東京帝大教授筧（かけひ）克彦博士の国粋的国家主義思想の宣伝につとめたことは、わがコ

ロニアにおける国家主義思想が理論的にとりあつかわれた最初である」。

弁論大会などにはむずかしい「哲学」なる語をふりまわして青年たちを煙に巻いた。日伯の三浦は彼のために一口話を書いた（文体は筆者のもの）――。

あるとき、あるところで南舟が居候をしていた。そこの家に客があって、「あの男は何者か」ときいた。主人もじつはこの居候の本業をしらない。つかつかと居候氏の前にすすみでて、「あなたの御本業はなんでござんしょう」とたずねた。

「おれは哲学者だ」

「ハハア……なるほど」

とひきさがった主人は客のところへもどって、

「あの方は、ドットール。デ・フェーロ（鉄学者）なんで……」

それから阪井田はドットール・デ・フェーロとしてしられるようになった。もってまわるような理屈のきらいな三浦は、阪井田のかきっぷりや話しぶりが気にくわなかったにちがいない。彼の論法を評して「スジの通っていることへチマの如し」といった。

阪井田はさっそうとした紳士であった。そして若き日には文学青年として「狂伯爵」という社会批判的小説もかいた。

『日本新聞』は一九三二年一月十四日、『南米新報』の後身として社長翁長助成によってはじめられた。一九三九年まで週刊、それから週二回にした。発行部数は五千といわれた。誠実な人柄と一貫した主張によってしられていたが「迎合が嫌ひなため営業の不振は免かれぬが、その代り能く清貧に堪へ、一家総出で徹夜機械を廻すだけの根気と努力を持続した」と「発展史」はその涙ぐましい奮闘ぶりを述べている。

社長翁長助成は商船学校出の二等運転士としてペルーへあがり、のちブラジルへ転住した。被は明星派の歌人であり、コロニアはじめての謄写刷り週刊『南米』時代から白水郎と号して短歌を発表していた。一九一八年以後は「伯刺西爾時報」編集長も勤めた。二世教育に深い理解をもち、戦後、聖市創立四百年祭記念祭典に際してコロニアに協力会の事業案が討議されたとき、パウリスタ新聞紙上に一九五二年九月二十七日「二世政治家に望む」を寄稿して、二世政治家はブラジル人としての立場からコロニアの問題を考えるべきことをさとした。

その他、地方でだしていた新聞も二、三にとどまらなかったが略す。

ここでは新聞が戦前において、ながく社長を主筆とする個人新聞であったことを示すにとどめる。コロニアの

興論はこうした個人新聞をとおしてかもしだされたのであった。

新聞が、スポーツ、文芸、その他組合運動などに対して啓蒙的な役割を果たし、またコロニア人の精神的連絡をはかり、ときには対立のお先棒をかつぐこともあったが……その社会的、文化的役割は大きかった。そしてさまざまな出版物を後世に残したことも大きな手柄であった。

聖州新報は、年鑑を四回だした。最初は一九二八年の「のろえすて日本人年鑑」、一九三〇年には『ノロエステ、ソロカバナ、パウリスタ三線邦人年鑑』、一九三四年の『在伯日本移植民廿五周年記念鑑』などである。香山個人としては戦後『移民四十年史』を編著している。

伯刺西爾時報は一九二二年ブラジル独立百年祭にブラジル紹介書として『新近之伯刺西爾』をだし、移民二十五周年を記念して出版した一、三〇〇ページの、『伯刺西爾年鑑』は移民史上貴重な文献となった。時報社は、このほか、多くの出版物をだしている。

こうした文化財をのこした点で「時報」と「聖報」の貢献は大きかった。

注

（1）「日本人発展史下巻」二五八ページ。

（２）同上、二五九ページ。
（３）彼の伝記己は「物故先駆者列伝」二五～二六ページ、および「上利新吉」（伝）一四一～一六四ページにくわしい。
（４）「日本人発展史」下巻、二五九ページ。
（５）「移民四十年史」三〇二ページ。
（６）同上
（７）「コロニア五十年の歩み」六七ページ。
（８）「日本人発展史」下巻、二六一ページ。
（９）「日伯新聞社主三浦鑿の処分歎願書」の序、一九二九年六月十日、日本人同志会発行。
（１０）除名広告は戦後の混乱期に多くなる。
（１１）『今日のブラジル』五三九ページ。
（１２）『移民四十年史』四〇八ページ、および『日本人発展史』下巻、二〇四～二六五ページ。
（１３）『移民四十年史』四〇八ページ。

５７　一九三三年から四一年末まで

戦前のコロニアで、いちばん大きな事件といえは、日語学校の閉鎖、そして日本語教育の全面的禁止であった。

「コロニア五十年の歩み（１）」より

一九三〇年のジェツーリオ革命後、世界情勢を反映して、この国にもぼつぼつナショナリズムの風潮があらわれてきたが、一九三七年「一月十日、独裁政権が樹立するまで、わが同胞社会には、それほど重くるしい空気はのしかかってこなかった。

移民二十五周年祭

一九三三年六月十八日には、日本移民二十五周年祭が、各日本人集団地でもよおされたが、サンパウロ市では、アクリマソン公園における祝賀会のほかに、パウリスタ劇場（2）を借りきっての芝居もあってにぎわった。

また、伯刺西爾時報社では、『伯刺西爾年鑑』を、聖州新報社では『在伯日本移植民廿五周年記念鑑』をそれぞれ発行して、コロニアに大きな文化財をのこした。

両者はそれ自身、移民史をふくむ現勢調査報告であったが、後世の移民史編纂のために多くの貴重な資料をのこした。いま、これら年鑑によって、当時の移民社会の空気をうかがってみると、『伯刺西爾年鑑』には、教育問題についてはなんのふれるところもなく『在伯移植民廿五周年記念鑑』では、「日伯関係暦」のなかの一九三二年の部に「外国移民子弟の自国語教育に対し伯国政府の取締厳重となり閉鎖を命ぜられたる邦語小学校あり」とで

ているだけである。それまでの泰平な気分がうかがえる。

移民二分制限法

ただし「記念鑑」は、一九三三年版となっているにもかかわらず、おそらく印刷まぎわに追加されたものらしく、同「日伯関係暦」の一九三四年五月二十四日には、外国移民入国に対する二分制限法が一四六対四一票の絶対多数で、新憲法制定議会を通過したことが記されている。そして、この年鑑の序言の終わりは「南米ブラジルで、日本移植民十七万人は、不同化で、人種違いで危険だとされ、過去五十年間入移民数の二分丈け、毎年入国を許すと制限されてしまった。日本人等は危険な連中であろうか、危険な連中ではないのだろうか。在伯二十五年日本人である私共白身に今でも、それは謎だ」と結ばれている。一九三四年八月二日付である。問題はおきていたのである。

二分制限法の公布は七月十六日であるが、さすがに多くの日本人を落胆させた。当時は日本移民の最盛期で、渡伯者は年間二万にも達していたのである。それが制限法によると三千そこそこになったのである。移民の後続部隊がわずかしかこなくなるということで、自分たちが異国に島流しになったようなさびしさを感じた。ただしこの二分制限は、カイオ・プラード・ジュニオールもいっ

ているように、ブラジル側からみれば、このころはすでに大量の移民は必要としない時代にはいっていたし、多くの日本移民は、日本人の農場へ流れこんでいたのである。そして、実際にはあまり影響はなかった。なぜなら、日本のアジア大陸への進出によって、ブラジル移民は減少し、やがて自然消滅の形となって戦争時代を迎えたからである。

ポルトガル語のできない教師は日本語を教える資格がない

二十五周年記念出版物に載せるにはまにあわなかったと思うが、一九三三年の暮れから三四年の一月にかけて約五十日間「在サンパウロ日本人学校父兄会（3）」の主催で、各地に、日本語教師に対してポルトガル語（4）講習会が催されたことは、この時代の教育状況をかえりみるために欠かすことのできない事件である。ポルトガル語のできない教師は外国語を教えることができない、ということになり、日本語教師をふくむ外国語教師は、検定試験によって、資格が問われるようになったからである。

むろん、五十日そこそこの講習でポルトガル語の読み書き、地理・歴史のあらましをおぼえこむことはむりで

あったし、はじめから断念して出席しない老人教師もあった。しかし、視学やブラジル人教師の協力と指示にしたがったこの講習会は、学務官憲の共鳴をえて、失格者はごく少数にとどまるほどの好成績をおきめた。講習会はサンパウロ市、プルデンテ市、リンス市および、レジストロ植民地等で行なわれ、どこでも数千人の教師（受講生したちが合宿して、小学校二、二年程度の教科書をもとにして、ポルトガル語の「読み書き」と文法の初歩をまなび、地理は州と州首府および連邦首府の名、歴史は国祭日の意味および主だった史上の人物名などを暗記した。この学習には、ブラジル人教師と父兄会から派遣された講師がつきっきりではげんだため、効果よりもその熱心さが、ブラジル人教師や視学たちを動かしたのであった。

こうして、多くの教師たちは日本語教師としての資格は与えられたものの、日本語教師の地位は、経済的に安定したものではなかったから、若い有能なものほど、この職業からはなれた。日本で中学以上の学力があり、そのうえポルトガル語ができたら、こんなきゅうくつな、将来性のない職業にいつまでもへばりついていることに同意できなかったのである。

十四歳以下の児童に対する外国語教授の禁止令

ところで、一九三八年にはいると、新移民法が制定されると同時に、十四歳以下の児童に対する外国語教授の禁止令がでて、ブラジルの日本移民は、はじめて自分たちが外国にでてきた移民であることを痛感させられたのであった。そして、自分たちの子孫が日本語習得の機会を失うことによって、自分たちから離れていくかもしれないという不安は、自分たちがまだこの国に同化しきれず、したがって子孫が、つきあいにくい「外人」と同じような人間になってしまうことは、民族の滅亡だとさえ感じたのである。移民にとって、民族の発展とは、日本人全体の発展ではなく、在伯二十万同胞の発展と錯覚されていたのであった。自分たちをよそにして、民族は考えられなかったのである。

さらに日本語が教えられなくなるということは、教育事業にたずさわる数百のインテリたち（５）の職をうばうことであり、また移民社会における彼らの発言権が失われることであった。植民者のカマラーダ（雇人）とまで批評され、農業国へ移住して農業のできない無能者とみられていた面もありながら、学校の先生は、なんといっても移民たちの精神のよりどころだったのである。

日語教師の生活は苦しかった

むろん、教師の質については、まえにも記したように植民地の小学校（それがどんなものであるかは別のところで記した）の安月給では、学問や教養の高いものは望めなかった。

一九三二年三月十五日、第一回教育研究会なるものがサンパウロ市のサン・ジョアキン街（現文化センター）にあった「在サンパウロ日本人学校父兄会」で催されたとき、地方から集まった日語教師は五十七名であったが、なんと相談の中心テーマは、教師の生活補助金を、総領事館へ申請することであった。教師の生活はたいがい生徒の月謝でささえられていたが、当時の相場は、一人五ミル・レイス、一家族で二人以上児童を通学させているものは一人三ミル・レイスというふうであった。二十人の生徒を教えて一〇〇ミル、四十人で二〇〇ミル、もしそのなかで兄弟で通学しているものがあるとすれば二〇〇ミルは切れた。だから、無学な筋肉労働者より安い場合もあった。父兄は先生の食糧補給として米や豆を贈ったりしたものである。いい先生をのぞむほうがむりかもしれない。

一九三七年一月二十一日、サンパウロ市における教育

懇談会にでてきたチエテー移住地代表Ｔは「言葉もわかり、熱もある教師は少ない。無職者や敗人だけが教師になり、それで教育が行き詰まったといっている現状だ。今度の集まりは、ブラジル語の話せる教師が選抜されてでてきたのであるが、そのうちで日本の高等教育をうけているものは自分一人だ」と筆者に報告するのであった。

だれが親孝行を教えるか

ところが、そうした先生さえも、一九三九年以後は、日本語学校から姿を消し、自分たちには全然気心の通じないブラジル人プロフェッソールだけになってしまうとすれば、いったいどうなるだろう。彼らは日本人の倫理の中心となっている忠孝の思想を子供たちにうえつけることができないのではないか、ブラジルでは忠義は教えられないとしても、孝行は教えられないものであろうか。移民たちにとって孝行思想は、生活のささえとなっているものであった。日本的家族制度がくずれて、子供が親のいうことをきかないようになったら、家庭は子の成長とともに崩壊し、家族は離散することにならないだろうか。日本人の先生で「親をうやまえ」と教えないものはないし、日本語の教科書で、忠孝を説いていないものはない。

言葉ばかりではない、精神が失われるのである。しか

も、その精神こそ世界でもっとも優秀な大和民族の精神としてわれわれが誇りとし、また生活のささえとしているものではないか。これを失って、なおかつ、日本人だ、日本人の子孫だといえるだろうか。

日本人の強味は、その家族制度にあると移民たちには考えられた。家長の命令一下、全家族員が協力して働くことであった。「毛唐はまずかかあが反対する、子供たらも勝手なことをいって親父のいうことをきかない。あれじゃ、裸一貫の移民が成功してパトロン（大農場主）になることはむずかしい」というのである。ことに、ポルトガル語がわからず、カマラーダを駆使する力量のない移民たちは、家族員の労力にたよる気持ちが強かったのである。

ただ悶々として

教育の制限令によって、子孫への明るい希望をうはわれるようになると、一方では、青年会などの活動が、まるでこれに代わる教育法でもあるかのように盛んになってくる。スポーツに気分のはけ口を求めると同時に、弁論大会などには、自分たちとはぜんぜん関係のない大陸進出論がさけばれたり、軍部追従者の「満洲は日本の生命線なり」などの論で鬱憤をはらしたりする。また非常時論は、ブラジルの現状にもはねかえってくる。民族（ブ

ラジルの日本移民）の将来を論じるものもでてくる。だが、ふしぎなことに、だれ一人ブラジルの政治を批判するものがない。移民の文化活動に対する制限に非をとなえるものがない。むろん外国人には、ブラジルの政治を論じることが禁じられていたとはいえ、日本語のわかるブラジル人など一人もいないなかで、それらしいものさえ論じられなかった。むろん法令に楯つくことのできない移民には無益なことであったろう。ただ、一九三九年に出版した『バウルー管内の邦人』で著者、輪湖俊午郎は「只問題は伯国が在住諸外国人に同化を強制し、先づ国内より不愉快なる外国語を追放せんがため、露骨に面かも急激な政策をとったことが、手段として上々なるや、否やに就いては、後世相当に異論批判もありうるのであります」といって、法の精神には同感できるところもあるが、その〝急激な〟政策には同感できないことを論じているだけである（五三ページ）。だが一般日本移民は、ただ悶々として政府の法令をおそれかしこみ、しかも、どうしたらこの束縛からのがれて教育の実をあげることができるかを思いめぐらしていたのである。

かくれて教えても効果はあがらない

言論機関（新聞）は家庭教育の重要性を説いた。サン

パウロの教育指導者たち（文教普及会）は巡回教授をすすめた。しかし、巡回教授といえども、植民地でははじめからむりであった。どうしても四、五人は集まってもらわねばならない。だが人目のつくところでいかにも学校らしい形で教えることは、必ずだれかに発見され、密告されてしまう。ブラジル人労働者のいない植民地などはなかった。ナショナリズムを利用するカマラーダたちはパトロン（日本人植民者）とのあいだに仲たがいでも生ずれば、なにかで復讐しようと思う。それには、日本語教育の現場を密告するにかぎる。つぎつぎと教師が警官にひっぱられていく。これではどうにもならない、というので、人目のつかない物置きとか山小屋で子供たちを集めて教える。もちろん、もう教科書などは絶対におもてをもちあるかない。かわりばんこに監視に立ち、人の近づく気配があれば、すばやく教科書をかくす。先生はかくれる。あるいは鍬をもって近くの畑をたがやす。子供たちは四、五人だから、わいわい小屋のなかで遊びたわむれる。

こうした教育法には、いろいろ批判があった。官憲を恐れる非合法教育が、はたして教育の根本精神にかなうものだろうか。発覚を恐れて、戦々兢々たる児童たちが、はたして人間としてすこやかに成長するであろうか。

このような懐疑もうまれて、潜行的非合法教育は、決

して一般的なものとはならなかった。しかし、移民の心に、自分たちはブラジル政府から圧迫されているのだという気持ちはふかく内攻して、後日ちがった形で爆発することになるのではないか。

二世教師は植民地で孤立した

このころになると、二世でブラジルの師範学校を卒業したものもあらわれ、ポルトガル語の教師として日本人植民地の小学校へ赴任してくるものもいくらかあった。しかし、早くからブラジルの学校に行って中等教育をうけたものは、たいがい日本語ができなかった。師範学校に行って教師になるものに女性が多かったが、彼女らは日本人植民地の小学校に来ても、植民者と親しくつきあうことができず、青年たちは白い目をむいて、日本語ができない二世じゃね、といってよりつこうとしなかった。しせん、彼女らはどこかの日本人家庭に下宿して、そこの人たちとだけつきあうさびしい生活をせねばならなかった。ただ日本語の先生にとっては、日系人の先生であるというので都合がよかった。また子供たちはポルトガル語がわかったし、彼ら同士は、あるときは日本語、またあるときはポルトガル語でお互いに話しあった。ブラジル人がまじれば、ポルトガル語でも、けっこう話しあえたので、日系の先生にはなついていた。

早く同化した二世とその親たち

おもしろい現象であるが、初期の移住者のなかでブラジル人の大農場で移民たちの通訳や監督をしてきたような、かなりなインテリたちは、コスモポリタンな思想をいだいて、同化主義を採るものも多かった。彼らは子供たちが二世としてブラジル人であることも知っていたので、ブラジル式教育を尊重し、日本語教育には無関心なものもいた。だから、そういう家庭には、早くからブラジル人の間に進出することのできる優秀な二世もでたが一方では日本人社会からのけものにされて、へんにかたよった性格を示すものもでた。一般同胞たちに比して、同化のテンポが早すぎたのである。こういう人間は、戦後になって、日本人の社会に反抗的な態度を示すようなこともあった。日本人はえらいの、日本精神を失ったらカボクロになるのといっていたが、このざまはどうだ！　というのである。

しかし、子供たちがブラジル的になっていく速度にあわせて、親たちも同じように同化していくことはむずかしかった。彼らインテリたちも、同胞社会から絶縁して生活することはできなかった。彼らは同胞社会に国粋主義思想がさかんになり、また自分たちがなかなか同化できず、しかもブラジルの国家主義政策のために、圧迫を

感じ、郷愁を深めたとき、子供たちがあまりに自分たちの気持ちから遠ざかっているのにおどろき、後悔の念になやむこともあった。

二世の自覚のはじまり

一九三六年の暮れのころであるが、サンパウロ市に学聯事件というのがおこった。一世および準二世（ブラジル育ち）がだしているある定期刊行物に、二世大学生の一人が、ポルトガル語で書いた文章のなかに「不敬」にあたる言葉がみいだされたというので問題になったのであった。移民たちはこれを日本語に訳して「菊花事件」と呼んだ。問題とされたのは、「われわれ二世は菊花の国（パイース・デ・クリザンテモ）日本を尊敬することはできるが愛することはできない」というのであって、ブラジル人としての二世の立場からすればまことに当然のことであったが、二世の考えをあくまで一世のそれと同じ次元におこうとした一世たちの無理解を暴露するものであった。伝えられるところによると、この問題は日本総領事館までもちこまれて、国粋派の連中にさわがれたのであった（6）。

わが同胞社会では、敵をおとしいれるには「不敬」事件へもっていくことが、戦術的にいちばん効果的だと考

えているものが多かった。これは戦後までつづく傾向であった。かつて一九二九年六月に、日伯新聞社長の三浦鑿処分事件（のちに国外追放となるも不敬事件としてとりあげられたのであった（７）。

だが、筆者が問題にしたいのは、この菊花事件としてさわがれたものが、じつは・二世の自覚によって、二世が自らの立場を決定するようになった点である。それまで、二世たちの未来は、一世の意志によってどうにでもなるものだという考えが、移民たちの頭にあった。そのために、教育の問題も、日主伯従とか、和魂伯才とか、気持ちは日本人的であって、対世間的な才能、あるいは仕事のうえでは、ブラジル人としてたつ、というような二重性格的人間をつくることが理想のように感じていたのを自分たちはブラジル人だ、父母の国としての日本は尊敬する、だが、自分はブラジルを愛する、自分たちの愛国心はブラジル人として、フラジルを愛することだ、とはっきり宣言したようなものであった。彼らは自分たちの将来を、自分たちの意志によって決定することを明らかにしたのであった。こういう意味で、筆者は菊花事件をコロニアにおける画期的な事件とみるのである。

しかし、二世の一部のものが成長して、自分たちの立場からものを考えるようになったとはいえ、一般的には二世の教育が二世の立場から考えられる時期にはまだ到達

しなかった。ただ二世の立場というものが、一世にもいくらかわかりだした時期であったにすぎない。また、そういう時代だけに、自覚した二世の立場に対して不安をもつものは、反動的に日本的教育の重要さをさけびだしたのである。

サンパウロ市の日系インテリ青年たち

時はあたかも、日本では国体明徴の声明（一九三五年八月）のあとであり、こうした祖国の動きは、ブラジルの邦字新聞にも発表されて、万邦無比の国体の宣伝とともに、邦人社会の空気も、日本的国粋主義一色に塗りつぶされたような時代であった。しかも地方の日本人小学校は、日本語教育に対する監視がきびしくなって、教師にも多くの失格者がでてきたことは、移民の気持ちを、狂信的な国粋主義にかりたてることになるのであった。

このころ、サンパウロ市のインテリ青年たちの一部では、無反省な日本的国粋主義にあきたらなく思い、二世の立場を考慮しながら、一方では移民同化の必然性を承認するとともに他方では二世の精神的な糧として日本文化の特長を伝えようとする動きがあった（８）。

一九三八年九月二十四日、コンセリェイロ・フルタード街の料亭富田屋（とんだや）で雑誌「文化」主催の、ブラジル人もふくめた二世大学生と「文化」同人の座談会が

あったが、当時の二世学生たちの気持ちを聞くことができた。この座談会は、近く日本へ見学旅行にでようとする大学生たちのキャラバンのために、日本へ行ったら何をみてきたらいいか、ということをテーマとしたものであったが、いま思いだされるころは、今日第一線に立って活躍している二世インテリたちの、当時のものの考え方が、かなり日本的であったことである。あるいは日本式とブラジル式のあいだにはきまって、おもいまどっていた、といったらいいかもしれない。たとえば、Tは、日本人のおくゆかしさを、ブラジル人は、ミステリオーゾと感じていることについて語り、一同の同感をえた。日本人ははじめて人に紹介されると「なにもわからないものですが、どうかよろしく」という。ところが、わからないどころか、なんでもしっていることかわかってくる。ブラジル人にいわせれほ、無知が有知ではありえないだろう。不思議な国民なのである。

似たようなことは、その後も二世からきかされた。「日本式にひかえ目な態度をとったり、正直一方で、まっさきに自分の過失をみとめてあやまったりすると、時には具合がわるい。個人だけのことならいいが、背後に仲間でもあると、彼らの利害関係にひびいてくるのだ」とこぼすことがあった。

日本的な教養やエチケットが、ときによると融通のき

かない「ばか正直」になるのである。日本的なものの考え方とブラジル的なものの考え方の相剋が、日本的な教養を身につけた二世たちを悩ますことになる。

これが一世だけの時代であったら、「どうも毛唐は話がわからん」、あるいは「下等なやつらで……」などといってすませていたものであった。しかし、二世の時代になって、本式にブラジル人とつきあいだすと、そんなひとりよがりの考えではすまされなくなる。考え方がちがうのである。ブラジル人の社会に生きようとするものは、彼らの考え方を学ばなければならなくなる。

もののいい方でも、日本式に、とおまわしにいうとか、気持ちを察してもらうとかの方法ではだめだ。時と場合によって、シンやノンははっきりいう。そして婉曲にいう場合は、ブラジル式表現法によらなければならない。

日本人の「おくゆかしさ」もブラジル的教養の面から検討されなければならないことが、二世たちにわかってきたのである。

ここにも二世の自覚があった。一世のひとりよがりの日本文化至上主義に対して、どのような立場からそれを理解し、また継承すべきかが問題とされだしたのである。

ところが、こうした理解は当時の教育指導者たちには、ほとんどなかった。在伯同胞の子弟教育問題の総元締めの任にあった文教普及会（もとの父兄会）の幹部連など

は、日本の文部省的な考え方をしていたので、当時の二世学生や自由主義的なインテリ一世青年たちの間では評判がわるかった。

ただし、自ら二世といい、ときによると準二世といって、日本で多少教育（せいせい中学程度）をうけ、二世の仲間にはいってブラジルの中学や大学に通っていた青年たちの間にはかなり日本主義者がいた。彼らは、二世の日本人化を己が使命のように感じていたのである。ただし彼らのなかにも、いろいろな考え方をするものがいて、日本文化と国粋主義的日本精神とを、はっきりわけて考えるものもいたことはここに断わっておく必要がある。

ヨーロッパ戦争と深まりゆく移民のなやみ

さて、一九三九年九月一日、ドイツのポーランド進撃とともに同月三日には英国の対ドイツ宣戦があって、第二次大戦がはじまり、ここに、われわれをめぐる社会情勢も急転するのである。

ジェツーリオ独裁政府は、外字発行の新聞雑誌に対し、新出版法令にしたがって、社説やその他主要記事に対して、葡語の訳文を掲載するよう命じたので、いかにも息ぐるしい空気が感じられだした。児童教育の監視もいよ

いよきびしくなり、日本人関係の小学校で閉鎖を命じられるもの二百十九校（９）にのぼったといわれる。

一九三九（昭和十四）年五月に出版された『バウルー管内の邦人』は輪湖俊午郎のノロエステおよびパウリスタ延長線同胞の現勢調査報告書であるが、巻頭にかかげられた「永住か帰国か」の論文は、移民の八割五分（１０）が帰国を希望していた苦難時代において、いかなる思想的立場から永住は可能であるかを思索したものとして、記念すべきものである。

「帰国、永住、曾っては一つの閑散な話題に過ぎなかった此問題も、今は其執れを選ぶにしても、真剣なしかも深刻な姿となって私共に迫って来て居るのであります」というテーマの重大性を、彼の言葉のままここに記しておく。私は在伯同胞の筆になった「苦悶の書」として、まだこれ以上のものを読んだことがない。ここには当時の移民たちの苦しみが、全部要約されているような気がする。私は移民問題に筆をそめるたびに、くりかえし、くりかえしこの論文をよみ、批判に批判をかさねてきた。

しかし、このなかにおりこまれている当時の民族感情だけは、論理を超越して胸にせまるものがある。筆者輪湖もいうように「そは我帝国の政治圏内を遠く離れて、天涯に身を処し、其地に子孫を遺さねばならぬ総ての邦人がもつ民族的性質のもの」であって、こうした経験の

ない者には、あるいはその気持ちは通じないかもしれない。これだけ切々たる文字がつらねてあるにもかかわらず、文芸作品のように具体的な姿でかかれていないために、今日の人たちには、この苦悶の姿を正しくみとめることはむずかしいのではなかろうかと思われる。

ここに問題としてとりあげられているのは、移民の二分制限法と日本語教育の禁止の二つが主で、つづいて、混血の問題と、二世が移民の子、日本人の子孫として、この国に自由に生存できるかどうかということである。この最後の問題は、筆者輪湖自身が、チエテー移住地のシチアンテ（植民者）であったという彼の境遇と、子供たちが、かなり親の思想、性格をうけついで日本人的な二世として育ちつつあった点にも関係していると思うが、都市にでて勉学している二世には、それほど重大問題ではなかった（むろん、のちにはカーラ・ノン・アジューダ（１１）などといわれたこともあるが）。そこで「吾等の子孫を此の地に遺して果して後悔することなきか」という彼自身が提出した問題に対する回答は、子孫自身の幸福に関する検討よりも、彼の「民族的立場」からその理想を実現しうる可能性のある二世として成長するや否や、に帰せられている。ここでは批判をぬきにして、この論文の結論の部分をそのままあげて、当時のコロニアにおける移民インテリが、いかなる決意をもって永住し

ようとしたかを示すことにする。

「私共の第二世をして、立派な伯国人に育てしげることが、果して子供等の為めに不幸であらうか。立派な伯国人とは抑も如何なる目標を指して云ふのであらうか。

私の願ふ所の立派な伯国人とは、先づ其国を愛し、其国を堅城として人類浄化の大使命に突入する所の勇者であります。此大理想は誇るべき祖国三千年の伝統であり、又ブラジル建国の精神と相結ぶ所のものであります。斯く考ふる時、子供の為めに帰国すると云ふ事は、全く無意義に終るのであります。

此の心を以て伯国の大自然を見よ。山川草木一つとして歓喜に燃えざるは無く、悉く我が味方たらざるはない。私共の前には、如何なる場合にも必ず道は通ずるのであります。実に宇宙万物は、私共の心の持方に依って、其総てが幸福を実らす材料ともなり、自己破滅の所以とも変ずるのであります。同じ材料を以て、宮殿を造ることも出来れば、獄屋を造ることも可能である。爰ブラジルを天国と化する事も出来れば、祖国に帰って地獄を作る事も又可能であります。

顧れば私共が此国に足跡を印してより、げんに三十年、其間払はれたる犠牲は老若男女を合し、実に二万近いのであります。此墓を捨てゝ帰ることは、決して私共の祖先に対する道ではないのであります。私共の血がブラジ

ル人の血脈に流れ入り、勝れたる伝統を以て其濁　りを浄化してこそ、私共が爰に移り来た意味をなすのであります。

此国の墓に入る其日迄、私は一生懸命働くでありませう。懐かしき祖国日本の姿を胸に抱き、私は最後の瞬間まで、其隆昌を祈るでありませう。而して私は我子の立派な伯国人として、役立たせる為渾身の努力を払ふでありませう。更に子孫の繁栄を確く信じ、尚ほ　伯国の将来を祝福して已まぬのであります」

ただ、こうした決意は、思索的なインテリには通じても、一般の移民たちには、彼らの要求にこたえて現況に対処する方法を示すものではなかったから、どのような反響があったかは不明である。

日本語学校の閉鎖とともに、教師たちの転職があり、もうおおやけに教育のことを云々するものもなくなった。もしあったとすれば、個人教授やわずかな巡回教授の話くらいであった。

多くのものはヨーロッパ戦争に注目したが、ヒトラーの電撃戦に驚嘆しながら、世界に平和がきたら、「民族の移動」がおこって、日本人は日の丸のもとに帰って、民族の発展をたのしむことができると考えた。彼らはブラジル移民は前時代的政策のなごりであって、いわば失策

に等しいものだ。戦後は「民族移動」によって、訂正されるにちがいないと考えたのである。

ただし、当時はまだいくらか永住論者もいたので、彼らは、二世はブラジル人として日本的教養はなくなるだろうが、それでも最後の願いとしては、日系人であることの誇りだけは失わせたくないものだと考えた。こういう人たちは家庭でのしつけ、訓練、教育を重視した。

一喜一憂の時代

ヨーロッパ戦争がはじまってからの在伯同胞の一部では、ヨーロッパとアジアの戦争が一つになって、世界大戦へ進展するのではないかという不安をいだくものがあった。そして、そういう人たちは、その鍵をにぎるのはアメリカであって、アメリカが仲裁に乗りだしさえすれば、なんとかかたがつくのではないかと思っていた。そして、日本はアジア大陸での戦争終結に努力するだろうという予想をたてた。

九月十六日にはブラジルの新聞にノモンハン事件に対して日ソ停戦協定が成立（九月一五日）したことが報じられた。これはこの人たちをよろこばせた。しかし、すぐそのあとから、追っかけるようにソ連のポーランド進撃があって、世界情勢にあたらしい不安をもたらした。ついで九月二十六日の、ドイツ軍に対するワルシャワの

降服は、さらに暗い影を追加した。このままではすまないだろうという感から、ヨーロッパの戦争はどこまで進展するか、ほとんど予想がつかなくなったのである。

ドイツの動きに無条件に賛成するもの、これをいきすぎとして批判するもの、在伯同胞の気持ちは必ずしも一様なものではなかったが、どちらかといえば、同胞一般はヒトラー礼賛にかたむいていたといえよう。これに対してブラジル側の言論は、徹底的に反ヒトラーであったことはいうまでもない。それが、日・独・伊防共国家群に対する非難ともなると、われわれのうえにも重くるしい雰囲気となってのしかかった。開戦直前の独ソ不可侵条約締結によって、日独伊はソ連をもふくめてデモクラシー国家群の敵にまわされた感があった。

こうしたときに、少しばかりわれわれの心を活気づけるニュースがもたらされた。日本から国際親善飛行として「ニッポン号（１２）」が九月二十九九日年後二時にサンパウロ市のコンゴーニャス飛行場に到着することになったことであった。

「日の丸」をえがいた銀翼をあおぎみようとして、わざわざ遠方からでてきた同胞もかなりあった。コンゴーニャス飛行場へおしかけたものもあった。しかし、二時が三時になり、さらに四時になっても日本の飛行機が着いたという確報はなかった。この日は午後になって急に空が

曇ってしまった。そしてコンゴーニャス飛行場にはもうもうと砂煙がたちのぼり、ニッポン号は着いたのか着かなかったのかわからないままに、その日は暮れた。

翌日の新聞報道によると、曇天のためにとうとうコンゴーニャスにはおりられず、サンパウロの上空からサントスへまわって着陸、ただちにリオへ向かって飛び去ったというのであった。デマが飛んだ、「日本移民の祖国愛を刺激しないために、参謀本部のとりはからいで、サンパウロへはもどらず、サントスからリオへ直行させるようにしたのである」と。真相はわからない。ただ、そういうことが信じられるような反日的空気が流れだしていたことは事実であった。在伯同胞は気が抜けたようにがっかりした。

世の中一般が変わっていく

その後この年はなにごともなく、われわれは一九四〇年を迎えた。サンパウロ市の人口は二百万をこえたといわれた。電車に乗っても、女の人に席をゆずらなくなった。「カマロン（13）」はもちろんのこと「アベルト（14）」に乗っても、女の人は男の膝の前にお尻を向けたまま立っていた。職業婦人がふえてきた。郵便局などで切手を買うために「列」をつくっている場合、以前には女の人はよく列をだしぬいて切手を買ったものだが、そん

なこともなくなった。なにか世の中の変化がま近にみえるようで、ブラジルもせちがらくなった感であった。

一月下旬、葡字新聞が、長年の二〇〇レイスから一挙に四〇〇レイスになる。インフレのかすかな足音であった。ブラジルも戦時体制にはいる前兆のように、外国人登録がはじまり（１５）、移民たちは鑑識手帳をとらねばならないことになった。

枢軸国民は敵国人

この年にはいると、ブラジルの同胞のうえには、重くるしい気分が倍加されてくる。いわゆる枢軸国の臣民（スーディトス・デ・エイショ）として敵国人あつかいをうけるようになるのである。

三月八日、北パラナ、トレス・バーラス移住地からの報告によると、「ベースボール試合の帰りに勝ったうれしさで愛国行進曲をうたいながらカミニョン（トラック）で町へ乗りこんだら〝暴動〟のかどで警察から九〇ミルの罰金をとられた」「道を歩きながら邦字新聞をよんでいたら、排日ブラジル人の手先になっているものが、突然横からこれをとりあげた」「商店のカレンダーに日本字を印刷することが禁じられた」「五人以上の集会は禁じられた」「日本語の教育も全部禁じられている」「カマラーダ

まで〝なんだ外国人が〟といっていばっている」「国粋主義を利用して地方官憲が私腹をこやしている」等等である。

サンパウロ州ではすでに禁止されていた日本語教育のことは別として、その他の圧迫はパラナ州のほうがさきであった。ドイツ人、ポーランド人などが多かったせいであろう。

九月二十七日、日独伊同盟調印が報じられた。だが、在伯同胞中、日本の世界戦争への突入を予感したものはごく少数にすぎなかった。一般の風潮は、ヒトラー、ムッソリーニが英雄であることを疑うものはあまりなかった。

二月十一日、在伯同胞も紀元二千六百年記念祝賀式を行なったが、サンパウロ市の総領事館邸の式場には三百人ほどが集まって、午前九時から祝賀式を挙行した。宮城遥拝、戦没勇士への黙祷、君が代、祝辞、聖寿万歳などで、あとで、するめ、おにしめなどのつまみもので同乾杯したのである。ごく簡単なものであった。もし平時だったら、もっと盛大な祝賀会があったかもしれない。この日は、ジュツーリオ政権樹立十周年記念日でもあり、市の中心はにぎわっていた。

一九四一年、戦前最後の年

この年の十二月九日、われわれは太平洋戦争の勃発を

しるのであるが、筆者は二月にノロエステの旅行にでて古い植民地における同胞の生活状態にふれることができた。数年前まで、最も活気のあふれたリンス市も、もはや完成された町となって、停滞ぎみであることを感じた。そして、初期植民者たちの社会では、二世の進出やブラジル育ちのものの成長がめだち、しかも、かなりカボクロ的な無気力を示しているのに驚かされた。最近、日本から来たものとくらべると、そこには、明らかな一方的なブラジル化がみとめられた。一方的というのは、まだブラジル人として、ブラジルの社会にとけこめない人間の、外面的な言葉や動作、表情などのブラジル化であって、この時代の二世タイプをあらわしていた。彼らは、仕事のうえではもう一世たちに負けていない。むろん、日本語は話すが、まだそこから精神的な糧をとりいれるだけの基礎はもっていない。ブラジル語は話せても、とざされた日本人社会特有の雰囲気のために、ブラジル語によって、知識やその他の教養を身につけることができない（１６）。いわば、全く過渡期の人たちをみいだしたのであった。彼らは日本人的二世といえる人たちであって、国籍を別にすれば、一世とあまり変わりなかった。意識のうえでも、ブラジル人というよりも、むしろ日本人であった。

日本語教育は個人教授以外はやっていなかった。

六月二十二日、独ソ開戦の報をえた。日本はヒトラーにだまされたという感をうけたものもいくらかあった。

日本から船がこなくなったので、新刊書や月刊雑誌による文化の流入がとだえた。移民たちはいよいよ棄民になったような心細さを感じた。

八月二十九（金）、三十（土）、三一（日）の三日間、全伯野球大会がサンパウロ市のカンポ・ベーロ東山野球場で催された。日本人の自動車が多くなり、成金のふえたことを示すようであった。服装も身につき、動作も神士的になってきた。ただし、便所も仮設されていたが、あいかわらず立小便は目についた。紙くずをちらすことも意に介しないようであった。

これが、戦前における最後の全伯野球大会となったのである。

八月末、聖州新報廃刊、十月末日日本新聞と伯刺西爾時報が廃刊閉鎖、わずかにブラジル朝日だけがその後葡字だけで発行をつづけたが、まもなく廃刊になってしまった。

在留民一同は、目隠しされたようなさびしさを感じだす。かわってデマニュースが流れだす。

当時、ポルトガル語の新聞がよめるものは、サンパウロ市や、地方都市にはかなりいたとしても、日々労働に

従事している農業移民たちのなかには、ほとんどなかった。

十二月のはじめ、日本から郵便物がおくれて一まとめについたが、九日（火）は日本の対英米宣戦の報があり、日本との交通は、全くのぞみのないものとなってしまう。

ブラジルにおける日本移民たちの、本当の苦難時代がはじまるのである。

注

（1）『コロニア五十年の歩み』パウリスタ新聞社編、一九五八年発行、一二三ページ。

（2）ベルゲイロ街で、カストロ・アルベス街のつきあたりにあった。

（3）Ｌｉｇａ　ｄｅｓ　Ａｒｎｉｇｏｓ　ｄａ　Ｅｓｃｏｌａ　Ｊａｐｏｎｅｓａ　ｅｍ　Ｓ．Ｐａｕｌｏ．

（4）われわれは、ポルトカル語といわず、普通にはブラジル語といっている。ただし、ブラジル人は必ずポルツゲースという。

（5）一九三九年三月には日本人小学校数四八六といわれていた。『日本人発展史』　下巻一九九ページ。

（6）『移民四十年史』　三一六ページ。

（7）『日伯新聞社主三浦鑿の処分歎願書及び犯罪証拠材

料』一九二九年六月十日、日本人同志会発行。
（８）　雑誌『文化』の啓蒙運動を指す。
（９）『日本人発展史』　下巻、二〇一ページ。
（１０）『バウルー管内の邦人』一ページ。
（１１）“Ｃａｒａ　ｎａｏ　ａｊｕｄａ”「顔がじゃまになる」日本人の顔をして自分はブラジル人だとがんばっても、世間では適用しないということ。
（１２）当時の大阪毎日、東京日日の主催したもの。
（１３）赤くぬってあったので、カマロンすなわち「えび」と俗称されたのである。
（１４）アベルトは旧来の開放式電車。横のふみ台から各腰掛けに直接のってすわれるもの。
（１５）一九三九年四月十七日から開始され、はじめはリオ・　デ・ジャネイロ（当時の連邦首府）で実施された。
（１６）「一一、五〇〇（バウルー管内）家族、伯国在住年数平均十一年というに拘らず、伯国語の雑誌など一冊もなく、新聞がわずか一〇〇部内外あったのですが、而も大部分は都市生活者のインテリ層に限られているという貧弱さであります」『バウルー管内の邦人』一九ページ。

58　太平洋戦争中の在伯同胞

付　―　戦争中の日本移民心理状態

戦争がすんだら……

日の丸のもとで暮らしたい。

ブラジルにおける日本移民にとって、第二次世界大戦は、一九四一（昭和十六）年十二月九日（水）日本の対英米宣戦を知ってから、さらに大きな現実として、直接身にこたえるものとなった。

すでに日本語による報道機関は禁止されていたし、ポルトガル語の新聞のよめる人たちの数も少なかった時代であるから、「真相」はひそかに日本からのラジオ放送をきいていたものの口からひろめられた。ときにはとんでもないデマとなって……。

あの日から一九四五年八月十五日の終戦の報をえるまでの三年八か月間が、事実上の戦争期間ではあったが、戦争のもたらした社会的緊張と精神的混乱のために、さらに四、五年は、われわれの生活から重くるしい暗雲が去らなかった。そして、この暗雲が晴れるまでは、さらに四、五年を要したのであった。思えば悪夢におかされ

たような長い年月であった。

ここでは、日本の対英米宣戦から終戦までの同胞社会の状態を述べようとするのであるが、文書による記録がほとんどない時代のことであるから、同胞社会の動きを正確に具体的に述べることはむずかしい。だが、一般的な空気はとらえることができる。

ブラジルの同胞社会においても、反戦的な思想、感情は、少数の人間の心の底に深く沈潜して表面にあらわれることはほとんどなかったから、一般の人たちが、日本の対英米宣戦を、むしろ、大きな感動をもって迎えたことは当然であった。しかし、戦争時代という非常時の不自由は、すでに一九三九年九月の第二次世界大戦の開始から、われわれ枢軸国民は痛感していたので「戦争はいつ終わるか」という問いは、あらゆるところで発せられ、物知りによって、かくかくの理由で、一、二年のうちにかたづくと予言された。

「戦争がすんだら……」、それを語りあうことが、なによりのなぐさめとなったのである。

◇一九四二年一月十五日

この日から、当時の首府リオ・デ・ジャネイロでは、汎米外相会議がひらかれ、アルゼンチン、チリーをのぞく十か国が対日経済断交を決定することになる。そして一

月二十九日には、ブラジルと日本は、外交関係断絶状態にはいるのであった。

一月二十八日の夕刻、サンパウロ帝国総領事館では、全員そろって万歳を唱えて退館した。

総領事館からは帝国大使の名で、各日本人商店および市内のおもだった家庭へ、おふれの文書がくばられた。それには「大国民としての襟度を失わずに……」がんばってくれるように、とあった。

帝国政府の代表が、このブラジルの地上から消えたのである。多くの日本人がショックをうけた。だが、カフェーその他、公の場所では、もう枢軸国語で話すことが禁じられていた。当時、コンデ界隈がサンパウロ市の日本人居住地の中心であったが、みな黙々として往来していた。

まもなく、コンデ、エスツダンテス街辺の日本人の十日以内の立退き命令がでる。これは、九月になって再び総立退きが命じられて、名物コンデも二世だけをのこすところとして一時さびれるのであるが、サントスのような徹底した立退きはついになかった。

奥地の事情は、旅行者によって少しずつサンパウロ市にもたらされた。産業組合が、まず政府の監理下にうつり、活動停止状態におちいったこと、個人の商店でも、政府の干渉があって、仕事がやりにくくなったことが伝え

られた。

多くの日本人は、日本の大本営発表のラジオ・ニュースによって、戦果をしることに夢中になっていた。当時はまだラジオをきくことができた。やがて家宅捜索によって警察にとりあげられるときがくるのであるが。しかし、まだ長・短波受信機は高価な時代であったから、サンパウロ市内でも、どこの家庭にでもいきわたっていたわけではなかった。夜になると、知人、友人の家庭を訪問して受信機にかじりついた。

緒戦における日本軍の進撃ははなばなしかった。ブラジルの新聞にさえ、外電中の表現ではあったが、「ベルダデイラメンテ・ディアボリカ（文字どおり悪魔的）」と報じられたほどである。そして、これは一九四二年二月十五日のシンガポール陥落までつづいた。この勝報によって、戦争はながびくものではない、という確信が多くの日本人の間につちかわれた。

翌十六日には、東京日比谷において大東亜戦はじまって以来の戦勝祝賀会が催されたことが日本のラジオによってブラジルにも伝えられた。

わが移民社会でも、シンガポール陥落に祝杯をあげたものは少なくなかった。だが、戦時中の枢軸国民であるわれわれは、これをおおっぴらに行なうことができなかった。それからほぼ一か月後には、ニューヨーク近く

でブラジル商船ブアルケ号がドイツ潜水艦にやられたとの報道が新聞にのって、枢軸国移民に対する監視がきびしくなった。「第五列」論が連日新聞にあらわれて、旅行には必ず警察の許可証（サルボ・コンズット）をとらねばならなくなり、急用で家をとびだすこともできなくなった。

こうした状況のなかで、移民たちは日本軍の大勝利を思いながら、戦後の引揚げ話に熱中した。海南（ハイナン）島への再移住論があらわれたのもこのころであった。移民たちの異常心理につけこんで、海南島のインチキ土地売りまであらわれる。

二月二十四日、サンパウロ市の葡字新聞にはイタリアの反ファッショ蜂起が大きく報道され、ロシアにおける独軍の苦戦についても伝えられた。しかし、世界大戦のなりゆきについて、移民たちはあまり関心をもたなかった。日本軍への信頼は、そうしたことに目を向ける余裕を与えなかった。

二月二十六日には、ブラジルの船がまた二隻沈められたと発表され、三月にはいると、コンデ方面では刑事の家宅捜索がはじまった。やってくるのは四、五人の一団であって、ときには彼らのなかにどんな人間がまざっているのか、てんで見当がつかなかった。隠匿武器と証拠文書（主として軍人であることの）をおさえることが主

眼であったようであるが、めぼしいものでは、まずラジオが持ち去られた。家中をひっかきまわし、ついでに現金がでてくれば、これも失敬していくので、たちまち一大恐慌となった。文句をいえば、すぐ「ぶた箱」へたたきこまれる。戦争がすむまではしかたがない。戦争がすんだら……とたいがいのことには目をつぶった。

とんでもないねつ造記事が新聞にでる。

三月二十二日のリオ市のある新聞には、日系二世がブラジルの政府にあてて、日本人社会の内情、とくにサンパウロ州内における軍事組織について、こまごまと内通した手紙文がのった。これには全くあいた口がふさがらなかった。

またある新聞には、サンパウロ市郊外のサン・ミゲールの「ニトロ・キミカ」工場が、日本人に包囲されたことが、でかでかと書きたてられた。

つかまった第五列の写真がときどき新聞にでる。りっぱなお坊さんの写真の下に、第五列としての説明がついている。知人、友人の顔がでるたびにびっくりする。

今日はだれがつかまった、今度はだれだれも覚悟しているそうだという話で毎日もちきっていた。リオの政治犯収容所のほうへ送られたという報道もくる。

いち早く職業活動を停止させられたのはサントスの漁師たちであった。

新聞にはでなかったが、日本人逮捕によって手柄をたてようとした地方官憲が、やりそこねたトリックについて書こう。チエテー移住地におこった実話である。

釣に熱中していた筆者の一友人が、五、六人で釣にでかけた。時節がらかたまっていてはいけないというので、みな離ればなれに釣っていたが、突然警官が大勢の黒人カッパンガをつれて、どやどやとおしかけて釣連中を包囲してしまった。

さて、どうするのか、と思っていると、警官はポケットから「日の丸」の旗をとりだしそれを棒にしぼりつけて、日本人の一人に持っているように命じた。ハハーン、と感づいたので、彼はそれをこばんだ。するともう、だれ一人持とうとするものがない。しかたなしに日本人をならばせておいて、後方に一黒人がかくれて日の丸の旗をさしあげた。そこをつれてきた写真屋にパチリ、と撮らせたわけだ。むろん、その写真屋も、むりやり引っぱってこられた日本人であった。

かくして見事に「日本人、かくのごとく反乱を起こせり！」とサンパウロ警視庁へ証拠品とともに報告することができる！（ついでに、いうところの軍事組織も発覚したのである）が、チエテーからはただちにブラ拓本部へ通知があったので、こちらでは先まわりして、事情を当局へうったえることができた。

さて、第五列の嫌疑でつかまった人たちがどんな生活をしているかは、多くの同胞たちがしりたがっていたことであったが、九十日も独房に入れられていて、しゃばへでてきたときはみちがえるような白髪の老人になってしまった人をのぞけば、留置場から移民収容所のほうへまわされたものは、伊・独人らとともに元気で合宿生活をいとなんでいることをしって安心した。

留置場のほうは、ときによると寝台がたりないために、セメントのタタキの上に三、四枚のコルション（草ぶとん）を敷きならべたところへ、七、八人、ときには十人くらいよりそってねるのである。小さな監房で、おまけに窓は高くて小さいので、人いきれとタバコの煙とでムンムンしているのがいちばんこまったという。ここにとじこめられるのはたいがい四、五日で、ながいものでも十日くらいであった。あとから、あとからと新入者がくるので、まるでところ天おしに、移民収容所のほうへうつきれる。かつて、ブラジルの土をふんだときに、一度はみんながやっかいになった宿泊所だ。ここの食事は昔を思いださせた。朝はコーヒーとパン。コンデンス・ミルクの空缶に手をつけたカネーカに砂糖湯のような甘ったるいコーヒー。昼食と夕食は、フェイジョン（豆）とアロース（米）、ときどきじゃがいもと焼き肉がつく。マカロナーダがでることもあった。ただし、野菜物はない。

はじめはちょっとのどを通すにほねがおれたが、だんだんおいしくなって、しまいには、みなけっこう食べた。食事のときは年齢順にならぶ。日本人が絶対多数だったので、チエテーのSなどは二番目だったという。

調書をとるには、当局のものも被拘留者もこまった。

「どうして捕まったのか」と刑事がSにたずねる。

「自分はなにもしらない、なにもしたおぼえがない。貴方のほうでしっているだろう」

「いや、こちらでもわかっていない。とにかくなんとかしなければ……」

というような具合だった。

釈放されても、帰りの汽車賃はだしてくれないので、遠方からつれてこられたものはこまった。碁の好きな連中は、白黒のボタンをさし入れてもらって、終日パチリ、パチリやっていた。

祖国の実力に信頼しきっていた移民たちにとって、獄中の生活よりも、しゃばでの重くるしい空気と職業上の自由を失って生計に思いなやむことのほうが、案外苦しかった。

戦争のすむまでのがまんだ。戦争がすんだら……。

ラジオは大部分とりあげられた。よめる新聞はない。だが、こっそりかくしもったラジオをきいて、「大本営発

表」のニュースを流すものはどこにでもいた。それに、ブラジルの新聞も、ときどき片すみに東京ラジオとして日本の「大戦果」を発表した。同胞たちは、これをなによりの真実としてたよっていた。

四月二十一日（火）は日本の放送で米軍最初の日本本土空襲が確認されたが、東京上空には十機あらわれそのうち六機が落とされたと報じた。しかし二十日のブラジルの新聞にのった外電では、撃墜はただ一機であった。毎日、ブラジルの新聞に目を適すことをおこたらない少数の在サンパウロ同胞には、これは「不可解な現象」として印象づけられた。

四月二十九日（水）、さびしい天長節であった。

東京爆撃の犠牲者は死者四百十四人とブラジルの新聞の電報欄は報じた。

日本人街コンデは、今日もひっそりしていた。

五月二十三日（土）、サンパウロ在住の日本人に、かなり大きなショックを与える事件がおきた。

遠藤書店が店の書籍を全部警察に押収されてしまったことである。

なにごとかと、集まってきた同胞たちは、皆悲壮なおももらで、つぎつぎと書籍がトラックにつみこまれる光景をみまもっていた。友人の報告によると、トラックに四台はあったという。警官が集まってきた日本人に対し

て、「バイエンボーラ！（帰れ！）」と叫んでも、二、三歩しりぞくだけで、だれもたちさろうとしなかったという。

昨日は東洋書房と豊吉書店がやられた、つぎは南米堂だろうと噂されている。

地方の事情ははっきりしなかったが、とにかく大部分の同胞たちは「日本の戦果」を伝えききながら、黙々と農業に従事していたことだけは察しられた。

だが、ときどき、意外な情報がサンパウロへもつたえられてくる。

アラサツーバの奥で一日本人がスパイの嫌疑で警察のものから蹴殺された事件である。犠牲者は退役の伍長であった。もともと身におぼえのないことだったので白状のしようもなかった。警官からさんざん蹴とばされて、ついに内臓出血をおこし、瀕死の状態となった。やりそこねたことをしった警官はこの不幸な旧伍長を日本人の店先につれてきて放りだしたまま逃げてしまった。瀕死の人は、そこへ集まってきた同胞たちに事情を告げるだけの余命はまだあった。そこで、証拠として医者の診断書をとっておくべきだと力説するものがあったので、医者をよびに行ったら、その町にいた三人の伯人医は、三人とも警察の口どめをくっていて受けつけなかった。そのとき一日本人運転手は非常線を突破してアラサツーバ

本署へ車をとばした。むろん、後方から射撃されたが、無事アラサツーバへ着くことができた。

アラサツーバ本署では、この訴えを放置しておくわけにもいかず、医者をつれてただちに現場へ向かった。目的地につくと、お通夜のために集まった二十人ほどの日本人が、みな町の警察署へ引っぱられてしまったあとだったので、ブラジル人人夫が埋葬におもむくところであった。埋葬は中止となり、死骸は本署の警官にわたされたので、町の警官の処置については本署のほうにまかせることができたのであったが、彼の地一帯の日本人に与えたショックは大きかった。

もう一つは、アララクアラ線で、日本人親子が銃殺された事件。家宅捜索の際、ある日本人農家から現金二コントが発見された。これを、違法だとして警官がもちさろうとしたのをこばんだ父親が、警官に反抗したというので銃殺された。これを目撃して狂気した息子が、今度は真剣に反抗的態度を示したので、もちろんただちに銃殺。この家族にとって、二コントは大金だったのである。この事件は家族のものや多くの日本人の連署で、アララクアラ市の本署へうったえられた。

こうした地方の下っぱ警官によって、同胞が苦しめられた事件は、もし当時記録にとどめておくことができた

としたら、かなりの数にのぼったことであろう。しかし、さすがにこういうでたらめは、大都会には起こらなかった。戦時中とはいいながら、奥地からこうした悲報がつたわるたびにうける心理的な影響は大きかった。

六月九日（火）、ミッドウェー海戦におけるアメリカの大勝利がブラジルの新聞やラジオで盛んに報じられたが日本からはなんの報道もなかった。二日おくれて東京ラジオは、ダッチ・ハーバーをやっつけるための戦略的犠牲だったと報じた。

七月三日、大使、総領事その他多くのものが、アメリカからきた外交官たちとともにスウェーデン船でローレンソ・マルケス経由日本へ発っていった。

八月十日（月）、ソロモン島沖の海戦で日本が大勝したというニュースが、いつものように東京ラジオとして新聞の片すみに小さくでた。この海戦で日本が太平洋の制海権を失うほどの大打撃をうけようとは全在伯同胞中、だれ一人想像したものはなかった。

八月十三日（木）、あいかわらず、ソロモン島沖の海戦で、英米連合艦隊が優勢であることがブラジルの新聞に報道された。

収容所からでてきた人たちのなかには、かつては永住論者であったにもかかわらず、五か月近い拘留生活のなかで南洋への再移住論者となっていたものもいた。こう

して、ブラジルの生活に希望をもつものは、もう例外的なものとなっていく。

八月十八日、ブラジルの船がナタール沖で二、三日の間に五隻も沈められたというので、反枢軸のデモ演説会が、夜プラッサ・ダ・セーでひらかれることになった。法大生が主であるが、参戦演説もでるらしいという新聞の報道もあった。

電車はジョン・メンデス広場から引きかえした。夕刻すでにセー寺院前広場からは楽隊の音楽が聞こえ、人の山がうごめいていた。枢軸国民である筆者は帰宅し、ブラジル人隣家のラジオによって「盛況」を想像するにとどめた。激越な調子の演説がきこえ、拍手また拍手、最後に国歌の斉唱で終わったらしかった。

翌朝、諸新聞は昨夜のセー広場における状況を伝えた。会衆二十万という。ガゼッタ紙など一面と最終面は全部写真であった。

大統領のデモ連へのメッセージがあったが参戦のことはなにもいっていない。ただ、第五列は田舎へやって道路普請の労働をさせるとか、国がこうむった損害は枢軸国民の財産を押えて賠償にあてるとか、ブラジルの港にある彼らの国の船舶は押収するとかの話だけである。政府の態度は国民の感情を刺激しない方針に思われた。

昨夜は、興奮した民衆から投石された邦人の家もいく

らかあった。
警官に連行される友人、知人の名が再び耳に入るようになる。「有名人はほとんど監禁された。三万五〇〇〇コントの攪乱費をうけ、敵性産業に従事することを禁ずる運動をしているというのが理由であった（1）」
筆者の一友人は、最近の重くるしい空気について語った。「まるで釣天井の下で仕事をしているようなものでいやなものだなア」と。多くのブラジル人と共に仕事をしている彼の日々が思いやられる。しかし、前から気心のわかっているブラジル人たちの気持ちは実に良識的であって、日本人の前ではあまり戦争のことを話さなかった。これは最後までわれわれが感謝した点であった。
八月二十二日（土）、ブラジルは枢軸国家ドイツおよびイタリアに対し宣戦した。翌日の新聞に「ゲーラ！（戦争！）」と大きくでた。月曜日にはドイツ、イタリア系の銀行がしまっていた。
同胞たちが、戦争はおそくとも、今年いっぱいと、日本大本営発表の戦果をかぞえながら考えているとき、ブラジルがわざわざ参戦するというのは不可解なものであった。
しかし、それは同胞間でも一部のものの懐疑であって、一般のものはなにも考えていなかった。
九月六日、再びコンデ立退き命令がでた。今度は旅館

も商店もみなしめられるという。名物コンデ界隈もこれでおしまいになるのか、引越すにも、行くべきところはもちろん、引越し賃もなくて、おろおろしているものが多い。期間はやはり十日間だという。強制立退き命令をうけたもの約三百五十家族にものぼった（２）。

戦争がすむまではしかたがない。戦争がすんだら……。

九月中旬、スペイン総領事館に日本人権益部ができて（係員　安藤潔）、各地からの情報がはいるようになる。

九月三十日（水）、在留同胞に対するブラジル政府のあつかい方について日本政府から抗議があった、というので昨日からブラジルの新聞がかいていたが、ＤＮ紙には今日サンパウロ在住日本人たちとのインタビューがのった。

「君らはブラジル政府から迫害されていると思うか？」

「否、否、皆平穏無事にくらしています。おかげさまで……」

写真入りで大きく発表された。どこかの日本人洗濯屋の店先で、家のものが記者と対談している図。曰く、「日本政府の抗議に反して在伯日本人はこのとおり幸福である」

一九四二年も十二月のおわりころになってわれわれの耳にはいった事件は、ある二世がうけた侮辱であった。いつどこで、ということはききもらしたが、あるとき軍

事教練で、教官から一人の二世大学生が侮辱された。国旗祭の日であった。その式上で一教官はその二世に近づいていった。

「国歌をうたっていないね、なるほど君は日本人だから……さぞ愉快だろう！」

その話を伝えきいた日の日記には私の感情が記してある。「この侮辱は後世に語り伝えねばならぬ。真にブラジルを愛する第二世は、ブラジル人の良心に訴えねばならぬ」

日本人はみな愛国心を誇りとしていた。そして二世に対しては、二世がブラジルを愛し、ブラジルにつくすことが、一世の伝統だと思っていた。それが非良心的一ブラジル人から否定されたのであった。

いま、冷静な心でふりかえってみると、当時は、まだそういうこともおこりうるような、日本移民が同化途上にあった時代であり、またそれは、戦争という異常な社会的雰囲気のなかでの出来事であった。今日では考えも及ばないことであった。

◇一九四三年

サンパウロ市内では、事件というほどのこともなく数か月がすぎていった。しかし、五月三十日になって、アッツ島守備隊の全員玉砕の報は、少なからず一部のものに

衝撃を与えた。むろん、在伯同胞一般には、なんの動揺もおこらなかった。玉砕は希望を与える言葉であった。

イタリアが講和するだろうという記事が新聞にではじめ、ドイツの電撃戦のことは報じられなくなった。

七月九日（金）、サンパウロ州の海岸線に居住している日独枢軸国民一万余家族が、奥地へ移転を開始したと新聞が報じている。

「すでに特別列車で一部はサンパウロ移民収容所へはいった……」　立退きは、八日午後一時警察へ出頭を命じられ「今夜八時の汽車でサンパウロへ向かうべし」というのであった（3）。財産処分のひまもなければ、病人があるからといって延期を申しでても命令は絶対であった。

引揚げは翌日もつづいた。

七月十二日、サントス方面からすでに四千人の同胞がサンパウロの移民収容所を経て、ノロエステ、アルク・ソロカバナ、アルク・パウリスタ方面へ向かった。サンパウロに身よりのものがあって残ったもの六百人ほどだという。

「戦争がすんだら、みんな日の丸のもとへいって働こう・・・」

サントス立退きの話をきいた同胞たちはみなそう語りあっていた。

ブラジル人の間にも終戦近しのデマがとぶ。

マット・グロッソのゴム林地帯に彗星があらわれ、連合軍勝利のV字型に尾をひいて消えていったと奥地のブラジル人がさわいでいることが、ア・ノイテ紙に発表された。

海岸地帯（主としてサントス）立退きの模様がぼつぼつ伝わってくる。立退きと同時に家宅が民衆に略奪されたもの、瀕死の病人をハンモックで汽車へかつぎこんだもの……。

戦争がすんだら……うらみをのんで語るものがいる。

七月二十三日、「件子（くだんご）」の流言がサンパウロ市にもつたわる。マリリア方面におこったことだという。

あるところに、人頭獣身の赤児が生まれ、予言してすぐ死んだ。

「今年中に戦争はすむ。むろん、枢軸側の大勝利であるぞ……そしてブラジルには戦後疫病がはやる……」

ご託宣をおわり「よって件の如し」とさけんだというのである。

これは大事件があるたびにあらわれるもので予言は絶対的中、ゆめゆめ疑うべきものにあらず……と実見した人の手紙である人に伝えられ、その人から……というので、相当良識のある人まで信じているという……。ここにも戦争による異常心理がうかがえる。

七月二十六日、ムッソリーニの失脚が伝えられた。
九月八日、イタリア降服。これを日本移民も信じたが、自分たちとは関係がないと思っているものが多かった。
十月には大統領令によって日系資本の諸工場、商社農場、銀行など「清算」にかけられるものが続出した（４）。

◇一九四四年

戦時社会の空気にもだんだん慣れていくが、だれ一人将来への見通しはつけられない。ただ戦争がすんだら……日の丸の旗のもとで暮らしたい、というのが多くの同胞の気持ちとなっていく……。
これはドイツ人はドイツ人らしい気持ちから、イタリア人はイタリア人の立場から、それぞれ戦後の引揚げを考えていた。イタリア人でも……筆者は、戦争がすんだらイタリアへ引き揚げ、子供はイタリアで教育したいといっているイタリア婦人と話す機会があった。
二月二十三日、カロリーナ群島内トラック島の戦いで日本は飛行機百二十台と運送船十隻はど犠牲にして、敵方に多大の損害を与えたとの東京ラジオのニュースをえた。
四月にはいると地方から、「青年愛国運動」として、敵性産物として考えられていたハッカ工場や養蚕小屋が破壊され、あるいは焼きうちに会っているという報道がサ

ンパウロ市同胞間につたわってくる。同胞社会における内訌の最初の「のろし」であった。

ドイツのＶ２（アビオン・フォゲッテ）の英京ロンドン爆撃のニュースがあらわれたが、七月二十一日には、反ヒトラー暴動のことも伝えられた。このころ、日本では東条内閣が辞職し、かわって小磯内閣があらわれる。同胞間には不安の空気がただようが、その不安は、「決戦内閣だ！」という強気にかきけされていった。だが、こんなことも同胞間一部の小さな動きであって、日本語新聞も短波ラジオもないつんぼ桟敷の奥へは全然つたわらなかった。

十月、サンパウロ市では、牛肉や生乳が不足していった。牛肉は週二回、しかも真夜中からでかけていって肉屋の前にならび、一人当たり半キロ。牛乳は週二、三回くらい。砂糖は切符制で月に一人半キロから、多いときで一キロだった。

十一月二十二日、ブラジルの新聞は、クリスマスまでには、戦争が終わると書きだした。

世界はこのころはげしく動きだしていた。英米ソの占領地では、左右両翼の内訌に苦しんでいた。戦後の世界が、大きな転換を示すであろうことが、多くの人に感じられるようになってくる……。

だが、わが同胞社会一般は……戦争がすんだら東亜の

楽士へいけると考えている。

◇一九四五年

戦争は最後の年にはいり、太平洋戦における大本営発表の戦果はいかに大きくとも、敵はますます本土に近づいて不安の種子となった。四月にはいると沖縄作戦が思わしくいかず、ソ連からの日ソ中立条約不延長の通告はなんとなく暗いかげをわれわれの頭上になげかけることになる。

四月十八日には、ブラジルでは政治犯人の特赦があり、民主化の動きが盛んになってくる。五月二日には、ヒトラーの戦死が伝えられ（自殺との報もはいり）、この日はベルリン陥落を祝う花火が夜空にひびきわたった。つづいて七日はドイツ降服であった。

日本はいよいよ焼土戦へうつるだろうという噂が同胞間にながれるようになる。

五月、旅行の自由が枢軸国民に与えられ、サルボ・コンズットが廃止になる。

六月六日、こうして、戦時気分が数段と下火になったときに、ブラジルは日本へ宣戦したのであった。米国へ基地を貸しつづけるための法的根拠が必要だったからだといわれた。ブラジル国民には、あの対ドイツ宣戦のときのような興奮はみられなかった。多くの同胞は、そんなことがあったのかどうか、全然しらないですごした。

ブラジルの新聞は、米軍沖縄を完全占領と報じた。日本軍死傷者八万をこえたとつたえた。

四月二十五日から開かれていた連合国のサン・フランシスコ会議は、ついにわれわれには有利に展開しなかった。沖縄喪失によって、日本軍の戦果でものをいわせる機会はなくなったのである。

当時、サンパウロ市にあった移民たちのように、ブラジルの新聞をよみ、自由にものを考えることができなかった地方の人たちは、この時期にいたっても、時代の動きには全然暗かった。

近郊のイタケーラでさえもそうであったので、旧ジャーナリストの江見清鷹などは、友人たちのすすめによって、戦後同胞のありかたを準備するために世界情勢の講義にでかけようとしたほどであった。

七月二十七日、朝の新聞は、いっせいに、チャーチル、トルーマンおよび蒋介石が、日本政府に対して日本軍の無条件降服を勧告したことを報じた。二十六日付のポツダムからの打電とある。

「無条件降服」の内容は「日本軍の全面的降服と武装解除、戦争責任者の処罰。日本の領土は、満洲はもとより、朝鮮、台湾をのぞく旧本土のみ、政体には干渉せず、ただし、国民の総意によって民主的な政府をつくること。連合軍は日本国民を敵とせず、軍事工業の全廃と再軍備

のおそれがなくなるまで、重要とみとめる地点を占領する」というのであった。

これはアメリカ側からみれば、かなり好意的な態度かもしれない。ドイツなどに比してはるかにゆるやかなものに思えた。しかし、朝鮮、台湾を失うことは日本の存続に大きな支障となるだろう。そしてなにより不可能と思われるのは全軍隊の降服であった。これは日本に内乱でもおこらないかぎり、できない注文だ（当時の筆者はそう考えたのである）。

ロシアの態度は、この宣言では不明であった（当時のトリブーナ・ポプラール紙には、スターリンへは、日本軍を満洲から撤退させてロシアの自由にまかせる条件で日本政府へ和平交渉を頼んだ、とでていたが、詳細は不明であった）。

夕刊には、簡単に「日本政府無条件降服を不承認」と発表された。

だが、こんなことも、一般同胞の間では問題になっていなかった。「そのうち米本土の空爆がはじまる！」というのが彼らのたのみであった。なぜなら、日本の主力艦隊は、どこかでそのときにそなえて待機しているはずだったからである。

新聞には毎日ポツダム会談の話がのった。

八月六日（月）、夕刊の最終版はトルーマン大統領の公

表として、米空軍が広島に原子爆弾を投下したことを報じた。それは、従来のニトロ・グリッセリン仕掛けのものの二千倍の威力をもつものであると説明されていた。

八月七日、今日の新聞は原爆の記事がトップをきっている。広島の六〇パーセントが一つの爆弾で灰燼に帰したこと。オ・エスクード紙のごときはほとんど一面全部をさき、また、原子核破壊によるエネルギーが、将来は水力、火力および電力の問題を解決するに至るだろう、正に画期的大発明だといって、いろいろな学者の説明も加えていた。フォーリア紙は、わざわざ解説文を別ページに特集していた。

日本からの報道では「被害は目下調査中、新型爆弾ならん……」というラジオ放送であったが、よくききとれなかった。

八月九日、ロシアが日本へ宣戦した。

「原子爆弾とやらがとびだした。日本はいよいよ降服するだろう。降服しないうちにとびこんでおかないと発言権を失う」というような印象を多くのものに与えた。

八月十日（金）、朝刊には、原子爆弾が再び長崎をみまったことがでた。

年前十時ころ、国内ラジオは「日本はポツダムよりの提出条件を承認せり」と放送した。東京よりの放送は「……ついにスイスおよびスウェーデンを通じて正式に和

を請う。天皇の主権を尊重することを条件として……」とききとれた。さらに「ロシアへは在東京ソ連大使を通じて交渉中…。しかし、ソ連は日本からの直接呼びだしに応ぜず……」という。

夕刊は日本降服を報じた。

ブラジル人にはたいした感銘がなかったようだ。平日と少しも変わらない街上の姿であった。

八月十五日、降服の公文書が日本から連合国側へ到着した。新聞には訳語（葡文訳）がでていた。阿南陸相の自殺もつたえられた。ソ連軍はどんどん満洲へはいっている。

八月十九日、いっさいが順調にいっていることが今朝の新聞でわかった。日本の講和使節がマニラへ飛んだ。満洲でも今日は停戦があるだろうとでていた。

だが、わが同胞社会は、ことここにいたっても、いっこう戦争が終わったような空気がみられなかった。

今日のディアリオ・デ・サンパウロは、シダーデに近い日本人商店およびホテルを探訪した記者の記事をだしていた。それによると、日本降服については「しりません」で逃げるのが日本人の大部分で、やっと捕えた一人の発言は—、「日本が降服したなどと絶対にありません」

ということであった。そこで記者はたずねた。

「だって東京ラジオがちゃんといっているじゃないか」

「いまごろ、アメリカから日本語の巧妙な放送があるから、そんなものはあてになりません」
「そんなら君らは陛下のメッセージにも信をおかないのか？」
「陛下のメッセージなんてあるはずがありません。みなデマですよ。日本の天皇陛下のおはじめになったことに誤りはありません」
という答え。はてさて、これは重大問題であると記者は書いていた。レポは写真入りで、ほとんど半面をついやしていた。
こうした雰囲気のなかに「日本大勝利」のデマはとばされたのであった。

戦争中の日本移民の心理状態

一九三九年ころから、いよいよ強化されていったナシオナリザソン政策によって、極度の精神的圧迫を感じていた日本移民は、日米開戦直前からの日本語新聞の発行禁止で、その精神活動を、正常な軌道から脱線させることになってしまった。
コミュニケーションの断絶は、不安な精神状態から生まれがちな妄想を満足させるデマの横行を許した。
同化促進運動は、戦争時代になると急変して、家庭外における日本語の使用禁止にまで発展し、当時まだ同化

途上にあった移民たちに、さらにきゅうくつな思いをいだかせるようになった。日本人同上が街頭でであって、お互いに日本語であいさつをかわしただけでも、警察に連行されなければならなかった。日本人同士では、日本語をつかうことが自然であり、また礼儀でもあると考えていたものにとって、これは人間性を否定されるような束縛であった。

こうした状態のなかで、移民たちの郷愁はいよいよ深まるばかりであった。日の丸のもとで暮らしたいという気持ちがおころのは当然であった。

郷愁が深まると同時に、祖国に対する依頼心も深まった。祖国に対する依頼心は、当然のことながら為政者の言を信じる傾向を生んだ。こうして、各自に自覚される愛国心は、伝統的盲従主義を強化し、祖国の声　―　大本営発表　―に対して批判を排除する精神状態にみちびいた。

このとき、批判精神を反逆、不忠と考える気持ちをつよめた。

こういう心理は、刻々とうつりかわる客観情勢による不安、動揺の心をふせぐために、外部の「雑音」をうけいれないような心がまえをつくりだした。日本語新聞によるニュースはなし、戦争は目の前で戦われているものではなかったから、それが可能だったのである。

大本営発表の戦果だけが、在伯同胞唯一のよりどころとなっていただけに、たいがいのところには伝えられた。それが敵国側のニュースとひどくくいちがったものであることも、ポルトガル語のわかる人の口からしらされることはあったが、それは敵国の窮状がしからしめる苦肉の策としてのデマであるとみた。

だが、戦争はながびきだした。

多くのものが警察に拘引され、留置場にたたきこまれ、ときには拷問されたという噂があり、不安がつのればつのるほど、この状態を脱出するための未来図は、東亜共栄圏内に建設されつつあるはずの「楽土」であった。

民族文化を否定され、そのうえ日常生活のうえで、一歩家庭をでれば、戦々兢々として歩かねばならないような息苦しさに、ブラジルに永住する心を失った移民たちは、日本軍部が約束した共栄圏のみが、唯一の生き甲斐のあるところと思われた。それは、この世に望みを失ったものが、極楽浄土をのぞむ気持ちにも等しいものであった。

この気持ちは、さらに「神国不敗」の信仰によってつよめられた。外部のものが、いかに現実の推移を云々しようと　三千六百年の歴史が証明」する不敗への信仰は、微動だにするものではなかった。

この信念は、戦前から日本的国家思想のなかでつちか

われてきたもので、明治、大正、昭和にわたって国民教育の根底にながれているものであった。だから、第三者―　不忠の徒　―　が、いかに現実を云々しようとも、これこそ忠良なる臣民の立場であると考えられた。現実に耳目をおおって、ひたすら祖国信頼の心に生きる移民たちは、終始一貫、神国不敗をおのが信条として生きてきたことは当然であった。

また祖国の為政者に対する絶対的信頼は、すべての一時的（？）失敗は、遠大な戦略のなかの部分的（予定）戦術である、と考える「理論家」を生みだした。「玉砕」という言葉は貴い下積みの犠牲であった。「戦略的転戦」「ひきよせ作戦」等の言葉はみな遠大な計画を暗示するものであった。小さな戦果に一喜一憂するのは、日本の真価をしらざる浅薄なやからの心理状態であるとあわれみときには世のじゃま者として憎むようになる。

これが臣道連盟その他の集団のなかにつたわると、その思想（信念）は、いよいよ社会性をおびてくるのであった。

日本人集団地において、この社会的雰囲気に反抗することは、ほとんど不可能なことであった。

かくて、ともかく戦争中は、大多数の日本人は一致団結して、彼らなりに「平和」をたもちつつ、生業にいそしんでいたのであった。

注

（１）『コロニア四十年の歩み』一四四ページ。
（２）同上。
（３）同上一四四～一四六ページ。
（４）同上。

第１０部

戦後の混乱と新しい生活への歩み

５９　終戦直後における同胞社会の空気

あるサロンでの会話

一九四五年八月二十日、終戦六日目の午後であった。サンパウロ市のある日本人中流家庭の客間で、そこの主

人と三人の来客Ａ、Ｂ、Ｃが戦争の終局について語りあっていた。
当時は少しでも名の知れた人の家には、知人、友人がいろいろな情報をもちよって、時局談にふけっていた。まだ勝組、負組の社会的分裂ははっきりしていなかったが、みんな落ち着きを失って、いわば右往左往の状態にあったのである。
そのサロンへ、また別の男が情報をもってとびこんでくる。彼はさもうれしそうな口調で報告する。
「いま、おおがかりの芝居がうたれているらしい。新聞にでていることは、どうやらみなあやしいゾ」
おおがかりの芝居とは、連合国側の「敗戦」を日本の敗戦にすりかえようとする陰謀が、いま「敗戦国アメリカ」によってたくまれているというデマのことである。
「そういえば……」と先に来ていた客の一人が話をひきつぐ。
「もう各所で祝杯をあげている。われわれも今シャンパンを抜いてきたところだがね。アメリカの艦隊が六百隻とかほとんど全滅し、ハルゼイ長官が日本へ和を請うてきた……原子爆弾のことも、勅語のことも、みんなうそだった。だれもそんなことラジオで聞かなかったといっている」
「わしのうけとった日本語のニュースは、やっつけた船は

四百隻、むろんウラジオは占領した。和を請うだのはトルーマンだった」

これは前からいた別な男Bの言葉。

あとでとびこんできたDがつづけていう。

「日本からの勝報は、たしかにこの耳で聞いたというものがあるし、サン・ベルナルド方面にはよくはいるのがある。ききに行ったものはみな確認して帰った。その一人から聞いたのだからまちがいない。日本からはいるのは七時三十五分ではなくて三十分のやつだ。……やっぱり連合国の陰謀だ、それにちがいない……」

ここで、いままで二人の話を聞いていたもう一人のおとなしそうな男Cは、

「実はわたしも自分のところで聞いているんだが、波長も時間も同じであるのに、わしにはどうもはっきり聞こえん。わしと同じことをいっているものもあるんだが……」

とつぶやく。するとあとからとびこんできたDの顔色がみるみる変わる。

「あんたは、この耳で……確信をもっているぼくの言を信じられないとでも……」

威嚇するような声にCはもう弁明することもできない。

このころサンパウロの有志たちのあいだには、すでに終戦詔勅の訳文が用意されていた。それは十四日の東京ラジオ放送から書きとった言葉を参考にして翌十五日、

ブラジルの新聞に発表された葡文詔勅から翻訳したものであった。当時のラジオは不明瞭で、とぎれとぎれにしか聞きとれなかったし、まだテープ・レコーダーもない時代であった。

この耳でたしかめたというDの言葉がつづく　―、

「もう祝賀会の委員までできているんだ。ラルゴ・ダ・セーへでたときは、だれが何の役をつとめるか、だれが君が代の音頭をとるか……」

こういい放って彼は席をたつ。

そのあとへ、もう一人の男Eがブラジルの新聞をかかえてはいってくる。

「いったいこれはどうしたもんですか」

「どれ、どれ」

と、いままで皆の話を聞いていた主人がさしだされた新聞をうけとる。

「日本の代表マニラを去る……か。順調にいっているんだね。われわれは変な宣伝にまよわされないように、よく事の成行きを見守っていきましょう」

一座のものにとって、これは謎のようなつぶやきであったが、だれもとりあげて問題にしなかった。新聞をもってきた男Eがいう。

「私はスイスの領事館から確報をえてきたという人の話を聞きました。だが、スイス領事館の名はださないように

とくれぐれも口止めしたとか。でも出所はたしかにスイス領事館だそうで……」
「名をだきないようにか……」
とまた、主人の言葉。そこへ、いかにもかっぷくのいい六人目の中年男があらわれる。
「講和はありうるさ。しかし、降服は絶対にない。これがわしの信念だ。信念さえもっていれば、どんな話を聞いてもビクともしない。話だけなら聞くよ」
どかっとソファーに腰をおろして、
「いや、なんのかんのと話がある。だが、わしは平気だ。信念があるからなァ……」
おおがかりの芝居を報告した男Dは、フンとあざわらうようにふんぞりかえる。信念の男はいかにも物に動じないという風采を誇張する。さきほど疑問をはさんだCは、もう小さくなっている。
主人はこのとき、奥さんが運んできたビールを抜く。
「まあ、とにかくめでたいことです。一杯やりましょう……」
かたくるしい空気をやわらげようとする主人の心づかいであった。

デマはどうして流されたか

デマがどのようにして生まれたか、そこには想像の域

を脱しない点もあるが、次のような事実は肯定されていいだろう。

大本営発表のはなばなしい戦果は、終戦まぎわまでつづいた。それが突如として敗戦の報に変わる道理はない、と考えるものがかなりいたことである。熱心なものは、毎日短波ラジオにかじりついて記録をとっていた。あるものはそれを（もしききとれない点かある場合は想像的な注解も加えて）謄写刷りにして知人、友人に配り、またそれによって、なにがしかの生活費を稼いでいたものもあった。

大本営発表の戦果は、つねに加算されて膨大なものとなっていた。それが一朝にして敗戦という「ゼロ」に帰することはありえないことだと思われた。

ブラジルの新聞の報道だという敗戦のことも気にならないわけではないが、いつも不明瞭な点のある日本の放送に、従前どおりの注解的字句を挿入してみると、これは日本の大勝利を伝えるものになる。そこで、そのように発表してみる。すると、俄然反響は大きかった。どこそこのラジオにも同じような報道がはいったというのである。自分の判断にまちがいはなかった！　と思う。あたらしい確信をもって、また不明瞭な日本の放送を聞くと、今度こそ明瞭に理解される。

こんなことがあった。

「おかしい」というので、コンデ街のあるところにわざわざそのラジオを聞きにいったものがある（そのなかには筆者もいた）。だがそのラジオは、だれにも明瞭に聞きとれるものではなかった。自分の耳で日本の勝利をたしかめたいと思って集まった十人近くの人たちは、片手に手帳をもって、熱心にうなずいている主人をとりまいていた。

「聞きとれる。おれにははっきり聞きとれる。日本は勝っている！」と主人はうなるようにつぶやくのである。彼をとりまく人たちは、まったく狐につままれたような顔をしていた。正気か、狂気か、それとも商売のためのニュースとりであったのか、その一点だけはなんとも断言できるものではなかった。

こういうことは一か所だけで起こったのではなかった。サント・アンドレーの一日本人のところでも、たしかに同じ勝利の放送を聞いたという、デマが流された。その他、各所に優秀な受信機のあることが伝えられた。そして日本大勝利のデマは乱れとんだ。

「からくりの裏をかく」ということがいわれた。それは連合国側の、おおいかくさんとする「敗戦」の事実を暴露することであった。そして、彼らが報道する敗戦という言葉を「連合国の」と聞きとり、読みとることがはやった。こうして、アメリカ側の放送を聞いたというもの、ブ

ラジルの新聞で読みとったというもの、デマの材料はつぎつきと山積していったのである。

計画的な陰謀も片鱗をみせる

まもなくデマは、なにものかによって計画的に流されはじめたことがわかった。これは、八月二十日のリオのグローボ紙の記事が、そのまま（？）タイプで小さなカード形の紙に複製されて、チラシのように各所に配られてきたことであった。筆者がわざわざその新聞を買い求めて、原文と一字一句を照らし合わせてみると、おどろいたことには、コンマの位置をかえ、「a」という前置詞を一つとり去ることによって、いかにも連合国側「に」日本が降服勧告状を渡した、と読めるものであった。まったく知能犯的行為であった。

さらに二、三日たつと、前にはたった三ミル程度であった円が、すでに無価値となっていたはずなのに、十三ミルで売られていることがわかった。また上海方面から、アルゼンチンを経て大量の円がサンパウロに流れこんだという情報もはいる。在伯同胞の心理的混乱に乗じて、いろいろな陰謀がたくまれていることが察せられた。むろん円売りなどはその一小部分にすぎない。しかし、それをあばきたてることは、国賊として、生命の危険をおかさねばならないような雰囲気が、すでに同胞間にか

もしだされつつあったのである。

「公報」を待つ心理

日本の勝利を信じるものも、敗戦を肯定したものと同様に、一時は終戦の事実は認めることができた。しかし、長いあいだ隠忍自重をしいられてきたうえ、いまなお戦勝を信じたい人々にとって、日本からの「公報」を待ち望む気持ちは強かった。

「公報」は、堂々と日章旗をひるがえした帝国軍艦か、あるいは日の丸をえがいた飛行機に搭乗する天皇陛下の御名代としての全権使節によって、ブラジル政府ならびに在伯日本帝国臣民にもたらされるものでなければならなかった。長いあいだ、忠良なる臣民として一点の疑心もなく、日本帝国を信頼しつづけた陛下の赤子に勝利の詔勅を伝えるものでなければならなかった。

天皇の神聖な詔勅が、ポルトガル語で新聞にでたというのが、すでにおかしい。そして、それが敗戦を告げるものであってみれば、なおあやしい。詔書は偽造きれたものとみなされたのである。しかも、翻訳と称して、あやしげな日本語の詔書なるものもあらわれているのである。

また、外国政府の手を経て「メッセージ」がまわってくるなどということも、ありえないことであった。まして、ただの外電など、どうして「公報」でありえよう。しかも、さかんに日本の勝利の噂が巷間に流されているときであった。どんなに考えてみても、たとい百歩をゆずって、敗戦が事実としても、二十万同胞の在住するブラジルに、正式な使節が派遣されないという理由はない。ただこの一事によっても、敗戦などということが、いかにでたらめであることがわかる。

使節は必ずくる。「公報」のある日まで、勝敗を論じないのが、日本臣民の態度であると考えるものもでた。

このように、移民たちは不安のうらに「公報」を唯一のたよりにしていたのであった。むろん公報はまもなくくるのであるが、それは彼らが期待した形でもたらされたものではなかった。そして、それがすでに組織化された勝組の人たちの「信念」の前に、いかに否認されてしまったかは、つぎの章で記述したい。

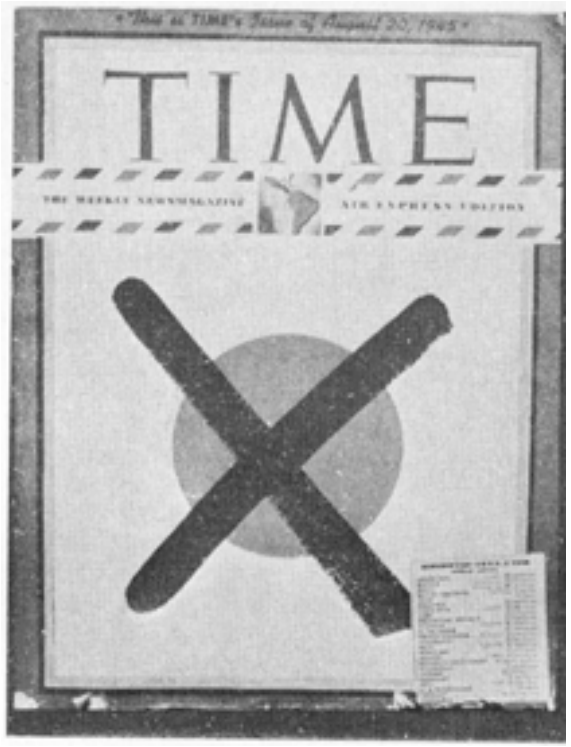
６０　混沌たるコロニアの状況

妄信と無知と残虐と……

悲しき移民の運命……

一九四五年八月下旬、サンパウロ市の新聞売り場には延着のタイム誌がならべられた。

その表紙には「日の丸」を大きくえがき、真黒い×印でこれを消していた（1）。それは、明らかに軍国主義日本の消滅を示すものであった。本文第一ページから原子爆弾の記事である。



挿入した漫画―大男が地球の上にたちあがり、一小丸薬のごとき原子爆弾をまさに投下せんとしている。左方の片隅に小さなキューピッドのごとき小児が、おそるおそるこれをのぞきこんでいる。背にはヒューマニチーと記してある。最後の手段として使用した原爆に対するアメリカ的反省であろうか。

だが邦人社会の空気は、もはやこうしたものに目を向ける余裕はなかったのか、相当なインテリといわれていた人たちまでが、戦勝を宣伝しだしていた。そして、彼らがほとんど戦後の帰国をとなえて終戦を待ちこがれていた人たちであったことは意味深い。

デマ報道がみだれとぶ。

ブラジルの新聞は、マッカーサーが厚木飛行場に着いたことを第一面にでかでかと報道しているのに、日本はトルーマン大統領を排してリンドバーグを後釜にすえたとか、東京では戦勝の提灯行列をやっているとかの噂である。

勝利のデマ・ニュースとともに、円売りが暗躍しているという報道もはいる。

九月二日午前十時三十分、アメリカ戦闘艦ミズーリ上で日本の降服調印がなされたという電報がはいった日、ピニェイロスのデマ放送局からは、「日本から戦勝使節が近くブラジルに着く、在伯同胞は日章旗をこしらえて歓迎の用意をすべし……」とのふれがまわってくる。

地方ではもう日章旗をつくる白布は売り切れたという噂もくる。

こうした空気のなかで、九月二十三日には、戦時中から臣道実践によって報国の実をあげようと計っていた一団の人たちによって、臣道連盟なるものが正式に発足し

たのであった。そして、本部はサンパウロ市のジャバクアラにおかれた。

すでにサンパウロでも日の丸を用意しているものが多いという。日本から飛行機が着いたという。いや一週間のびたのだ、というものもある。日本の使節を迎えよう、せめて日本の飛行機でも見ようと、奥地からサンパウロへでてくる日本人は、つぎつぎと旅館や知人、友人の家にあふれた。その数は二千とみられた。

こういうときに、一方では二ユーヨーク爆撃が伝えられ、サン・フランシスコ占領を報じるビラもまわってくる。むろん、鉛筆でかきなぐった一片の紙屑のようなものであるが……。

戦争はまだ終わっていないのか？

日本から公報が着いた。

しかしそれは、多くの移民たちが期待していた「公報」ではなかった。

公報は「一九四五年八月十四日の終戦に関する詔勅と、東郷外務大臣の〝在外同胞宛メッセージ〟」で、「外務省から在ジュネーブ万国赤十字社本部に打電され、次いでアルゼンチン赤十字支部、ブラジル赤十字支部を順次経由してサンパウロ市のサン・フランシスコ学院長ギード・デル・トーロ神父宛に送られ、同神父からコロニア有志の手にはいり、（略）一般へ通達が計られたが、勝ち

いくさで既に固まってしまっている人々の心に受け容れられる筈も」ないものであった。

そのうえ、つよく戦勝を宣伝しだした「臣道連盟では極力これの伝播を防ぐ手段を講じ、（略）このため海外同胞に賜わりたる勅語〃なるものが別個に作られ流布されており、しかもこの偽勅語には一葉幾らという値段すらついていた」ほどであった。「こうした点からも連盟の実体が如何に〃企業的〃なものであるかがうかがわれる（2）」

のであるが、善良な移民たちは、もうそのからくりのとりこになってしまって、それを見やぶることはできなかった。

公報はデマと一蹴された。そして、これの伝達につとめた人たちは国賊とされた。

「畏くも御詔勅の中に拝します様に、忍ぶべからざるを忍び、堪え得ざる苦難に堪え、如何なる感情の激発をも押えて、一致団結一意専心、新日本の再建に邁進する外はありません。何卒御自重御自愛あらんことを切に祈ります」と、いともつつましい伝達文までつけて、おもだった有志七人の名で各地に送られた公報は、「傲慢な態度で敗戦をおしつけて来たから反抗せざるをえなかったのだ」とあとになって多くのものが弁解するのであるが、おそらく彼らは本文を読まなかったろうし、また読む機

会は与えられなかったことであろう。

ついでに、臣道連盟が一九四六年の一月号『臣道』に発表した彼らの思想をここに披瀝しよう。

（この元旦、日本では人間天皇の宣言があったのであるが、のちにこの人間天皇なる言葉をきき知った彼らは、これを在伯認識者のデマとして非難したのであった）本文はつぎのところから引用できる。

「……然るに、在伯同胞の指導的重要地位にある名士にして、日本民族の今や将に成就せんとしつつある新秩序世界建設への反動的潮流の走狗となり奇怪極る言動を弄するもの〔あり〕と聞き伝えます。これが事実とすれば、吾が民族の光栄に輝くの秋、この光輝を汚辱するものこれに過ぐるはないでありましょう。

（終戦の勅語の伝達者は反動的潮流の走狗とされている―筆者注）　……吾が三十万同胞は、この時如何に不可抗力とはいいながら、この千載一遇の民族的天の試錬に馳せ参ずることを得ず、拱手傍観の止むなかりしことは吾々衷心より遺憾の極みとするところであります。況んや前記の如き吾が民族の血の伝統の恩義を忘れその成果を自ら汚辱する如き、不達不義の徒の一人にしてもあらんか、我が在伯同胞、何の顔（かんばせ）あって祖国に見（まみ）えることが出来ましょう。連盟同志諸氏よ、希（こいねがわ）くは、吉川理事長をたすけて、在伯同胞よ

りかかる不純物を一掃し徹底的浄化工作をなし、もって祖国一億一心の実に参与し、眩古の大業翼賛に奉公の誠を致すべく…（３）」

熱意にあふれた荘重な文章である。日本が戦争に負けるなどということはありえないと思っていた多くの移民たちは、「天来の声」のようにひびくこの文章を読んで、「反動的潮流の走狗」を憎み、「不純物を一掃し」「大業翼賛に奉公の誠を致すべく」努力しようと心に誓わないわけにはいかなかったであろう。

かくて、公報とその伝達行為とは「奇怪極る言動」としてほうむり去られたばかりではなく、「不純物を一掃し徹底的浄化工作」を示唆されて、その下部組織には、「挺身隊」または「特攻隊」とよばれるテロ分子をも包含するにいたるのであった。

このころブラジルはすでに（前年十月二十九日）ジェツーリオ大統領の失脚があり、ズットラ将軍が大統領となり、戦後のデモクラシー時代にはいっていたのであるが、あらゆる世界情勢を「戦勝国日本の意志によるもの」と狂信する人々は、新秩序到来の徴として自分たちの信念をかためていたのであった。

結婚式にまで教育勅語を奉読し、愛国行進曲を歌うものがあった。ある私塾では「国賊入るべからず」の張り紙を入口に貼った。

こうした空気のなかで、三月七日年後十一時三十分ころ、臣連特攻隊によって、バストスで時局認識を促進していた産業組合専務理事・溝部茂太が血まつりにあげられた。隊員四名に待ち伏せされ、裏庭にあった便所で用をたし、うしろむきに戸を閉めようとしたとき背後からピストルで射殺されたのであった。

まだ日本語新聞のないときであったが、この報道はたちまち在伯同胞のあいだにひろまった。

そして、この事件があって一か月もたたない四月一日（エープリル・フール）、サンパウロ市では、同胞間にもっとも人望のあった、元日伯新聞編集長、のちの文教普及会事務長の野村忠三郎が、五人づれの凶漢に殺害されたのであった。

「まさか、四月馬鹿のデマではないのか？」

そう疑いながらも知人、友人がかけつけてみると、血のタペッテの上に横たわったまざれもない〝忠さん〟を見出したのであった。

同日は、元アルゼンチン公使の古谷重綱宅もおそわれた。ここでは窓ごしに射撃されたが命中しなかった。捕えられた襲撃者二人によって、はじめて臣道連盟の陰謀が明るみにさらしだされたのであった。

この日の夕刊には、一斉にシンドウ・レンメイのテロリズムが報道され、コロニア（日系人社会）の人たちの

みでなく、一般ブラジル人の心情を害することがはなはだしかった。街頭の小児にいたるまで、シンドウ・レンメイを口にして日本人の残虐性をせめた。

こういうゆがめられた愛国的行為が、当時精神的に成長しつつあった二世たちに、どんなに強い悪影響を与えたか、戦後のある時代に彼らが一世から背を向ける原因をなしたことはいうまでもない。

「あれほど崇高な日本精神を説いた一世たちは、こんなにも頑迷、救いがたき人々であったのか―」

三月十四日の『フォーリャ・ダ・マニャン』に、ある二世が匿名で邦人社会の醜態をあばきたてたのが、バストス事件に聞係のあることは充分うなずける。青年会、日本人会、臣道連盟等のいき方に対する反撃であった。一世たちの非常識と無知蒙昧を攻撃し、彼個人の意見としては、警察の手で処理するよりほかに方法なしと主張し、啓蒙運動の絶望を暗示するところがあった。

戦争前から戦争中にかけて、一世の最大の悩みは二世の教育であった。そして、その教育思想の一部は、そのまま臣道連盟の思想ともなって存続してきたものであった。それが、二世白身から、いま非難攻撃をうけなければならないことになったのである。

歴史の皮肉といえば皮肉。だが、社会的混乱のなかで新しい世代は、旧世代をおき去りにして成長していたの

である。

このころ、二世たちに、一世の気持ちを伝えて理解してもらいたいというので、二世たちと懇談会をひらいた篤志家もあったが、認識者といわれた人にしても、日本が戦争に負けたことは認めていても、新しい時代の動きに対しては、二世からとり残された面が多く、しかも、いつまでも二世を被教育者的な地位においてものをいっていた点に反感をもたれ、この会合は全然効果をもたらさなかった。

ただ、一九四七年十二月二十日の夜、コチア組合に多くの一世および二世の中堅層が相会して、腹蔵のない対談会をひらき、コロニアの啓蒙に尽力することを誓い合ったのは、画期的な催しだったと主張するものが多い。

いずれにせよ、一世と二世の接近は、旧来の一世および二世の立場を止揚して、同等の立場から話し合わなければならないことをお互いに自覚させる道をひらいた点で、将来に大きな希望を与えるものであった。

しかし…向胞社会一般の空気は、むしろ陰惨なものであった。

ある日本人理髪店での話　―

「殺さなくてもよかったのになァ、いまに日本から官憲がくるから、そのとき引き渡してもよかったんだ」

野村忠三郎殺害事件に対する世評の一つである。

来るはずの船が来なくても、日本の使節が乗った飛行機を迎えにきた連中が、しびれを切らして奥地へ引きあげたあとも、戦争は続行中だというデマが流れても、勝った勝ったの話はたえなかった。

「とにかく、最後の一兵まで戦うのが日本人だ。すべての日本男子は日本軍人だ。自分はまだ降服していないぞ。日本の軍人は降服しない。そのなによりの証拠はこの自分だ。戦争はまだつづいているんだ。日本はこれから反撃するんだ。最後の勝利はわれわれのものだ！」

と、力む。その表情には、まったく鬼気せまるものがあった。だれがこういう人間を説得可能だと信じることができよう！

レロレロが非難された。

レロレロとは、勝ったとも負けたとも、なんともはっきりしない言葉で、その場を濁すことであった。戦勝派以外の多くの商売人は、このレロレロによって客をあつかい、なんとか商売をつづけたという（当時の日本人商人は日本人顧客をはぶいては商売がなりたたなかった）。レロレロは慎重派ともよばれた。それが計画的な行為でない以上は、臨機応変でいくより仕方がなかったのである。

日本から新聞がとどいて、認識運動本部から各所へ回覧された。

「いや、よくもうまくまねて作ったものだ」と感心するものもでてくる。これはアメリカの支邦人が作ったものだ、いや誰々の偽作だとかいう噂もあったからだ。

四月も半ばにはいると、マリリア、プルデンテ等で、テロ事件が続発する。六月二日には、元陸軍大佐・産組中央会理事長の脇山甚作がサンパウロ市の自宅で殺される。そして七月は、テロがノロエステ地方に荒れ狂ったもっとも凄惨な月であった。この月だけで十七件、殺害されたもの十名、重傷者七名に及ぶのであった。

カンポス・エリーゼオス宮の説得

こうした七月の十九日、臣道連盟の連中が警察へ出頭を命じられ、そこから州統領官舎へ呼ばれていったことが、二十日のブラジルの新聞に発表された。集まったもの三百五十名ほど、欠席したものも相当あったらしいと報道された。いまこのときの様子を『コロニア戦後十年史』の二〇ページから書きとってみる。

「一連の臣道事件の中で、最大のケッ作に属するものは、一九四六年七月十九日、マセド・ソアレス州執政官がファナチコ（狂信者）の幹部どころ約六百名（４）をカンポス・エリーゼオス政庁に招じ、説得を試みた折の一幕であろう。

官憲に対する日本人の見事な服従性を一面では利用し、

幾ら何でも政治の衝に当るものが責任をもって説得にあたれば、情勢を納得するようになるだろう、という見方のもとに集会は開かれた。しかし、これは大きな見込み違いで、コト勝ち負けの問題に関する限り、日本人は「見事な」信（丶）念（丶）の持ち主であることが、この集会で証明され、これほどまでとは思わなかった狂信ぶりに、流石（さすが）の執政官もサジを投げ、思い上った要求を苦笑しながら容れて散会するという結果となった。

このことは、政界、言論界で執政官の失敗を責める論説となって現われ、また、勝ち組の意気を一層昂揚させるという不測の事態まで惹起したことになった。

当時の様子はおよそ次のようなものだ。

……臣道連盟の問題で心を労していたマセド・ソアレス執政官は瑞典（スウェーデン）公使の出席を得て自ら日本人狂信分子に時局の説明を試みようとし、州保安当局を通じてサンパウロ市及び奥地主要地から各三名ずつの代表的「戦勝」の参集を命じ、七月十九日政庁に会合させた。

この日の日本人出席者およそ六百、州政府側からは執政官はじめ州政府秘書官長、保安局長官、労働局長官、保安局官房長、保安局軍事顧問、第二軍団長、第四空軍区司令官が出席、宗教界からはドン・カルロス大司教も立会った。

最初瑞典（スウェーデン）公使、次いで執政官から時局の懇切な解説が行われ、これをサンタンナ・ド・カルモ氏（元日伯文化協会日語教師）及び森田芳一氏が通訳した。

ところが、参会日本人は一向耳を傾けないばかりか、却って「日本の大勝」を主張し、以後ブラジルの新聞に、日本の敗戦に関する記事の掲載を差止めることを約束せよと執政官に迫り、最後に当日の議事録に署名する際、文中の日本の「無条件降伏」の字句の削除を要求する始末だった。マセド・ソアレス氏は一寸小首をかしげた後「よろしい」と一言、この要求を容れたが、このことは「自分達の主張するところを州政府も承認したではないか」といいふらきれる結果となり、「戦勝の裏づけ」として、地方に持ち帰られたのである。七月末から八月末にかけて「血の旋風」はこの集会がファナチズムに一層の油を注いだ結果だとみる向きも多いのである」こうした「思考の城をはるかにこえた」信念は、執政官の地位とその親切をもってさえも説得不可能なものであった。

かくて、テロは同志の犯人隠匿も手伝って、ますます暴威をふるった。

オズワルド・クルースの暴動

「白昼悪夢にうなされるような不安と無気味な日々を過し

ている折も折、パウリスタ線オズワルド・クルース市では日伯人間に未曾有の大乱闘事件が勃発し、世間を驚愕させた（５）」のであった。

七月三十日の夜八時ころ、突如として、

「日本人がブラジル人を殺した！」

という叫び声があがって、たちまち市中が騒然とした。一人の日本人と四人のブラジル人とが、あるバーで口論をはじめ、ついに格闘となったとき、組みしかれた日本人が小刀を抜いて、下から相手の心臓を刺したのであった。口論は、昼、街上でトラックの道をゆずるゆずらないのくだらない争いから、その後このバーでふたたび口争いとなったものである。日本人もブラジル人もトラック関係の連中であった。

加害者は逃亡したが、便所にかくれたところを警官に逮捕された。

ちょうど一週間ほど前、日本人Ａの家が爆破され、またＢの家には放火があって、市民たらは臣道連盟に対して怒りを燃やしていたときであった。

「日本人をたたき殺せ！」

「リンチだ！」

と叫んだ市民たちは、留置場になだれを打って押し寄せ、これを破壊しようとした。警察署長の「カルマ、カルマ」のマイクでの要請に、さわざは三十一日の年前二

時ころになってやっとおさまった。
ところが午前八時ころになると、もう一度、前日にまして大きなさわざがおこった。
日本人経営のノッソ・バールでは、ブラジル人のあいだで昨日のできごとが論じられていた。これへ主人のM（臣連武道部長）が口をだした。
「ブラジル人の三人や四人がなんだ。おれは臣道連盟だ。殺しがおそろしくてどうする！（6）」
このたんかを聞いたブラジル人の一人が、
「ではおれが相手になろう」
と喧嘩を買ってでたからたまらない。すでに興奮していた市民たちは、バールにとびこみ、店内の設備をこわした。家々からとびだした市民たちは、怒り狂った民衆に合流し、
「日本人をやっつけろ、シンドウを殺してしまえ！」
と叫びながら、ありあわせの武器として、棒切れ、ファッカ、斧、その他の刃物を手にして、日本人の住宅といわず店といわず、つぎつぎに破壊しだした。
このとき、他方で、また騒動を倍加させる事件がおこった。三、四人のブラジル人が議論しあっているところへ臣連顧問の肩書きをもつJがとびこんで、「まもなくおれたちがお前らをマンダするときがくるんだ！」と放言したものである。これは日本人がまもなくブラジルに

命令するようになるんだぞ！　というに等しい。この言葉はブラジル人の感情を激昂させるに充分であった。Ｊは群集にたたきのめされ重傷を負った。警官はただちに多くの日本人を保護監禁した。Ｊ以下約五十名ほどであった。

暴徒は街上を右往左往して、破壊をつづけた。騒動は八月二日までつづいた。ツパン市から警兵一個小隊が来援して当市の警察と協力したので、ようやく平静をとりもどすことができた。市内にはもう、日本人の姿は見られなくなっていたからでもあった。

終戦一周年

まもなく終戦一周年の八月十五日がくる。この日、ツパンから約二〇キロメートルの地点で集会をひらいた当地臣連の面々は、ラジオを囲んで日本からの戦勝一周年の記念放送を待ったのであるが、ついに期待にそう報道はなに一つ得られなかった。いよいよ不安にかられた彼らは、翌八月十六日、五人組の特攻隊をしてツパンの「敗戦ども」を襲撃させることにした。このとき殺害したもの二名、重傷者一名をだし、隊員のほうでは四名が逮捕され、残る一名だけ逃走することができた。

すでに特攻隊員も、かなり内心動揺していたので、も

し敗戦が事実であって、自分たちの立場がなくなるなら、「敗戦ども」を死の道づれにしようというやけくそな気持ちもあったのである。

こうして、ツパン襲撃ののち、一九四七年一月六日、かねてからねらっていたスウェーデン領事館日本人権益部の森田芳一を暗殺するつもりで、その義兄・鈴木正司を血まつりにあげたあと、テロ事件は聞かれなくなる。

郵便再開

日本から手紙が来るようになる。

だが、信念にこりかたまった人たちは、親身のものの直筆による私信すら、偽ではないかと疑ったものもかなりあった。第一切手が偽物だ（すでに戦前のものではなかったから）。それに、どうも開封した形跡があるといった。

字は似ているが、だれかがまねたものだともいった。疑えば、なにからなにまであやしいものに思われた。

そのうち、日本から来る新聞や雑誌は、みなアメリカでつくった偽物だという噂がひろまった。掲載された写真もみな偽造とされた。偽写真をつくるくらい簡単なものはないといった。

（しかも、こういう彼らこそ、様々な偽写真にだまされ

ていたのであった（７）

邦字新聞の再刊

やがて九月十八日になって、ブラジルでは戦後の新憲法が発布され、外国語の新聞が発行をゆるされるようになると、十二月一日から『サンパウロ新聞』をはじめ、『南米時事』『伯刺西爾時報』等の発刊があり、翌年一月一日には、以前から認識派によって計画されていた『パウリスタ新聞』もその第一号をだすことになった。

だが忘れてならないことは、こうした公刊物を持つ前に、各所で個人的に啓蒙パンフレットを謄写版刷りにして、友人、知人に配るものがあり、また奥地でも、それぞれ認識運動の一助として、パンフレットを発行してデマ粉砕に戦っていたことである。

認識運動の中心となっていた宮腰千葉太の『情報』、コチア産組の『週報』など新聞発刊以前のコロニアに大きな役割を果たした。『週報』は邦文タイプ謄写刷りで、約七か月つづき、新聞出現の報を得るにいたって廃刊した。

だがつづいて、戦勝組をバックとする新聞も二、三にとどまらず発印された。すでに、新聞をだしてまで、自己の勢力圏を守ろうという連中が出現したのであった。

そして彼らの言論は、いつのまにか、「勝ち負けが問題

ではなかった。皇室や祖国日本を誹謗するやからに対する愛国者としての立場から、自分たちは戦っているのだ」と宣言するようになってくる。そして、「敗戦」に対してみずからを「強硬」ととなえる一派は、あいかわらず団結して、コロニアに対立の溝を深めていった。彼ら強硬派の新聞には、何々青年会、あるいは日本人会の名で、認識派旧幹部に対する除名広告をだした。日本人としてあるまじき態度を非難し、集団より追放しようとするたくらみであった。

「今後M兄弟一家との交際を厳禁し、植民地内の催し事、シネマ、冠婚葬祭等の集合場所に出入することを堅く禁じ、不徳漢M兄弟一家の覚醒を促すべく、右の通り満場一致の決議により、げんに除名広告するものなり(8)」というようなこともおこってくるのである。

彼らは背後に『昭和新聞』とか『中外新聞』その他をひかえて、言論的保証を得て安心しているかのように見えながら、外出のときは肩をいからせ、目じりをつりあげて眼前に敵をひかえたような態度を示していた。「あすこに勝組がくるよ……」と一見してわかるような格好であった。つねに内心と戦っている姿であった。

永久帰国者の出現

一九五一年といえば、終戦後六年目であったが、当時

多数の永久帰国者をだして、これが日本の新聞にも報道され、ブラジルの勝組が問題になった。

しかし、日本の新聞が伝える勝組の姿は、「時代おくれの人間のカリカツーラ」としてのそれであった。移民社会におこった悲劇については、時代の先端をいくジャーナリストといえども日本では到底理解できるものではなかった。忠良なる臣民であったがために、祖国を信頼していたが故に、無知とあなどられ、時代おくれと軽蔑されながら陰謀にまきこまれていった移民の心情は、移民の歴史を知り、異国に苦労をかさねた人々以外には理解することができなかった。

注

(1) 一九四六年、二〇八号。

(2)『コロニア戦後十年史』一一ページ。

(3) 同上、一〇ページ。

(4) ブラジルの一新聞に発表されたときは、三百五十名とあった

(5)『コロニア戦後十年史』一四ページ。

(6)『ディアリオ・ダ・ノイテ』一九四六年八月三日―

“Sefosse eu teria matado uns tres ou quatro brasileiros. Eu sou Shindo-Renmei e no tenho medo de matar.”

(7) エルクラーノ・ネーベス著『シシドウ・レンメイ』参照。

（8）『昭和新聞』一九五一年五月二日。

61　テロ事件とその犠牲者

臣道連盟特攻隊その他によってひきおこされた事件と、その犠牲者を左にかかげる。

一九四六年三月七日のバストス事件を皮切りとして、四月に二件、五、六月に各一件がつづき、七月にはいると十七件余となり、ノロエステ線がいちばん多かった。この七月は、ノロエステ全線に「血の雨をふらせた凄惨な月」として長く人々の記憶に残るだろう。

（ここには、パウリスタ新聞社発行の『コロニア戦後十年史』をもととし、これに香山六郎編著の『移民四十年史』を参考にしながら、事件のおこった年月日と犠牲者の名をあげる。姓名には多少分明を欠く点があると思うが、いまは訂正の方法がないので、このままにしておく）

◇一九四六年

三月七日（バストス）　死亡一名

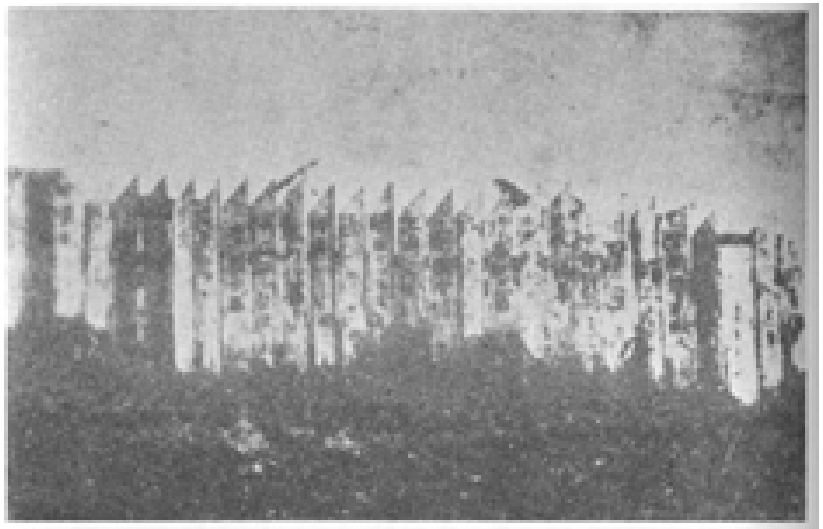
バストス産業組合専務理事・溝部茂太が特攻隊五人におそわれ、ピストルで射殺された。

四月一日（サンパウロ）　死亡一名

元文教普及会事務長・野村忠三郎が特攻隊五名によっ

て暗殺された。
同日は元アルゼンチン駐在公使・古谷重綱もおそわれたが無事。犯人二人が逮捕された。
四月十七日（マリリア）　重傷三名
被害者は林久道、渋谷兼五郎、三浦勇。犯人二名逮捕。
五月六日（バストス）　軽傷数名
七家族に爆弾の小箱が、自動車に乗った青年によって配られ、ふたをあけた数人が軽傷した。
六月二日（サンパウロ）　死亡一名
元産組中央会理事長・元陸軍大佐・脇山甚作が暴徒四人におそわれ射殺された。犯人は即時中央警察に自首。
七月十日（ブラウーナ）
仲買商人・八木武人方を二人の青年がおそったが、八木の応射に会い逃亡。犯人二人は彼の知人であった。
同日（ビリグイ）
ビリグイ駅栄拓植民地の安部、渡辺両人宅へ一団が来襲、警戒が厳重だったので犯人は逃亡した。
同日（ビラッキ）　死亡二名
バール業者・森五一、および兄の伊丸が射殺された。
七月十一日（ベーフ・ビスタ）　死亡一名
ビリグイ＝バストス街道ベーラ・ビスタの佐羽（幕？）
内勇が夕刻入浴中、二人の青年に射殺された。
同日（コロアードス）　死亡一

（「敗戦」の名をつらねた木柵）



天誅をうくべき「敗戦」の名をつらねた木柵

名、重傷四名

ミル・アルケーレス植民地の富永一衛宅へ特攻隊三人

同日（カフェーランジア）　死亡一名、重傷一名

雑貨商・楠庄平が五人の青年から射撃をうけて即死。また歯科医・今井竟は患者と称する青年に腹部を刺された。さらに他の闖入者四人から拳銃でなぐられて昏倒。

同日　（ボルボレーマ）　死亡一名

ドゥラデンセ線イタポリス駅ボルボレーマ町の岩田篤治が二名の青年に殺害された。

七月十八日（カフェーランジア）

竹内豊次がおそわれた。

同日（ジェツリーナ）　死亡一名

上塚第二植民地産組理事長・堀内藤次がやられた。犯人は八月二日に逮捕された。

七月二十三日（オズワルド・クルース）

阿部豊方床下に爆弾を仕掛けたものがあり、爆発して屋根まで破損したが、負傷者はなかった。同時刻、鈴木出世方へガソリンをかけ放火したものがあったが、いちはやく発見され消火。

同日（バストス）

バストス移住地カスカッタ区の梶原武男が暗闇で狙撃されたが、命中しなかった。

七月三十日（オズワルド・クルース）　ブラジル人死亡一名

時局外の口論ののち、喧嘩となり、一ブラジル人が日本人に刺殺された。オズワルド・クルース事件の発端となる。

同日（グリセリオ）　死亡一名

稗田鶴吉が五、六人の一団からおそわれて射殺された。

七月三十一日（オズワルド・クルース）

オズワルド・クルース事件勃発。

八月一、二日までつづく。

臣道連盟員とオ・クルース市民とのあいだにもちあがった騒動。七月三十日のブラジル人殺害事件と関係あり。市民の憤激をかう。ツパン市から警兵一個小隊来援、警察と協力してとりしずめた。

八月十日（マリリア）　死亡一名

白昼、時計商・平田良博が射殺された。

犯人はブラジル人運転士によってとらえられ警察へひきわたされた。

八月十六日（ツパン）　死亡二名、重傷一名

新田写真館支店の新田実が写真修正中を背後から発砲される。新田は頭部を貫かれて絶命。岡崎事務所の岡崎司三も一弾をあびて死亡。この犯人二人はブラジル人に

捕えられた。西川商店ツパン支店長・大原守郎もおそわれて重傷。この犯人も居あわせた一検事に追跡され、捕えられたとき市民のリンチにあったが、生命には別状なかった。

また、中家、土田共営の雑貨店へ向かった暗殺団は、いちはやく土田に発見され、双方ピストルを擬したところを出動の軍隊の手で逮捕された。

その他もう一か所でおそわれたものもあり、この犯人は逃亡した。

◇一九四七年

一月六日（サンパウロ）　死亡一名

スウェーデン領事館日本人権益部・森田芳一の義兄・鈴木正司が森田の長女（生後八か月）を抱いて街路散歩中を射殺された。森田芳一と見ちがえられたものであった。犯人は一ブラジル人に自動車で追跡されてつかまり、ラジオ・パトロールに引き渡された。

ここに記したものは、サンパウロ市の新聞に発表されたり、中央警察や認識運動本部へ報告されたものだけであって、一般には知られなかった事件もあったことだろう。犯人は後日、ほとんど逮捕された。

ここでは事件数二十六をかぞえるのであるが、もし同

日同地におこったものを別々にみるとすれば、さらに十五件が追加され総計四十一件となる。死亡者はブラジル人一人を加えると十六人、重傷者十一人、その他軽傷者数人である。特攻隊員も重傷一人、死亡者一人をだしている。

ちなみに、サンパウロ市でつかまった臣連特攻隊員の宿泊所から、警察が押収したブラックリストにのっていた暗殺目標の人物は、サンパウロ市およびリオ市のおもだった人々をほとんど網羅して、総計二十三人であった。そして、これには地方の人物は一人も含まれていなかった。

62　ブラジル人側に残された資料による臣連事件の理解

臣連事件に対するブラジル人の態度

サンパウロ市の諸新聞に、勝組のあらゆる活動および犯罪事件が一括して〝臣道連盟事件〟として報道されだしたのは、一九四六年二月七日、バストス産業組合の理事長・溝部茂太が臣連特攻隊によって殺害されてからであった。

『オ・エスタード・デ・サンパウロ』紙は三月二十六、二十八、三十一日の三日にわたって、事件の詳細とバストス、ツパン、マリリア方面の勝組の動静をも報じたが、その記事は、不同化民族に対する非難の言葉に充たされていた。事件を報道するまえがきとしてバストスの地理、その創立史と現況をあげ、さらに、一九三六～三七年にわたる憲法制定議会において、二人の上・下両議員によって行なわれた日本人集団地論をあげて、日本人の集用地生活がブラジルの利害に反する結果をもたらすであろうという説を紹介している。

サンパウロの新聞、とくに夕刊に臣連事件が連日おおきく報道されだしたのは、四月一日野村忠三郎が殺害されてからであって、二ページ近くをさいて報道するものも少なくなかった。『ディアリオ・ダ・ノイテ』『フォーリャ・ダ・ノイテ』および『ア・ノイテ』等にはいつもセンセーショナルな見出しがついていて、新聞を買うたびに胸をえぐられるような思いがした。「サンパウロ市に組織された日本のゲスタッポ」（四月一日「フォーリャ・ダ・ノイテ」）、「サンパウロ市に暗躍する〝黒竜会〟」（四月四日『ア・ノイテ』）、「バンド・ダ・モールテ＝死の徒党＝の不気味な陰謀発覚」（四月五日『ア・ノイテ』）等であった。

むろん、新聞はほとんど犯罪事件を中心とした報道な

ので、そこには勝組の人たちに対しては同情的な言葉がまったく見られなかったのは当然であったろう。われわれにも、ブラジル人記者の気持ちは充分くみとることができた。たとえば四月五日の『ア・ノイテ』紙を見る。特攻隊によって暗殺されるべき人物のリストが発見され、それが同紙上にもこの日に公表された。特攻隊員がもっていたといい、あるいは腹にまいていたともいう日の丸には、殺人におもむく本人の原籍と姓名とが記してありさらに「決死報国」と大書した文字がＥ　ｇｒａｔｏ　ｍｏｒｒｅｒ　ｐｅｌａ　ｐａｔｒｉａ　と訳されて発表された。パートリアとは日本のことであり、時局を認識し、ブラジルの大地を愛し、生産にいそしむ者を反逆者、国賊として殺害しようとしているのである。しかも、逮捕されてサンパウロへ送られてきた隊員をインタビューすると、彼らは皮肉な微笑をうかべて、「日本は戦争に負けていない。この地上に一人の日本人でも存在する以上、日本は決して敗北しないだろう」とうそぶいたというのである。なんのために彼らはブラジルにいるのか、記者は呪いともなげきともつかない絶望的な言葉を記すのである。

〝彼らは、われわれの食べる同じ食物を食べるに価しない。彼らはわれわれの飲む同じ水を飲むに価しない〟―〝Ｓｏ　ｉｎｄｉｇｎｏｓ　ｄｅ　ｃｏｍｅｒ　Ｏ　ａｌ

imento que comenios !……
So indignos de beber agua que bebemos!

この気持ちはいたいほどわかるのである。しかも同じ移民の一人としての筆者は、犯罪者となってもなお、自分たちの精神的支柱を失うまいとする悲壮な勝組たちの気持ちもわかるのである。この時代の新聞記事を読んで、異様に感じるのは、ブラジル人には、むしろタブーとなっている「オス・アマレーロス」（黄人たち）という言葉を使っていることである。いかに彼らが殺人事件を憎んでいたかがわかる。

勝組の人たちに対するブラジル人の怒りは、一九四六年七月十九日、州執政官がカンポス・エリーゼオス宮に勝組代表を招集し、集まった三百五十名の前で説得をこころみ、それが失敗に終わったあと最高潮に達した。「信ずべき政府代表の二人が諸君に通告するのだ。一人はスウェーデン国の代表であって、同時にブラジルにおける日本人の権益を守っているもの、他はサンパウロ州政府を代表するこの私、二人の言葉に偽りはない。ことにこの州政府本部で発言している以上なおさらのこと」と宣言して、ねんごろにこころみられた説得にも彼らはかたむける耳をもたなかったのである。彼らがその日の議事録に署名するにあたって文中にあった「無条件降伏」

の字句を、無理に削除させ、まるで凱歌をあげるように退去したあと、この様子を翌日の新聞で知ったブラジル人インテリたちは、猛然として勝組排撃の論を各新聞に発表しだしたのである（そのことは「戦後十年史」の三三～三四ページにいろいろでている）が、それが日本移民の入国禁止論となってあらわれたことは見逃がすことができない。当時の憲法審議会の席上で、人道主義的立場から日本移民入国禁止が論じられたとき、一議員がたって、「ヒューマニズムとは、人間に対してはいえるが、人間以下のものに対して適用することはできない……」とまで極論したことを思いだす人も多いことと思うが、禁止条項を憲法本文に入れるかどうかで投票を行なったとき、九十九対九十九の可否同数となった。このとき「こうした条項を憲法に挿入することは国の恥だ」と議長のメーロ・ビアンナは最後の決定権（ミネルバ投票）をもってこれを否決したことも知る人ぞ知る。あの事件がいかにブラジル人一般の心情を害したかわかるだろう。

臣連事件が新聞にでるごとに、その記事中に同情的文句が皆無であったことも当然であったろう。

ブラジルの新聞に見る
臣連本部と臣連実践綱領

一九四六年四月三日の『フォーリャ・ダ・マニャン』には臣連本部が警察の捜索をうけたことがでている。これは、それ以前脅迫状をうけていた一日本人の通告と四月一日の野村殺害の結果、その場所が明らかにされたものであった。

新聞の記事と、そこに掲げられた写真によって、臣連本部のサロンの模様を描きだしてみる。

大サロンは中央に大きなテーブルがあり、そのまわりを、椅子がとり囲むようにならんでいる。

奥の壁はちょっと深まった祭壇のようになっていて、紫のたれ幕がかかっており、両側にひらくと、そこには壁いっぱいに日の丸と軍旗とがならんでかかっている。その両旗のあわさる継ぎ目のところ、人の頭より少し高く、白馬にまたがった陛下の軍服姿の写真が、ちょこなんとかかっている。

幕の向かって右側には、「臣道聯盟本部」と赤い字で大書した「のぼり」がかけてある。その字の上方には、桜花に白く〝臣〟と染めぬいた臣連本部のマークがつけてある。のぼりの左方下部には、かなり小さく紀元二千六百何年と記してある。

幕の向かって左側には、ブラジル国旗が天井から床へとどくように、縦にたらしてある（これらは写真によってその大きさがわかる）。

さら′に、この左のはう（あるいは他の壁面）には、〝御真影〟をおさめた厨子のようなものがある。警官の質問によって得られた答えによると、そこは「祖国をおがむ祭壇のようなもので、日本国民が陛下のお姿に対して崇敬の礼をささげるところである」ということがわかった。

さて、大きなテーブルのほうに目をやると、そこには〝秘密結社〟の会員名簿があり、そのなかには日本人の子である幾多のブラジル人の名が記してある。警官の推察によれば、おそらくサンパウロ市の連盟員の名簿であろうという。

壁面の一つには、よく描かれたサンパウロ州の大きな地図がかけてあって、各地方の日本人集団地支部（ヌクレオ）が記してある。ここに見られる支部の数によって、十三万の会員を擁するという連盟の重要性をみとることができる。地図のマークによって判断すると、支部のない地方はめずらしいくらいである。

捜索隊とともに裏庭にまわってみると、庭の奥に小さな離れがある。そこの部屋はかぎがかかっていたので、こじあけてはいる。そこは本部の印刷場であった。よく調べてみると、最近ここで印刷が行なわれたことがわかる。テーブルの上には新聞や宣伝用パンフレットがちらばっている。そこには会員の連絡に必要な印刷物をつく

るためのりっぱな謄写版印刷機があった。片隅のテーブルには宛名のかかれた大量の封筒が積みかさねられている。おそらく郵便局を通じて配布されるものではなく、連盟員の手によって送りとどけられるものであろう。

昨日の集会を招集した書類によって根来良太郎を総裁とみた警察は、彼を第一に逮捕したのであった。むろんその他多くの幹部がこのとき拘引された。

根来はすべての日本人に共通な態度で、物静かに微笑を浮かべながら、警官のあらゆる質問に対してよどみなく答えた、という。

本部はパルケ・ジャバクアラ区、パラカツー街九八番であった。（文庫注・現在はサウデ区になる）

では臣道連盟なるものは、どのような理念のもとに組織され、活動していたものであろうか。ここにその実践綱領なるものをあげてみる。しかし、これによって彼らの動きを知ることは、ほとんど不可能である。結局、その本意は、彼らの活動の全般によって推察し、またその幹部連中の人為や、ここにくいこんで集まった不良分子、そして、ついにはそれにひきずられていったその後の傾向によって知るより仕方がないだろう。

臣連綱領なるものが、ブラジルの新聞に発表されたのは一九四六年四月十六日の『ディアリオ・ダ・ノイテ』紙

上であった。

「あらゆる文法上の誤りもそのまま……」と注して発表されたものであるが、ここではポルトガル語そのままのものをのせるのではないから、「戦後十年史」に発表された日本語による大要をあげることにする。

一、世界永遠の平和と全人類の繁栄を念願とする八紘一宇の精神に透徹することを要し、この故に連盟はいつ如何なる時と場所においてもこの精神をもって正々堂堂と行動するを要す。そのためには大いに教養を積むを要し、あくまでも日本精神に基くものたらざるべからず。

二、大日本建設に協力するを要す。これがために日本に帰ることを必要としない。ブラジルに在っても協力することは容易である。ブラジルの国法に遵いその繁栄に貢献することはとりもなおさず大日本建設に協力する所以たることを忘るべからず。

いかにもりっぱに見えるが、彼らのいう日本精神に基づいて正々堂々と行動し、〝敗戦ども〟をやっつけ、はっかや繭の生産をサボらせ、「日本に帰ることを必要としない」といいながら、帰国詐欺、「南洋」の土地売り詐欺等の暗躍を各地に増長させながら、「国法にしたがって」「ブラジルの繁栄に貢献し」ブラジル人の憤激を買っても、なおこの地にあって、「大日本建設に協力すること

は容易である」　と、まじめに考えていたものであろうか。

この綱領がいつできたかわからないが、一九四六年四月にはブラジル語にも訳されているし、その後臣連関係者の不法活動や犯罪行為はあとを絶っていないのである。

デマ宣伝と偽造写真、その他

「日本大勝利」の宣伝には、まず「連合国側がその敗戦をかくそうとした陰謀によるデマ・ニュースの〝裏をかく方法〟によって発見される〝真相〟」がいろいろな形で発表された。そのなかで、もっとも大きく社会的に影響したのは、いつ、いく日、日本船（あるいは軍艦）が迎えにくるというデマ・ニュースであった。取るものもとりあえず、サンパウロにでてくるもの、リオへおしかけるもの、サントス、ついにはパラナグアまでとんでいくものがそのあとを絶たなかった。残してきた財産は白紙委任状にして「世話人」に渡し、まんまと詐欺にかかるものがかなりいた。日本船出迎えの報はあらゆる悪事を生む原因となるのであった。

さいわい白紙委任状ではなく、安く土地を売り払って現金をにぎったとする。今度は、コント・デ・パッサージェン（船会社のニセ切符売り）や、コント・デ・エン

（円売り）にひっかかった。

〝円〟は「戦後十年史」によると、香港やシンガポール方面から、あるユダヤ人によって飛行機でブエノスアイレスへ運ばれ、それがブラジルへ流れこんだことが「ほとんど定説になっている」らしいことが書いてあるが、一九四六年四月十日の。ジョルナール・デ・サンパウロ誌の発表するところによると、その円はアルゼンチンにあった日本人ツダ某によってブラジルへ送られたことになっている。

サンパウロ市における円売り事件は、当時ブラジルの新聞にも報道されたはずであるが、どの新聞であったかはっきり思い浮かべることができないので、確証をあげるわけにはいかない。かなり有力な日本人がこれに関係していたことは、取引きの現場を目撃した人によって語られていた。ただし、こういう人たちは臣遺連盟員ではなく、これを横から利用した、いわゆるレロレロ連中であったことは、ここにことわっておきたい。

いずれにしても、デマ・ニュースは、おもいがけない犯罪を生んだものとして責任がある。しかも、多くのデマ・ニュースは、各地の勝組集団内でも、それぞれ別個に捏造され追加されたことは、デマ・ニュースのおそろしい不統一によっても証明されるだろう。

さらにデマ・ニュースは映画フィルム、および偽造写

真によって強化された。

それは、ベルゲイロ街の日本人住宅で押収された三五ミリ映画フィルムだというが、そのなかには「マッカーサー将軍がヒロヒト天皇の手にキッスしている」場面が発見されたという。そして、「これらのすばらしい映画フィルムのトリックによって、臣道連盟のシャンタジスタ（詐欺師）たちは、広範な活動を行ない、充分な維持費をかせぎ、日本は戦争に負けていないという宣伝カンパをつづけたのであった」と、一九四六年四月四日付の『ア・ノイテ』紙は警察にあがった資料をもとにして書いている。ちなみに、この種のフィルムは七缶あったという。

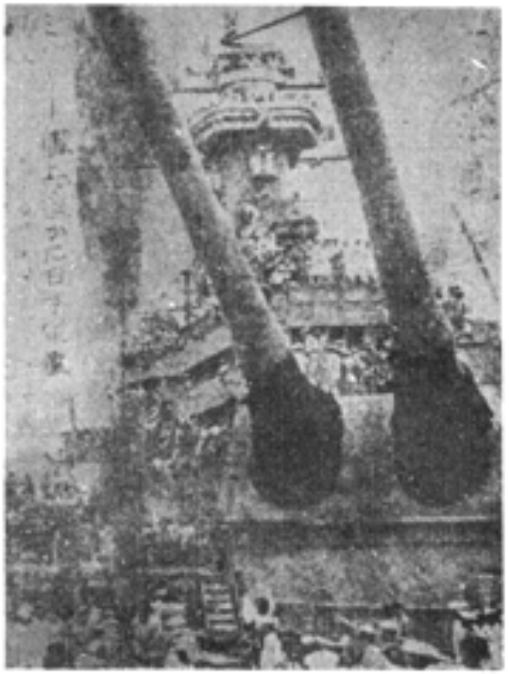
偽造写真が警察に発見されたのは再三であった。これは、一九四六年三月二十六日の『オ・エスタード・デ・サンパウロ』紙上に発表されたものであるが、ここにあげられている写真には、じかに日本文で「帝国代表川辺中将ノ一行マニラ到着、米軍出迎ヘノ場面、上・下」というのである。本文の説明によると、これはツパン市の一日本人写真家（1）によって偽造されたものであって、この「芸術家」は、日本の軍事使節が丸腰で（マニラへ）のりこんだことがすでに知れわたっているときに、周辺中将の左側の順にサーベルの先端をかきそえたのである。

ところが……写真家は、ツパンの警兵サルジュント

（軍曹）に現場にふみこまれたとき、一コントをにぎらせて上司には通告しないようにとりはからった。しかし、軍曹どのは、金をうけとり、すぐその足で所長へ訴えでたのであった。

写真の出所は、おそらくアメリカの『ライフ』あたりではなかろうか。むろん、れいれいしく、サントス市発行『トリブーナ』紙よりなどと日本字で写真の上にことわり書きをしたものさえひろまっている。

（当時はまだ日本との通信はひらけていなかった。のちに日本と通信がひらけて、日本の写真が着いたとき、多くの人が〝これは偽造写真だ〟といったことは有名である）



ミズリー艦上、遥かに日章旗

アメリカ軍降服の写真は、すでに各地の人の手にはいっていた。ミズーリ艦上のアメリカ軍の降服調印の図などは、いろいろな機会にブラジルの新聞に発表されたが、あるものは、艦上にひるがえる小さな旗が日本の海軍旗にかきかえられていた。

偽造行為は、ブラジルの新聞によると、日本臣道連盟本部の〝印〟を偽造したばかりか、天皇の御璽（印）にまで及んでいる。一九四六年四月八日の『ディアリオ・ダ・ノイテ』紙は、ポンペイアで四月四日、日本の臣道連盟本部の印の偽造者がつかまったことを報じた。そしてこの偽造者（本名もでていた）は天皇の御璽まで偽造したと報じている。

脅迫行為のいろいろ

臣道連盟を筆頭とする勝組諸団体の人たちが、各地の〝敗戦ども〟に脅迫状を送っていることは、「戦後十年史」にもでているし、エルクラーノ・ネーベス著『シンドウ・レンメイ』にも多くの例を見出すことができる。

ここではただの脅迫とかなりちがった妖術的「呪い」に似たものの例をあげる。

一九四六年三月三十一日、『オ・エスタード・デ・サンパウロ』紙に掲載されたものである。

マリリアのポンボ区に異様なものが組み立てられていた。なかには日本字を書いた紙片がはいっていて、その前にローソクが数本ともしてあるという噂がたった（人家から離れた耕作地の片隅が想像される）。いったいなんだろうか。あるものはマニラでアメリカ軍に処刑された山下将軍をとむらう法事でもあったのだろうかと考えた。

ところが、ある二世の説明によると、そこにおさめられた紙片には、この地方で日本の敗戦を信じる五十名ほどの日本人の名が書いてあるというので、これが勝組の人たちの敗戦国賊たちに対する呪詛行為であることがわかったのである。

あの異様な組立てものは、おそらく小さなホコラのようなものであったろう。同年四月五日の『フォーリャ・ダ・ノイテ』紙に発表された写真は ― 説明はなかったが ― どうやらそのほこらのものであった。そのなかに祭った日本字を書いた短冊型の紙片は、みな位牌であった。姓名の上方には、わざわざ「俗名」と注してある。そしてその五十ほどの位牌の詰まったほこらの下には、呪文のような説明書きがついていた。これもあとで『フォーリャ・ダ・ノイテ』に載った写真からわかったものである。不明瞭なカットから読めるだけの字をさがしてみると左のような文となる。

警告書

生前君等は日本人であったが、去年八月十五日に既に死亡したるものとして謹んで此処に弔意を表す

即ち君等は其後亡者の如く口に敗戦を論じあまつきへ是れを宣伝し然も皇室の尊厳を傷け或は御詔勅を偽造し不敬も甚しく扨ては当国在住邦人を……人心をカクランさせ……いては……貧困のどんぞこに落入りたる母国救済金等と偽り寄附金を募集したるが……為に農民を悲観の絶頂に落入らしめ彼等悲観の余り農業も……苟も……多の損害を……へたるは実に言語同断にたへず君等の此の責任は重且大なりと思考す依って速に可然自決せよ

南無阿弥陀仏

仏心会同人

もしこのようにくどくどと述べず、はじめから実況を思い浮かべながら印象的に描写できたなら、鬼気せまる妖術的雰囲気をあらわすことができたかもしれない。

もう一つ。

これは新聞に発表されたものではなく、『シンドウ・レンメイ』にある写真とその説明であるが、ところはプルデンテ市からパラナ街道へ約一キロの地点、かなり幅広

な木柵に、ずらりと国賊として天誅をうくべき〝敗戦〟たちの名がかきつらねてあったことである。その木柵というのは、一本一本が、ちょうど卒塔婆のように先がとんがっているので、まるで死者の名を書いて突き立てたように見える。写真では二十八本ほどかぞえられたが、もっとつづいていたように思われる。まるで集団墓標のようで、うす気味悪い光景である。

さらに別種の脅迫行為としては、家の壁に脅迫の大文字を書きつらねたものがあった（2）。ミル・アルケーレスの例―

国賊

ユダヤ宣伝部

ミル・アルケール

支部長白倉

天誅

首を洗ってまて

ここではその後実際に殺人事件がおこっているのである。

その他マリリアでは敗戦組に対する〝葬式〟が公衆の面前で行なわれていたという（3）。

各地指導者の臣連理解

こうした脅迫行為をあえてした臣道連盟なるものは、各地支部の指導者たちに、いかに理解されていたか。

ここでは警察の調書をもとにして、彼らのいうところを聞いてみる。

（調書の中心となっているテーマは、暗殺事件に対して臣連本部が直接指令をだしていたかどうか、のようである）

「在伯同胞の思想と行動を天皇崇拝のもとに統一し、敗戦思想に影響されないように彼らを守るもので、臣道連盟は純然たる道徳的修養団体である」と主張するものが多かった。

そして、彼らの述べるところによると、「敗戦者たちの偽勅語（4）によって日本の敗北を知らされた農民たちは絶望し、酒におぼれて仕事が手につかない状態であった。

これを救うために立ち上がったのが愛国団体としての臣道連盟である」という。

またあるものは、「自分は臣連の日本勝報によって生き甲斐をとりもどした。臣連は日本人に希望を与え、彼らを平穏と労働にたちかえらすためにできた指導機関である」という。ときには「うそも方便だ」といわんばかりに、臣連の効用を宣伝するものもいた。いかに臣連の勝報

が地方農民に熱狂的にうけいれられ、彼らに「希望」を与えたかがわかる。「溺れるものはわらをもつかむ」という心理が、戦争直前から、戦中、戦争直後にかけて、日本移民のうちにやしなわれてきたのであった。

またあるものは、「天皇崇拝とこれによって真の日本人にたちかえらすために、戦争中消滅状態にあった諸団体を統一するものが臣連の使命である」といい、また、他のものは、これは「旧日本人会の別称だ」ともいっている。「個々バラバラに戦後あらわれた諸愛国団体（受道実践連盟、精華連盟、在伯在郷軍人会、愛国青年団、等々）を統一しようとするのが臣道連盟だ」と説明するものもいた。しかし、多くのものは殺人事件には関係なしといっている。また、暗殺行為に直接たずさわった特攻隊員ですら、これは地方の青年たちの仕事であって、自分たちの指導者が、臣連本部の指令にしたがっていたかどうかはわからないと述べている（これはのちに事情が明らかになる）。

つぎに注意すべきは、臣道連盟が、ときによると日本官憲の代行者のような「権威」をもって連盟員にのぞんだことである。「今ブラジルには日本の外交官がいない。連盟はこれに代わって、ブラジルにおける日本人の利益を守る機関である」と臣連の存在を説明した地方幹部もいた。

（彼らは日本の権益を守るスペイン大使、のちにはスウェーデン公使館を認めていなかった。あるいは、その存在も知らなかった、といえるかもしれない）

ついでにつけ加えるが、いわゆる時局「認識者」たちの配布した天皇の終戦詔勅も、とんでもないところで逆用されていることも明らかになった。すなわち、天皇は生きている、ということであった。もし日本が戦争に負けていたら、天皇が生きているということはありえない。まっさきにハラキリをしているはずだ。天皇が生きているということは「敗戦」たちも、ブラジル人も、新聞の外電によれば世界中のものが知っている。これ以上、日本が勝っているという生きた証拠はないと主張するものが各地にいたことである。臣連の宣伝によって彼らに与えられた論理であろう。

さらに注意すべきことは、「近いうちに日本の使節がブラジルを訪れる。そのとき臣道連盟員を、優先的に日本へつれていく」と信じられていたことである。そして、この臣連報道は、日本が勝っていることの証拠ではないか、といっているものもいたことであった。まるで臣連を日本政府の代行機関と信じ、その報道を確実なものとしていたのである。

各地の支部設置には、根来良太郎がいちばん活躍していたようである。彼と一時行動をともにしていた「一哲

学者」は、幹部の暴力行使宣言に同意できず、途中で臣連運動から身をひいている。

偏執狂的頭脳の指導者たち

だが、臣連幹部の心境について断定的なことを述べることはむずかしい。当時の新聞は詐欺陰謀家たちの行動を追及していたし、警察は犯罪行為を中心に捜索、検挙をつづけていた。勝組の心理を利用する臣道連盟の運動は、火事場どろぼう的な営利企業と見られるより仕方がなかったのである。まして、脅迫状をうけとったり、彼らの宣伝に影響されて家庭の平和までうばわれ、ついには身内のものを血祭りにあげられた犠牲者たちが、臣道連盟を不倶戴天の敵と見たことも当然であったろう。

だが彼ら指導者たちが、すべて詐欺師たちであったかどうかは断言できない。これはのちの「偽宮様事件」「前衛隊事件」「桜組挺身隊事件」などのような、明らかな詐欺師や精神異常者たちの仕事と区別するべきであろう。むろん彼ら指導者たちが、正常の精神状態ではなかったとみなされる点もあって、パラノイコといわれたわけである。

吉川順治とならんで、理事長とか会長とかいわれた根来良太郎は鉱山技師と自称していたが、彼が神がかり的

な人物であったことは、彼を知る多くのものの断言するところであるが、吉川については材料が見つからない。ただ彼が、ある裁判についてその「不法」を上訴した文章のなかには、「どのような圧迫をうけても、ブラジルの日本人は、かかる不法な裁きが効力を発することを認めない。国交が回復した暁には、日本帝国をして抗議せしめるだろう。場合によっては、国交断絶、あるいは戦争になるかもしれない」という意味のことを、彼は自署をもって抗議している（5）。戦前の日本軍人的な態度がうかがえ、同時に、彼の性格や、そのときの心境も想像できそうである。

臣連中の「理論家」であり、特攻隊の指令者・渡真利政一（とまり・せいいち）によると、彼が終戦直後、敗戦の報によって悲嘆にくれているとき、吉川を訪問して元気づけられたことが彼の押収された日記にでているが、その記述によると、「九月十七日、土、吉川中佐はめでたく出獄、……この人は何千の同志にもまきる……」と記している．彼がいかに吉川の「人物」にたよっていたかがわかる。当時吉川は六十九歳で七人の子供たちと洗染業をいとなんでいた。

吉川の陳述によると、「推進部」というのは臣連に属していて、必要に応じて同胞の救助にたずさわる機関であるが、さらにその下部組織として、推進部に属する天誅

組、暗殺隊、武力団、挺身隊などと称する青年の諸団体があり、老人たちにはこの推進部の青年たちを牛耳る力はなかった、ということである。老人組、すなわち根来も吉川も、特攻隊の活躍はただ傍観せざるをえなかったのだ、ということになるだろうか。だが「一哲学者」のように脱退できなかったところに彼らの責任が問われる根拠があった。こうした点から吉川や根来は、「祭り上げられた人物」と評判するものもあったのである。

特高課秘密警察部長ドットル・ジェラルド・カルドーゾ・メーロによると、「……これらの事件は渡真利政一の偏執狂的な病的頭脳から生まれたもので、彼は、実際には連盟の総監であり、参事であり、ときには吉川中佐の代役でもあった」といって、刑法上の事件に関するかぎり、彼を吉川、根来の上に置いている。そして、この最後の渡真利政一なる人物をパラノイコの病的頭脳の持主としている。しかし、このパラノイコの傾向は、多くの指導者にもあてはまるものではなかろうか。

調書には岸本次男（きしもと・つぐお）に対する質問もたびたびでてくるが、彼が吉川の釈放に尽力して「謝礼」をもらっていることや、その他臣道連盟のために立ちまわったことは述べられているが、どの程度関係していたかここではまだ明らかにされない。彼に対する根来

の意見として根来の息子が述べているところによると、「岸本は二股かけている男だ。自分の利益になると思えば、臣連のために働き、他の場合は警察の仕事のほうにまわる。信用のできない人物だ」というのである。岸本はたびたび新聞にもその名があらわれ、警察のほうでも注意して、多くの被逮捕者に彼の行動を聞きただしているが、そのなかで黒石清作が彼をほめているだけ、他のものは、渡真利を自分の友人として認めている以外、多くは答えをにごしている。彼は警察関係や上層政治家に多くの知友を持つ天下御免の人物とも噂されていたが、警察でも一部のものは謎の人物としてあつかっていた。ところが調書の結論のほうを見ると、「大山鳴動してねずみ一匹」。

彼が黒竜会のブラジル支部長であったという噂は否定され、彼は神道連盟のアジェンテとして動き、連盟から月額二コントを支給されて、いろいろと情報を提供していた人物であって、秘密警察のベナンシオ・アイレスによると、臣連幹部たちと同様に、国外追放に処さるべき人物にすぎなかった。

とにかく、根来、吉川、渡真利などは、この時代の社会情勢にしたがって、コロニアに生まれたメシア的存在であったことはまちがいないし、彼らも一面では、それを自任していたことであろう。しかし、彼らをとりまく

詐欺師たちをどうすることもできなかったようである。彼らは、ずるずるとこ奸計のなかにひきずりこまれ、また、渡真利のような人物がいたため、「病的頭脳」によって手段を選ばない過激な行動を示唆することになり、ついには、本部・支部をあわせて、はじめは八十名ほどの幹部が大統領の裁決によって国外追放処分をうけることになるのであった。さらに、第二次、第三次と検挙が行なわれ、「その総数百七十七名という多数に達し」たのであったが、その後、「臣連側弁護士団によるアベアス・コルフス（人身保護令）の申請が効を奏することになり、裁判進行中の者を除いて漸次釈放されていった」のである（6）。

注

（1）後日、彼が臣連本部の要請によって作製したものであることがわかった。H・ネーベス著「シンドウ・レンメイ」三八七ページ。

（2）プルデンテでも多くのものが、家の壁に国賊と記された。前掲『ンンドウ・レンメイ』一八三ページ。ゴトウ・トラオの陳述。

（3）同情、三七一ページ

（4）終戦の詔勅のこと。

（５）『シンドウ・レンメイ』
（６）『コロニア戦後十年史』一七～一八ページ。

６３　戦後コロニアの対立抗争は どのように解釈されたか

戦後における日系人コロニアの対立抗争、ことに勝組の運動について、当時いくつかの解釈がこころみられた。ここに述べることは、先に提出した「なにがそうさせたか」という疑問に対する答えに、いくらか寄与するものとなるだろう。

その一つは、これを同化過程のできごととして、その間に日本とブラジルの国家主義運動、戦争、日本の敗戦というような大きな事件が加わって、あのようなはげしい反抗運動がおこったとする見方であって、同化というデリケートな問題を解説しながら、多くの共鳴者を得た（『コロニア戦後十年史』二五～二六ページ参照）。

つぎは、あれを階級闘争の一種ではないかと考えたものがあったことである。

某国総領事がある日本人に質問して、「これは圧迫されていた移民階級の海興やブラ拓に対する反抗心のあらわれではないか」といったそうであるが、そこにも、そう

した疑いがかくされていなかったろうか。
ブラジル人のなかにも、社会の下積みになっていた移民階級が、自分たちの上部にある支配的階層とみなされた認識派指導者に対する階級的反抗ではないかと疑った者がいた。そうした疑いをもらした新聞記事を、筆者は読んだことがある。
勝組自身の宣伝ビラにも、旧支配階級を葬る、というような言葉がたびたびあらわれたことは、多くの人の記憶にあることだろう。
もともと、この運動を指導したものも、また連動にひきずられたものも（これを利用しようとしたレロレロたちは別として）、ブラジルではあまり生活にめぐまれなかった人たちであり、ツパン、バストス、オズワルド・クルース方面のように、綿作りの投機的農業をいとなみ、浮き沈みのはげしい、したがって心理的にも動揺しがちな地帯で、あのようなテロ事件がくりひろけられたことを考えると、そうした見方もなりたたないことはなかった。
だが、彼らの敵はだれで、味方はだれであったろうか。血祭りにあげられに儀牲者のどこに彼らの生活を破壊する「敵性」があったろうか。彼らは多少自由に物を考えることのできる柔軟な精神をもっていた。そして敗戦を認めたことは、信念派の人たちの立場からすれば、その

よりどころとしていた軍部と日本主義イデオロギーの無力を認めることを意味した。その点では「敵性」と認められるものがあったろう。なぜなら、日本精神獲得のかげには、彼らが日本人の美徳としてあくまで維持しようとした旧家族制度があったし、無資本の移民たちは、家族員の奉仕的労働によってのみ、社会的にのし上がることができた時代だったからである。これをもし階級闘争の一つと見れば、むしろ反動的な近代化への抵抗だったと見ることができるだろう。

もし支配階級に対する、下積みになった移民階級の反抗だとすれば、むしろブラジルの地主や商工階級への反抗ということになるが、そんな気配は全然見られなかった。

また特攻隊員は、ブラジルの官憲には抵抗するな、という命令をうけていたといわれ、脇山甚作の殺害者たちは、犯行ののちはただちに警察に自首している。

ただし、戦前、戦争中に積もりに積もった「圧迫感」が深く内攻して、一つの爆発の機会を待っていたということはいえるだろう。戦争さえすめば、すべてはつぐなわれると思っていた。ところが、これを否定するものがあらわれたのである。彼らは敵を自分たらの内部に発見したのであった。

かつて、移民は棄民だという言葉があったように、社

会の下積みになっていると感じていた移民たちは、東亜共栄圏の建設を、自分たち棄民にとって解放を約束するものと見ていたことは事実であった。そうした天国をうばおうとするものに対する怒りとなって爆発したのであった。そこに階級闘争的ななにものかがうかがえる。だが、なにがかの「圧迫感」をもたらしたのか、約束された天国を実際に否定したものはだれであったか、彼らの立場からはつきとめる方法もなかったので、手近な敵に対して怒り狂ったのであった。だから、彼らは全然敵を見あやまっていたことになる。

このように見てくると、階級闘争説は、まだ一つの説として今後の究明を待っているものといえる。

もう一つ、勝組の思想的リーダーのような人たちは、これを思想的闘争と見た（『涯しなき思想旋風を衝いて』参照）。そこでは、自分たちの立場を、戦前の国粋思想において、民主主義、自由仁義をあくまで排撃しようとしていることであった。ここには、新しい時代に対する古い世代の反抗が明らかに見てとれる。こうした思想も、もちろん家族移民としての現実的な立場をもっていることは事実であるが、こういう思想が闘争々指導したものとすれば、これは階級闘争ではあっても、時代の前進をくいとめようとする反動的なものだったといえるだろう。

だが移民であるわれわれは、これを簡単に反動的といって片づけられない気持ちを抱いている。なにが彼らをそうした反動におしやったのか、そういう疑問をなげかけざるをえないのである。

こうして、ここには二つの異なった解釈と勝組の立場からの主張をあげたのであるが、どの一つにもそれぞれ理由が見出され、考えさせられるものがある。

それなら、この運動は、結果から見てどうなっていったか。

まず同化の面から見ると、二世の成長と初期植民地的集団の崩壊とによって、コロニアは多方面への発展を示し、生活のあらゆる面でブラジル化していったことである。

社会的変化という面から見ると、あのような闘争があってもなくても、海興やブラ拓というような移植民会社はなくなったし、現実的には、ああした闘争を経たのちのコロニアは階級分化によって多くの中産層を生みだし、また同時に都市労働階級もいくらか生まれた。思想のうえでも画一的日本主義などは影をひそめて、民主的な考え方は生活のなかにとけこみ、特別めずらしいものではなくなる。

また、日本的国粋思想は、特殊な集団には存続しても、

一般からはかれこれいわれなくなる。日本語のできない二世の出現も、あたりまえなこととして見られるようになる。

こういう傾向から見ると、戦後のコロニアは、日本やブラジルの社会の民主化と同一な軌道をすすみ、同化も深まった。コロニアの近代化と同化とが同じ時期に行なわれたのだといえるだろうか。

64　建設への道

第二次大戦終了後、約一か年を経過したころ、わがコロニアの一方では、まだ勝組の地盤へ悪辣なデマが飛ばされていたが、他方、負組といわれた時局認識派の人たちは、従来の出稼ぎ的な気分を反省し、着々と永住の心がまえをかためていた。

ここには、戦時中政府の事業管理官により清算―リキダソンが行なわれ、ほとんど再起不可能なまでにいためつけられた破魔商会の主人、破魔六郎が、同志とよぶ社員たちの同人雑誌『溌剌』第十六号にのせた論文を紹介しよう。敗戦を契機として永住を決した人たちが、過去の出稼ぎ根性を清算して、将来を「民族の発展」に賭けた意気ごみがうかがえるので興味深い。筆者がここで「人たち」といったのは、単に破魔六郎一人ではなく、多

くの事業家および文化人たちが、同じような方針のもとにふるいたち、実際、自分たちの理想を実現していったからである。

論文の題名は「建設への道」という。

「大和民族移住の跡を振り返って見る時、到る処、之失敗の歴史の様である。安南に、南洋に、北米に、満洲に、朝鮮に、我が民族の移往先は、同等の独自の文化を所有する国士であったことは、此処ブラジルに対しても同様である。

ブラジルの移民が失敗であるか、成功であるか、之を断定することは、尚早と思えるが、一つの事は確定の事実であろう。それは在伯同胞誰の心をのぞいても、不安定であるということである。過去の我民族移住の失敗と、現在在伯の、我々の不安定の心情を通じて之を看る時、裁々は今日迄の移住者達に理想の皆無であった事に思い当るのである。出稼者には理想がない。過去の我民族の移住は、本当にいえば、移住ではなくて出稼者が、其の時代の色々の不可抗力の出来事のために、止むなく定住したものの様に思える。移仕者には理想があり、建設があるが、出稼者には理想も無く建設もない。移住の先駆者に、立派な理想の有無が、その後代にどんな大きな影響を与えるかは、南北米諸国の建国の歴史を見て、之を比較する時、我々の目にも一目瞭然である。英国で信仰

上の圧迫に耐え切れず、末開のアメリカに、理想の自由の国建設の意気高く、移住して行った所謂清教徒達を開拓の祖として、それ等に続いて当時の英国内の政治上の不平の徒輩も、自由の地に、新社会創造の希望に燃えて移住して行ったのであった。

熱烈真摯なる初代移住者の大理想は、米国々土の豊穣と、天然資源の豊富さと相俟って今日の北米合衆国の繁栄をなしたのである。之に反して、中南米諸国は、北米のアングロサクソンに依る開拓以前から、スペイン及びポルトガル人に依って開拓に着手されていたけれ共、之等の両国民は幾百年もの間、此の新天地を、単に掠奪の対象以上には考えなかったのであった。即ち此の地から出来る丈多くの金銀財宝を本国に運び去る以外には考えなかったのであった（1）。勿論単に右に述べた丈が原因の凡てではないが、今日我々の目に映る北米合衆国と、中南米諸国間の国威、国富、文化の程度の相違の大部分は、各々の国の開国当時の先駆者達の理想の相異に遠く起因することと私は思う。

ひるがえって我々同胞の生活を見るとき、彼等の移住と我等のそれとは、時代の差があり、又未聞野蛮な地に新社会を創造するのと、既に文明主権のある国に移住するの大差はあるが、我々移住者に対する、理想なり心構えは、果して前者の何れに属するだろうか。云わずとも

明白な通り、総ての行為が、富の獲得以外一歩も出なかった。出稼人根性にしか過ぎなかった。如何に口に筆に美麗な字句を飾ろうとも、恐らくは、我々同胞の百人が百人、右の気持ちであったろうし、今猶、其の気持ちから抜けきらぬ人々が大多数であろう。ここに我々の社会生活の不安と不合理の源があることに気付くであろう」こういってから、彼は出稼ぎを目的とするものは、一定期間内に必ずひきあげるものでなければならないという。ところがブラジルでは、成功の地盤をきずくにさえ早くて十五年、二十年かかる。そして、やっと自分たちの事業が面白い城に達したころは子孫のほうがふえて、自分たちからわかれて各所にまた生活の根をおろす。これらの人間をひとまとめにして故国へひきあげることなどできるものではない。また二十年三十年ブラジルに住んでから日本へ帰っても、想像していたように日本に住みつくことはできない。まして二世などはとても無理である。ブラジルは出稼ぎ地ではなく、はじめから永住の地だったのである。

「実社会に即せぬ錦衣帰軌の白昼夢を清算されぬ処に、我々の在伯生活に不合理と矛盾があり、此の矛盾から抜け切らぬ限り、我々の心に安定はないのである」と主張する。

「我々は少青年期を既に充分故国の御世話になり、幾分

でも奉公し得る壮年期を遠く祖国を離れて暮し、其の上移住に際しても我々の大部分は国庫の補助を得て渡伯させて貰い、移住後に及んでも、平生の施設から、子供等の教育に関してまで故国の補助を得て来たのである」「戦争中何一つ御奉公出来なかった我々は、日常生活の経費を減じても、祖国同胞救援のため、此処にあり余る物資を出来る丈、多量に、永続的に、銘々の人が日本に送ることによって、今日まで被れる天恩の万分の一にも報い得る喜びを味わうべき秋である（２）」

かくて、われわれが務むべきことは、「伯国の土に化すべき運命にある三十万同胞」が、「我々の子孫が嘗つて安南やシャム国であったように本国の交通が途絶えて百年も経ぬ内に、日本人の文化も人種も、跡万もなく消え失せ」ることがないように仕向けることである。「我々の子孫にも亦、我々が移住者第一世として、把握すべき理想も持たず、先駆者として確立すべき百年千年の計画を立て得ざるために、安南、シャムの先例の轍を踏まそうとしていて心苦しくはないのか、未だに我々在伯同胞の永住理想樹立にも、故国の役人の指令に依存したいというのか」と、いわゆる勝組の連中が、自分たちは祖国からの「公報」を待ち、その「指令」によって帰国か永住か決するのだといっていることに対して警告を発する。

「我々の生活観念が腰掛的であった限り、其処より生ず

る生活と事業に、永遠性のある筈はない。農業者のみでなく、工商業家にもそれが謂える。子孫へ最も貴い贈物を忘れて、土地から搾取することのみ腐心した現在までの農業者と、何等変るところがない。徒らに金儲けのみに専心して、日本民族の善い半面を伝え、我々の事業の跡継ぎをしてもらわねばならない第二世への建設的の何を為してきたか、同胞が見果てない夢を迫って、自分の一生は勿論、子供をも犠牲にして了っているのに気付かないで、現在に達してきたのである」「転々と居を変えて移動する生活は、日本人本来の姿ではない。大地に根を下ろして、子孫の為めに、住みよい、美しい里を作ってやる為めに、花を培い樹を植え、百年経っても壊れないような家を建て、近隣力と心を合わせて、美しい楽しい施設を作り、百里、千里と離れて住む娘や息子の故郷として、父母の許に帰り、春夏秋冬の楽しい催しを、村全体こぞって為すということが、我々日本人の本然たる願いであるまいか」

ここで彼は子孫のための故里（ふるさと）建設を提案する。

『「ブラジルは百姓しても、商売しても、金の儲ろ処だが、どうも生活が殺風景で……」とは万人が肯定する言葉であった。然し今落ちついて考えてみれば、殺風景なのはブラジルではなくして、我々の心と生活とであった。我々の生活を日本人自然の落付きと、風雅に満たせ、

我々の後世を托すべき子供等の心に、日本人の善良さを伝え残すために、私は故里建設を提案する次第である。そのために、今居る処を再建することを理想とする。然し、故里建設を目的として、適地を求めて移動することもあながち排斥しない。数家族単位で善かろう。数十家族でも良い。数百家族を包含することも勿論良い。大植民地の中で、心の合う人達で始めて出来る事と思う。

故里建設というても、自分の住む周囲をより美しく、より住み良くすることである。先ず心の合う人達で、自分達の力を併せ、自分達の工夫研究に依って、生活と生産の方法を合理化し、科学的経営法を取り入れ、従来よりも利得を多くして、共同の力で、文化施設を追々増加して行き、ブラジル人始め、諸外国人もその生活内に合流を希望する人達を拒まず包含して行くことを理想として、例え十家族の人達が、心を併せてその建設に取りかかる事を決心すると、お互いの住む所が、よし離れて居ても差支えない。隣接していれば好都合である。お互の土地を充分に調べて、その一部分の適地に共同施設をする。例えば先ず十家族の米の安全生産を保証するために、共同水田を経営する。又肉食の資源を得るために、共同牧場を作る。早速出来なくても、共同のオラリア（レンガ作り）の地を定める等、共同で有利なことを先ず定めて、臨機応変に経営すれば良かろう。科学的経営法とは、

お互の力を併せ、或る程度生産を機械化し、農産品の加工をすることである。此の様にして経営すれば、無駄が省かれ、生活が合理化して、自然に利潤は生れる。此の利潤を生かして共同施設を強化し、共同庭園、運動場、娯楽場、図書室、交際場、植林、発電所、ラジオ等を建設していけば、楽しい美しい生活、潤いのある生活が生れる。斯くしてこそ、我々の子供の心に、故郷、楽しい故里の夢が生れ、例え遠く離れて住んでいても、常に故里に住む優しい父母の元に心は繋がっているであろう。

斯くすることにおいて、日本人の持つ善さを諸外国人に示すと同時に、彼等もその一分子として、受入れたい』

この理想は、彼の同志の一人によって実行されたが、かつてブラ拓の「ガット運動」が思ったような成果をあげることができなかったように、輸出向きの商品生産にかりたてられがらなブラジルの農業の波に乗っている同胞には、一地方に定住することがむずかしかったようである。しかし、彼らはあの当時、自分でいいだしたことは率先して実行したほど建設の意気にもえていたのであった。

論文は、彼の新しい事業のことに及ぶ。そしてその事業が、やがて農産物加工に発展することを予想して、同胞の農家とつながり、彼らの福祉に資すことができるこ

とをよろこぶ。そして最後に二世学徒のために、サンパウロ市内に「学生会館」の建設の念願を持っていることを述べる。

「我等の二世、三世諸君が、世界人として尊敬され、日本人の短所を去り長所を生かして、立派なブラジル市民となってくれる所に我等の伯国移住の意義が生れると信ずる。彼等が此の機側を活用して、友好を深め、互いに励まし合い、親の期待に副うように落付いて勉学に従事出来る環境を作ってあげたい。我等一世の持つ狭い島国根性をかなぐりすてて、思想を拡く世界に伸ばし、世界人類の文化向上に尽くし得る人物の輩出を願っている。又此の機関を通じて、日本の新興文化を伯国社会へ流入させる紐帯の役目をすることにおいて、日伯の親善は深められると思う。

私の夢は限りなく続く。夢に励まされて日々の業務に「張り」が沸いてくる。幸に多くの同志を得て、此の民族的建設事業も、日一日と具体化へと進捗している。此の夢の一日も早い実現を神懸けて祈っている」

（原文は旧かなづかい。かなり重複しているところもあり、長い説明もあったので省略した部分も多い。原文は約九百五十字のものであった）

注

（1）　このあたりは必ずしも史実と一致しない。

（2）毎月の修養会のたびに机囲救済義損金の積立てを、終戦以来つづけている。溌剌十六号、二四ページ、「編者のことば」による

65　「涯しなき思想旋風を衝いて」
――終戦後七年の信念派の理論

『伯剌西爾時報』一九五五年、天長節奉祝特別号には、一六ページから一七ページにわたって、「涯しなき思想旋風を衝いて」と題する碧水なる筆者の大論文がのっている。私がちょっと計算したところによると、八千二百五十余字にわたるもので、新聞に掲載される論文にしては、たしかに「大」の字を冠していいように思う。しかしこの論文は、いわゆる「信念派」の人でないと、はっきり理解がゆかないと思う。あるいは、信念派の人たちにすら、むずかしすぎるかもしれない。実際むずかしい漢字やら当て字、誤字で、読みにくいことおびただしい。だから、ここに私がものにした・文は、かなり解説的に整理したものである。

終戦後七年もたった今日、こうした論文を読むことは、彼らがいかに「思索」してきたかを知るための参考となる。ただ終戦直後の言い分と違っていることは、あれが単なる「勝敗」のあらそいではなかったとことわってい

ることで、これはこの派の多くの人々が、あとになって必ずつけ足したことであった。それは、敗戦を認めざるをえなかったためであるが、しかし彼らは、「敗戦」を実に表裏ある、ニュアンスに富んだ言葉だと解釈したのである。なぜなら、「世界人類に平等の福祉をもたらすための義戦」を断行した日本は、「目的を達成」したのであるから、もし敗戦が事実であるとすれば、それは目的を達成しない敗戦とは「わけがちがう」はずである。もしわけがちがうとすれば、それは敗北者（連合軍）をあわれんで譲歩したものにちがいない。虚名を捨て、実質をとる日本は、そのくらいのことはするにちがいない、と考えたわけである。これは、実戦の敗北に文化の勝利（日本の正義）を対立させている人々とは、ちょっと立場がちがっているようであるが、実は、両者の抱く「神国不敗」の信念は同一の論拠となっていることがわかる。

ところで、われわれに興味のあることは、不敗を信じなければ、どうにも精神的よりどころがなくなってこまる人たちの気持ちである。しかもその人たちは、「日本精神」と日本語を子孫に伝えなくては、心の落ち着きを見出せないのである。

だから、論文の筆者・碧水氏が、だれであり、どんな年輩でどんな境遇にある人であるかがわかれば、真実味は倍加するのであるが、論文の内容から考えると、むろ

ん信念の人ではあるが、思索の人ではないし、相当の教育はうけているかもしれないが、長くブラジルで生活している老年の人であろうと思われる。二世の問題でも、頭から二世を日本人としてあつかってあやしまないあたりは、ブラジル人の社会には、ほとんど交渉のない人のように思われる。ただ、古い日本を慕う気持ちだけは人一倍強いし、天皇の詔勅は絶対的なものであるから、民主日本などというものはありえないと思っている人たちの一人であろう。

（ここでちょっと注釈を加えれば、天皇詔勅の絶対性を信じていたこの人たちには、終戦当時やその後の詔勅は意味のないまやかしものであって、神聖おかすべからざるほどの天皇が、前言をひるがえすなどということはありえないことであった）

碧水氏は案外、信念派指導者の一人、しかもまじめな一人だったかもしれない。

彼の論法は多くの信念派の人たちと同一型のものであって、絶対的信念に照らして、いわゆる「現象の裏をかいて行く」方法である。それは「敗戦の汚名」について述べているところからも読みとれるし、都合のいいことはみな「真相」であって、都合の悪いことはみな裏のあるものなのである。この点は戦争中も戦後も変わっていない一貫した日本至上主義者の態度である。あたかも

ある種の神学者の弁証に似たところがある。これは、実に「忠良なる臣民」の態度だといえる。

私は、この論文の最後に「（文責筆者）」なる一句がつけたしてあるのを見て、編集者がこの論文の発表を逡巡したことを想像した。筆者は株主か有力な支持者の一人でもあろうか。載せねばならない義理があったのかもしれない。

私はここに解説的再録をはじめるにあたり、原論文の書きだしと最後の文句をあげてみたい。

「終戦後の空白時代を通じ、在伯同胞の思想界を観るに実に混沌として深刻を極むる。そして再後（其後の誤植？）も涯しなく続く思想戦！　戦争終局が前代未聞の不可思議なる煙幕を張って真相を発表せず大風呂敷に包んでゐたが、七年も経てば破れてぼつぼつ真相がこぼれ出す。……」

そして十一字詰十段の論文は、つぎのように結ばれている。

「私はこの稿を執筆中吾等の時報紙が革新の先駆として経営が同志中村満志氏に委譲され社内又国体護持に一貫せる同志の陣営となった朗報を受くる。（十五行略）革新新時報社の隆昌を祈ってこの論稿の筆を措く。（文責筆者）」

この論文をその内容からわかりやすく整理して、私は

つぎの順序を得た。

一、「敗戦の汚名」について
二、聖戦の目的達成のこと
三、米・英の謀略について
四、自分たちの信念は正しかった
五、民主化は国民の一部におこった一時的現象であった
六、その他の不逞の徒
七、この論文を書いたわけ
八、日本語と日本精神
九、ユダヤ思想、アメリカ思想の不可について
十、ジャーナリズムへの注文

これは、前後数回にわたって読んだ結果の整理であって、私は日曜一日をこれに費やした。

一「敗戦の汚名」について

このたびの戦争は「皇祖以来の理念、八紘を掩ふて宇となす聖業」であったのだから、この根本的な信念によって現実の分析と推理をすすめていけば、すべては明らかとなるはずである。もし敗戦ということがあり得るとしたら、それは「世界人類総親和を実現せしむる」ために「忍び給ふ大御心の深慮」であって、「吾らは銘記すべきものなのである」。「敗戦の汚名」は「連敗した揚句

の果に」「前例なき非人道極まる原子爆弾を投下して無事の民を殺傷し」て、やっと「講和を申し」こんだから、人類平和のために「大御心」から「忍び給ふ」て受諾した結果であって、日本の弱体化からでたものでも、彼らの勝利から必然的にもたらされたものでもない。原子爆弾などを使いだした彼ら敗者のために、便宜上使うことを許した敗戦という言葉にすぎない。実際日本の大本営発表によると、それまで連戦連勝であったから「忍び給ふ大御心」の意味がよくわかるのである。

もし負けていない証拠をだせというなら、いくらでもある。「現今の如き隆々たる国家を築きつつある事」もその一つだが、「戦後幾何もなく世界各国に先んじて七つの海を制圧して物資を配給し、往年の敵国をうるほす道義日本」の姿を見ればよくわかる。警備隊、保安隊の強化、国鉄電化、観光日本、科学日本の姿など、ブラジルの「敗戦ども」が「堕落頼廃を吹ちやうする祖国誹謗の論拠を根底から覆へす事実である」。

二　聖戦の目的達成のこと

さらに、敗戦の「汚名」などにとらわれてはならないことは、アジア各民族が聖戦のおかげで独立したことである。米英が「数世紀に亘って殆ど略奪に等しい残虐性を発揮して獲得した資源財源〔を〕放棄」したことが、な

にを意味するかを考えてみればすぐわかる。これは「道義に基づく真の人類愛によらずして実現する現象では絶対にない」ことから見ても、正義日本の力が加わらないでおこりうる現象ではないと解される。このへんは再読三読して、そのいわんとするところがはっきりしたのである。

三　米・英の謀略について

しかし世の中には、「人々の道義心を蝕んで思想的疾患に因り、腐敗せる人類を〔の〕支配権を掌握せんとする謀略宣伝に寧日なきせん行運動を続くる一派のあることを知るのである」。その一派がだれであるかは明らかでないが、おそらく「共産仁義の思想或は人面獣心に変形するユダヤ思想又は自由享楽等々の思想」をもつやからであろう。あるいは「勝利者」の名だけを冠せられ、実は「言語に絶する悲あいを痛切に感じてゐる」「米・英」または戦後なお「国体を護持し得て」の「聖慮を冒とくする米進駐軍」であるかもしれない。なぜなら、彼らはおのが敗戦をかくすためにポツダムから申し込んできた講和を、日本が受諾したのち「占領日本の統治をするとの口実で自国民を欺瞞して一兵も凱旋」しなかった連中だからである。「米国内五百万の失業群」はそうしたことを余儀なくせしめる事情にあるだろうというのである。

だから「謀略」にだまされてはいけない。「戦争の勝敗は論及するの要はない」。なぜなら、「正しい主張は天が審判する」、「立派に戦争の目的は達成しつつある現状」ではないか。いわゆるポツダム共同宣言というのは「ポツダムにある連合軍側に宛てた陛下の御受諾の通告」であって、「講和を申し込」んだから大御心によって受諾したのである。碧水氏はぜんぜん宣言の内容は知らないし、知ろうともしないだろう。

ここで思いだされるのは、実に都合のいい外電が当時ブラジルの葡語新聞に載ったことである。デマ宣伝に使われたそのタイプ複写を私はよく調べてみたのであるが、なるほど、それにはたしかに「連合軍〔が〕降服条件を受諾した」と読めるポルトガル語外電であった。不思議なことと思い、原文をさがしだして調べてみたところ、日本が「連合軍〔の〕降服条件を受諾した」ことが明らかになったのであった。そして、これはコンマの位置と（a）という前置詞をとりさることによって、そう認めたのであった。おそろしく頭のいいデマ宣伝であった。これが「真相」を待っていた信念派の人たちにどれほど歓迎されたかは察するにあまりある。

四　自分たちの信念は正しかった

そこで、かくまで「国体観念を護持して」「神州の不滅」

を信じるこの人たちが、終戦後ながく、「公報がない」ということを楯として信念にこっていたことはよくわかる。だから七年たった今日なお、「戦争終局が前代未聞の不可思議なる煙幕を張って真相を発表せず」云々と回顧しているほどである。ところで、「七年も経てばぼつぼつ真相がこぼれ出す」と断定しているのであるが、この真相なるものは、当時から真相として伝えられていたものであった。そして、筆者の一大発見らしいのは、「終戦直後弦伯国内で国体破壊一派が流布した終戦勅語」と比較して「感慨無量」なほど本物の詔勅が違ったものであったことを確認したことであるらしい。しかし、筆者のいうところの「終戦詔書」というのは終戦直前のもので、「宣言受諾の詔勅」ではないのである。しかしそれを理解しなかったところに、信念派の考えの正しさは持続されたのであった。

五　民主化は国民の一部におこった

一時的現象であった

さて、「勝ち、負け」の対立を思想戦であると規定する筆者は、この対立抗争を「謀略」にまどわされた「自由享楽主義の退化日本人」に対する「国体観念を護持して日本人として生きぬく」人たちの戦いであったとする。「祖国の民主化は過渡期における虚脱状態に陥った国民の

一部におこつた一時的現象であって」「現今の如く隆隆たる国家」を築いた日本は「伝統に生きぬく国民大衆の忠君愛国の発露」によるものである、といい、さらに、「語らは私情を以て彼等国体破壊臣道否定を是認する大人を憎悪するのではない、天皇陛下の御聖慮に反抗するが故に論駁する」のである、とさけぶ。そして、忠君愛国者は英米の「御都合主義（すなわち謀略者）に拠って宣伝される皮相なる日本の仮装には感はされない」のだとの信念を述べている。すなわち、民主化は一時的現象であり、いかにもこれが本物のように宣伝されたのは「日本の仮装」にすぎなかった。それは人類平等のために、あえて「敗戦の汚名」を着たのと同じ仮装であった。

六　その他の不逞の徒

しかし今日になってみれば、ブラジルの認識派と称する「国体誹謗者」だけが悪いのではない。日本の代表官憲をはじめ、日本から来る名士も芸能人たちも、またこちらからの訪日者たちもみなよくない。はなはだしいのは、「人間天皇などと放言する不達な者も居る」。総領事すら、「忠君精神不要、日本語不要、大和民族は優秀民族にあらず」等々と放言する。（ちょっとへんだが、そうしたことが書いてある）。そして、こんなものは「在伯日本人には不適当な不要な人物である事を指摘する」。

七　この論文を書いたわけ

さらに筆者・碧水氏は、近ごろ急激に「認識」していく旧信念派が多いのにおどろいて、「現実の日本の敗戦を認めざるを得んなどと弱信念に転向する人々を多く知る故に」「邦家のために深く憂ふるの余り、慨世の駁論を執筆する所以」を述べて、「余りにもくどい駁論を」つづける。かくして、この大論文は八千二百五十余字にのぼるのである。

八　日本語と日本精神

私はもうすこし「くどい駁論を」うけたまわることにしよう。

「民主化を模倣する」「狂言者」を批判して、「微動だもしない日本精神を護持し」た筆者は、「世界各国に挙がる日本語熱、柔道熱、日本古典の研究熱等々祖国日本礼讃」の現状をあげ、「武道精神を通じ日本語を通じてこそ貴い尽忠報国の日本精神は涵養されるのである」から、「似而非なる吾らに不適当なる総領事などの言に耳を藉すことなく、二世三世の骨の随迄浸透する日本語教育を励行されんことを」「世の父兄諸姉」に祈っている。

九、ユダヤ思想、アメリカ思想の不可について

それからあらためて、「民主化を模倣して自家繁栄と自由享楽主義の思想に転落した人々を想」い、「慨嘆を久しふ」しながら、「その主流」たる「ユダヤ依存」を説き、また、「数世紀に亘る掠だつ的搾取によって国を富まし、黄金の魔力に拠って世界を牛耳り遂に亜細亜制覇の野望の昂ずる所、日本と衝突して」「連敗したあげく」「原子爆弾で無事の民を殺傷し」てから「講和を申し込」んだアメリカが、自他を偽って世界人を混迷におとし入れて「惑乱する（？）道義心の片鱗さへも見出せない国である」ことを説いて、「アメリカ依存の人々は深く反省すべきである」と警告している。

最後に彼らの支持を得ているジャーナリズムに対して、「理解し難い様な朝鮮戦争記事」や「真相とは想へない諸外国の通信」を載せることに対して再考をうながしたり、その他、厚意ある批評がつづくのであるが、ここでは略することにしたい。

６６　人種的偏見のない明るさ

ブラジルの日本移民史をつづるにあたって、ぜひとも一項をもうけて大書しなければならないことは、ブラジルには、アメリカやハワイのような「排日」がなかったということである。これは、われわれ一世が、われわれ

の子孫である二世以下のブラジル人たちに伝えておかなければならない重要な証言である。

ブラジルにも日本移民「制限」の問題がおこったが、それはブラジルの将来を考慮した政治家たちのあいだの問題であって、民間における反日本人的感情の反映によるものではなかった。また、この法律案が、いわゆる「二分制限」として法律上の規定となり、実施されるまでには、十数年の歳月を要し、その間、多くの日本移民弁護者があらわれ、この法律案が最後的実施をみたときには、すでに日本移民にかぎられた法律ではなくなっていたのである。しかも、当時アジアにおける情勢は、すでに多数の移民をブラジルに輸送することが、実際上不可能なときになっていたのでみる．そしてこの時代における国際情勢は、「枢軸国家」に対する多くの猜疑心もあったので、これをブラジル人の側に立って考えてみると、当然な措置だとも考えられるのである。なおそのころ、ブラジルはそれまでの農業立国から工業化に進もうとしていたときであり、一方に農村における労力補給の問題もあったが、国内労働者に対する保護政策上の問題もおこっていたのである。一九三〇年十月のジェツーリオ革命ののち、農業家族移民以外の外国労働者の入国を制限したことなどは、それを証明するものといえるだろう。大量の外国移民をぜひとも必要とした時代がすぎ去ろう

としていたとも見られるのである。
　また日本移民制限論の多くは、同化問題が人種問題と結合して論じられたが、こと人種問題にいたると、ブラジル人の伝統的人種平等観をきずつけるものとして、多くのものから反駁された。当時はまだ人種と文化とが本来的に結合したものと見る思想もあり、これが科学的とさえ考えられていた時代であるから、不同化は人種のせいだと考えていたものもあった。
　しかし日本人の同化可能性を実際的に証明する労をとった親日家もいて、日本移民のため、またブラジルの名誉のために戦った。

『ブラジルに於ける日本人発展史』上巻、七九ページから一二九ページまでは、日本移民反対に関するいろいろな動きが記述されているが、その書きだしのところには、「全体としてのブラジル国民の対日感情は、終始一貫して友好的であり、日伯両国民の親善関係は未だかつて傷害されたことはなかった」と述べてある。
　日本移民反対の法律化に対して戦った人たちの苦労がおもいやられ、感謝の気持ちを抱かずにはいられないが、われわれは、その最終ページが閉じられるまでの、いろいろな経過を調べてみて、日本移民に対する人種的差別観は、のちにややくわしく説くように、きわめて現実ば

なれのした白人優越論からきているもので、むしろ実際には、まったく文化系統を異にする異人種に対する不安がもとになっていたことがわかるのである。

ここでは、反対運動中、もっともはげしかった「連邦議会における言論、特にレイス移民法案」について述べてみよう。

一九二三（大正十二）年十月二十二日、ミナス州選出連邦下院議員フィデリス・レイスは、「排日を目的とする最初の移民法案」を議会に提出し、同時に日本移民攻撃の演説を行なった。その法律案は、「ヨーロッパ農業家族の国内誘入を奨励援助する権能を（行政部に）付与する法案」という標題で、全部で七か条より成り、第一条において、ヨーロッパ農業家族の誘入を奨励援助すべし、と規定し、同条補項において、この目的のためには、ブラジル向け移民の出国を許可し且つ援助する諸国に、関税上の便益を与えて、これと労働・通商条約を締結すべし、と定め、なお、第二条では、連邦は州をして移民奨励にともなう経費を、その収受する移民数に応じて分担せしめるため州と協定を結ぶべく、第三条は、（事務促進のため）土地植民局官制を改正すべし、と定め、また、第四条では、政府は国民（ここでは「国民性」と訳してあるが、おそらくナシオナリダーデのことであって、簡単に国民と訳したほうが日本語では意味がとりやすいだろう）

の人種的・道徳的・精神的形成に害ある分子の入国を遮止するため、移民に関し厳重なる統制（取締り）を行うべし、と定め、しかるのち、第五条においては、黒人種移住者のブラジル入国を禁止す、黄色人種については、国内にある同起原者の百分の五に相当する数において、毎年入国を許可す（2）、という規定を含めたものであった。ここにある「黒人種移住者」云々は、当時アメリカからの黒人二十万のアマゾン移住の風説があったことに対する法律案が議会に提出されたことに聞している。

この制限案が、日本移民の絶対多数を擁するサンパウロ州からおこらず、あまり縁のなかったミナス・ジェライス州から選出された代議士によってなされたことは、当時、アメリカの排日論に影響されたものだと評されたゆえんである。だから、日本移民擁護者は、サンパウロ州に断然多かったのである。

このレイス代議士による法律案が議会に提出されると、新聞紙はもとより、各方面に日本移民誘人の可否に関する議論がさかんにあらわれた。そのなかで、人種平等観のうえにたって日本移民制限に反対した意見には、「ブラジルの伝統を忘却し、われわれが採用する宗教の至上教訓に違背するもの」としての批判があった（3）。

これに対してレイス案賛成の意見は、翌年の議会に送

られたブラジル医学士院のレイス案賛辞に見られるとおりである。その全文をあげると、「ブラジル医学士院は、人は一国の伝襲財産たること、ブラジルはこの伝襲財産に留意し、その人種的構成を改良し、かつその社会的淘汰を主宰する最先義務を有すること、アジアの人民は、その価値の如何にかかわらず、宗教・言語・性格・慣習の根本的相異のため、西洋においては絶対に同化せざるものなること、優生　学上、および経済上の法則は、該（これら）起原の分子のブラジル領土に入来するに反対なることを考量したる上、院則第二条にしたがい、左記の通り決議す（４）。

一九二三年法律案第二九一号を修正し、毎年のアジア移民の数を、すでに各州に定着せる明らかに農業者たる者の百分の五に減じる農工委員会の修正案に対する本医学士院の賛辞を下院に呈す」

であって、院長ミゲール・コウト博士を筆頭に、すべて二十八名がこれに署名した。

（ちなみに、レイス案は農工委員会付託となっていたものである）　ここには、全ブラジルを白人種化し、ヨーロッパ系文化に統一しようとする人々の願望が、〝最先義務〟として主張されている。そして、いかにも科学的論議のように表現されているところに、医学士院の面目がうかがえる。

ミゲール・コウト博士らのいわゆる「人種型改良論」は、当時一部の学者間にとなえられていた一種のアリアニズモ（アーリアン至上主義）であって、ポルトガル人の大多数、ことにその貴族階級をアーリア系人種と見、それゆえに優秀な文化を維持することができたのであるが現にブラジル文化を支えている主流もまた彼らである。だから、「アーリア的ラテン系人種が主となって、将来の人種型を形成するようになることがブラジルのために必要である。一国の将来は人種統一によって完璧なものとなる。移民国であるアメリカが白人を国民の主要素としょうと努めている点は他山の石として注目すべきである」という思想によるものであって、その裏には、ブラジルの人種構成に対する不満と、ブラジルを白人種国にしようとする気持ちがかくされている。それが同化問題とからみ、やがてその後の世界情勢に刺激されて、「帝国主義者日本人」に対する恐怖、それの排撃となってあらわれたものであった。だから、これはブラジル人一般の輿論とはならず、とくに、多くの混血人を含むカトリック教国民としてのブラジル人のうけいれる思想とはならなかったのである。

さて、こうした人種論を基とした移民制限に対しては、いろいろな方面から「否」とする論がでたが、そのなかで最大の努力をおしまなかった人に、フランシスコ・

シャーベス・デ・オリベイラ・ボテーリョ議員、中央農会長であったリーラ・カストロ議員があった。ボテーリョはブラジルの各方面の人の意見を徴するとともに、日本移民の実態を調査して彼の主張の根拠とするにつとめた。

この移民法案は、提出後足かけ五年を経てもなお、上院はもとより下院本会議へも回付されず、先に記したように、農工委員会から、さらに財政委員合にまわされたままになっていたが、一九二六年の末、サンパウロ州出身のワシントン・ルイスが第十期大統領になるとともに、オリベイラ・ボテーリョは蔵相となり、リーラ・カストロは農相となったので、レイス法案は一時沙汰やみの形となった。

しかし一九三〇年十月のジェツーリオ・バルガスの革命政府になると、レイス案を支持していた医学士院の大立物ミゲール・コウト博士が憲法制定委員に選ばれることになって、日本移民反対運動は再燃した。このとき、ミゲール・コウトの人種論に対して反駁を加えたものに、人類学者ロケッテ・ピント教授があった（5）。

一九三〇年、世界経済恐慌の影響で、コーヒーの市価暴落や多くの大農場主が没落の非運にあったとき、日本移民の入国数だけは年々増加していった。そして一九三一年九月の満洲事変後、コウト博士の議論は、明らかに

政治的色彩をおび、いわゆる「恐日病の高熱に侵され（6）」た形に変わっていったことには同情せざるをえない点がある。

かくてレイス案もコウト博士一派の修正案も、いろいろ変わって、ついに一九三八年の移民入国二分制限法となったのであるが、その内容は――、

「国の領土内における移民の入国・分配および定着は法律の定める要求および条件にしたがうべし。但し各国の移民流入は最近五十年間にブラジル国内に定着したる当該国人の総数に対し、毎年その百分の二の限度を超えることをえない」というものである。

そして、日本移民の割当ては年に二千八百四十五人となった。しかしこの時代は、すでに国際情勢の悪化とともに、ブラジルのナショナリズムも優秀となって、日本人コロニアではいろいろな文化活動に対する制限をうけるようになってきた。そして、それは戦争の前ぶれでもあった。

かくて日本移民の入伯数は、一九三八年には二千五百余人、一九三九年には千三百人ほどに減少し、四二年には、ついに途絶したのであった。減少・途絶の姿は、人間生命の自然死のように、移民制限という人為的ファクターが加わらなくとも、自然に消えるべくして消えたようなものであった。

戦後の民主的憲法制定議会において、日本移民の入国禁止が新憲法に挿入されるかどうか論議されて、その可否が九十九対九十九の半々にわかれたとき、議長の、ミネルバ投票によって否決されたことは、知る人が少ない。こんなあぶない瀬戸際に日本移民が追いこめられたのは、戦後におけるコロニアの混乱がその原因であって、決して排日家の運動によるものではなかった。しかも議長が、憲法のなかに、とくに日本移民禁止の条文を入れることは国家の恥だとして否決投票をしたことは、ブラジル人の良識を示すものとして忘れられないだろう。

あの混乱の時代をすぎて、戦後、日本移民が永住の腹を決めたころ、同化の傾向はどんどん進行し、同化しないはずであったアジア人も、りっぱなブラジル人になる資格が認められるようになったのである。

一世としての筆者は、コロニア史の一齣として日本移民反対運動をあげたが、多くの二、三世は、こんなことがかつておこったことも知らずに、すくすくと伸びていく。今日そだっていく二世以下の世代は、もう移民時代のコンプレックスもなく、生来のブラジル人として、自分たちこそ明日のブラジルを背負ってたつ気概をさかんにしている。ただ一世としてのわれわれは、こんな尊い

平和が、ブラジルであればこそ得られたのであって、アメリカやハワイの同抱が、いかに暗い苦しい運命のもとに生きつづけてきたかを思うたびに、ブラジルの二世たちが、もっともっとこのブラジルを愛するよう願わずにはいられないのである（７）。

追補　日本移民の人種的差別観

「なぜ兄弟の目にあるチリをみながら、自分の目にある梁（ハリ）を認めようとしないのか」

マタイ伝第七章三節

「日本人は、ブラジルには人種的偏見がないといってよろこんでいるが、日本人自ら、差別観をもって〝外人〟を毛ぎらいするのではないか」と、筆者はある人から注意されたことがある。たしかに、子供の結婚などになると、この傾向ははっきりとみとめることができる。ただし、これは日本人の人種的優越感からくるものか、異文化の人間に対する親しみにくさからくるものか、どちらとも決めてしまうわけにはいかない。日本人にはむかしから外人崇拝の傾向があった。古くは中国人崇拝、近代ではヨーロッパ人崇拝などそのいい例であろう。

人種的優越感は伝統的なものであって、文化的所産で

あると見られる。決してある人種に生来的なものでないことはわかる。だが、文化的所産とはいっても、そこには、政治的社会的審美的等、いろいろこまかな要因がかぞえられよう。問題はそれが伝統的に抜きがたい感情となるとき、その社会的影響は大きくなるのぐ、差別観がどのくらい深いものとしてある国民の感情を支配しているかということであろう。

ここで反省できることは、人種的優越感も異文化人に対する反発も、ともに人間の社会的な生活が生みだしたもので、前者についてはその伝統の長さ深さが問題とされ、後者においては、同化の程度が問題となるだろう。

話が一般論になってしまったが、ここでは実際問題として、日本移民が、ブラジルにおいて人種的差別観をもっているかどうかと問われれば、たしかにもっていたし、現にもっているといえる。

われわれ一世移民は、かつて民族至上主義をふりかざして、みずから人種的差別をもうけようとしたこともあった。むろん、民族至上主義は、多分に政治的イデオロギーをもりこんだもので、決して移民の発明にかかるものではなかったが、それにしても、みずから差別の垣を設けようとしたことは事実である。

いま、人種間題を文化的相克の点から眺めてみるならば、かつてブラジル人が日本人を生活様式の違う同化し

そうもない、変わった人間としてながめたように、日本人もまた、ブラジル人をえたいの知れない（理解しにくい）国民として見てきたわけである。

ことに奥地の環境において、教育程度の低いカマラーダやカボクロたちと接したとき、優越感にとらわれて、みずから差別をもうけたものであった。それはいま反省される点であるが、おそらく多くのものは、気にもかけずにすごしてしまったことであろう。

かつては奴隷制度の存在したブラジルに、全然人種的偏見がないといい切ることは危険であろう。しかし、個人や一部階級の偏見を云々するまえに、一般ブラジル人の誇りとしている人種平等観を想い、これが社会の通念として多くの人に擁護されている点は重要である。

われわれ一世は、ブラジルに永住を決したのち、いつのまにか子供たちの結婚問題を通して、混血を是認せざるをえなくなり、日一日と実際生活のうえで、一般ブラジル人と同じように、人種平等を認めざるをえなくなってくるのである。移民として、いつの日にか解決をつけなければならなかった民族意識を清算しながら、いまやっと肩の重荷をおろしたようなやすらかな気持ちになりつつあるのである。同化の力は頑迷な民族的感情をも追放してしまうのである。実は、同化は同化される民族の消解であった。むろん、ブラジル人的になると同時に

人種的優越感すらこの感情とともに消えていくのであった。

またこの優越感を心の片隅で支えていた移民コンプレックスも共に消えていくのである。

だが、ここに記した心境的変化は、必ずしも一般的なものではないかもしれない。しかし早晩到達しなければならない心境であろう。むろん、多くの一世中には、墓へはいる日までこの民族的感情を清算することができずに悩みつづけるものもあるにちがいない。

（一九六七年十月二十六日現在をもとにした感想）

注

（1）『日本人発展史』上巻、九四ページ。

（2）『ブラジルを直視して』には外務省保管の全文が載っている。ここでは前記「発展史」のものをとった。

（3）『日本大発展史』上巻、九八ページ。Dr・Vicente Vereira de Costa Piragipe.

（4）同上、九九ページ。

（5）彼の専門は型質人類学で、ブラジル人のなかにインジオ（モンゴロイド）の血が混っていることを指摘して論をすすめたのである。

（6）『日本人発展史』上巻、一一二ページ。

（7）本章では、『ブラジルに於ける日本人発展史』のほか次のものを参考にした。

在伯日本人文化協会編「伯国新憲法審議会に於ける日本移民排斥問題の経過」同協会、一九三四年十一月。

『伯刺西爾年鑑』一九三三年

67　一世青年と異人種間の結婚

一九五一年の『よみもの』三、四月合併号に、田畑陽三の「彷徨」という短編小説が載っている。当時の一世コロニア青年が、異人種間の結婚にどうしてもふみ切れなかった悩みを描いたもので、この時代における異人種間の結婚問題をあつかったものとして、一つの代表的作品ではないかと思う。

この一編の主人公島村は、外交員（セールスマン）として苦学をしながら、大学の経済科に学んでいる青年である。

恋人のエルザは、同学院の予科にいたが、地方の大牧場主の娘で、サンパウロ市では叔母の家から通学していた。北イタリア系の均整のとれた美人であった。彼女は人種とか国籍とか、そんなものは問題にもしない自由な気持ちの娘だった。彼女の考えでは愛情がすべてであって、愛情が深ければ、あらゆる社会的な因襲は、たやすくふりのけることができるものであった。

しかし島村は、日本人間の気がねや邪推に満ちたせせこましい生活から抜けだして、「国籍、風俗を問わず、や

わらかな愛情、未知の感覚、普遍的で自由な生活」にあこがれながらも、そうした生活に共鳴するということは「自分一人の思い上りであり、苦しかった過去への単なる反動ではなかろうか」と思い悩むのである。だからエルザの積極的で明るい愛情に対しても、逡巡しがちなのである。しかし、自由な交際と彼女の大胆さには、あらゆる思惑をおしのける力があった。それでも、いよいよ結婚へふみ切ろうとすると、島村は急に背後に立っている日本人を意識せざるをえなかった。「田舎の仮家暮し、寒いといっては綿入れを着、暑いといっては肌ぬぎになる老人たち、一切が家長に依って支配される家庭、隣りとの義理の交際、オレの顔を立てないと力む人々、味噌汁、漬物の味……」、離れようとしても離れられない因襲的な同胞の社会が、彼をとらえるのであった。彼はこの時代の青年として、こうした社会を抜けだす可能性も見出せなければ、決心もつきかねる存在であった。

つぎに、この短編のラスト・シーンを示そう。人間的、コスモポリタン的愛情の前に、この島村青年の姿が、いかにみじめなものであるかがわかるだろう。

午後の灰色に乾いた日曜日、公園のゴム樹のほの暗いかげにサビアが一羽枯葉の上を渡って前の茂みにかくれた。

「あの話はどうきめた？」

エルザは坐っている島村の前に立ったまま言った。
「エルザ、少しの間だ！　どんなにしても皆を説きふせる。皆にわれわれのことを祝福してもらえるように、どんなにしてでも」
「何を相談するの？　あんたの脱れようとしても脱れられない苦しみが、ぐんぐんと私の脈搏に聞えるようだわ……あたし達はもうだめ！」
「ど・どうして・・・」
「出来ないことは出来ないって、どうしてはっきり言わないんです。もうみんな解ってるんです……あたしは知らずに愛した……そしてもうこんなになって」
　というと、ようやくこらえていた涙がいちどに溢れ、激しいすすり泣きがしばらく続いた。
「あたしがこんなになっても、皆自分の行為だから誰も恨まないけど、たった一人の女の子すら愛し切れない、あなたのつまらないトラジシオナリズムを一生憎むでしょう。あんたを好きだわ、けどあたしは自分までその不幸に入りたかないの」
「バカ、エルザ、そんな思い過ごしは……」
「今更空々しいことを言ってどうする気」
蒼白な彫刻（ほりもの）のような面を動かさずに歩き出した。
「ま、まって」

前方をさえぎろうとする島村の頬に激しい平手打が飛んだ。とエルザはさっさと身をひるがえして大通へ出た。疾走してきたタクシーをとめ、瞬間の中にエルザは島村の前から消えていった。

「エルザ、俺が悪いんだ、俺が、あゝ」島村は虚脱の眼をひきつらしてふらふらと歩きだした。

二人とも学校へは二度と姿を現わさなかった。

68　「新来」と「ブラジル・ボケ」

終戦（一九四五年）後十年ほどして、日本から新来者がコロニアにあらわれだしたころ、ブラジル・ボケという言葉が聞かれた。

これは、日本から来たばかりの人たちとブラジルの社会にようやく根を張った旧移民たちとのあいだに、気持ちのずれがあまりひどかったので、どうもブラジルに古い連中とは話が通じないというところから、新来者によって旧移民たちにつけられた名称であった。

旧移民たちは、どこの言葉（方言）かわからないような日本語を使っていた。そして、会話にませて使う日本語化したブラジル語は、彼らに通じなかった。

まだ戦後の日本がどんなに変化したかわからず、彼ら

新来者との応対に古い日本式なものを予想していた旧移民たちは、ひどくとまどったのである。たとえば新来の青年たちに、年長者である旧移民たちは、期待していたような日本の青年らしい礼儀正しさを感じることができなかった。

裏切られたような感情を抱く彼ら旧移民に対して、新来者（新移民とはいわなくなった）たちは、逆にとりつく島もないようなたよりなさ、もどかしさを感じ、ブラジル・ボケといったのである。

旧移民たちは、すっかりブラジル的になっていたから、動作がにぶいうえに、なにをきいても、新来の人たちは納得いくように返答が得られなかった。たとえば「われわれはいつ農場へ出発するのですか」ときいても、「そうだなァ、あすの夕方になるかなア……」というような返事なのである。スケジュールなど、ほとんど役にたたないブラジルでは、「これから、これ、これの用事をすませると何時になるから、出発は何時になる」というような計算のもとに生活することはない。大体のこと　―マイズ・オウ・メーノスで通るのである。しかし、日本のようにテキパキと物事をさばいていかなければならないような社会から来たものにとって、これは耐えられないほどのろくさいものであり、それはやがて、不安から不信に変わるものでさえあった。ブラジル・ボケは始末

のわるいものであった。

さらに新来者には、一世も二世も区別がなかった。たとい日本語が通じるとしても、二世たちは日本の生活をほとんど知らなかったし、知ろうともしなかった。話が通じないのはあたりまえだ。二世は日本語の会話はできても、性格も物の考え方もブラジル的になっているものが多い。またそうでないと、ブラジル人の社会では住みにくいのである。だが新来者たちは、彼ら二世が日本語のできる外国人だという頭がない。そして、ただ話の通じないことにいらだつ。これもブラジル・ボケのせいに思われた。

しかし、こうした旧移民や二世をたよらなければ、彼らは生活の道を見出しようがなかったのである。「ボケてやがんなア、たよりないや」と思いながら、旧移民や二世たちのあとにつづいたのであった。

ことに、農村にはいって仕事、環境、住居、食物などに面くらった新来者たちは、「話のわからないおやじたち」に対して、ブラジル・ボケの名称を呈した。それは彼ら旧移民たちのステロタイプをあらわす名称であった。自分たちのセンスから見ると、なにか半世紀もおくれているように感じられるものであった。彼らはブラジル・ボケしているからであると断じた。

こうした感情のくいちがいは、やがて旧移民たちの気

持ちにも影響を及ぼす。彼ら旧移民たちが期待していた日本人は、戦前的な律義さを持っていて、旧移民たちの忠告を守り、献身的に彼らに協力するものでなければならなかった。「ブラジルに三十年もいて、このざまではたよりない」というような目で見る人間ではいけなかった。ましてや、「おれたちだったら、もっと頭を働かせて早く成功するのに……」というような考えで、彼らをだしぬこうとする自信過剰な人間ではならなかった。新来者はあつかいにくいものに感じた。

そのうえ、彼らが口にする人権尊重とか労働基準法などというむずかしい言葉は聞いたこともなかった。それどころか、ときどきどこの言葉かわからないような片仮名英語をまぜてしゃべる。日本人は日本語を話すのであるから、意思の疎通を欠くはずがないと思いこんでいたのに、彼らの話が理解できないのである。一言一言意味をただすわけにもいかないので、おそらくこういうことだろうと思って返答すると、相手はけげんな表情をする。なんてわけのわからない日本人だろうと旧移民たちは思うのである。

「どうもセンスがないなア」といわれる。「考え方が封建的なんだ……」なんて陰口をきかれるのであるが、はじめはそれもなんのことかわからない。悪口であることはわかるのであるが……。

そのうち、「頭が古い」という意味であることを理解する。この「頭が古い」はこたえる。なぜなら、旧移民たちは、自分らが頭が古いことを、うすうす感づいていたからである。そのものズバリは痛いのである。

ところが「頭が古い」ということのなかには、旧移民たちの考えが、現代の日本人的立場から見ればおくれているということ以外に、「ブラジル的生活に同化していて自分のブラジル的センスや行動様式のゆえに、むしろこの国の生活に適応できるのだ」といういわばプラスの面は自覚されていないのである。自分たちは、いまでこそ、子どもたちの成長とともに永住を決したのであるが、たえず日本を想い、日本の進歩をわがことのようによろこんできたのである。その日本から来た人たちに、「頭が古い」といわれることは、今日の日本人としての失格を意味することで、それは旧移民たちがどんなに日本を想っていても、「いまの日本はそんなものではない」と宣告されるようなものである。

こうした点、二世は割り切っている。「ブラジルは日本じゃないよ。ブラジル人はまずブラジルのことを知るのがたいせつなんだ。日本のことは二のつぎだよ」というだろう。もっと徹底しているものだったら、頭から「ブラジル人に対して、日本のことを知らないから頭が古いというのか。もしそうだとしたら君はブラジルのことを

知らないから頭が古いといってもいいだろう」と、その非常識を笑われるかもしれない。

だが二世でも、日本語がわかり日本のことを知っていると信じている層には、この場合の「頭が古い」はこたえる。自分が、親たちや一世の友人知人から教えられた「日本」がまちがっていたことになるからである。

「頭が古い」ことを気にしだした旧移民が、「ブラジル・ボケ」といわれたときは（むろん直接そういわれることはめったになかったと思うが）、なんともいえないコンプレックスを感じたものであった。彼らは、徹底した二世のように「ブラジルのことなら、よく知っているんだぞ」といえるだけの自信はなかったし、事実、日本の総理大臣の名は知っていても、ブラジルの大統領の名は知らないものもいたからである。

こうなると、自分が予想していた日本人とはちがった者から、逆に古いと断定されると、今度は新来者に対してあらさがしがはじまるわけであった。

「新来者は信用できない。新来者は日本精神を失っている」と旧移民はいい、二世青年は「ジャッポン・ノーボは気にくわない。ブラジルのことは何も知らないくせに、なんでも日本は、日本は……」という。

このような気まずい空気が、新来者と旧移民、あるいは二世とのあいだに流れていた時期があったのである。

これがいろいろな噂を生み、新聞にも報道された。呼び寄せ青年と、呼び寄せた責任者パトロンとのあいだにも噂があった。

「理屈ばかりこねていて仕事のできない新来青年」と、「頭の古い明治時代の遺物であるパトロン」とのあいだの葛藤だといわれた。

もう一つは、「南の花嫁」といわれた呼び寄せ女房のこと。お互いが戦後の青年男女であってさえ、二、三年の生活環境のへだたりによって、うまくいかないことがあるのに、シチアンテ（自作農）の件である場合は、てんで気持ちが合わない。合わないのがあたりまえであるのに、親たちの郷愁は、日本から日本式の嫁をもらったら、自分たちは「おとうさん、おかあさん」と呼ばれて大事にされ、息子も満足して家の仕事を継ぐものと考えていたのである。ところがセンスが合わないこと、話が通じないことは、ここではもっとひどい。しゅうと、しゅうとめと気があわず、むこどのには退屈を感じる花嫁が、現状に満足するはずがないのである。そこからいろいろな事件がおこった。ブラジル・ボケにたえられない花嫁の行動は、気の毒にも世の非難の的となったりした。

ブラジル・ボケとは、お互いの無知を示す言葉であった。そこから花嫁の悲劇も生まれた。ボケの正体がわかっていれば、悲劇はさけられたのである。

日本から来るものは、コロニア人がどんなに現代の日本人と違っているかを知らない。ブラジルの旧移民たちは、現代の日本人が、戦前の日本人とまったく変わっていることを知らないし、自分が長いあいだ外国に生活していたために、日本人というものを自分の考えをもとにしてあまりに理想化しすぎていることも知らないのである。そしてお互いに、自分の持っている物差しで他を計ったのであった。一方ではブラジル・ボケといい、一方では新来、またはジャッポン・ノーボといったのである。

あれから十数年、かつての新来者は旧移民に学ぶこと、あるいはその失敗のあとを研究することによって、成功の早道を見出すようになった。旧移民たちは、日本の書籍・雑誌などによって日本を知り、新来者とつき合っているうちに、戦時から戦後へかけての十数年間の断層をだんだん埋めていった。旧移民たちは、すでに自分たちに近づいて旧移民になりつつある、かつての新来者の能力を高く買うようになったのである。

いまでも部分的には問題はつづいている。

日本の、日本人コロニアの旧移民や二世に対する理解の程度もそれほど変わってはいない。しかし戦後渡伯者のなかの青年たちは、ブラジル語で二世と会話ができる

ものさえ多くなって、二世への理解と二世の現代的日本青年への理解も進んだ。旧移民と戦後移住者とのあいだもかなり溝が埋まった感じである。少なくともセンスのくいちがいなどは、あたりまえのことだと思うようになっていることは、お互いの進歩だといえる。

もし今後問題がおこるとしたら、大量に新移民がはいるときであろうが、そういうことがもしなかったら、問題はこれでおしまい。ただ、相変わらず、旅行者やその他日本の出先官憲のものが、ブラジルの日本人を称してブラジル・ボケというにとどまるだろう。

69　二世と日本文化
――　逆効果をもたらした教育

これも、コロニア史のなかの問題の一つである。今日では戦前ほどやかましくいわれなくなったが、それでも二世の教育の理想は「日本文化（日本的教養）を身につけた、立派なブラジル人をつくること」だといわれている。一世の親の立場からすれば、この考えは当然のことだと思われる。だが、そうした理念によるいままでの教育が、実際にどのような効果をもたらしたか、というところに問題がある。ここに教育というのは、単に学校教

育ばかりを意味しない。日本人は家庭においても、ブラジル人である二世に対して、日本的教養をもった立派なブラジル人として、世に立つことができるように仕向けてきたことと思う。むろん、「ブラジル人として」という二世の立場を無視して、日本的教育をつぎこんできた家庭もあったろうが、こうした特殊な場合は、ここでは一応除外して、二世がブラジル人であり、ブラジル人としてやがて世のなかにでて活躍することを当然のものとして教育してきた場合のことを主として考えてみたい。

ブラジルにおける日本人コロニア史を研究している筆者に対して、こうした反省をうながしたのは、日本移民の同化問題を研究されたコーネル大学の東洋文化研究所所長スミス教授の講演を、人文科学研究所のゼミナールで聴いたときであった。

同教授は日語学校における教育についてもいろいろ研究され、ブラジルにおける日語教育の将来に対する見とおしなどにふれた点にも参考になるものがあったが、ここに私が問題としたいのは、日本人の家庭に育った二世大学生たちが親たちの生活に対して述懐したことの内容についてである。同教授が、それを日本的教育の結果を示すものとして直接それと関連させて話したかどうか、いまそれを思いだすことはできないが、私は二世たちが育てられた日本移民の家庭的雰囲気も教育の一部である

と考え、日本移民の教育がその理想に反して、どのような逆効果をもたらしたかについて考えてみたいのである。

一世移民の家庭において、二世の親たちは自分たちが日本的伝統のなかに生活していると信じ、自分たちの生活態度を子供たち二世にうけつがせようとして教育してきたことを、私は否定することができない。

その意味で、学校においても家庭においても、日本人は「日本的教養（あるいは文化）を身につけた立派なブラジル人」を育成することを理想としていたと考えたいのである。しかし、そうした理想 ― 精神 ― をもって育てあげられた二世が、大人になってブラジル人の社会にでたとき、口をそろえていうのは、「日本人の家庭的雰囲気はつめたい。そこでは、親たち夫婦のあいだに、はたして愛情があるのかどうかさえ疑わせる。だから、自分たちはもっとあたたかい家庭をつくって子供たちを育てたい、ということであった。これは多くの二世と面接した結果得られた彼らに共通した述懐であった」というのである。

日本人の家庭は「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和」すところの家族制度をもつ世界に誇るべきものと考えられていた。そういうことを意識していない場合でも、日本式家庭生活こそ二世にとってものぞましいものと考えていたにちがいない。しかも、そうした日本文化のなかで

育てられてきた二世たちが自分たちを育てた家庭を「つめたい」と批判し、そうした生活をくりかえしたくないと思っているとすれば、日本的教育というものが、まったく逆効果をもたらしているということになる。それはなぜだろうか。私たちは感情的に、そんな馬鹿なことがありうるはずがない、と反駁する前に、いちおうそういう事実があるものとして、なぜそうなったかを考えてみたいと思う。

ここには、文化的相克の姿が見られる。文化はそれを担う民族が、それぞれの立場を正しいものと主張する傾向をもつ。しかも二つの文化が融合して同化する過程においては、小さな社会の文化は大きな社会のそれのほうへ合流していく。そっすると、合流されたほうの文化をもつ人間は、その価値判断において立場をかえることになる。幼いときに、父母の文化のなかでなんの疑いもなく育ってきた二世が、ブラジル文化に同化した場合、まったくちがった立場から父母のもつ文化をながめるようになると、そこに批判的態度が生まれてくるのである。

われわれは、こうした事実を長いあいだ知らずに暮らしてきた。だから日本的なものを二世に伝える場合に、多くの知識と技術がいるということを考えることができなかった。また文化とか精神とかいうものを、もっと手近なものから教えるべきであったことも知らずにいた。

どんな高級文化でも、それらは皆日常の生活の仕方に根ざしていて、その上に築かれていくものであることをあまり考えず、高い理想だけが文化である、と考えがちであった。

もし日常の生活をもとにして文化を云々するとすればそれはちがった様式をもつ生活と比較してみなければ本当の姿はわからない、ということも知らずにいた。ブラジルでは、ブラジル人の生活様式と比べてこそ日本人の生活様式 ― 文化 ― がはっきり認識されるのである。

生活様式の差は、行動の差、あるいは愛情の表現の差ともなってくるのである。

どんなに日本的生活様式 ― それは日本文化でもありそこから生まれる理想は日本精神である ― が立派なものと確信していても、ブラジルの社会と交渉をもち、ブラジル文化のなかで生きている二世―ことに中学以上の学校生活をし、ブラジル人とのつきあいが多くなっている彼らにとって、日本的生活様式による愛情の表現などは、そのままでは、だんだん理解されなくなるのである。彼らはブラジル人の立場から、日本人の家庭生活を見るようになってくる。そうすると、意外なショックをうけることが多くなる。もし夫が妻に対して人を見さげたような言葉を使ったり、ある場合は、感謝の気持ちさ

えはっきり表現しないとしたら、抱擁し、キッスをかわし、最大のジェスチュアーをもって喜びや感謝の心を表現するブラジル人の夫と比較したら、日本人夫婦の生活が「冷たいもの」はたして愛情があるのかどうかさえ疑われることになるだろう。

ブラジル人的愛情の表現を「おおげさ」とか「見ちゃいられない」とか評するのは、日本人的な立場からする価値判断である。また日本人的生活様式―無言の愛情表現（？）を「つめたい」と評するのは、ブラジル文化からする価値判断であって、この場合どちらかが正しいという厳正中立的立場からする判断などはありえないのである。

こうした事実を意識して、なお日本的なものを理解させようとすれば、ブラジル人的な態度をいちおう受け入れて「『しかし』、日本人の生活は伝統的に、喜怒哀楽をなるべく表面に現わさないよう教育されているので、内心は少しも変わるところがないのだ。親子の愛情でも同じことで、抱擁したり、キッスをしたりはしないが、親たちは子供の将来を考えて、貧乏しながらもせっせと学校に通わせ、教育しているではないか」と説明すべきであったろう。

しかし、これはあとのまつりであり、また一般のものに、こんなややこしい注文は無理であったろう。そして

多くの場合、父母たちは、日本人的な立場からだけで子供たちを教育し、むしろ、おおげさなジェスチュアーはかえってその底にある誠実さの疑わしいものとしていましめたかもしれないのである。

さて、残るところは、「日本文化を身につけたよきブラジル人」に対して、という句のなかに含まれた「よきブラジル人」どのような認識をもっていたろうかということである。

この場合のよきブラジル人も、日本人的立場「よきブラジル人」であったにちがいない。

すると、この「よき」も日本人の立場から「気にいった」よきであることになる。残るところは、ポルトガル語が自由に話せて、ブラジルの事情に通じた（これもまた問題であるが）、ブラジルを自分の国として愛することのできる者、ということになる。

ここで「ブラジルの事情に通じた」というのが問題になるといったのは、頭のうえだけで、ブラジルのことがわかっている者ではよきブラジル人とはいえないし、人情や風俗をよく理解しているものとすれば、もうすでに彼がブラジル人的性格をそなえていることになり、日本人の考える「よきブラジル人」のカテゴリーを抜けだすことにもなりかねない。また、本当にブラジルを自分の国として愛するとすれば、ブラジルの文化をも愛するこ

とになる。すると日本人の気にいる「よきブラジル人」からはみだすだろう。だからここにいう「よきブラジル人」とは、日系以外の、祖先代々のブラジル人が彼の教養の一部として日本文化を理解している、というタイプではなさそうである。またブラジルの文化を理解しないでいて、日本文化の「よきもの」をその子供たちに伝えようとした日本移民に、そうしたブラジル人が理解されていたとは思われない。だから簡単にいえば、日本的教養を身につけポルトガル語を自由にあやつることのできる二世ということになる。これでは言葉の上手な一世とあまり変わらなくなる。

こうした二世は、ブラジル人の社会にはいって、いかに自分が日本人的であり、ブラジル人の社会にとけこむことのできない人間であるかを感じ、暗い二世コンプレックスを持つようになる。彼は日本人の子孫であったことをうらむようになる。それは、ブラジル人の社会にはいって、いかに日本的教育あるいは文化がじゃまになっているかを感じるからである。

かつて親たちは考えたものである。

「正直とか勤勉とか親切とかは、どこの社会でも通じるものだ。われわれは、子供たちにこの精神をつぎこむ。自分たちはただ言葉がわからないために損をしてきた。二世たちは言葉がわかる。そのうえに自分たちのむかし

から持っていた正直、勤勉、親切というような徳性を持ちつづけていたら、きっとよきブラジル人になるにらがいない」と。

しかし世のなかはそんな単純なものではなかった。正直とか勤勉とか親切とか一口にはいえるけれども、それが実際の生活のうえであらわされるときは、実に様々な形をとる。だから、融通のきかない正直、能率の上がらない勤勉、他人に理解されない親切もでてくるのである。ブラジルの社会に生きて、正直、勤勉、親切な人間であるためには、ブラジル人の生活様式をよくのみこんでいなければならない。相手の生活の仕方がわからなければ意思の疎通を欠くことになる。ブラジルの生活に即した善い行ないがあるのである。だから、ブラジル人の目から見たよきブラジル人の行ないも、日本人の目から見れば、「でたらめ」なものとさえうつるかもしれないのである。

正直は一生の宝ともいわれるが、日本人の正直は、ときによると習慣性のものであって、事の真相をきわめる前に自分の責任のように感ちがいしてしまうことがある。たとえば自動車が衝突した。どちらが先にぶっつけたかなかなかわからない場合がある。この場合、自分にも不注意な点があったとして悪かったとあやまれば、先方は得たりかしこしと、そんなら修繕費を払えといいだす。

実は自分も不注意だった。だから修繕費云々はいわないことにしようという具合にはなかなかいかない。ブラジルではお互いが自分には責任がないといい張る場合が多いのであるから、正直一方では損ばかりしていなければならないだろう。また気の弱いものの正直は、相手の不正を見逃がすことがある。筆者の知っている勇敢な二世（娘）は、他人から自動車をぶっつけられたとき、あくまで彼の責任を追及し、彼の車とともに自分の車を修理所まで連れていって修繕料を払わせたことがある。彼女はあとでは修繕費を請求しても、決して払わないことを知っていたからであった。

親切でも同じことで、うっかり気をゆるしたら、人に利用され、恩を仇で返されることもある。

このように、正直も親切も、よほど頭をつかわないとその実は上がらない。習慣や生活様式の違うもの同上ではなおさらのことである。ブラジル人になりきって、正直も勤勉も親切も考えなければ、意味をなさないのである。日本人のなかでは通用する徳行が少しもブラジル人のあいだに通用せず、「どうも日本的なものがじゃまになってこまる」という二世も多いのである。

このように、同じよきブラジル人も、日本人の立場からいう場合とブラジル人の立場からいう場合とでは、かなりなへだたりがでてくるのである。ブラジルの文化を

知らずに、ただ日本的教養をそなえたよきブラジル人を考えることは、文字のうえでは少しも無理のない理想のように思われても、実際は、意味のないものだったのである。それは理解されないものであったばかりでなく、そうした理想のもとに教育されて来た二世が、その教育を少しも感謝していないばかりでなく、後日、ブラジル人の社会にでた場合、じゃまにさえなったというのである。

だが「日本的教養をそなえたよきブラジル人」という理想が、全くまちがっていたとはいえない。その方法がわからなかったために、効果が逆になってあらわれたということで、今後はその方法を改めなければならないし、攻めなければ、理想とは逆な結果があらわれるということが証明された今日では、もうむかしながらの方法は理想を実現するうえで有害無益だということである。

日本文化または日本的教養は、ブラジル人としての教養・文化を身につけたものがその教養の一部として持ってのみ意味がある。だから二世を教育する親たちは、まずブラジルの生活を知り、ブラジル式な生活の仕方に対して寛大な気持ちを持ち、これとはまったく違った系統に属する日本文化に対する説明をこころえたうえでの教育でなければならないだろう。簡単にいえば、ブラジル人のよいところを知り、彼らを尊敬する気持ちを失わず

に日本的なものをも教えるというのでなければならないと思う。あくまでもブラジル文化か土台となって、そのうえに日本的なものが追加（プラス）されることにならなければ、教育というものが教育をうけるものに幸福をもたらすことにはならないと思う。

７０　日本移民の宗教生活

ブラジルにおけるわが移民の生活の歴史をつづるにあたって、いちばん困難を感じるのは、その宗教生活の面である。

日本人は集団すると日本人会をつくり、小学校を建てた。しかし、必ず寺院を建立して、集団の精神的結合を図ったとはいえない。むしろ、寺院や教会はずっとあとにできたものだし、一つの寺院や教会が村全体の精神的結合の中心となったことは、戦前においては、まずなかったといっていい。

例外的には北パラナ、アラポンガスのカトリック教徒による信愛植民地―　コロニア・エスペランサがある。一九三五年先発隊がはいり翌三六年から入植者があった）

日本人の生活態度は、ヨーロッパ人のそれとは、この点でかなり違っていたのだと考えるより仕方がなかった。そして、そのことは各所で指摘した。

だが、日本人の生活にまったく宗教が関係しなかったとはいえない。

むろん、宗教心の大部分は、教育勅語を中心とする天皇崇拝がこれに代わっていたことであろう。しかし、それだけが日本人の伝統である「祖先の霊をまつる」気持ちや、死後の希望である「来世」についての要求を満たしてくれるものではなかったろう。だがそうした要求は「成功」に心をうばわれていた時代、さしせまった問題とはならなかったようである。

「不幸にして縁故者中に死亡者があった場合、その葬式に当って読経して呉れる僧侶があればと考へる位の程度で、日常心霊の糧を求めて、宗教的訓誨を希望する如き熱心は、移住者の間には甚だ稀有で、ただ経済的に富まんことのみ専心する」というのが出稼ぎ移民としての「一般的情勢であった（1）」と「発展史」の筆者が指摘していることもうなずける。

またブラジルでは、同一信仰をもったものの集団が不可能であったという点も宗教が社会的結合の中心となれなかった理由の一つにあげられるかもしれない。

「数に於ては仏教徒が断然他を圧し、恐らく全体の約九割を占めるものと見られるが、而かも日本に存在する十五宗四十八派は、そのほとんど全部が多少の信徒によって、ブラジルにおいて代表されて居り、また神道も十四

の教派に分れてゐるので、在留邦人間の宗教は、勢ひ故国に於ける多岐状態の縮図たらざるを得ない（２）」

と同じ「発展史」の筆者はいっている。また、つぎのような理由もあげている。

「……ブラジルには比較的微弱ながら、一条の排日暗流があって、その排斥の理由として人種・言語・風俗等の外に宗教の異なる点が指摘されるから、僧侶（および神宮等の派遣は行はれない事こそ望ましい」

といふ日本外務省の方針にもとづいて、僧侶・神官の渡伯が外面的にせよ阻止されてゐた」

からでもあろう。

しかしこういうことは、日本人の生活においては、宗教を除外しても、それは致命的なものではないということを暗示しているものではなかろうか。

いずれにしても、日本移民の精神生活では、「神、仏」よりも国家あるいは民族の観念が上位にあり、これが移民の精神の支柱となっていたことは事実であった。だからブラジルへきてもカトリック教徒の宗教的圧迫は「感じなかった」が、国家主義・民族主義に対する弾圧には戦前・戦中・戦後を通じて、あのような抵抗運動を展開したのではなかろうか。

だが、以上の理由だけで、移民の宗教生活の全部を無

視することはゆるされないだろう。ここでは、どのようにして、今日の多種多様な宗教がさかえるようになったか、そこにいたる道程をたどってみよう。

移民船に仏壇や神棚があったかどうか、ある船には神棚があったという人もいる。

船中で水葬があったとき、だれかがお経をあげたかもしれない。ただし、船に専属の僧侶はいなかった。

船尾から白布にくるんだ遺骸が、ドブーンと海中に投じられた。汽笛がなって、船は徐航をやめた。水葬点を三回転するのが正式だという話であったが、一回まわって永久のおさらばだった。

ファゼンダにはいった。宗教的行事はほとんどなかった。

マラリアのために犠牲者をだしたところもあった。お経もない簡単な葬式がでた。墓には卒塔婆の代わりに白木の十字架をたて、裏側には横に「ほとけ」の生年月日、没年の日づけを書き、たてには俗名、行年何歳と書いた。そして表には、南無阿弥陀仏あるいは南無妙法蓮華経と記した。土まんじゅうの上に、ブリキ製ペンキ塗りの花輪をおく。これは風雨にさらされてもながもちしだ。線香をあげ、あるいはろうそくをたてた。会葬者は無言で合掌するか、口のなかで念仏か題目をとなえた。

遺族はコロニアの家にもどって、一室に（多くの場合寝室に）小さい棚をつくり、そこに「ほとけ」の生前の写真をかざり、野の花をきさげ、線香をあげる。線香のないときにはろうそくをたてた。しばらくのあいだは、毎日灯明としてカンテラをとぼす。初七日には、近所の人を呼んで法事らしいものをいとなむ。むろん坊さんはいないのであるから、読経はない。にわかづくりの仏壇に合掌したのち、みんなで夕飯を食べる。いんげん豆のあんと麦粉でつくっただんこの「おしるこ」や細いマカロンでつくった「うどん」をふるまう。

ファゼンダから契約地へ、それから植民地へと荒山の仕事に移る。墓はファゼンダへ残してくる。

五年目にお骨をほりかえし新しい墓地へ移すこともあるが、初期の移民にそんな余裕はなかった。たいがいファゼンダへ置き去りにしたままだ。

現在（一九六八年）第一回移民のはいったグァタパラー農場の墓地には、無縁仏を合葬した二メートル四方、高さ八〇センチほどの、セメントでかためた四角な墓がある。おそらく、個人の墓をつぶすとき、あとに残った篤志家たちが、遺骨を合葬したものであろう。その人ちもいまわいなくなっている。

苔むした表面は、もうセメントがくだけてきざんだ文

字もよく見えないが、「なみ（、）あみだ仏」の字が読めた。

だれかろうそくをあげたらしく、古いろうが墓の上に流れていた。その墓も、近くとりはらわれるそうである。

初期の移民たちは、自分のためのお寺も、永久の墓地もつくらなかったが、土人の墓を発見して「神社」を建てたことがある。趣味だったのだろうか、それとも先住者の塚に、自分たちの「守護神」でも見出したのであろうか。

プロミッソンのイタコロミー（上塚）植民地ボン・スセッソ区の事務所の前方、谷むかいに建てた「ブーグレ神社」のことである。

カッポエイラ（やぶ）のなかに、直径五メートルほどある二つの丸い塚を発見したのは開拓当時のことであった。土地のものの話によるとブーグレ（土人）の墓だという。

「祖先を尊ぶ心に厚い日本人のことだから、このまま草山にしておく事も気の毒とあって、其辺で発見されたブーグレ共の使用した水瓶と土製のラッパ（3）二つを神霊として〔小さなホコラをたて〕、毎年五月〔五日〕にお祭りをする事にした。ブラジルで鳥居の建った最初であったろう。今から八年前（一九二〇年）である。神主の土井梅若丸が高々とノリトを読んだころ、神前角

力ははずんだ。

植民者の仕事が、ふえるに従って神宮もいつしか蜂の巣の宿となって境内も荒廃した」

ということが、『農業のブラジル』一九二八年九月のプロミッソン開拓十周年記念号に載っている。

この開拓十周年には記念塔を建ててにぎわった。しかし、そのときも宗教的儀式はなかった。ただ来賓祝辞のなかで、岡田英定が「…終わりに開拓のために犠牲になった人々の冥福を祈る」と結んだのが、わずかに宗教な言葉であった（ただしこの人は後に浄土真宗をひろめた）。

建てられた塔そのものには、宗教的な意味があったかどうか。「後世人あって此処を尋るもの誰か今日の情景を回想し、感慨無量涙なく通るものがあろうぞ」と『農ブ』記念号は写真説明に記しているが、今日そのあたりは荒廃して、ただ「兵どもの夢のあと」を示しているだけである。

次男、三男どもの多かったわが初期の出稼ぎ移民たちは、前山隆（たかし）の論文にあるように、「宗教は日本に置いてきてしまった」、「先祖は兄が日本でみてくれるから自分には何もない」、「帰るまで留守をたのんできている」、いずれ「墓参り」に帰る、というのが彼らの気持ちであろうか（４）。

（前山は「ブラジルにおける日系マイノリチー社会における宗教行動の一考察」で、日本の家族制度における「イエ」の観念の分析から、それに関連する祖先崇拝の宗教を論じ、次男、三男を主とした初期出稼き移民たちの宗教不在の理由を究明している）

文献を読み、当時の人の直話を聞いて、平野植民地の苦闘をふりかえってみる。しかしそこに宗教生活のあとをたどることはむずかしかった。『平野二五周年史』によると、平野運平と松村貞雄総領事を記念した鎮魂碑の建ったのは、一九三一（昭和六年であって、この年の八月三日の入植祭も、翌年二月六日の平野祭（運平の命日）も鎮魂碑の前で神・仏画式で記念祭を挙行し、以後毎年これをつづけたとある。入植十六年目に宗教的儀式があらわれる。

さて、植民者中の一部のものが、近隣の植民地から伊藤助一なる老師を招いて、毎月一回巡回で法話を聞くようになったのが一九三三（昭和八）年のことであった。そして村に真宗寺（5）が建ったのが昭和九年であった。このとき、住職も住みつくようになる。

「朝夕仏に供へ読経に身を浄め、春と秋との彼岸の中日には亡者の霊に読経し、法門を聞いて善男善女を仏教に導き大に浄化に努めた……」

（平野二五周年史、三一ページ）

のであって、それ以前、すなわち一九三〇年ころまでは、はとんど宗教的活動はなかったように推察される。

「入植当時はまだ若くて元気で、行く先も考へず一念金儲に走ったが、さて其の結果はどうか、金が出来たか、出来ん、地位が出来たか、否残ったものは只此の痩躯とみにくい根性、之では錦を着て祖国へ遊ぶことも夢より外に道がない、と考へめぐらす時、行く末此の体はどうなるのか、魂はどうなるのか、と深い煩悶に沈む。どうも心に物足りなさを感ずる。この煩悩の心を鎮め、苦悩を忘れるにはどうしても仏の力でなくては浄ふ（丶）する事が出来ん。……」（現文のまま）

というのが、昭和八年に坊さんをたのんで法話を聞くようになった動機であることが、『平野二五周年史』の「寺院」の項に書いてある。

これによってもわかるように、渡伯後二むかしもすぎて、帰国の夢もやぶれてわが身をふりかえるころになって宗教的生活がはじめられたのであった。

植民地の初期時代は「ほとけ」をだした家以外は、仏壇もあまり見あたらなかった。掘立て小屋に空箱を吊るした仏壇のことは、植民地初期の生活のなかでも描写しておいた。指物大工の片手間に作った仏壇や神棚があらわれたのも、植民地生活にはいって六、七年後、コーヒーがとれだしてからであって、着伯から十数年たってから

である。

戦後はじめてカフェーランジアに寺ができたとき、「ブラジルでもお寺まいりができる」といって老人たちはよろこんでいた。まるで、お寺のない国に来たさびしさをいままでこらえていたかのような口ぶりであった。

無宗教的生活をいとなんでいたような日本移民の生活のなかにも、宗教的意味をもったようなものが慣習的にくりかえされてはいた。そして、それが生活の日本的な枠組を与えていたのである。

お正月には「おそなえ」をかざり、おみき—ピンガまたは日本酒—をあげ、命日には精進料理をつくり、棟上げには餅をついた。

天長節を集団的に祝ったことはもちろんである。その他日常生活では、食事どきに「いただきます」「ごちそうさま」など慣習としてくりかえした。

子弟の教育上では、物をそまつにすることをいましめて、「もったいない」という気持ちを二世にも植えつけた。無慈悲なことをすれば「たたる」といい、無作法なことをすると「ばちがあたる」とさとし、また「功徳」になるといって善行をすすめた。

このように、意識的にはそれが宗教的行為とは考えなかったかもしれないが、日本人の生活のなかにしみこんでいたものは、ある程度持続されてきた。ただ宗教的生

活として、それが統一的に表現されなかっただけである。
ほとけをおがみ、祖先を祭る気持ちは、出稼ぎ気分がうすれところ、郷愁とともに生活の表面にあらわれてきたのではなかろうか。

一般をはなれて特殊な場合をたどれば、ブラジルにおける日本移民の宗教生活を示すことができる。
皇国殖民会社の社長水野龍が法華宗徒であったことは有名である。
「パラナ高原に晩年を托した水野氏は、毎朝未明に起床し、折目正しき日本着で、灯明を点じて瑞座し、朗々と読経を初め、これが終ると過去帳を読みあげるのだが、それが頗る永い。かつて水野氏の知る人々のほとんど凡てに及び、上は大臣から下は女中に至るまで、ブラジルに於ける耕地通訳や移植民など、其数五、六百名に達するのだから堪らない。『私が長生きするものだから、過去帳を読むのに時間がかかって閉口し』という熱心ぶりだったという。九十二歳まで生きて一九五一年サンパウロ市で亡くなった。
一九三六年ノロエステ線リンス駅ウニオン植民地の松原米次が、同地に本門仏立宗伯国元寺を建ててから、各地にひろまった仏立宗のブラジル元祖、茨木（日水）友次郎は、かさと丸第一回移民であった。茨木は、リベイロ

ン・プレット経由でズモーン農場へ入ったが、ここはコーヒーがほとんどなっておらず、騒動つづきで移民会社を悩ましたところであるが、争議中のこと、法華宗の坊主上がりだった彼は、コーヒー採取用の三脚梯の土にかけ上がり、移民会社弾劾の熱弁をふるった。そのとき足をふみはずして地上にころげ落ちた。「それ以来〃俗事を脱落した〃と語っていた」と「四十年史」にあるそのご本人である。以来五十年お題目をとなえて本門仏立宗をひろめたというから、ブラジルにおける仏立宗の歴史は古い。一九三〇年以来の移民受難時代から、とみにひろがったように見える。

真宗本派本願寺の布教使生駒真澄は一九二八年四十歳のときに来伯した。イグアッペ植民地に移り住み、そこに「慈光会」をおこし真宗の布教を始めた。約十五年間リベイラ河畔に住み信徒一千近くを得た。一九四三年出聖して聖市方面を布教した（7）。

また、真言宗―高野山大師教会伯国支部をもうけた榛葉平九郎、法名隆昶（りゅうしょう）　―　も移民として来伯した。彼は一九三九年ブラジルの宗教局から正式に許可をうけて布教したといわれる。

一九二九年チエテー移住地にはいり、一九三一年からバウルーにでた天理教の大竹忠次郎は、チエテー移住地の直来移民であった。

またアリアンサ移住地には、木村石之助が一九三一年から農耕に従事しながら天理教をひろめた（８）。

このように、一般的とはいえないが、指導者のいる生活圏内では、それぞれ宗教生活がいとなまれていたことがわかる。寺院とか会堂とかいえるものではなくとも、おのおの自宅においてお経をあげ、あるいはのりとをとなえ、また法話もあって、多くの信徒のあいだに宗教的雰囲気がかもしだされていたことであろう。冠婚葬祭のときばかりではなく、日常生活のなかにも宗教的気分が侵透していたにちがいない。

さらにアリアンサ移住地には、キリスト教新教徒が、多く日本から直接入植した。ここにも教化に熱心な石戸義一郎牧師がいたが、彼は一九二六（大正十五）年、同移住地に入植した。そして一九三三（昭和八）年には同志の浄財を得て「アリアンサ基督教会」を完成、献堂式を行っている。ここにはもと牧師をつとめたこともある植民が数人あり、宗教を日常生活のなかに生かした。もしわが移民史のなかで、宗教生活を詳述するとすれば、アリアンサ移住地は、いちばん特色のあるところとしてあげることができるだろう。

ここではプロテスタント的集会があり、日曜学校をひらき、生活のなかに祈りをとり入れて働くものが集まった。

植民の子弟からは、つづいて牧師があらわれて現に活動をつづけている。また多くの移住地史、植民地史のなかで、宗教の項をもうけてかなりくわしく叙述しているのも、アリアンサ移住地、『創設十年』である。

ついでに、ブラジルへ移住した新教の牧師、伝道師たちのことにふれておく。むろん、農業移民として移住し農業に従事しながらも、はじめから宣教を使命としてきた人たちが、いままで述べたもののなかにはかなりいたと思うが、ここにはとくに牧師、伝道師として来伯し、終生その事業に一身をささげた人たちについて書く。

一九二二（大正十一）年五月、サンパウロ市コンデ・デ・サルゼーダス街の坂下、大正小学校で、ブラジルでは初めての日系人日曜学校をひらいたのは、小林美登利（みどり）であった（このときサンパウロ市独立長老教会からブラジル人数名が応援に来た）。彼はのちに聖州義塾をひらいて教育方面に貢献した。

最後まで伝道につくしたのは一九二三（大正十二）年に渡伯した伊藤八十二である。両人とものちに教会に属し、あるいは塾を経営するまで、独力でパンを稼ぎながら、各地を説教してまわった。

小林は、一九二二年ブラジル独立百年祭ころは「伯刺西爾時報社」にあって、一社員として宗教論壇をうけもった。三十そこそこの若さをもって宗教原論から聖書

講義、さらに金もうけ一点張りの我利我利亡名に対しては神を求めて隣人愛に生きる生活こそ有意義な人生であることを説いた。日曜学校をつづけるかたわら、奥地へ旅しては説教とともに教育事業のたいせつなことを説いて聖州義塾設立のための寄付金を集めた。社会的な催しとしては、復活祭の戸外集会、日曜学校を主体としたクリスマス祝賀会、それから、このころはじめて「母の日」などの集会をひらいたことは社会的な活動として記録されていいことであろう。

伊藤八十二については、「日本人発展史」下巻、二一六ページを引用する。

「ブラジルについた伊藤牧師は、同年三月十三日、サンパウロ市ボニータ（現トマース・デ・リーマ）街一一番にあった当時の土地（うえじ）旅館で、同志七名と共に宣教開始の祈祷会を催した。これが抑も伊藤牧師のブラジル伝道に対する宣言でもあり発端でもあった。

外国伝道の祖・聖徒パウロが「我は努めて他人の置（す）えた基礎（もとい）の土に建てじと、未だキリストの御名の称へられざる所にのみ、福音を宣伝（のべった）へたり」との、開拓精神に燃えた往時の青年牧者伊藤八十二を思ひ、干数百の信徒を漁（すなど）れる今日の成果〔一九四〇年ころ〕とその辛苦を顧みる時、一旅館の

一隅に催された此の祈祷こそは、ブラジルにおける聖公会の伝道史中、記録に値する場面と言へやう」かくて、伊藤の奥地伝道は始められたのであった。

その後ホーリネス教会が物部赳夫（たけお）牧師によって一九二五年に活動を開始し、一九三六年には救世軍もあらわれる。ただし一九三二年に渡伯したブラジル救世軍日本人部の創設者・田中三次大尉は、農業移民としてモジアナ線の一農場にはいり、はじめはコロノとして働いていた。

このように、仏教・天理教・プロテスタンチズムは日本人によって始められたものであるが、カトリシズムの伝道は、はじめは外人僧侶によって行なわれた。

「四十年吏」に発表された武内重雄神父の記事によると、

カトリシズムの布教は、一九一九年、ドイツ人ローレンソ・フッバウエル神父がピンダモニャンガーバの東山農場の監督・安田良一のもとで、「邦人の宗教方面の世話を始めた」のがはじまりで、一九二一年、コルプツーバＣｏｒｕｐｕｔｕｂａの小聖堂で邦人の一団に最初の洗礼が授けられた。この人の尽力によって、一九二三年に中村長八神父が渡伯することになったのである。

サンパウロ市では、一九二六年ころから、サン・ゴンサロ教会のギード・デル・トーロ神父のもとに、コンデ辺の子供たちが集まり、教会通いをはじめ、それから父

母たちの入信となったのである。

こまかなことは省くが、仏教徒としての移民たちが、カトリック教に改宗する道程には、あまり問題はなかったように見える。ただ新教徒のなかには、入信の動機には利害関係がともなっていることを指摘して、その不純さを難詰したものもあった。それは、代父・代母にサンパウロ市の名士たちが招待されたからであった。

だがその当時、仏教徒と称された移民たちが、どれほど深い信仰をもっていたかわからないし、改宗というほどのはげしいものが感じられなかったとすれば、はたして「不純」を云々する根拠があったかどうかも疑わしい。そして、この改宗がたやすかっだということは、日本人のそれまでの宗教生活がそれほど深い根をもったものではなく、ただ伝統的に仏教徒と称されていたにすぎなかったことを物語るものではなかろうか。

ともあれ、カトリック教への改宗と入信は、その後のいきおいによって見てもわかるように、ブラジル文化への合流の前兆であったことは疑えない。

さらに中村神父の伝道は、日本人にもパードレがいるというので評判になったし、神父の人格にふれたブラジル人は、もう日本人をパゴン（異教徒）として見なくなったというから、こんな点でも、カトリシズムの運動は同化の大きなてことして働いたことは否定できない。

この点、プロテスタントのなかには、あくまで日本主義に執着して、戦後は勝組の仲間として抵抗したものがあった点などを見ると（これは仏教徒にもいえることであったが）、日本人の宗教は国家的、民族的であったことがわかる。

さて、私の記述すべき分野は、宗教論でも伝道史でもなかった。「移民の宗教の一般的傾向はどんなものであったか」、「どんな宗教生活ののちに、今日にいたったか」であった。

はじめにも書いたように、初期移民たちの生活を見てそこに宗教的なものを見出すのは、わずかに葬式の際と「ほとけ」をだした家族における仏壇や神棚の礼拝にすぎなかった。そうした移民の生活を見かねて、各地に移住した僧侶あがりや旧牧師たらが、個人の努力で宗教生活を促進するようになったのである。

仏立宗や天理教、および生長の家などは、ここでは活動の歴史が古いだけに、戦前からかなり信者をもっていた。数においては真宗の人たちが断然多かったともいわれている。彼らのなかの指導的な立場にあった人たちはあるものは寺を建て、あるいは会堂をつくってそれぞれ宗教的活動をしていた。しかし、それは決して一般的な傾向ではなかった。

プロテスタンチズムもカトリシズムも日本移民一般の宗教生活を代表するものとはならなかった。

移民たちのあいだで宗教が盛んになるのは、二世たちが成長し、自分たちもこの国に骨を埋めることを余儀なくされた戦後の傾向であった。一世の老齢と同化の進行と、宗教の隆盛との関係は、今後の研究が明らかにしてくれるだろう（前山隆の論文は、その先駆的研究の１つである）。

さらに、戦後の日本における新宗教は、新しい魅力をもって移民たちのあいだに伝えられている。それは、まるでいままでの宗教的なブランクを満たすためでもあるかのようないきおいをもっている。

アラサツーバのノロエステ本願寺
「アラサツーバ五十年史」より

新宗教ほどではないが、従来の仏教諸宗派も各地に多くの寺院を擁して、戦前には見られない隆盛を示している。ことに東・西両本願寺系諸寺院は数十に達している。

ここで考えられることは、むろん経済的な裏づけがともなってのことでもあろうが、戦前の「植民地」や「コンデ街」を中心とした同胞社会は、いまや宗教を中心とした結合の社会に変貌しつつあるのではないか、ということである。地区的には、ブラジル人の社会に没入しても、精神的には宗教を通じて、移民一世を中心とする民族的再結合を行なおうとしているかのようである。

いずれにしても、戦前における移民の生活のなかには宗教はそれほど大きな力となっていなかったことが、今日の諸宗教の盛大きによって、逆に証明されるだろう。戦前的集団と天皇崇拝のおとろえた今日、宗教は、これに代わる新しい民族結合の原理となってきたように見える。そしてこれに参加している二世層は、日本人的要素を豊かに持っていることも特長である。

以上のような結合様式は、農村においてもっとも特長的である。

しかし、こうした結合をもたない二世三世とコロニアの大せいは、生活のブラジル化への方向とともに、カトリック化が本流となっているようである。そしてこの傾

向は、ブラジル人と接触の多い都会ほど強いように思われる。

注

（１）『日本人発展史』下巻、二〇八～二〇九ページ。

（２）同上。

（３）円筒形の土器。筆者の記憶によると、直径七センチ、長さ二〇センチほど。

（４）前山隆「ブラジル日系マイノリチー社会における宗教行動の一考察」（人文科学研究所、『研究レポート』一九六八年）一〇九～一三三ページ。

（５）最近の文献には「光明寺」とある。

（６）『物故先駆者列伝』六一～六二ページ。

（７）『移民四十年史』三八三ページ。

（８）『創設十年（アリアンサ移住地）』一六一ページ。

（第１０部おわり）